
Wild Sky

TUUMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W i l d S k y

【Nコード】

N O 4 7 7 F

【作者名】

T U U M A

【あらすじ】

四大陸からなる世界の中心には果てしなく広い大海が広がっていた。進化し続ける大陸、インジョリックサーク。西の大国、ジルニクス国の防衛機関である護衛艦隊セイヴァに所属している主人公ヴレイは、幼い頃何者かに村を襲われ、母と姉を亡くしていた。ある日、ヴレイは偵察任務を言い渡される。任務内容は近年劇的な機械進歩を見せているグランライン大陸へ渡り、その存在が脅威になる恐れはないか、内偵調査せよというものだった。そして任務以外でもグランドライン大陸へ渡りたい理由があった。渡った先で幼き頃

の友達と再会するのだが……。絆と友情の冒険物語。

&l t; 1章& g t; 第1話 君といた。 (前書き)

長い間修正しながら書いた初めての長編なので、つたない文章もあるかもしれませんが、気軽に読んでいただければ嬉しいです。第一章セイヴァ編スタートです。

&1 t; 1章& g t; 第1話 君といた。

庭園の池に浮かぶ島で楽師が雅楽を奏でていた。青々とした芝生の上に一人、着物の裾を広げて腰を下ろす女性が水面を眺めながら溜息を付いていた。天然の岩壁を挟んだ反対側には高貴な庭園とは対照的に、荒磯を表した大きな池と、石つつじが植えられた凄然な庭園が広がっていた。気高い雰囲気を纏った女性には反対側の庭園で何が行われているか容易に想像ができた。

中洲には年の頃十歳と十四歳の少年二人が体術の構えを保ったまま、その時を待っていた。

庭園に流れ込んだ通り風は池に静かな漣を立てた。一匹の鯉が飛び跳ねた瞬間、水を打ったような静けさは破かれた。

二人の拳が衝突すると同時に、池が小さく波打った。拳の打ち合いが続いた後、両者の脚が互いの腹部を蹴り上げた。相打ちかと思われたが、片方は相手の脚を掴まえ、もう片方は腕を盾にして直撃を免れた。

激しい息づかいを繰り返したまま、しばらく睨み合いが続いた。

「いつまでやってる、そろそろ時間だ」

長身の男が二人を乱暴に呼びつけてきた。

「続きは俺達が戻ってきてからだ。遅刻すると団長にどやされるからな」

「どやされるほどの仕事じゃないじゃん、どうせ俺達は留守番だろ」
少々背の高い方の少年が口端に滲んだ血をぬぐいながら言い返してきた。

「つまり、ザクロさんをお守りする大役は自分達には簡単すぎてや

りたくない」と、団長に伝えておくよ」

少年達は男に襟足を鷲掴まれ強引に引きずられた。あまりにも男の腕力が強かったので、二人はどうか抵抗しようと子犬のように騒ぎだした。

「いやじゃないよ、留守を任されるほど頼られてるってことでしょ僕達、なのに団長はまだ認めてくれないのかな」

背の低い方の少年が紫紺色の瞳を男に向かって上目遣いした。

「まったくだぜ、こんなに強くなったのに俺達を現場に出してくれないなんて。だから強く掴まないでよ、痛いよ首っ、もっと手加減しろよ」

本気で怒鳴り散らす灰色の瞳の少年は男の腹部をバシバシ殴るが無駄な抵抗だった。

「お前らずいぶん態度がデカくなったなあ」

「だろ、いつまでもガキじゃないんだぜ、時間通りに帰るからさ、なあヴレイ」

「うん。絶対に遅れないからさ。次こそザイドに勝てそうだったのに」

「お前のへなちよこパンチじゃ俺に勝てるわけないよ」

「そんなことないよ次は絶対に勝てるよ。パンチのスピードにだって追いついてるもん」

少年達の口ゲンカに苛立った男は、少年達の頭と頭を遠慮なくぶつけた。

＊ ＊ ＊

橋を渡り終えた着物姿の女性が少年達の姿を見つけるやいなや、花が咲いたような気品あふれる笑顔を見せて、小走りで駆け寄って来た。

「やっと来てくれたのね、待ちくたびれたわ」

「ザクロ様聞いてよ、今日も途中で止められて勝負がつかなかったんだぜ」

唇を尖らせたザイドはザクロの手を握って、滝壺が見えるいつもの浮島へ歩みを進めた。

「そうなんだよ、今日こそはと思ったのに」

同じように唇をすばませたヴレイもザクロの手を引いた。

「そうなの、でもあなた達はお友達同士なんだから、傷つけ合わないようにしなきゃ、いつも戦ってばかりじゃない」

「大丈夫だよ、こいつ結構丈夫だし、俺のパンチも避けれるようになったんだぜ、なヴレイ」

「当たり前だよ。いつか僕の拳でザイドに参ったって言わせてやる」

少年達は無垢に笑うが、小さく溜息を付いたザクロは少年達と同じ目線になるまで腰をかがめた。

「確かにお互いに磨き合うのはいいことだけど、友達を傷付けることは決していいことではないのよ、かけがいのない大事な人なのよ、それを忘れないこと」

「はい」

似たようなことを何度言われたのか分からないが、二人は何度も彼女の言葉を胸に響かせては、絆の大切さを実感していたのだった。

NEXT

&l t; 1章&g t;; 第1話 君といた。 (後書き)

読んでいただきありがとうございました。

どんなことでもいいのでコメントを入れてくれれば幸いです。

第2話 居場所と仇（前書き）

1話から2話までに主人公の歳が四歳ほどあがります。
その為に1話の内容はほとんどプロローグと同等です。

第2話 居場所と仇

時代と共に変化を重ね、時代の流れの中で生きる。

機械文明が発展し、科学技術を極めた大陸インジヨリックサークには二つの大陸が存在する。その一つ、東側のリンボーン大陸の最北端に位置するジルニクス国。

高層ビル群が街の中心部に密集し、幾本もの都心環状線によって繋がれている。

首都近郊の住居区は高層建築が周流で、やや勾配のある市街地を巡回している路面電車は日常生活には必需機関だ。

首都圏から伸びる高速道路はリンボーン大陸最大規模を誇る商業地帯でもあり、世界各国から人が集まる首都ピポロードルへと繋がっていた。

都心に向かって四人乗りの車を運転している女性は、助手席から街を眺めている少年を盗み見た。

街のいたる所には、冬季の間にだけ花を咲かせる樹木が植えられていた。賑わいを増してきた蕾はどれも薄紅色に膨らみ、微かに甘い香りを放っていた。

「ヴレイ・リルディクスね」と唐突に確認され、少年はたじろぎながら「はい」と返事をした。警戒心の強い紫紺色の瞳が運転席の女性を認めた。

赤い口紅がよく映える白い肌の女性は軍服に身を包んでいた。

「到着までに、これに目を通して置いてね」

渡されたのは手の平サイズのダグノートとイヤホンだった。

躊躇しながらもヴレイは耳にイヤホンをつけて、電源のスイッチ

を入れた。モニター越しに映し出された文字を見て、不機嫌そうに読み返した。

「セイヴァって防衛機関の……」

女の横顔を視界の隅で窺ったが、女は黙って運転を続けたままだった。

数分間の映像を見終わると、ヴレイは複雑な心境になった。

「社会の授業で習ったことあるわよね、それに詳しく説明しなくても知っているでしょう」

不満そうにヴレイは「はい」と声を返した。

細く開いた窓から十一月の風が冷たく入り込んでくる。

「本来なら訓練校を経て入隊試験を受けるの、でも君は総司令直属の命令でセイヴァに入隊することが正式に受理されたのよ」

怪訝な顔をしたヴレイに女は小さく笑った。

「どうしてって顔ね。四年前、総司令の官邸から家出したと聞いたわ」

ダグノートを持つ手に力が入った。

女は横目でヴレイの様子を窺ってから続きを話した。

「連れ戻されることに不服ならお父さんに直接聞きなさい。話は変わるけど十二月で十四歳でしょ」

「そうですけど」

「特例ではあるけど、十四歳未満での入隊は史上初よ。皆が君に期待しているわよ」

あまり嬉しくなさそうな顔をしたまま暫く沈黙していたヴレイは、何か思い出したかのように突然、堅気な声で女に訊ねてきた。

「拒否権がないのなら、交換条件を出してもいいんですか」

「内容によりけりじゃないかしら」

通り過ぎていくビル郡の向こう側に、超然とした威厳さを際立たせている建造物の頭がこちらを睨みつけてくるようだった。

＊ ＊ ＊

有無を言わず半強制的に連行されたヴレイは総司令公務室で、唐突に父親と再会した。喜ばしい親子の再会とは無縁な、重苦しい空気を漂わせていた。

「元氣そうだな」

先に沈黙を破ったのは父親の方だった。

黒レンズの眼鏡をかけた男の姿に、ヴレイは父親と言う認識を持てずにいた。

「自ら出て行ったお前を無理に連れ戻したわけではない、お前にはここでやるべき事があるから呼んだまでだ」

父親の言葉はあまりにも傲然としていて、目の前の人物だけには逆らえないことを本能的にヴレイは感じ取っていた。

「やるべき事って」

嫌な緊張で喉が渇いてしまいかすれたような声になった。

微動にしない威厳さが昂然と人を見下している。その視線に萎縮するヴレイは気付かれないように生唾を飲み込んだ。

父親の存在に重圧を感じていたヴレイにとって彼の元に引き戻されることは、悔しさより屈辱的な感情の方が強かった。

「第一艦隊艦長候補生兼ねディウアースパイロットに任命する」

平然と言い放った言葉をヴレイが理解できていないまま、総司令は続きを言った。

「始めは三週間交代で各部の研修を行い、その後艦長候補生として訓練を経た後正式な艦長として任命される。尚お前には講師を付ける、何故か分るな。学校教育が足りないからだ。最低限の単位はとってもらう」

「訊いてもいいですか、何故俺が艦長なんか、訓練校にも行ったことないのに」

剣呑な面持ちでヴレイは総司令を凝視した。

「お前は覚えていないだろうが、戦艦システムのコアとなるダグプログラムを幼児期のお前にプログラミングさせた。お前の持っている能力は潜在能力の域を超えている、だから社会で生きていく術を基盤に植え込んだ。余計なことだと思うだろうがお前にそうしたことをあいつも後悔はしていない。それを知った上で入隊するか否か、今決めろ」

驚愕でもあったが漠然としすぎていた。

決めろと言われても断る動機もなかったヴレイは必然的に受け入れるしかなかった。

「必要なものはすべて寮に運ばせる。何か質問は」

唾で喉をうるおし、唇を舐めてから口を開いた。

「断る理由はありません、でも条件があります」

数秒してから父親の眼鏡が上を向いて、続きの言葉に耳を貸した。
「母さんと姉さんの仇を追わせてください」

NEXT

第2話 居場所と仇（後書き）

読んでいただきありがとうございます。なにかと読みにくい構成になっ
てしまいすみません。

第3話 出逢い（前書き）

前話から1年11ヶ月が経ってます。プロローグの延長になってしまっていますのでご了承ください。

第3話 出逢い

それからノア・シエルトリーに出逢ったのは入隊して一年十一ヶ月が経った頃だった。

日々の喧騒にかまけ、一度決意した仇に対する怒りも風化し始めていた。そんな自分に情けなさも感じながら、やはり復讐心にかまう余裕もない日常にヴレイは苛立ちすら感じていた。

輸送船から降りると、湿った海風が空母艦隊の甲板に強く吹き抜けていた。

甲板を踏みしめた彼らの面前に、長身の女性がヒールの音を響かせて歩んできた。

「お久しぶり、スカイ副指令、ロイナは元気？」

「ああ、元気だとも、君も元気そうじゃないか。みなに紹介しよう、彼女が」

腰まで落ちる赤銅の髪が激しくなびいた。腰に手を当てて昂然たる姿で女は続きを言った。

「昨日から戦術作戦部第一課に所属しました。階級は第二等少佐。ノア・シエルトリーです。現在二十三歳、皆さんよろしく願います」

威勢のよい自己紹介に頼もしさを感じて、皆は快く握手を交わした。

適度な筋肉がついたそのしなやかな体軀を、他の男性少佐と同じ形ではあるが色は女性用の深紅色の制服を身につけている。左肩の徽章から伸びる革紐は左胸の金ボタンに繋がっている。

艶のある黒革スカートに映える白くて長い脚に隊員達は瞬きもせず見入っていた。

「では作戦部佐官の紹介をしよう」

スカイ副指令は同行させた一佐と三佐の紹介をすると、ヴレイに視線を向けた。

「彼は作戦部ではなく艦隊部だ。作戦部と最も縁の深い部署だ、それで代表で一名だが同行させた。軽く自己紹介を」

続きを促されたヴレイは下唇を少し噛んで、恐々とその女を見上げた。

「ヴレイ・リルディクスです。第一艦隊隊長兼ねディウアースパイロットです」

ヒールの高さを考慮しても、彼女の方が頭一つ分は有に高い。見下してくる眼光には乙女らしさのかけらも感じられなかった。

「貴方が総司令宰相閣下の息子ね」

悪気があって言ったわけではないようだが、気分を害したヴレイは眉根を寄せて彼女をにらんだ。

「どうも」

＊ ＊ ＊

その夜、ヴレイは外の通路の手摺に寄りかかっていた。

艦が波を切って進む音が静かに聞こえてくる。

ほどかれた漆黒の髪が潮風に乗ってなびき、月明かりでさらにその艶やかさを映えさせている。

雲の合間からちらちらと漏れる星の光をながめながら、紫紺色の瞳は力なく瞬きをした。

同じ頃、彼女も外の通路に出てきていた。慣れない船内のベッドでは寝付けず、気晴らしで外に出てみれば先客がいたのだ。

「最年少の隊長さんじゃない、こんな真夜中に出くわすなんて、奇遇だな」

彼女はヴレイの横に歩み寄ると、身体をくの字に曲げて顔を覗き込んできた。

「なんですか。こんな夜更けに海を見にきても真っ暗で何も見えないですよ」

機嫌の悪そうなヴレイの口調に、喉で笑ったノアは手摺に体重を

かけて身を乗り出し、長い髪を夜風に舞い上がらせた。

「真っ暗だから綺麗じゃない、この世じゃないみたいで」

昼間の時とは違い、気さくで上機嫌な彼女の口調にヴレイから緊張感が抜けた。

「そうだ。私まだあれ見てないの、ちょっと付き合ってくれない」

「え、ちょっと」

突然言われて言葉が出ないまま、手を引かれて連れてこられた所は戦闘機スピリツチャーが積まれている格納庫だった。

そこにはまだ傷一つない新型のスピリツチャーが何十機と格納されていた。

全体的に丸くなだらかな曲線を描いている。乗り込むときは湾曲になった屋根が上に開くので、どことなく飛び魚に似た形だ。

「攻撃は従来と同じマシンウイルスか」

沈黙するスピリツチャーを見ながらヴレイが訊ねた。

「そうよ。改善された点は戦闘機の生命維持システムを作動させ、強制的に母艦へ帰還するようプログラムされた。ちなみに開発チームは全員ドミロン出身よ」

ノアが自慢げに言うのも無理はなかった。

主に開発を担当しているのは彼女の出身でもあるドミロン国だ。もちろん共同開発も行ってる。それを輸入して実践しているのが連合国のジルニクス国だ。

工業分野だけで見ればドミロンはジルニクスより三年は先を進んでいると言われている。

「それと新たにプラズマ砲が搭載された。でもその為の制御プログラムを載せたため、従来の機体より若干重くなったみたい」

「それって熱粒子砲ですよ。軍法では使用禁止されている、使用許可があるのはマシンウイルスと決められているはず」

「それは限られた範囲での戦闘時でだ、戦争ともなれば大陸軍法評議会がそれを決定する。有事の際いち早く戦場で能力を発揮するのがこのスピリツチャーなんだ」

「でも、戦争なんて」

「軍人でしょ、そのぐらいの覚悟は当たり前だろ」

頭上から鋭い眼光で見下され、眉間にしわを寄せたヴレイは不機嫌そうにそっぽを向いた。

「軍人か」と小さく呟いたヴレイは踵を返して格納庫を出た。

「何故幹部はウイルス粒子が気に入らないんだろう。わざわざ戦争を起こさせるような武器を載せて。損害が減ればそれだけ費用だって、ケガ人だってでないのに」

後に続いて格納庫から出てきたノアは無然に溜息をついて答えた。
「戦いは血を流すものだと思える人もいる、評議会にも幹部と同じ考えを持つものはいるはずだ、ディウアースの開発に口を出さないのもおかしい。数年以内に対ディウアース戦闘機が各国で建造される、その開発には評議会の裏金が回っていたりするのも事実」

手摺を強く握ったヴレイは飛沫をあげる波をにらみつけた。

「何故あなたここに入ったの」

ノアからの問い掛けにヴレイは一瞬言葉を詰まらせた。

「自分から入隊したわけじゃない。元々家出してたから、しょうがなく帰って来てやっただけだ」

「ふうん。ディウアースの開発者ってあなたの母親なんですよ。優秀な生物工学者でセイヴァの技術開発部に所属していた。どうしてあれを造ったと思う？」

「あれに乗って戦えてことだろ、それでしか俺の能力は役に立たない。戦争は嫌だけど、もしそうになったら俺はこの力で戦うしかない」

「あんた、人間兵器にでもなりたいの、そんなものじゃないだろ」

顔をゆがめたヴレイは、彼女の茶色がかった緑色の瞳を凝視した。
「総司令が何故スピリッチャーのウイルス粒子開発を支持していると思う、それは奥さんと同じ考えを持っているからだ。怖いのは戦いじゃない、怖いのは戦いで物事を決めようとしている人達の考えだ」

月光を浴びて光る赤銅の髪が風に乗って舞い上がる。

夜空の中で明瞭に浮かんだノアの姿は綺麗だった。

「事が起きてしまったら別だけど、ご両親がそうなんだから、きっとあなたにも分るんじゃない、何の為に力を揮うのか。なんてね、偉そうなこと言ってごめんなさい、じゃあおやすみ隊長さん」

身を翻して船内へ戻ろうとしたノアを、突然何か思い出したかのようにヴレイは呼び止めた。

「また、話せるかな」

ノアは少し驚きながらも微笑んで頷いた。

とっさに出た言葉にヴレイ本人が驚いていた。その場で放心したまま、先ずは大きく深呼吸した。

取り残された甲板はやけに閑散としていて、一層悄然な気分にした。

「何の為に」

静寂を保つ波飛沫が時折顔に当たって頬を流れる。

ノアの残した言葉が頭の中で呪文のように木霊している。

ヴレイは月光を浴びたノアの顔を思い出し、無性に胸の内がそわそわした。不思議な感覚に鼓動が高鳴り、湧き上がった寂寞な想いが長い溜息となって吐き出された。

「なんでドキドキしてんだよ」

NEXT

第3話 出逢い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
なんでもコメントお寄せ下さい。

第4話 新たな地（前書き）

ここからがやっと本編になる感じでスミマセン
時間軸は現在になります。とりあえず幼少期から成年期に入っ
ています。

第4話 新たな地

悪夢にうなされて飛び起きた青年は汗ばむ額を手の甲でぬぐい、そのまま瞼を強く擦った。

意志の強さを示すかのような凜とした眉は太くて長い。まだ寝ぼけ眼の紫紺色の瞳はどことなく人間離れた一種独特の雰囲気漂わせていた。

窓から爽快な朝の風が入ってくると、背筋まで落ちた漆黒の髪が揺れた。

眠っていたソファから起き上がり、小さな洗面所に向かった。

蛇口をひねったまま、水の流れる音だけが部屋中に響いた。

今朝見た夢を思い出し、鏡に映るヴレイの顔がしがめいた。

思い出したものを掻き消すように騒がしく水の音を立てて顔を洗うと、髪を無雑作に後頭部できつく結った。

風雨にさらされ砂埃で曇った窓からは、ほぼ廃屋の建物が並ぶ裏路地と、人影がちらほらと窺える露店通りが見下ろせた。

床の上に転がっていた革製のベルトに付けられた短剣を拾い上げ、手際よく腰に回して装着した。

食べかけのパンをかじっていると、上着のポケットに入れたままの携帯電話が鳴った。

「まだここにいる、……わかった」

荷物から必需品だけを選んで腰バックにしまうと、靴紐をきつく締めてから革手袋をはめた。携帯電話に付いているホックを、ベルトから伸びるチェーンに引っ掛けて上着のポケットにしまう。

準備が整い部屋から出ようとしたその時、ふとヴレイの足がドアの前で止まった。とっさに腰ベルトに装着していた短剣の柄を握る。息を潜め六、七人の足音を瞬間的に聞き取った。

ポケットに忍ばせておいた携帯電話のリダイヤルボタンを押して、二、三秒で切った。

木製のドアが蹴破られたのは、ヴレイが後方へ下がった直後だった。

「朝から騒々しくて悪いが、仲間の敵はとらせてもらおう。お前から芋づる式に仲間の居場所をはかせてやる」

格下の人間をあざ笑うかのようにヴレイを見下した。

罵倒や唾を吐く奴らを、前髪の間から伶俐な眼光でヴレイは睨み返した。

両者の視線がぶつかった刹那、一人の男が手に持っていた鎖を放つと、身構えたヴレイの両手首に巻きついた。

身動きができなくなったヴレイを見て、奴らは堂々と正面から斬りかかった。だがヴレイは刃先の動きを一瞬にして見定めると、太刀筋は目先一センチのところで空を切った。

「つち、すばしっこいガキめ」

ヴレイは両手首に巻きついた鎖を引っ張ると、その鎖の先を持っていた男ごと振り子に使得、周囲を取り巻いていた男達をドミノ倒しの様に薙ぎ倒していった。

痛みでもがく男達は情けなく床にはいつくばっていた。ただ一人、この集団のリーダーだけはさすがに巻き込まれるのは避けたようだ。帽子のつばの下から心底憎たらしくヴレイを睨み付けた。

「あんた達がこっちに來てくれて助かったよ、こっちから行く手間がはぶけた」

「クソガキが、多少は腕が達からって、いい氣になるんじゃないのか」
「あんたたちはクソガキ一人し止められないのか」

最高潮に怒りが込み上がった男は腰に巻いていた鉄板状の刃を、とんでもない腕力で振り投げた。

「飛來刀か」

円盤のように飛んできた刃物は大きく弧を描き、ヴレイの首筋をかすめて、持ち主の元へ旋回した。

勝ち誇ったように笑った男は更にもう一つ取り出した。投げられた瞬間、ヴレイはとっさにしゃがみ込んで避けると、手首を捕まれ

た時の鎖が床に転がっていたのを見つけた。

勘でそれを捕まえると、大きく振り投げた。

鎖は男の手に当たり、掴みかけた飛来刀を手放してしまった。すかさずもう一刀を取り出そうとしたその時、首筋に冷たいものを感じて男はその場に硬直した。

「い、いつの間に……」

ヴレイが背後に回っていたことに気付いたのは、短剣の冷たい刃を当てられてからだった。

男が冷や汗をかいている間にヴレイは携帯電話で連絡を取った。

「すぐそこまで自警団が来ている、無駄な抵抗はやめろ」

愕然とした男はうな垂れ、その場にひざを突いた。

＊ ＊ ＊

「やつ等が銃を持っていなくてよかったですね、一人だからと油断したのがアダでしたね」

賞金狙いの輩で構成された旅団員の一人が安堵した様子で呟くと、ヴレイは鼻で笑い平然と答えた。

「銃を持っていなくても奴らの洞察力じゃ俺は撃てないよ」

上着のポケットに忍ばせておいた銃の安全装置を解除し、革製のガンホルダーに入れ替えた。

「君には敬服です。賞金は予定通り山分けです。指定の口座に振り込んでおきます、念のため金額を確かめてください。君ほどの腕なら公安が認めるブラックリストハンターになれますよ。君を入団させたがる旅団も多いでしょう、ここのグループみたいです」

ヴレイより二つか三つ年上の男は深い二重の目を更に細くして笑った。

クセ毛の茶髪が肩口で揺れていた。髪と同じ色をした瞳は開いているか定かではない隙間に賢そうにおさまっていた。

「始めから小遣い稼ぎのつもりだ。そろそろ情報収集もしたいし、

今回仕事に参加させてもらえただけで十分だよ」

「そうですか、私の情報でよければ何か提供しましょうか」

「と言われてもあんたから教えてもらった賊の中に、気になる奴はいなかったしな」

ぼんやりと呟きながらヴレイは携帯電話から銀行に振り込まれた金額を確認した。そこから指名手配中の賞金首リストの画面に切り替えると、今回捕まえた団体名にチェックをつけた。

「ではこちらから一つ伺いたことがあります」

「ああ、なんだ」

「君も探している賊がいると言っていましたけど、それは匪賊ですか」

眉をひそめた数秒後に「匪賊って何」と男に訊き返した。

「簡単に言ってしまうえば陸上版の海賊と同じです。集団で虐殺、略奪をする集団。私も探している賊がいます」

ヴレイは携帯電話をポケットにしますと、頭をかきながら答えた。

「匪賊かどうかは分らない、集団じゃなくて単独かもしれないし」

「では私と君の探し物は別件ですね。私の探している輩は集団ですし、同じ賊ならそこまで曖昧にはならないでしょう、この世界では有名ですから、それだけ訊きたかったんです」

怜悯な風貌でありながら気軽に笑みを見せるこの青年は物事を大観するかのように落ち着いていて、どこか取っ付きにくいところがあった。

小豆色のローブは革ベストに備え付けられた短剣を隠していた。

太いベルトを締めた腰は細かった。長いローブのせいかな、細身の長身が際立っている。

「そろそろ行きます、でも一緒に仕事をした方の名前も知らずに別れるのは惜しいもの、私はシリウスと申します。君は」

「ヴレイ」

「覚えておきます、君とはまたどこか出逢うよう気がします」

謙遜なシリウスはヴレイに背を向けてから、アッと立ち止まった。

「そうだ、君、匂いがします」

「ニオイ？」

また何を言い出すのかと、顔をゆがませたヴレイは気だるそうに自分の肩を掴んだ。

「私が探している匪賊と似たような匂い、でも気にしないでください否な感じはしませんから」

言いたいことだけ言って飄々と立ち去っていった。

つくづく変わり者だなと言いたげに溜め息をついたヴレイは、しばらくシリウスの後姿を見据えてから、シリウスとは逆方向に歩き始めた。

「本当に変なやつ」

N E X T

第4話 新たな地（後書き）

読んでくださってありがとうございます。なんでもコメントお待ちしています。

第5話 約束

グランドラインは二大陸から成っている。その一つ、グレスター大陸の東部、ラブラリン国の東国際空港に降り立ってから二週間がたった。

どこまでも吸い込まれそうな眩しい虚空。

石畳を踏みしめる足音、赤い屋根が並ぶレンガ造りの町並みに響く教会の鐘。

湿った土の匂いまでもが洗礼されているような気がしてヴレイは清々しくなった。機械化、通称インジヨリック化が進行しているとはいえ、それは生活面のみで利用している国々がほとんどで、軍事的策略があつて導入させている国は限られている。

この街には相当古い建築物が残されていた。

壮麗な大聖堂や、豪華で威厳を放つ宮殿と言われる建物は遠目からでも圧倒される。

歴史を守るために存在する大陸がここにはあった。

馬車が首都ミラードルに着いたのは夕方に近かった。

生まれて初めて馬車に乗ったヴレイは馬車酔いに襲われ顔面蒼白になっていた。少しでも良くなろうとずっと外を見ながら風に当たっていた。

軒を連ねたテント形式の市場には色鮮やかな衣類や食材が、所狭しと並んでいた。それらを求める地元の買い物客で市場は活気に満ちていた。

煉瓦たたみの広い道は馬車が何台も行き来できるように、幅が広くとられていた。

白い煉瓦で統一された建物が橋と橋で繋がれたミラードルは、最近観た都市の中では最もにぎやかに栄えていた。

白石を詰まれて作られた噴水を中心とした広場に到着すると、馬車は決められた駐馬スペースに停められた。

馬は腕木を外され、噴水に鼻面を突っ込んで水を飲み始めた。

客達はざわざわと降りて、ヴレイは屋根に積まれた荷降ろしを手伝った。

「あ、それあたしのなの、取ってくれない」

突然黄金色の髪の少女に言われて、ヴレイは毛皮の付いた革製のバッグを降ろしてあげた。

「ありがとう」

むしり取るようにバッグを受け取った少女はそそくさと踵を返して、市場へ駆けて行った。

少女だけではないが、こちらの住民が着ている服は派手なものが多かった。

基本的に色鮮やかなものが多い。少し蒸す気候にもかかわらず女性には布を多く使ったドレスを装い、男性はリネン生地や絹生地の衣装を身にまとっていた。

生活の格差によって大なり小なりの違いはあったが。

それに比べたら先ほどの少女は軽装だった。翡翠色に染まった絹生地を腰に何重も巻いていたのが印象的だった。リネン生地のパンツのすそは黒革の紐ブーツにしまわれていた。

両膝には銅製の膝当てが付けられていた。

腰に下げていたのは緋色の鞘におさめられた長剣だ。

インジョリックサークでは一分もしないうちに警察に捕まっているだろうなど、思いながらヴレイは鼻で笑った。

軍人として仕事をこなしながら、仇を追えるほどの時間も気力も、正直言っていないに等しかった。

それを知っていて父親は今回の任務を与えてくれたのだろうか？ヴレイは考えてしまった。

だとしても今更仇を見つけてもどうすれば良いのか、長い時間の中で幼い頃のヴレイの怒りや復讐心は、もはや過去の遺物になるうとしていた。

でもこの任務を引き受けた限り、仇のこともあきらめ切れなかつ

た。

あの村が、幼い頃襲われたあの村がグランドラインにある、手掛かりはここにしかないのだから。

＊ ＊ ＊

手元のモニターを深緑色の瞳に映す彼は、二、三度瞬きをした。

まだ艦長としての正式な制服を着ていない。灰色の服装が見習生であることを示している。左胸にはセイヴァの意味をしめす徽章が輝き、紺色のパンツのすそはきつちりとブーツの中にしまわれている。

「ここはひとつ艦長候補生のお手並み拝見といきますか」

肩につく金髪を手際よく束ねた技術部のジーベック少尉が楽しそうに言った。

「実戦スタートです。前方に動力波反応を感知、領域内に侵入しました」

凜とした声で言った作戦部のハリ少尉は二十歳をすぎた青年ながら、子供のような大きな黒い瞳を持ち、その活気あふれる発言力で現場の空気を引き締めた。

戦闘隊形を映している空域図が中央モニターに映されると、候補生に緊張が走った。

「スピカ、もっと肩の力を抜け」

「は、はい、艦長」

誰よりも歳若い本艦の艦長が候補生に声をかけた。

この第一艦隊の最高責任者であり総司令官でもある艦長は紫紺色の瞳を中央モニターに向けたまま、手元のダグノートを操作すると、敵艦のデータがモニターの隅に表示された。

「敵艦隊識別信号を受信、戦闘隊形は南部連合軍式と合致している」「あ、はい」

と返事はするものの、萎縮しているスピカの視線はモニター上を

泳ぎ、手には汗を握り締めているばかりだった。

「相転移エンジン大破、各部被害甚大、死傷者、負傷者共に多数出ている模様」

冷静沈着な艦長は事務的にデータを読み上げた。

「第一艦隊戦闘不能です」とハリはいつになく声を張り上げた。

「いまだ合格点には手がとどかずか」

力なく背もたれに寄りかかったジーベックは長い前髪をかき上げた。

「残念な結果ではありますが、気を落とすことはありませんよ。今回の模擬戦闘は訓練レベル八の高難度ですからね、一発合格はうちの艦長ぐらいですよ」

ハリは嬉しそうに説明した。

「エネルギーの残量に注意して、攻撃成功率と回避、防御を見極めながら慎重に戦えばさほど難しくないよ。ある程度はダグがバックアップしてくれるから」

艦長の易しい説明に励まされたかのようなスピカは「はい」と元気のいい返事をした。

「さすが艦長。よいアドバイスです。ヴレイ現艦長と前代艦長、歴代この二人しか模擬戦闘一発合格者はいませんかね、その腕を認められたうちの艦長はこの世界では有名人ですから」

「やめろ、ハリ」

ヴレイは眉根を寄せて、ニコリと笑うハリをにらんだ。

機嫌をそこねた艦長をよそに、不敵な笑みを見せたジーベックがさらに付け加えた。

「二代続きの凄腕が名を残したことで、不死身の艦隊と異名されたほどだからな」

二人のセリフにスピカは力なく肩をなでおろし、今にも泣きそうになりながら呟いた。

「これ以上僕にプレッシャーをかけないでください」

「あはははっ」と声をあげて笑ったのはノアだった。

「笑いごとじゃありませんよ」

「ごめんスピカ、でも彼らが艦長を尊敬するのは当然だよ、特に戦の前線で戦う彼らにとって指揮官の命令は絶対だ、それだけ艦長を信頼してるしな、自慢したがるのはしょうがないよ」

ノアの言っていることは最もだった。

地下施設の第一ドックは艦隊整備用ケージになっていた。

機械と油の匂いが鼻についていたが、時間がたつとまったく気にならなくなった。

「で、どこまで話したかな」

「艦長の階級は佐官の下となり、仕官で言うと中隊長または大尉という、ところまでです」

「そうそう、だから幹部といっても上官クラスにいるわけではないのよ、現場では最高司令官だけだね。これで少しは力抜けた？」

ノアは平然と言ってしまいが、スピカは眉をひそめて「でも」と言葉を続けた。

「十七歳にして艦長の職務に就いているのはすごいことですよね」

「まあ、前例がなかったから。責務と言う観点から言ったらこれは甘えになるんだろうけど、会議や評議会場で大人と混じって論じることができない、だから副艦長のイーグルやジーベックまたはハリに発言を任せている、本人の言論が必要なきもあるけど」

初めて聞いた話にスピカは口をあげたまま頷いた。

「威張り腐った上の連中は特権付きのような彼に、いい風を吹かせようとしなない。ディウアースにしても幹部はその性能に反感している。スピリツチャーの戦闘システムと基本は同じだから、ディウの開発はただの税金の無駄使いだってね」

「そんな、遠回しにヴレイ艦長を非難しているようなものじゃないですか」

視線をヴレイに向けながら呟くスピカの顔は渋る。

「何を言われても彼は絶対気にするそぶりは見せない、ああ見えてクルーをまとめ上げる艦長としての威厳は持ち合わせているから」

「強い艦長ですね」

「そうよ」

ニコツと口端を上げて笑ったノアに、スピカは数秒間見惚れてしまった。しかも彼女の声色ときたら酔いしれてしまいそうなほどなめらかなものだった。

ディウアースの胸部の拘束壁からダグ回線で繋がれたダグノートと睨めっこをしながら、キーボードを打っているヴレイを半分うらやましげに盗み見てしまった。

「ノア二佐、特別講義ありがとうございました」

「いつでも訊いて。もうすぐ模擬戦闘試験だろ、自信のほどは？」

「艦長に教えてもらってはいるんですが、僕覚えが悪くて、なかなか合格点に達しないんです」

「君の場合焦らないことね、君のペースで力を付ければいいんだから、候補生になれただけでもすごい才能なんだから、自信を持って」
うつむいていたスピカはノアの言葉を聞いたとたん、やや嬉しうにほころぶと「ありがとうございます」と深く頭を下げて、足場に設けられた鋼鉄のはしごを軽やかに降りて行った。

「どおディウの整備終わりそう？　そういうえばまだ区画配線整備合格してないんだって？　初級なんですよ」

「そんなこと言われたって勉強はしてる」

あれだけ褒められた艦長も今は唇をすぼめてむくれていた。

「それでも合格しないのは教える方に問題があるんじゃないか」

すばやくキーボードを叩くヴレイの横顔を見つめながら、ノアは恋人と言うより世話の焼ける子供にものを伝えるような口調で言った。

「イーグルは時間を割いて教えてくれてるのに、その言い方は失礼だろ」

「悪かったよ。たんに俺の覚えが悪いんだよ。スピカのように訓練

校から推薦されて艦長になったわけでも、前代のように才能があつて艦長になったわけでもないのに、俺に勤まるわけないだろ。みんな俺を褒めるけど、作られた能力じゃないか」

バタツと音を立ててダグノートを閉じると、ヴレイは嫌気が差したような溜息をついた。

「何もそこまでむきになることないじゃない」
不穏な空気が二人の間でただよった。

ヴレイは少し気まづくなって「ごめん」と小さく謝る。

コードや整備器具をしまいながら、ヴレイはとっさに違う話題を引っ張り出した。

「そういえば俺来週休みが取れたんだ、最近お互いの休みが合わなかっただろ、せっかくだし街へ出かけるのもいいかなって」

その言葉にパアツと顔を明るくしたノアが返事をしようとしたその時、地下ドック内にけたたましい警報が鳴り響いた。

掴みかけた仲直りのチャンスを警報ひとつで簡単に不意にされてしまい、ヴレイは誰にも気付かれない程度に舌打ちをした。

「発令所へ戻るわ。ヴレイは艦の発進準備を」

「了解」と気だるそうに返事をする、チラツとノアに視線を向けたヴレイは彼女の唇にキスをした。

そそくさとその場から立ち去ったヴレイを、ノアが後から呼び止めた。

突然の呼びかけに驚いたヴレイは条件反射的に振り向くと、後頭部で結われた黒髪が動きに合わせて大きくゆれた。

「さっきの、約束だからね」

ケージ中にノアの声が響いた。

真っ直ぐ向けられる彼女の瞳に愛らしさを感じ、照れくさそうに笑みを返した。

息を切らして発令所に戻ってきた時には、中央モニターに写る空域図に敵艦を示す印が点滅していた。

「信号受信後に敵艦を感知、領域内に侵入しました」

オペレーターの一人がモニターを見ながら説明した。

「総員戦闘準備、敵艦の進行状況は」

「はい。南南西から進行中、このままでいけば三時間後には境界線まで到達しそうな勢いです」

「まだ様子見ね、第一、第二艦隊発進準備。準備ができ次第発進せよ、高度一万五千メートル、方位は送信される座標に固定、その場にて待機せよ」

中央モニターを見上げるノアは眉根を寄せて、精悍なおもむきを強張らせていた。

NEXT

第6話 初陣

「真っ昼間からドンパチとは、おっかないねえ」

「ジーベックさん、非常時に昼も夜もありませんよ。軍人である者いつでも戦える覚悟を持たないと」

二人は艦内の発令所に繋がっている通路を走っていた。

「ハリ、そんなこと言ったらいつか無駄死にするぞ。そんなら昼夜問わずビビってるスピカはどうなる、初陣で皆まとめてあの世逝きだぜ。あれで艦長候補生とは、見上げたもんだ」

「そんなこと言っちゃかわいそうですよ、まだ慣れないだけですよ」
「ここ最近年齢が下がったと思わないか。ヴレイにいたっては十七歳のガキだ」

「でもそれは実力があるから認められているんですよ」

そんなことを話しているうちに二人は滑り込むように発令室にたどり着いた。

だがすでに最高責任者の席にはヴレイの姿があったので、二人は自然に背筋が伸びた。

「誰かと思えば、これでも俺達急いで来たつもりだったが」

金髪を肩に落としたジーベックは頭をかきながら自席についた。

「さすが艦長、僕も見習います」

ハリは大きく会釈をして自席についた。

司令塔として、床が丸くくぼんだデスクが高台のブリッジに三席設けられている。前半分がコンピューター操作するためのキーボードになっている。

そのブリッジの両側には階下へ通じる階段があり、そこはオペレーター専用のブリッジになっていた。

「艦長、境界域に動力反応を感知、駆逐艦クラスです」

右後ろのデスクに着いていたハリが声を張り上げた。

「スピカを呼んで来る、準備ができ次第艦を発進させろ」

デスクから立ち上がったヴレイを、あきれながらジーベックが意
見した。

「待てよ艦長、スピカはまだ候補生だ、実戦はまだ無理だろ。第一
さっきの戦闘結果見ただろ」

「候補生が実戦なくして艦長になれるはずがない、俺だってそうだ
った。俺がバックアップする、防衛システムのバックフィードの
誤差修正を急げ、それからディウアースの最終確認を整備班班長に
指示しろ、スピリッツチャー隊には待機命令だ」

苛立ち混じりの指示を仰いだヴレイはブリッジから出て行ってし
まった。

「スピカみたいな腰抜けを後輩に持って、イライラしちゃってるの
かね」

指先で首筋をかきながらジーベックは他人事のように細く笑った。
「艦長がそんなこと思うわけじゃないですか、それよりスピカ
君を呼びに行くなら艦内放送で呼んだ方が早かったんじゃないのか
な」

大きな目を不思議そうに瞬きさせるハリに対し、気難しい顔する
ジーベックは頭をかきながら鼻で笑って見せた。

「腰抜けのスピカが自分から来ると思うか、待っている間に終わっ
ちまうよ」

案の定、艦内放送どころか人の手でも危うかった。

「ええっ、ちょ、ちょっと待ってください。僕がやるんですか、そ、
そんな絶対無理ですよ、あの成績を艦長も見ていたじゃないですか」
阿鼻叫喚するスピカの腕を強引にひっぱり、無理矢理にでもブリ
ッジへの廊下を歩ませるが、華奢な体のどこにそんな力があるのだ
ろうかと不思議でならないほど、もの凄い力で行くのを拒んでいる。
「滑走路位置に固定完了、総員発進に備えてください、地下ケージ
から発進します」

艦内放送が流れた直後、ヴレイはスピカの手を取って近くの手す

りに掴ませた。強い推進力で体が圧せられたがすぐ元に戻った。

「ぼ、僕では無理ですよ。それに今シェルトリー二佐から教えてもらったことをノートに整理していたんですよ、まだ続きが……」

小さく開かれた口の隙間から震えた声を漏らすスピカに、いい加減苛立ちを覚えたヴレイは我を忘れて怒鳴った。

「今はそれどころじゃないだろ。俺がフォローするから、とにかくブリッジに来て俺のデスクに座るんだ、来ないなら命令違反とみなし艦から降ろすぞ」

息が止まってしまいそうなほどヴレイの怒鳴り様は本気だった。あまりの恐さでスピカは全身がすくみ上がってしまい、頭の中は真っ白になった。

「誰だって怖い、でも自分一人で戦うわけじゃない、一人じゃないから空に行ける、一人じゃないから艦に乗れる、少なくとも俺はそうだ」

＊ ＊ ＊

「第一艦隊発進しました、続いて第二艦隊発進しました」

「敵艦の分析結果は」

ノアが訊ねると、広いモニターを持つデスクで作業していた女性オペレーターが即座に答えた。

「まだデータ不足ですが、ペクト国連軍の旧第一戦艦です」

「ペクトですって、あそこにはギウル大佐がいるのよ、エルゼール国出身の元統合軍中佐。次のペクト後継者は彼だと言われているほどの実力者だ」

「よく知っているな、シェルトリー二佐」

「バンデイス一佐。彼の目的は何でしょうか」

セイヴァ本部の発令所、作戦局一課のブリッジに入ってきたバンデイスは中央モニターに映る空域図を見上げると、太い眉根を寄せて答えた。

「どうやら水面下で再起動の準備をしていたのだろうな。前は決起の映像をギウルが直接配信してきたほどだ」

「ではギウル大佐がその意思を受け継いだってことですか。でも第二次を起こさないために契約が組まれたばかりなのに」

訝しげなノアの頭上から、これ以上ない含み笑いを見せていたのは、階上のブリッジで佇むスカイ副指令だった。深く刻まれた口元のしわをゆっくり動かしながら、淡々と語りだした。

「エルゼール国の旧第一戦艦に対し使用禁止兵器を使い、あっけなく掌握してしまったのはうちの前代第一艦長だからな。さぞかし許せなかったのだろう。人工知能搭載艦を密かに研究していたエルゼールは、我々をにパンドラの箱の情報だけを保管させ、軍法違反の濡れ衣を着せたのだから、前代が義憤に駆られるのも無理はない」

「今回も宣戦布告なら新たな連合軍を呼ぶしかない。評議会に即時報告を要求します」

階上に強く進言したノアの肩をバンデイスが掴んで止めた。

「それは最終手段にとっておくことだ。奴らの目的は妖源ダグシステムの占拠とも考えられる、無人艦に導入すれば高度な戦闘が可能になるからな、まあ軍法違反にはなるがな」

「向こうは完全に手を引いたはずでは」

「書類上ではな。だが虎視眈々と狙っていたのは事実だったようだ」

それを聞いたノアは下唇を噛んで眉間にしわを寄せた。

「これは明らかに敵対行動です」

「評議会が干与する前に税金が消費されそうだな、スピリツチャーがなかったらこうはいかん」

挑戦的な笑みをバンデイスに向けたノアは、前方の中央モニターを見上げて勇ましく指示を仰いだ。

「第一、第二艦隊は送信した座標に戦闘配置。第三、第四艦隊はバックアップへ。全艦隊は電子防壁を通常装備すること、緊急回避に備え対空迎撃を三十パーセント稼動開始」

呼吸を整えたノアはヒールの音を鳴らして振り返った。

「リルデイクス総司令、作戦指揮は私が執ります」

まだ二十代半ばをこえた女性だが指揮官としては男に勝る勢いと覇気ある。

司令官の隣には常にスカイ副指令が凜と控えている。

最上階のオペレーター達はデータ処理に追われて慌しかった。沈着さを常に備えた司令官は書類に目を通しながらオペレーターに何か指示を出していた。

黒いレンズの眼鏡をかけていたので視線がどこを向いているのかわからなかったが、彼の威圧感明らかにその眼鏡で増幅されていた。二、三日剃っていないのか顎の回りが無精ひげになっている。

そうしてようやく階下のブリッジを見下ろした。

「連合指令議会の返答を待っているが、国を守るのは我々の使命だ、故に作戦があるのなら任せよう」

「はいっ」

NEXT

第7話 鳴り響く警報

コックピットの自動ドアが開くと、息切れをしているヴレイが、涙ぐむスピカを強引にブリッジへ押し入れた。

「遅くなった、状況は」

「息を切らすなんてめずらしいですね、艦長」

他人事のように呟いたハリはデスクのキーボードを操作すると、中央モニターに現状を示した空域図を映し出した。

「先ほど本部から情報が入りました。捕捉したのはペクト国連軍の旧第一戦艦だと判明、目的は宣戦布告あるいは妖源ダグシステムの占拠だそうです。僕の解釈だと八つ当たりってところですね」

「逆恨みとも言うな、税金の使い方からベンキョーしなおせて言っつけ」

細長い眉を吊り上げるジーベックの口端は、どんな時でも不適な笑いを作っていた。

「スピカ。ジャミング波から艦を守る防衛手段は分っているな」

艦長デスクに座らされ、思わず喉に息を詰まらせた。

まだ十代にもかかわらず艦長としての毅然とした趣や技量は奇跡じみていたが、スピカは心底彼を畏敬していた。

「敵の攻撃パターンを予測し、どれだけの範囲に防壁を張ればいいのか指示を出すんだ、ペクトは西部連合形態に属している。訓練を思い出せ」

「は、はい」と返事はするものの、やはり手付きは覚束ない。

緊張のあまり上手く頭の中で情報が整理されないのだろうと、ヴレイは不安混じりの溜息をもらした。

その時、階下のオペレーターがマイクに向かって叫んだ。

「敵艦隊のフレア反応を感知、攻撃します」

「三十度に回避」

ヴレイの指示で直撃は免れた。

「各部損傷の確認、ダグコロニーから被害状況を収集しろ」

「了解っ」

ハリとジーベックは各セクションに命令の伝達を行った。

「微妙に攻撃速度の誤差が生じているな、つまりこちらが避けられる時間をわざと作っただ。もしかしたら陽動作戦か、その判断も艦長に任される」

「そうですけど、まだ僕はそんなことまで習っていません」

「だったら今習え、艦長は皆が集めてくれた情報を元に指揮すればいい。だから端末モニターにはこれらの座標とデータを表示しておけば、後は機械が算出してくれる、何を公式に当てはめるかは艦長に任せれるが」

グレイはキーボードを叩きながら説明する。

状況についてこれないスピカはおちおち言葉を詰まらせていた。確かに戦艦システムの知識や戦闘能力は問われるが、重要視されて要求されるのはすばやい判断力と冷静さ、そしてクルーを引っ張る指揮能力だ。

スピカは必死になって覚えたマニュアルを思い出そうとするが、緊張して上手く思考回路が働かない。

手の平が異常なほど汗ばんでいた。

「にしても、一体どう言う事でしょう、フレア戦にでもなったら面倒ですよ」

唇を尖らせたハリは眉根を寄せて童顔を渋らせた。長い前髪をかき上げたジーベックが隣のデスクから、挑戦的な笑みをちらつかせながらハリに答えた。

「でも今のは目的を持って攻撃してきたと認識せざるおえないよな」
ジーベックの浮かれ調子に反して、ブリッジに張り詰めた空気が漂った。

「とにかく本部の発令所に緊急連絡だ、ハリよろしく」
「了解」

ハリは素早く作業に取り掛かった。

「これほどの状況下でも攻撃許可が下りると思うか？ ドミロンとジレーザスの連合条約が締結したばかりだろ、旧戦艦は元々ジレーザスが所有していたんだし、それを攻撃したらやっとなぜか着けた護衛協定も徒労に終わりそうだな」

「だとしても、選んでいる余裕はない。許可がない以上領域を侵犯させるわけにはいかない」

モニターを上目遣いする艦長の眼光は、悠然さを常に保っているジレーバックにスリルを感じさせるほどの凄みがあった。

戦艦の界下には雲海が広がっていた。地上は曇っているらしい。コックピットは天井から外壁まで超強化ガラス張りになっているので、天気が良いければ真っ青な虚空が眺望できる。

目を凝らした先には、雲海の上に頭を出した山脈の稜線がうっすらと浮かび上がっていた。

「艦長、リルディクス総司令より入電です」

ハリが操作すると、中央モニターにラルクナ・リルディクス総司令が映し出され、コックピット内のクルー達は一斉に姿勢を正した。悪気はないが意識的にそのモニターを凝視したのはヴレイだった。「君らが遭遇した艦隊はペクト軍事政権後継者の残存部隊と判明した」

心情を読み取らせない一方的な声色だ。

「妖源ダグの件は大陸軍法評議会でも和解したはずですよ」

ハリは眉根を寄せて意見した。

「だが彼等に見ればまだ終わっていないということだ。現に決起声明が同盟軍に送りつけられている、今そっちにデータを送った」

送られたきた声明の映像がモニターに映されると、コックピット内にクルー達の疑惑がどよめきとなって沸き上がった。

声明の映像が終わると、モニターは総司令を映した。

「ジレーザスと協定を結ばせまいとしている、だがそれは我々が判断することではない、お能の仕事をしな。全艦隊戦闘準備、本部か

ら指示する」

総司令の映像が消えると、空域図の画面に切り替えられた。

「戦闘……、そこまでしなくてはいけないのですか」

慄然するスピカの声が恐怖で震えていた。

「スピカ、お前が指揮をするんだ。怯えている暇はない、命令だ」

厳しくヴレイに怒鳴られ、泣き出しそうなスピカはビクリと肩を震わせて艦長を見上げた。

端正な容姿ばかりではなく艦長の傲然とした姿勢はスピカだけでなく、コックピットにいるクルー達にも畏怖的なものを感じさせた。彼から発せられる威光が艦を束ねる天賦の才能なのだと、誰もが納得させられる。

そんな彼の恩恵を浴びているスピカは強く瞼を閉じ、「大丈夫」と何度も自分に叱咤させ、ひとつ深呼吸をしてから深緑色の双眸を見開いた。

「イーグル副艦長に通信、今すぐ戦闘準備。本部からの指示を待つて戦闘開始、整備班はダグシステムのバックアップ強化を行ってください」

スピカは振り向いて、背後に立つヴレイを見上げて命じた。

「ディウアースパイロットは戦闘準備をしてください」

了解の合図を示す代わりに、イスの背もたれに手を突いたヴレイはスピカにだけ聞こえるようにささやいた。

「スピカにはその真っ直ぐな熱心さと才能がある、だからこの座に就いたんだ、自信を持て。俺とは違うんだから」

スピカの肩を叩いたヴレイはブリッジから出て行った。

彼の言葉の一部に疑問を抱いたが、今は目の前の仕事に集中した。

＊ ＊ ＊

セイヴァ本部発令所は緊迫した空気に満ちていた。

第一作戦課のブリッジから、ノアは揺ぎ無い視線を中央モニター

に向けていた。

「通信繋いで、作戦モニターを艦のモニターへ配信して」

「はい」

発令室の正面中央にデカデカと映し出されているモニターには、本部発令所のモニターに映っているものと同じ戦略航路の空域図が映し出されていた。

「簡単に説明するからよく聞きなさい。第一艦隊が敵艦の気を引くおとり役、第二艦隊が第一からの合図を受け、反対から山脈の影を利用して駆逐艦隊の動きを封じる、挟み撃ちにして母艦のシステムを停止させる。陽動のやり方は艦長に任せます。絶えず連絡を取り合い、タイミングを計ること」

デスクに足をかけたジーベックが背もたれに体重をかけて、頭の後ろに指を組ませた手を回すと気だるそうに呟いた。

「理論上では説得力のある作戦だが、そう上手くいくかね」

「大丈夫ですよ」ハリが笑顔で返した。

不安を隠しきれず一つ一つの指示に恐怖しながらも、スピカは意を決するとマイクのスイッチを入れた。

「スピリッチャー各員戦闘配置、イーグル隊長の支持で発進してください」

「了解」

音声だけがコックピットに響いた。

「あのジーベックさん、確かヴレイ艦長が乗るディウアースは艦長しか持っていない『力』で動くんですね」

「そうだ、あいつしか乗れない。だからあいつを倒そうと、何回か狙われたこともあるが心配後無用だ。お前見るのは初めてか」

「はいっ」

「艦を君に任せて、ディウ専属のパイロットになる日もくるんじゃないか」

彼らの会話を横目で眺めたハリはスピカの驚き様にクスツと喉で笑った。

「まさか、でももしそんな日がくるなら、その日のために僕がんばります」

ぎゅっと拳に力を入れたのと同時に、副艦長でありスピリツチャ―隊長でもあるイーグルがモニターに映し出された。

「全機発進準備完了。本部からの指示了解した。配置、人選共に問題はない、後はお前の指示を待っただけだ」

生唾を飲み込んだスピカは精一杯モニターに向かって叫んだ。

「スピリツチャ―隊はイーグル隊長を筆頭に発進してください」

「了解した」

イーグルは八重歯を見せるように笑むと、次はディウアースのコックピット内の映像に切り替わった。

「最終調整完了した」

「了解、では充電ケーブルを切断」

「ちゃんと言ってるじゃん」

ヴレイの笑顔にスピカは励まされたように嬉しくなった。

「スピリツチャ―全機離艦しました」

「了解、ディウアースは三十秒後に離艦。発進準備」

スピカの指示と共にコックピットは驚くほど活気付いた。それを見てハリとジーベックは目を合わせて強く頷いた。

「防御出力異常ない、妖源動力システム順調に稼動、ダグシステムバックアップに問題ないし、乱流発生率零点八パーセント、搭載飛行機の最終安全装置解除だ」

景気良くジーベックはモニターを読み上げ、ハリがその続きを付け加えた。

「順調に出力上昇中です。スピカ艦長候補生」

二人からの合図にスピカは視線で頷いた。

「ヴレイ艦長、頑張ってください」

「了解」

音声だけがブリッジに響いた。

「ルート確認。発艦します」

数十機のスピリツチャーと戦闘機ディウアースが晴れ渡った空へと飛び出した。

発令室を囲む超強化ガラスの向こうに、スピカはその姿を肉眼で確認した。

同時刻、セイヴァ本部発令所でも機体の発進を確認していた。

「半径二十キロにシールド展開、その四十秒後……」

ノアが指示をしている最中に、別のオペレーターが端末モニターを見ながら愕然とした声を上げた。

「シェルトリー二佐、五十近くの敵スピリツチャーから高エネルギー反応、ウイルス波ではありません」

「熱粒子が母艦からも反応しています」

「波動除去プログラムを作動させています」

「通常探知機では無反応だ、しかも許可のない撃墜砲を出すなんて、今の防壁では貫通してしまう」

蒼白していくノアは言葉を失って立ち尽くしてしまった。

「三時の方向、第一艦隊に向けられています、攻撃します」

「緊急防御の命令だ」

突発的にデスクを叩いたバンデイス一佐が声を上げた。

「間に合いません」

ディウアースが空へ飛び出した次の瞬間、紫紺色の瞳に映る視界が一瞬にして光に支配された。

上空一万五千メートルにまばゆい光が散った。

「ヴレイ……」

ノアは目を皿の様にしたまま、その場で放心状態になりながらも無意識に指示を仰いだ。

「急いで被害状況を確認して、動ける機体も即時離脱」

「整備班はドックへ急げ」

「救助船を第一艦隊へ向かわせろ」

発令所にいた非戦闘員は嵐のように駆け回っていた。

固く拳を握り締め、中央モニターを睨みつけていることしかでき

ずにいると、オペレーターの一人が突然振り向いた。

「シェルトリー二佐、ディウアースのコントロール神経に八十パーセントの乱流を測定しました」

「外部装甲盤が五十パーセント焼失、妖源動力エンジンが四十パーセント破損し稼動レベルが危険域です、補助エンジンを全力で稼動させても、機能低下のバックアップにはなりません」

「パイロットは頭部から出血しています、このまま乱流を続けさせでは命に危険が」

全身から血の気が引き、愕然としたまま沈黙するノアの変わりに、冷静さを失わないバンディスが変わって指揮した。

「機能レベルは下がっても構わない、鎮静プログラムを送れ」

「神経回路が三十番まで切断、乱流に影響され自動防御が強力に転回されています、そのため鎮静剤の効果がありません」

するとノアが突然我に返ると、オペレーターの背もたれに手を突いて指示を出した。

「ディウと通信繋いで」

即座にオペレーターがキーボードを叩いた。

「繋がりました」

「今すぐ離脱しなさい、命令だ、ヴレイ聞こえてるでしょ、退却しなさい」

「無駄だ、シェルトリー二佐。強制離脱を試みるんだ」

ノアの決死の叫び声はヴレイの耳に届いていた。

心臓が破れてしまいそうなほどの鼓動の高鳴りに、息が上がる。

『力』の抑制が効かなくなる度、自分自身に恐怖を感じていた。

「信じられません、稼動レベルが上昇しています、このままでは……」

顔を蒼白にさせたオペレーターが言葉を失っていた時、正面を猛然と見据えたヴレイの瞳は飛び出さんばかりに見開いていた。

こめ髪から一筋の血が流れ落ち、操縦桿を握る手に落ちた。それも一滴だけではなく、だらだらと生暖かく流れ落ちてきた。

「ディウアースが再起動しました」

機体を損傷したディウアースは間接部分にギシギシという鈍い音を響かせた。搭載していた飛行機が駆動音を響かせた直後、突風のごとく敵の戦闘機軍の中に突っ込んでいった。

その動きは尋常ではない、相手が攻撃してくる前にフレア砲撃で仕留めてしまっていた。

「搭載飛行機の反応プログラムが書き換えられています」

微塵の動揺も感じさせないディウアースの戦闘力に、誰もが言葉を失い、殺戮にも似た光景に戦慄する者さえいた。

「敵スピリットチャーターの数が四十パーセント減少」

「メインダグの一部が破損しているため、ディウアースの稼動領域が限界にきています、このままでは連動している飛行機の出力も落ちています」

奥歯をかみ締めていたノアがハッと顔を上げた。

「搭載機に帰還コードを組み込んだウィルスを送信して」

「自動防壁を解除するのに少々時間が掛かります」

「急いで」

「はい」

「二佐、旧戦艦から再び熱粒子反応を感知、ディウアースに向けられます」

その時、ディウアースのコックピットに甲高い警報が鳴り響いた。

NEXT

第8話 ここにいる理由

敵艦からの砲撃警報に気付いて振り向いた瞬間、ヴレイの視界は再び眩い光に支配された。

その様子を端末モニターで確認したオペレーターは愕然としたまま結果を言った。

「ディウアースの稼働率マイナスにっ」

「フィールド出力が稼働しません」

「コックピットボックスを強制射出して」

「了解っ」

ノアの指示で即座に反応したオペレーターがキーボードを叩いた。デスクに肘を突いてモニターを凝視する総司令の隣で、不動に直立するスカイ副指令が浮かない声色でつぶやいた。

「連合評議委員がまたうるさいぞ」

席から立ち上がった総司令はモニターに背を受けて答えた。

「機体が破損しても構わない、妖源ダグのバックアップはドミロンに保管されている、パイロット回収し次第ディウアースをドックへ回収、ペクト艦には特別ダグコードを通信しろ。大陸軍法評議会にもだ」

書類の束を乱暴に掴むと、踵を響かせてブリッジから出て行った。一人残されたスカイ副指令は重たい溜息をつきながら、階下のブリッジに視線を落とした。そこには意気喪失しながらも、拳を震わせた彼女が佇んでいた。

＊ ＊ ＊

冬の到来が間近に迫ると、一層冷たくなった空っ風が公園に強く吹きぬけた。

落ちゆく夕焼けが街全体を愁色に染め上げていた。

同じ色に染まったセイヴァ本部敷地内の数箇所には憩いの場として公園が設けられていた。この寒空の下、公園には誰の姿もなく、彼女一人だけがベンチに座っていた。

寒さで眉間に力が入る。緑色に茶色がかった瞳はどこか遠くを見つめ、赤い口紅を塗った唇は乾燥していた。絹地のような白い肌に夕日が当たると。

風に吹かれているのは緋色に染まって艶めく赤毛の髪だ。

しばらくして枯れた芝生を踏み歩いてくる足音に彼女は気がついた。

「ノア」

暖かいものが頬に当てられた。

視線を上げると、イーグルが缶コーヒーを持って立っていた。

首筋まで伸びた青みがかった黒髪が横風になびいている。

「ほらよ、コーヒー」

「ありがとう」

イーグルがノアの隣に腰を下ろすと、二人同時に缶コーヒーのふたを開けた。

「まだ秋なのに、冬みたいだな。寒くないか」

「大丈夫」

はるか遠くの空を眺めてから、ノアは熱いコーヒーを一口飲んだ。気付けば甘い香りが風に乗って、公園全体をその香りで包んでいた。冬季の間、薄紅色の花を咲かせる樹木がこの公園の周囲に植えられている。

少し開きかけた蕾から甘い香りを漂わせていた。この甘い香りが冬の到来を感じさせる。

「修復作業が予定を大幅に遅れて終了した。とくにディウアースは修復じゃなくて復元作業だったらしい。調整が終わり次第再起動テストだな」

「そう。乗ると思う？ あんな目に遭ってまで」

「乗るだろ、もうあれから一年だぞ、あんな目に遭ってまでもあい

つはディウを手放しはしないと思うぜ。「妖力を生かせられるのはディウだけだ、ディウがあるからここに居られる」って言ってたかな」

頓着のないイーグルは話しながらコーヒーを飲み干した。隣で小さく溜息をついたノアは抑揚を失った声で呟いた。

「そんなこと言われたんじゃ、こっちが辛いじゃん」

＊ ＊ ＊

ジダルガン・スカイ副指令はラクルナ・リルディクス総司令を横目で見てから、深刻な面持ちで事態を述べた。

「まさか過のような攻撃をするとは冗談にもならん。ディウアースと第一艦隊の修復の見通しはたっていないそうだ、ラグゼル隊佐が黙ってはいないぞ」

眼鏡の向こうから窓の外を眺めるラクルナは何事もなかったかのように、その冷静沈着な態度を崩すことなく堂々と答えた。

「問題ない。今回のことはペクトがここに直接占拠して来たと同等だ、軍法違反である国がどうなるかは目に見えている。責任はすべて向こうにある、今後のことは大陸軍法評議会と連合評議会が決定する」

「それはそうと、死者は出なかったものの、彼らは三ヶ月の治療が必要だ、特に酷かったのはブリッジだったそうだ。艦長候補生は意識を取り戻したそうだが二ヶ月は集中治療室だ、それとディウアースのパイロットだが、まだ意識が回復していないそうだ」

深いしわを眉間に刻んだスカイ副指令が無然な溜息をついてから三日後、ヴレイは集中治療室のベッドの上で目を覚ました。

まるで思考回路のない人形のように、ただベッドの上で横になっていることしかできなかった。同じ頃、ノアは総司令公務室を訪ねていた。

「ディウアースの制御システムを早急に見直すべきです。あのまま

ではパイロットの心身に負担がかかりすぎます、それにコックピットの強制射出は妖源を強制的に遮断させるためパイロットは意気を失います、ケガを負っていれば更にリスクを伴います」

大窓の前に佇んでいたスカイ副指令が浮かない顔で答えた。

「それはすでに検討中だが、彼の『力』を抑えるのはシステムでも限界がある、彼自身が『力』を制御できなくては、システムのバックアップ能力も低くなる」

「ですがこのままでは、彼は戦うだけの兵器と同じです。彼は人間です、危険な状況に追いこまれば誰でも精神不安定になります」

「だが……」

心苦しい顔を浮かべるスカイ副指令が口を閉ざすと、情緒の読めない冷徹なリルディクス総司令の黒い瞳がノアを見上げた。

いつにも増して精悍なまでの威厳さが分厚い空気の層になって、彼の回りに取り巻いているように見えた。

「事態が重くなったのはどの責任だ、先手を打たれる前に有利な状況へ持っていけなかったのは何故か、条件次第では敵を撤退させることもできたはずだ、作戦課としての仕事も満足にできずに駄々をこねているのは、どっちだ」

「しかし、言い訳はしませんが、システム開発に愚問しているわけではありません、ただ彼のことをもう少し考えてほしいと」

するとスカイ副指令が軽く手を上げて、ノアの言葉を止めた。

「開発部も最善の手を尽くしている、それに乱流はパイロットの強い意志と関係してくる、パイロットの日々の訓練に改善は必要だと、すでに訓練教官には相談済みだ」

「シェルトリー二佐、下がりたまえ」

総司令の鋭い眼光にノアはそれ以上言い返すことができなかった。

＊ ＊ ＊

一年前にノアが直接抗議していたことを知ったイーグルは溜息を

つくばかりだった。

「言いに行くなら俺にも教えてよ、あいつのこと考えてるのはお前だけじゃないんだぜ」

「ごめんごめん、……抗議した後思っただけけど、もしかしたら彼の母親があれを造ったのって、息子を守るためなのかもしれない」
唐突にもらしたノアの言葉にイーグルは理解できず顔をしがませた。

「妖力という特殊能力から息子を守りたかった、もしディウがなくなっても我を忘れず生きていけるように」

「そうだな、ディウ開発の為に母親自身の潜在能力をこじ開けたぐらいだからな。にしてもディウアース型戦闘機の開発予算、バカにならない金額らしいぜ。無駄に税金消費するなら、もっとあいつのことに使ってやればいいのに、俺達の給料にも回せっての」

「委員会に首を突っ込みたがる評議会にとってはおいしい話だな、委員会もおもちゃをエサに抗議を勃発させたがってるんじゃないの、凍結は時間の問題だな。そう言えば、スピカの成績はどんな感じなの」

「ヴレイの最低記録まで後三十点だった。あいつは長い目で見ながら徐々にディウ専属パイロットへ転向するつもりらしい、何よりあいつの肩の荷が少しでも軽くなってくれば俺はそれでいいと思う」
独り言のように呟いてから穏やかにイーグルは笑んだ。

「それより風の噂で聞いたんだが、造船に使われている資材が他大陸に輸出されているって話」

やけに真剣な彼の声色にノアは眉根を寄せた。

「輸出先は」

「グランドライン」

二、三度瞬きを繰り返したノアは言葉を選ぶように口を開いた。
「戦艦資材を他大陸へ輸出することは禁止されていないだろ、うちから輸出されているってこと」

「どうだろうな、輸出元の断定は数がありすぎてまだ情報がない、

しかしグランドラインも変わったもんだよな、歴史を残す大陸じゃなかったのか、昔から造船資材の輸出はあったが今になって浮上してきたってことは、その数が増えたってことだろ」

「そうだな、調査員がグランドラインに渡るって話はできていないの」

「さあな、まだ聞かないけど」

イーグルの返答を聞きながら、ノアはすっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干した。

「おっ、やっと見つけたぜ、聞いたか、ヴレイがグランドラインへ出張って話」

駆けつけて来た第一艦隊のスピリツチャー隊員ジールは呼吸を整えてから話を続けた。

「どうやら総司令の命令らしくて、第一艦隊中がその話で持ちきりだ」

「本人に聞きにいくしかないな」

NEXT

第9話 任務始動（前書き）

第一章セイヴァ編、最終話です。次話から第二章シルバーム編となります。

第9話 任務始動

突然コックピットに駆けつけて来たノアとイーグルに驚き、スピカは席から立ち上がって二人を出迎えた。

「ヴレイはどこ」

ノアの機嫌は声の低さで明らかだ。

「ディウアースの最終調整でケージへ行きました」

「ここへ呼んで！」

「は、はい」

じりじりと伝わってくる彼女の機嫌の悪さに、生唾を飲み込んだスピカは緊張な面持ちで艦内放送を流した。

「どうしたんだよ急に、艦に来るなんて珍しいな」

眉間にしわを寄せたノアを見て、困惑するヴレイはイーグルに助けを求めるような視線を向けるが、答えてはくれない。

「あの……」と声を出したとの時、突然ノアが口を開いた。

「説明して。グランドラインに行くって本当なの」

「どうしてその事、スピカしゃべったのか」

「ぼ、僕はジールさんにだけ言ったつもりが」

ジールに言えば皆が聞いたのと同じぐらい、口が軽いことで有名じゃないか、とヴレイは言ってみてやりたかったが愚痴はかみ締めて飲み込んだ。

溜息をついたヴレイは皆が噂していることを説明した。

数時間前、総司令公務室でその任務は言い渡された。

「ペクトの件も終結し軍政も今は落ち着き始めた。そこで君にグランドラインへ偵察に行ってもらおう。ここ数十年、軍拡や機械化の進んだ一部のグランドライン内の国々に軍艦用造船パーツが大量に集まっていると言う情報が入ってきた。今グランドラインはインジヨリック化が加速しているのと同時に、造艦工学が確立され航空技術

が進歩してきている、その事実は講義で習っただろう」

ヴレイは頷きながら「はい」と返事をした。

「そこでグランドラインがインジョリックサークの脅威にならないか内偵をしてもらう。すでに諜報部員が向こうに渡っている、だが調査は個別で行ってもらう、出立は年が明けてからだ、こちらで出発の手続きは済ませる」

スカイ副指令の黒い瞳を直視したままヴレイは質問した。

「何故俺なんですか、第一俺が艦隊を空けてもいいのですか」

すると気丈に沈黙を守っていたラクルナ・リルディクス総司令が口を開いた。

「軍人として諜報部員以外は外の公務を認めていない、だが緊急任務の場合、承諾するかは本人次第だ、それをお前がどうとるかはお前次第だ」

その時初めて父親と認識できたことに驚き、ヴレイは一瞬答えるに躊躇してしまった。

「行きます。スピカには今日中にこの事を伝え引継ぎを始めます」

「では」とスカイ副指令が手に持っていたダグノートをヴレイに渡した。

「向こうにはインジョリックサークの電波基地局はない、そこでこのダグノートにはセイヴァ専用の特別信号をセットさせた。向こうのダグ回線を使えばメールのやり取りはこれでできるが、インジョリックの情報を取り出すことはできない。それと工作費は君が指定してきた銀行に送金する、この期間の給料は内偵が終了するまで手を付けなくて済む」

「グランドライン内で携帯電話を使うことは可能なのか」

「あそこは一つ一つが独立国の集合体のようなものだ、安易に連絡が取れる場所はまだそう多くはない。携帯電話に搭載された信号を使えば携帯電話同士でなら通信はできる、それとダグ回線は主に公共施設に設置されている、電波を拾えば携帯電話からでもグランドラインの情報収集は可能だろう、当然ダグノートでも同じことがで

きる。報告書用のファイルやメールアドレスはこちらから送信しておく、仲間のメールアドレスも登録しておくといい、説明はこのくらいだ、前日に航空チケットを届けさせる」

親切に説明してくれたスカイ副指令はヴレイの肩を叩いた。

「任務承諾いたしました」

姿勢を正したヴレイは二人に深く頭を下げ、公務室から出て行った。

「とりあえずスピカにだけ話して、近くなったら皆に報告するつもりだった」

「似たような話なら俺たちもついさっきしていたところだ、造船資材の輸出が増加しているって噂を聞いて、それで調査団が向こうに渡るんじゃないかって、まさかお前が」

イーグルが話している途中にもかかわらず、声を尖らせたノアが割り込んできた。

「どうしてヴレイが行くの、諜報部に任せておけばいいじゃない、それに艦長が船を空けるなんて」

ヴレイの腕を掴んだノアは納得のいかない面持ちで答えを待った。「ごめん、でも俺グランドラインに行きたいんだ、こんな機会もう二度とないかもしれないから」

沈黙するノアの代わりに、イーグルが叱咤するようにヴレイの肩を軽く叩いた。

「お前が決めたことだ、がんばれよ隊長」

「ああ」と頷いたヴレイの腕を放したノアはブリッジから出て行ってしまった。

「ほら、行ってやれよ」

ヴレイの背中を押したのはイーグルだった。

ライバルだった彼がいつの間にか心許せる友人になっていたことに嬉しくなった。

廊下の先で彼女を見付けた。

二、三歩歩み寄ったヴレイは気まずそうに咳払いをしてから、声かけた。

「ごめん、勝手に決めて、分ってくれるか？」

沈黙がしばらく続いた後、うつむいたままのノアは突然ヴレイの胴に腕を回し、人目も気にすることなく強く抱擁した。あまりにも突然だったので、押されたヴレイは壁に背中をぶつけてしまった。

それでも嬉しかったヴレイは彼女の頭を撫でながら、額にキスを落とした。

「私は気が短いんだ、さっさと帰ってきて」

「ああ、分ってる」

一安心したヴレイはノアの髪の中に顔をうずめて、強く抱きしめた。彼女の香りに安らぎを感じる。しばらくの間この香りと安心感を我慢しなければいけないのはヴレイにとってかなりの苦行だった。

「ヴレイの十八歳の誕生日は皆で祝おうか、送別会も兼ねて」

「うん、そうだね、でもその後は二人がいい」

ヴレイは言葉を言い終わる前にノアの顎を軽く持ち上げ、彼女と唇を重ねた。

屈託のないノアの笑みを見付けてから、ヴレイはセイヴァに身を置くことも悪くないと思うようになった。

だがノアの笑みの裏に辛い過去があることを知ってから、今まで見ていた色彩が真逆の色に変化したような錯覚を受けたこともあった。多面的なノアの横顔を見るようになってから、自然とヴレイは自分の事を自ら話すようになっていたのだ。

＊ ＊ ＊

ジルニクスの上空は目も覚めるような透き通った快晴だった。

彼方に小さな雲の塊が山脈の傘になるように浮かんでいる景色を、コックピットから眺めることができた。

黒を基本に白と青で統一された戦艦。艦橋の突き出た舷側蹄部はスピリツチャーの射出口になっている。大気圏に吹く強力な対流を利用し、インジョリックサークで開発された戦艦は成層圏内を一ヶ月から二ヶ月は飛行できる。

空飛ぶ要塞は太陽の光を反射させながら、碧玉のような虚空を浮遊していた。

大陸を割る雄大な大山脈の絶景も、船内の整備コロニーの中からでは見ることに以前に、太陽の光すら感じることはできない。

慣れない手つきで配線コードを組み直していると、隣でそれを見ていたイーグルが手を伸ばしてきた。

「違う、これは二百五十八番に接続だって言ってるだろ、配線を間違うとどうなるか分るよな」

指摘されて、そっけない返事をしたヴレイはイーグルの無駄のない鮮やかな手付きに見入ってしまった。

何度見ても芸術作品のように描かれた配線の図面が、ヴレイの頭を幾度となく痛ませた。同じ工程を何度もやり直され、後半になると集中力を切らすので苛立って作業が雑になっていた。

イーグルは重たい溜息について手を止めてしまった。

「先週と何も変わってないじゃないか、俺の教えた所はまだ簡単な方なんだぞ」

「どれも同じに見える」

「もううんざりだ」と付け加えたかったが、生意気な生徒になるだけだと思ったのでそこは言葉を飲み込んだ。それでも十分デキの悪い生徒だ。

「機械関係になるとさっぱりだな、基礎電子工学からやり直したほうがいいぞ」

「ジールにも同じこと言われた」

「そうだろうな、ひとまず休憩だ」

イーグルは喉で笑うと、持っていたタオルで額の汗をぬぐった。ディウアースの拘束用デッキから出た二人は、休憩所として設置

された張り出し台まで降りた。

息苦しい機械の中から開放された直後は、そこが格納庫の中でも空気がおいしく感じられた。だが作業服に染み込んだ汗や機械油の異臭には、外界にさらされたことによって更に強く鼻についた。

邪魔そうな前髪を梳き上げたイーグルはその場に腰を下ろした。

「まあ気にするな、配線音痴でも隊長はディウの最高の相棒なんだからさ、人には向き不向きがあるってことだ」

「フローのつもりか」

「まあそういうことだ」

群青色の瞳をディウアースに向けるイーグル・スカイは、ノアが入隊した半年後に入隊して来た青年だ。

「ところでさっき調整した箇所のデータ修正はちゃんとしとけよ、あれで一定の磁界防御壁を転回させた際に装甲を硬質化させ、物理攻撃にも耐久性が増したから」

機械工学や電子工学を得意とする彼はスピリチャー隊長を任せ、手が空けば多忙な整備班に変わってヴレイの機械整備の教育係にもなっていた。

そのことにヴレイが快く思っていないことはイーグルも察知していた。

「分った。その頭脳を俺にも分けてほしいです」

冗談を言いながらもヴレイの冷めた態度に、イーグルは負けじとあおったりする。

「大半の戦闘を勘で切り抜ける隊長には負けるさ。ところでノアと付き合ってるんだって、俺とは付き合ってくれないのにさ」

「ど、どこでその事」

「お前の身近な奴らから」

「絶対ジールだ、おしゃべりが」

イーグルからその話を持ち出されなくなかった。

ノアとイーグルが顔見知りだと言うことは一目で分ったが、あまりの親しさに腹が立ったこともあった。

二人が元婚約者同士だったという噂が耳に飛び込んだ時は、言葉が出なかったほどヴレイは驚いた。ノアと付き合うようになった今でもその事実は訊けていなかった。

「それでもショックだったんだぞ、いつかは振り向いてくれるって思ってたし、悔しいがお前らを見てると憎めないんだよな、それでもいいかなって思えてくる」

イーグルから予想にもつかない言葉が出てきて、ヴレイは身を引いてしまいそうなほど驚いた。

「俺がノアの元婚約者だって聞いてイラついてたんだろ」

凶星を隠そうとして不自然にうつむいてしまった。

「十五年前、グランドラインで起きたダグコロニー爆発事故の事、話だけなら聞いているだろ」

ヴレイは頷いて返答した。

「ダグコロニーの組み直しとして派遣された調査団にノアも同行していたんだ、父親と一緒に。あいつの父親はセイヴァの戦闘機開発部所属のダグ開発の一人者だった、ディウの開発にも携わったらしいぞ」

「そうだったのか、知らなかった」

「あいつは話さねえけど、ノアの父親は優秀な技術開発者で家族と過ごす時間もつくらず研究に没頭していたらしい。派遣先で原因不明の大爆発が起き、ノアの父親も含め多くの研究員が亡くなった、だから正直あいつがセイヴァに入るとは思わなかった」

手すりを掴んで気だるそうにイーグルは立ち上がり、足場から眼下を眺めた。

視線の先にはスピリツチャーの整備に精を出すクルー達がいた。

「当時まだ下っ端の研究員だった俺の父親は爆発事故の調査へ行った。生き残ったノアを保護していた施設にも行ったそうだ、そこへはお前の母親も派遣されたらしい」

「お袋も爆発に」

「いや、彼女は爆発原因の調査で先に渡っていたんだ。その調査で

彼女が主幹の実験は二年引き延ばされたとか。ノアはセイヴァの医療施設に移されたが、精神的ショックで鬱病になりかけてたあいつを少しでも良くしようと、親父が引き取ったんだ。それが俺とノアの初対面だった。俺が成人した頃、十九歳のあいつはドミロン大学の全寮制に入学が決まって、慌てて俺はノアにプロポーズした」

「そしたら」

ヴレイは生唾を飲み込んだ。

「見ての通りだ、元々付き合ってたし、遠距離になるぐらいなら結婚したかったんだ」

まだ尾を引きずっているようなイーグルは自嘲するように鼻で笑った。

「それから四年後、女の尻を追ってここまで来た訳だ」

「そうだったのか」と呟いたヴレイは気が抜けたように茫然とした。ノアの男らしい喋り方がイーグルと似ていたことに、その時初めて気が付いた。また自分は知らない二人だけの思い出があるともうと、ヴレイは悄然な気持ちに襲われた。

「知りたかったんだろ、俺とノアの昔話。別に隠してたつもりじゃないんだぜ、でもお前とあいつがデキてるって聞いた時は大人げもなくムカついた。さてと」

大きく伸びをしたイーグルはヴレイに手を伸ばし、立ち上がるのを手伝った。

「残りの仕事を片付けるぞ、覚えの悪い誰かさんのせいで夜中になっちゃう」

「誰かさんの教え方がいいもんでね」

憎たらしいほど解りやすく教えてくれる講師にムカついて、機械整備は嫌いだとヴレイは改めて思った。

NEXT

第9話 任務始動（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
またまた長くなってしまいすみません

&1 t; 2章& g t; 第10話 召喚士の憂鬱（前書き）

第二章シルバーム編スタートです。

&l t; 2章 &g t; 第10話 召喚士の憂鬱

「ロインっ」

左右対象の巨大な柱は五メートルほどの高みまで伸びて、天井を支えている。

磨き上げられた大理石の壁は花模様や有名な妖精物語の名場面が幻想的に描かれている。同じような絵が天井にも描かれていた。

床から天井まである大窓の横には、脚に壮麗な彫刻と金メッキが施されたベッドが横たわり、深紅の天蓋が垂れ下がっていた。

声を上げて観音開きの扉を開けっ広げたベフェナ王は、ベッドの上で召喚獣と戯れていたロインを怒鳴りつけた。

「ロイン、夕刻までどこに行っていた、遅くまで出歩くなと何度言えば分るんだお前は、エスコーター達の手を煩わせるな」

「ごめんなさい父上、っわ、くすぐったいよ」

赤毛をなびかせる大型の召喚獣はロインの横っ腹を鼻先で撫でてきた。

「それと、宮殿の中で獣をむやみに召喚するなど言っているだろ、もし人に危害を加えたらどうする、しまっておきなさい」

まるで仕付けもされていないペットを人の目に触れるなど言っているような口調だ。

「僕の友達が他人に迷惑なんてかけないよ、それに自分の部屋の中だけならいいでしょ」

「侍女や従者もいるんだぞ、場を考えろ」

嵐のように現れた国王はロインの返事を聞くことなく、純白のガウンを翻し早々と部屋から出て行った。

重たい溜息をついたロインは召喚獣の顎の下を撫でて、小さく笑った。

ベッドから降りると、分厚いカーテンで閉ざされた大窓に歩み寄り、そつとめくった。眼前には城下町の明かりが蝋燭のように揺ら

めいていた。

ロインより大きな犬型の召喚獣もカーテンをめくって、ロインの後ろに寄り添ってお座りした。

母親はそうでもないが、何故か父親は昔から動物を毛嫌いしている。召喚獣と戯れているのを観付けると、今度ばかりはと強く叱ってくる。

自分の息子が召喚士だと知った時はさぞショックだったんだろうなど、ロインは叱られるたびそう思った。だから動物嫌いの父親の前では召喚獣の話を一切しないように決めていたし、極力視界に触れないように気を付けてはいるが、先のように突然部屋を訪ねて来られるのは不意打ちだ。

いつか絶対に認めさせるんだ、という想いがロインを躍起にさせていた。

「今頃あの子どうしていると思う？ あの家は安全だけど、いつまた謀反が起こるか、見てるだけなんて」

満月の薄明かりを浴びるロインは窓に手を付けて、地平線より先にある国へ視線を投げた。

下唇を噛みしめ、窓を突いている手に力が込み上がった。

召喚獣が小さく鳴いた後、部屋の扉が開かれた。小さなワゴンに焼き菓子と、アルコール度の低い果実酒が入ったポットを乗せて入って来たのは、ロインの専属侍女だった。

「どうしました、ロイン殿下」

大きな茶色い瞳には優しい光を宿し、肩にとどく毛先が豪華に巻かれていた。

ロインはカーテンの内側から出てくると、ベッドの上に飛び乗った。

「シルバームが心配で」

「最近はまだ大きな反乱があったとは伺ってはいませんが」

花の香りのように漂ってはゆっくり消えてしまいそうな侍女の囁きは、心身を癒す薬だ。

侍女はポットに入った果実酒をグラスに注ぎながら言った。

「やはり王がないからでしょうか、王制を廃してから幾度となく王軍と反王制軍が衝突し、今の新王が即位してもまたこの騒ぎですから」

ロインはグラスから昇る湯気を呆然と見つめ、浮かない面持ちで口を開いた。

「こうしている間にも国を捨ててベフエナやグレイディウル国に非難してくる民が大勢いる。難民を食べさせるに父上も躍起になっているよ」

十四歳にしては大人びた口調で言葉をつむぐ。

腰のあたりまで伸びた赤毛は首筋の後ろで束ねられていたが、一日中髪を結っているのは窮屈なので紐をといていた。

「都城であるエントラールパレス周辺で新王軍の数が膨らんでいる、あれじゃあ連合軍は太刀打ちできない」

ロインは近くのテーブルにグラスを置くと、勉強机に広げたままの地図を取ってくると、無雑作に床の上に広げた。地図上に描かれたシルバーム国を指でなぞりながら、続きを話しはじめた。

「すでに地方の連合軍が首都に向かっていて。新王軍が三千、とても連合軍が勝てる武力なんてない、シルバームを救える方法は新たに王制を復活させるしかない、でも」

知的で利発な声色が不安げな口調に変化した。

「今更正当な王を即位させても、民はすぐには納得しないだろうな」
「王制が廃されたのは、聖冠に翻弄された王族に民が謀反を起こしたのが切っ掛けでしたからね」

侍女が無然に呟くと、あっと声を上げたロインが顔を上げた。

「そう言えば、ルピナ王女から手紙が届いたんだ、一人でここに来るらしいから僕が迎えに行つて来るよ、召喚獣と一緒に行くから付いてこなくていいからね」

「殿下をお守りするのが私の義務だと言うのに、すっかりお一人で外出するようになってしまつて。しかしルピナ王女がお一人でいら

つしやるなんて、どうかなさったのでしょいか」
するとベッドに身を投げたロインは鼻で笑った。
「放浪の旅立ってさ」

＊ ＊ ＊

数ヶ月前。すでにシルバーム国に新しい執政官が即位し、新王軍と新王を受け入れない連合軍が対立し始めていた頃、ロインは召喚鳥に乗って上空を巡回しながら、眼下に広がるシルバーム王都を見下ろしていた。

執政官が王と呼ばれるのは王制時代の名残で、現代でも王または陛下と総称される。

シルバームの都心は他国とは異質的な街を作り上げていた。希少価値の高い鉱物の鉱脈を地下に持つシルバームの城下町は、ガラス製の建造物が多く建ち並んでいた。ガラスと言っても、ガラスと融合させ加工させた特殊ガラスだ。しかし、所詮都心から離れた郊外は他国と変わらない町並みが広がっている。

鉱物によって繁栄しているとはいえ、安寧を失っている国はどこか荒廃の色を見せていた。

一年前即位した執政官に疑念を抱いた逆賊と新王軍が衝突した跡が街のいたる所に、生々しく残っていた。

今尚、復興作業を行えずにいる地域も目立っていた。

そんな王都の中心には、一際飛び抜けて巨大にそびえ立っている城がある。山を描いたような、巨大なガラス製の屋根は昼間の日差しを反射させていた。

睨みに近い眼差しで眺めていると、召喚鳥が小さく喉で鳴いた。くちばしの先で何かを警戒しているように小さく振っている。

「哨戒機だ、城下町周辺を警備しているのか」

はるか前方に微かな影を認めたロインは口笛を吹いて、召喚鳥を巡回させ街の外れに向かわせた。

人影のない街の裏路地に降り立った。そこからロインはケーブルカーに乗って閑静な住宅街までやってくると、そこからは徒歩でとある館の前までやってきた。

N
E
X
T

第11話 金髪と剣

壮麗で華麗な館は訪れた者を圧倒させる。

白亜の大手の楼門に架けられた橋。アーチ道の奥に両開き鉄柵の扉がロインの前に立ちはだかった。

両隣には守衛が一人ずつ立っていてこちらを険しく見据えている。本人であることを確認した後、鉄柵は人一人分が通れる程度に開かれた。

庭の奥には外壁と同じ、白亜の屋敷が見えてくる。中央の尖塔を中心に大小の塔が寄り集まって建てられている。

色鮮やかな季節の花々が客人を出迎えると、「ロインッ」と庭の奥から少女の声が飛んできた。声を上げたのはロインと同じ年ぐらいの少女だ。

真昼の日差しの中から少女を見つけたロインは頬をくすぐられたように緩んでいた。

「待ってたわロイン、中に入ってお父様も待っているわ」

ロインが今日会いに来た男レイスは、子供の頃にベフェナ国へ留学し帝王学を学んでいた。

現在シルバーム国に王族は存在しないが、レイスの家系は王族の血を引く末裔だった。他国で帝王学を学ぶのは代々から言い伝えられている決まりのようなものだ。

成人してシルバームへ帰国してからも、レイスは娘のアンを連れて時折ベフェナ城を訪ねに来てくれる。

赤ん坊の頃からアンと同じ時を刻んできたロインにとって、彼等は身内同然だった。

「ダグ情報にシルバームの執政官に即位したのはルベンスだと書いてあった、過度な軍閥政治を敷いている彼の噂は各国にも流布し始めている、鉱物の物価は高騰するし、石好きの父上は立腹していたよ」

紅茶をすすったロインは不安を隠しきれない顔で、続きを話した。

「新王軍の圧力に連合軍がこのまま耐えられるか心配で、どうしてあんな独裁者が新王に、確かに権力はあるでも力だけだ、やっぱり君達、王族の末裔が王制を復活させるべきだと思う、僕が父上にご助力をお借りすれば」

「それは無理でしょう」

「どうして」

「利発な王子ならお解かりになるでしょう、ベフェナがシルバームに干渉したことになります、そうなればルベンスがベフェナをほっとくとは思えない、彼も王族の末裔です。私達より力のある者を信用します」

「でも、このままにしていたらこの国がどうなるか、それにアンもレイスさんもいるのに見ているだけなんて」

ロインは握った拳をひざの上で強く握った。

助けられないことは分かっていたが、悔しさが込み上がってくる。治安圧制部隊を派兵するには軍法評議会の許可がなくては他国へ部隊を導入することはできない、なにより無許可の導入を父上が許すわけがなかった。

「ロイン王子の義憤は痛いほど伝わってきますが、ここはまだ抑えてください。ただでさえベフェナは軍備拡大政策の反対派です、王子がもしシルバームの内戦に巻き込まれるようなことがあれば、同じ反対派から圧力がきます、そうなれば新王の思うツボです」

アンは細い肩を落とし、眉間にしわを寄せるロインを心配そうに見つめた。

「冷静さを忘れた僕を許してください」

ロインの小さな肩に手を置いたレイスは無然に呟いた。

「王子の熱意には励まされます、連合軍の皆さんにも聞かせてあげたいぐらいです」

唇を噛みしめたロインはうつむいて小さな頭を振った。

自分のやっている事は子供のものでしょりではない事ぐらい分かっていたが、一言でいい、レイスの口から一緒にがんばろうという言葉がほしかった。

＊ ＊ ＊

一人の少女がラブラリン国の首都ミラードルを離れ、西端の港町に着いたのはまだお昼前のことだった。

港町は買い物客で賑わっていた。狭苦しい広場に所狭しと並んだ露店市場をすぎると、広いポート乗り場に出た。

ラブラリン国とベフェナ国を繋ぐ境界湾沿いの町は海外との貿易港として栄えていた。

船長達のこだわりを感じさせる様々な漁船が何十隻と停泊し、また別の乗り場には連絡線と貨物線が並ぶ。

黄金色の短い髪をなびかせる少女は既に決めてあった乗り場へと向かった。

乗船チケットを買うと、ゲート先で大きく手を振る少年を見つけて「えっ」と声を上げてしまった。

その少年は腰まで落ちる赤毛を首の後ろで結い、大きく開いた瞳は水飴のように艶めいていた。十四歳ほどの体軀はまだ細身で、頭一つ分低い身長が幼さを感じさせた。

「ロインじゃない、また一人できたのね」

「久しぶり、ルピナ。少し見ない間に大人っぽくなったね」

「当たり前じゃない、少なくとも君より年上ですから」

二人が再会した数時間後、ヴレイもその港町に訪れていた。

港に來たのは湾を横断してベフェナ国内を通った方が、その隣にあるシルバーム国へ行くには最短距離だった。何より長い陸路をこれ以上馬車で移動したくなかったのも本音だ。

数日前、セイヴァ本部から詳細な任務内容がメールで届いていた。それはインジョリック化しているシルバーム国の現状を偵察せよというものだった。

初めての独断任務にヴレイの冒険心が小波から大波へと高ぶっていた。

ヴレイは一番運賃の安い船を見つけたが、他の客船とは明らかに設計の異なった姿に、咄然としてしまった。

船底は波の抵抗を考えて緩やかな曲線を帯びてはいるが、甲板の型がおかしい。

船尾が横に広がり、船橋にはデッキのようなものが設置されている。まるでそこから何かを観覧するようになっているみたいだ。

とりあえずヴレイは乗船し、出港まで野外カフェで待つことにした。

大海へと繋がる湾の水平線をどこまでも眺めながら、照り付ける

太陽の下で眩しそうに目を細めた。

海面を裂いて進む船の甲板は塩気のある風が吹きぬけ、それはもう爽快だった。

「なにもここまで来ることなかったのに」

「いいじゃないかたまには、僕は船を使わなくても召喚鳥がいるからここまでひとつ飛びなんだから」

「それって密入国じゃない」

「失礼だな、僕だってちゃんと港の国境ゲートで旅券見せてるもん」
「それなら私にだって乗せてくれれば、わざわざ船賃はらうことないじゃない」

「でも帰りは船に乗りたかったんだもん、それにルピナお得意の波乗りも見えたかったし」

手すりによかかって無邪気に笑うロインに、ルピナは「そうね」と情けなく笑い返した。

「それより、旅の許可がよく下りたね、フレイヤ王に止められなかったの」

「止められたわよ、でも将来のためだからって強引に許してもらったの、それに私一級剣士の称号取ったから、約束通り父様は仕方なく折れたのよ」

「ルピナが羨ましいよ、心の広いお父上がいて」

「ベフェナ王は厳格なことでは有名だからね、なのにこんな所まで一人で来て、ベフェナ王が知ったらさぞお怒りになるんじゃないの」

「大丈夫だよ、父上は召喚獣を呼び出す僕に怒るだけだから、最近そういう時ぐらいしか顔合わせないし」

悄然するロインは船のそばで泳ぐ魚のジャンプに、声を上げておもしろがった。

どう声を掛けて良いか分からなかったルピナは一緒になってはしゃぐことも忘れていた。

「ごめんルピナ、君の気を悪くさせるつもりはなかったんだ、ただ父上は動物嫌いで、いつかは分かせてやるんだって思ってるんだ、ルピナがそんな顔しないでよ」

逆に慰められたような気がしてルピナはロインの背中を思いっきり叩いた。

「その意気よ」

王族の中でも彼女は風変わりで、並みの姫君とは異質な存在だった。そのせいか各国の王侯が集まった席でルピナは浮いていた。目を惹いてしまう優美さは勿論のこと、彼女の異彩な雰囲気があるさせているのかもしれない。

王子ならともかく、王女で剣を扱える人間は少ない。

服装と言ったら昔から軍服を好み、それも上級官僚の壮麗で高貴な服ばかりを選んで着ていた。今は庶民に溶け込もうと、それなりに落ち着いてはいるが、ズボンの裾をブーツにしまう女性は滅多にいない、基本的に男性の装いだからだ。それでもルピナは颯爽と着こなしてしまふ。

首筋で短く切られた髪は黄金色に輝き、潮風に強く吹かれていた。海の様に真っ青な瞳が楽しそうにロインを見下ろした。

春から初夏に移り変わる季節風は湿り気が増して暖かくなるのが特徴だ、そして気流が動きやすくなるこの季節は遥か上空で吹く風音がここまで聞こえてくる。

出港からしばらくして甲高い汽笛が三回響いた後、アナウンスが流れた。

「ただいまから波乗りのエントリーを行います、参加希望の方は二階受付ロビーまでお越しください、締め切りは今から三十分後です、時間厳守ですので申し遅れた方の途中参加は認められません」

「だってさ」

手すりから身を乗り出したロインが楽しそうにルピナを促した。

「じゃあ行ってくるね」

「いってらっしゃい、中央ゲットしろよ」

「運がよければね」

同じ頃、二階のカフェで平穏な船旅を始めていたヴレイにも、アナウンスは聞こえていた。続々と人が集まってくる様子がカフェからも見る事ができた。

「波乗りって何だ」

カップを口元に当てたままヴレイは紫紺色の瞳を二、三度瞬きさせていた。

NEXT

第12話 波と舞う

「波乗り」というものが気になったヴレイはカフェを離れて様子を見に行くと、そのまま人の波に押されて列についてしまった。物珍しさもあり船賃の元を取るつもりでそのまま受付まで行ってみた。

「スカイフィッシュとはプレイヤーがケーブルと繋がったグリップを握り、脚に装着したボードを使って波を滑ることです。どのケーブルで滑りますか？」

訊かれてヴレイは隣の受付を見た。

「中央のロングで」

隣で受付をしていた人と同じことを言ってみた。

「エントリーを受け付けました。このプレートを左胸にお付けください。呼ばれるまで観覧バルコニーで待機してください、呼ばれましたら一階の波乗り入場口の通路を下りて来てください」

「は、はい」

簡単に説明されただけではどんな競技か分からなかった。

言われた観覧バルコニーとやらは船尾から突き出た船橋のことを指していた。

船橋への通路が開放され観客席に人が集まってきた。眩しいくらいの紺碧の青と、照りつける日差しが観客達のテンションを盛り上げる。

海上を見ている限り穏やかとは言えない波だ。船体が時々大きく傾き、波が強く船底にぶつかってくる。

観客席に着いた頃、再び汽笛が鳴り響いた。

「間もなくスカイフィッシュが始まります。呼ばれた方は入場ゲートへお越しください」

一番低い場所にある船尾のデッキから三人のプレイヤーが出てきた。

足には円盤型のボードが取り付けられている。プレイヤー達は軽く手を上げて、観客席を歓声で沸かせると、ケーブルの先に付いたグリップを握って荒波の中へ飛び出した。

左右に一人ずつ、そして中央のケーブルに一人のプレイヤーが海面を切って滑る。

高波の頂上で派手な技を繰り出すと、再び観客席から歓声が沸き起こった。波飛沫が太陽の光を反射し、観客席にも容赦なく潮が飛び散ってくる。

ヴレイは立見席からそれを観覧した。思わず目を惹いてしまったアクロバットに息をのんだ。

自分の番が呼ばれるまで少し緊張しながら見入っていると、中央を滑っていたプレイヤーが転倒した。

リタイヤしたプレイヤーは即座に船へ戻され、新たに呼ばれたプレイヤーが水面を滑って登場した。女性が出てくることはよくあることだが、ヴレイから見てそのプレイヤーは自分と同年ぐらいの少女だった。

黄金色の短い髪がなびくたびに輝き、銅製の胸当てと刺繍が派手に施されたレースの腰巻が印象的だった。

船はわざと高い波の上を突き進み、プレイヤー達は引っ張られる

ままだに真正面から荒波を受けた。

それでも彼女はワイヤーの先で華麗に舞っていた。

派手な技を見せるわけでもなく、彼女は波の上で花のように踊っていた。目を奪われたヴレイは言葉もなく見惚れてしまった。

彼女の波乗りが終わると自分の番号が呼ばれた。波乗り用のデッキに着くと潮が容赦なく吹き付けていた。

波飛沫を浴びながら、足にボードを装着し係員の誘導するままヴレイは荒波へと飛び出した。

「ああ、もう焼けくそだっ」

後頭部で一つに束ねた漆黒の髪が乱れて舞った。

波をボードで蹴って大きくジャンプし宙返りを見せたりすると、おもしろいぐらいに観客の歓声がこだました。ヴレイがひと際高い波の頂上から大きく飛び降りると、観客席は最高潮に盛り上がった。

濡れた髪をタオルで拭きながらルピナはその光景を悔しそうに睨んでいた。

「あいつすごいよな」

横でロインがルピナの剣を大事そうに抱えながら感嘆した。

ロインの視線を釘付けにするのは黒髪を一つに束ねた少年だった。今までのプレイヤー達とは明らかに異質的で、それでいて挑戦的な技を繰り出し観客を魅了していた。

「あ、あいつ」

突然ルピナが声を上げ、隣にいたロインがビクツと目を向けた。

「ど、どうしたのさ」

「真ん中のあいつ、どっかで見たことあると思ったのよ、ミラードルで私が追いかけてた泥棒をあいつが掴み投げしたのよ」

「え、どういうこと、顔見知り？」

「泥棒を捕まえた後あいつに任せちゃったから、その後のことは知らないけどね」

「そうなんだ、手柄だったのに」

「私の身分がバレたら面倒でしょ、そもそも捕まえたのはあいつよ、じゃシャワー浴びてくる」

ルピナはロインに預けていた剣を受け取った。

「観ないの？」

「だってあいつ私よりすごくないもの」

波乗りが終わった後、ヴレイは個室に戻ってシャワーを浴びた。着替えてから部屋を出ると、小腹を満たそうとラウンジへ戻ってきた。

カフェのメニューボードに載っていた、アイスクリームののった蒸しケーキの写真に見とれてなら列にしていると、前方から聞き覚えのある声が響いてきた。

「蒸しケーキアイス売り切れなの」

「すみません、生産が追いつかず二時間ほどお待ちいただいているところです」

「じゃあいいわよ、オレンジジュース二つ」

ジュースを持って列の外に出てきた少女の髪は艶のある黄金色だった。波の上で舞っている少女と、前にいた町で泥棒を追いかけていた少女の姿が重なって、思わず「あっ」と声を上げてしまった。

苛立った少女を迎えに来たのは、十三、四歳の赤毛の少年だった。彼女に気を遣いながら苦笑いしていた少年がこちらに気付いた。

「あっ、波乗りが上手かったお兄さん」

そして自動的に少女もこちらを見て「あっ」と声を上げた。

「君の波乗り見たよ、すごかったよ、プロの波乗りなの？　僕はロイン、スカイフィッシュのファンなんだ」

ロインは深緑色の大きな瞳を輝かせ、興味津々にヴレイを観察する。

「俺はヴレイ、波乗りは初めてだ」

「初めてであんなにかっこよく滑れるなんて、すごいよ。彼女はルピナ」

「あっちにも似たような競技があったから」

「あっち？」　ロインとルピナが同時に言った。

童顔で人懐っこいロインはきょとんとした顔でヴレイを見上げるだけだが、隣でジュースを飲み干していたルピナが目尻を細めて凝視してきた。

「こっちの人じゃないの？」

少々遠慮がちにヴレイの容姿を窺い、最後に紫紺色の瞳を見つめるルピナ。確かに彼の装いは馴染みのない異文化を思わせた。

ルピナが返事を待っていると、ヴレイはあの時のことを思い出して声を上げた。

「お前あの時面倒くさいこと俺に押し付けただろ、あの後何時間も自警団で引きとめられたんだぞ」

以前ルピナとは馬車で乗り合わせていたので顔見知りではあったが、恩を婀娜で返されては腹の虫も収まらなかった。

ラブラリンの首都に着いてから、宿探しのついでに市場を散策していると、彼女が窃盗犯を追いつめていたのだ。現場に居合わせた

ヴレイが逃げて来た窃盗犯の服を掴んでしまい、そのまま背負い投げてしまったのだ。

自警団が駆けつけて来た時には既にルピナは姿を消していたので、ヴレイが対応する羽目になってしまったのだ。

「今はその話じゃなくて、グランドラインの人間じゃないのって私が訊いてるでしょ」

「インジョリックサークだ、面倒を俺に押し付けたあんたは何者だ」「別にどうでもいいでしょ、あの時のことは悪かったわよ」

言葉を吐き捨てたルピナは乱暴にラウンジから出て行った。

取り残されたヴレイはあまりの見捨てられ様にますます苛立った。「ルピナは剣士なんだ、類まらない剣舞の持ち主なんだけど少し傲慢なところがあって、大目に見てやって、悪い娘じゃないんだ」

ロインは利発で賢い子供なんだと印象付けられてはいたが、ルピナをフォローする彼の方が自分より年上ではないかと錯覚してしまっているようだ。

しつこくルピナの後を追わず、二人で展望甲板にやってくると、そこからもスカイフィッシュを見ることができた。競技が終了してなお、自由に波乗りをする者達が競って海面を滑っていた。

その中に一人、目立って明るい髪の少女が滑り出した。黄金色の髪を翻し、自由気ままに滑っている。今度は背に剣を背負ったまま滑っていた。塩水で錆びないか疑問だ。

さっさとこの二人と別れようと思っていたその時、耳が痛くなるような甲高い鳴き声が轟いてヴレイとロインは同時に空を見上げた。

悠然と上空を飛来するそれは日差しをさえぎり、甲板に大きな影

を落とした。

逆光で目を細めるヴレイは初めて見た奇異の生き物に、口を開けたまま愕然としてしまった。

「なんだ、あれは」

NEXT

第13話 護衛獣

甲高い鳴き声の持ち主は、巨大な鳥にも似た爬虫類の尾を持つ獣だった。何度も鳴き声をとどろかせ、その様子は明らかに尋常ではない。

「船の真上にいて気付かなかったなんて、こいつ気配を消していたんだ」

冷静に私見するロインに対して、取り乱してしまいそうなほど驚愕しているヴレイは状況が理解できなかった。

「何だよあれは」

「シルバーム国の護衛獣だよ、でもあれはこっちから何かいない限り攻撃したりはしない、それに護衛獣を使うときはその国が他国から警戒している場合だけなんだ」

「護衛獣ってのを動かせるのは誰だ、軍法か」

「軍じゃない執政官だけだよ」

護衛獣は突然、急降下すると船の展望甲板ギリギリを飛び抜けた。その突風で船体が大きく傾いて、デッキにいた乗客達は恐怖で逃げ惑う。

海上で波乗りをしていた人達をまるで弄ぶかのように高波が襲う。船員が潮をかぶりながらケーブルを引いて戻そうとしているが、いつ足が波に取られるかわからない状況ではいつ犠牲者が出てもおかしくない。

「何故攻撃をしてくるんだ」

「分からないよ、でもこのままじゃ危険だ」

するとロインは指先で空に陣を描いた。陣が光ると、何もなかつ

た空中から護衛獣と似たような巨大な鳥が飛び出してきた。

「ここは僕が、ヴレイはルピナを」

「え、ちょっと、どうなってるんだ、どこから獣が」

「今はこんなことより、早く下へ」

困惑するヴレイはロイン怒鳴り声で我に返ると、身軽に手すりを飛び越え、階下の甲板へ飛び降りて行った。

波乗りの場のデッキまで下りてくるなり、高波にのまれまいと手摺りにしがみ付いているだけの船員は船内へ非難させ、動ける者と協力しながら海面に転倒したプレイヤーをデッキに戻した。

無事に波乗りを続けているのはルピナだけになった。

この状況にもかかわらず彼女はスリルのある高波を楽しんでいるように見えた。

「彼女は俺がどうかしますので、他の乗客をお願いします」

船員達は迷いながらもここはヴレイに任せて良いと判断した。

「何かあったらすぐに私達を呼ぶんだ」

「はいっ」

とは言ったものの、ここで粒濡れになって待機するのは酷だった。そこでヴレイは乗り場に置きっ放しになっていたボードを足に装着すると荒波へと飛び出した。

相変わらずルピナはこちらに視線も向けず、平然と滑っていた。

「おい、甲板に戻るのは危険だ、間違っても転倒するなよ」

「するわけないでしょ」と叫んだルピナは高波の上からジャンプしてヴレイの頭上を通り過ぎた。

その運動神経にはヴレイも脱帽だ。

上空ではロインが召喚した獣と護衛獣が衝突しながら激しい攻防戦を繰り広げていた。

だが力の差は明らかだった。一方的に体当たりされているのは召喚獣の方だったので、見ていて不安になったヴレイは腰に手を当てて気付いた。銃を部屋に置いてきてしまった。

「あれシルバームを護衛しているんだろ、何で急にこの船を攻撃してきたんだ」

「そんなこと私に分かるわけないでしょ」

言葉を吐き捨てるように怒鳴ると、背負っていた剣のベルトを腰まで下げ、ボードと繋がっているグリップを片手に持ち替えた。緋色の柄を握ったまま獣を鋭く見据える。

「おい、何をする気だ、剣じゃ無理だ」

「やってみないと分からないじゃない、ちょっとあんた護衛獣が低空飛行してきたらタイミングよく私を放り投げて」

「バカな、そんなことが」

あきれて苦笑いするヴレイだったが、昂然と構えながら海面を滑り続けるルピナを見て、それ以上言葉が出なかった。

「分かった、俺がそっちへ行く」

不規則に暴れる波の動きに合わせながら、ルピナの側で滑り続けるのは容易ではなかった。ケーブルと繋がるグリップを片手に持ち替え、自由になった右腕をルピナの腰へ伸ばす。

二人の息が合った時、高波の頂点へと滑り上がった。護衛獣の動

きを見定めたヴレイはルピナの両脚を抱えて持ち上げた。

「行くぞっ」

合図と同時にルピナはヴレイの腕力によって、宙へ放り出された。間合いに入った獲物を鋭い眼光で捉え、構えた姿勢を崩すことなく護衛獣の首を目がけてルピナは剣を抜いた。返り血を浴びたルピナの顔が深紅に染まる。

その様子を展望甲板から見ていたロインは、初めてとは思えない息の合った二人のコンビネーションに見惚れてしまった。

深手を負った護衛獣は飛行力を失い海面に叩き付けられた。海面を血で染めながらも、船に向かって飛び立とうと水飛沫を上げながら、翼をばたつかせていた。

二人は警戒して身構えると、船橋の甲板の下から射撃砲らしき装置が現れた。

「何でただの客船に砲弾が」

「海と繋がるこの湾はシルバームの護衛獣が監視しているのよ、しかも最近シルバームは情勢が不安定だから、砲弾は護身用よ」

十二時方向に向けられた射撃砲はタイミングを見計らい、護衛獣に目掛けて砲撃された。

だが護衛獣は直撃寸前に水面から飛び上がった。爆音と共に水面が山のような波飛沫を作り、爆風と津波で船体は大きく傾いた。

「大丈夫か」

「なんとかっ」

高波に襲われながらも無事に滑り続けていたルピナを見て、何故かヴレイはホッと肩をなで下ろした。

だが安心しているのもつかの間、護衛獣が口を大きく開けると、体内から太陽の様な光源が強烈な光を放って顔を出した。初めて見る光景にヴレイは我が目を疑った。

「なんなのよあれ」

眉をゆがめたルピナが大声で訊いてきた。

「こっちが聞きたいよ」とヴレイが叫んだ直後、その光源は船を目がけて放たれた。

一瞬音もなく、秒針が止まったかのような刹那的な間に、ヴレイは手の甲に印を描き意識を拳に集中させると、護衛獣の放った光弾と同等の光弾を放った。

お互いの閃光が正面衝突した瞬間、空中で爆発を起こした。すぐさまヴレイは先と同じような光弾を放つと、見事に護衛獣の胸を貫いた。

＊ ＊ ＊

「あんた、人間？」

「魔獣の化身？」

怪訝な顔をするルピナと、興奮で目を皿にするロインの様子に、呆れて頭をかいたヴレイは深く溜息をついた。

「お前らに言われたくねえよ、ロインはいきなり怪物出すし、ルピナは女である剣術だし、どっちが変人なんだか」

「その言い方やめて、女だからって関係ないでしょ」

「だったら人のこと馬鹿にするような言い草はやめろよ」

デッキからルピナとロインの部屋が近かったので、ヴレイはシャワーだけ借りて潮を洗い流した。苛立って黒髪を荒々しく拭いたタオルをヴレイはバスルームに投げ捨てた。

本当は今すぐベッドで寝入ってしまったいほどの疲労感と脱力感に襲われていた。

自分の拳を見てから、いまだに震えの止まらない手をさする。何年かぶりだろうかあれを使ったのは、と先の事を思い出してまた震えた。

「ケンカしてる場合じゃないだろ、シルバームの護衛獣はおかしいよ、絶対に何か理由があったんだ、でなきゃあんな必要以上の攻撃なんてしてこないよ、ましてやただの客船に」

「そうだな、そのシルバーム国とやらに何か目論見があることは間違いない」

任務内容にも記載されていた国でもあったので、首を突っ込まないわけにはいかなそうだと思ったヴレイは溜息をつてしまった。

この二人とはまだ別れない方が得策だと思ったが、ルピナとは初っ端からケンカが多いのでこれからのことを考えると気が重くなった。

夕食後、ヴレイはさりげなく情報を収集しようと、カフェで彼等とお茶をすることにした。

昼間食べ損ねたアイスの乗った蒸しケーキをルピナは幸せそうにほおぼった。腹も満たされ少々眠たそうに肘を突くヴレイは、それ

を見て胸焼けを起こしそうになった。

ジュースをストローで吸い上げて喉を潤したとロインは険しい表情を見せ、被害者が裁判で陳述するかのように口を開いた。

「グランドラインの国々は王が国を守り、民を救って安寧をもたらす、名君たる王が玉座について代々国を統治するものだと言い伝えられている、でもシルバームは王制を廃したんだ」

N
e
x
t

第14話 冠への挑戦

「昨今即位した執政官は軍閥政権を布く独裁者だ、国の強化と言って主要政策は軍拡ばかりだ、反政府組織と何度も紛争を起こしている、組織と言っても民兵を結集させた連合軍だよ」

まだ十四歳にもかかわらず哲人のようなしゃべり方をするロインにヴレイは感心してしまった。

デザートを食べ終えたルピナがナプキンで口を拭くと、機嫌をそこねたような顔つきで続きを話し始めた。

「確かそいつって王族本家の末裔でしょ、シルバーム王族本家は聖冠の力に翻弄されて国を荒廃させた歴史がある、それを阻止したのが分家だったわよね、聖冠は存在してはならないものだ国民に誓約し破壊した。もしかしたら新王ルベンスが政界に申し上がったのは、聖冠を復活させるためかもしれないわ」

「僕も同感だよ、シルバーム城は新生と共に聖冠を創り出せる。ルベンスがここまで申し上がったのも裏で政府の協力がなければなしえない、そしてその見返りとして確実な地位と、金を払うって魂胆だよ、単純にね」

二人が真剣に話し合っているのを見ながら、ヴレイは会話が途切れたことを確認すると戸惑いながら口を開いた。

「と、ところで二人が話してる意味が分からないんだけど、セイカンってなに」

「これだからインジョリックの人間ってのは頭固いんだから、つまりシルバーム特有の力なのよ、聖冠を手中に納めて国を統治するわけ」

「でも力を私利私欲に使うと安寧はもたらされず、国は荒廃し破滅への道に向かうってことだよ、インジョリックとは違ってグランドラインは昔からの古い力が眠っているからね」

「ふうん、つまり封印された冠を今の新王が復活させようとしていてってことだろ、それには城の再生が必要だって言ってるのか」

「そうよ、何度も言ってるじゃない」

簡単な数式を組み立てるように整理しながら言葉をつむいだヴェイに対して、ロインは浮かない顔で答えた。

「あんな奴が聖冠を持ったらシルバーム国はますます荒廃してしまう、聖冠の復活と軍拡には何か関係があるんじゃない」

「つまり城を再生させるには今ある城を破壊させる必要がある、だろ」

「多分そうだと思うけど」

非常識話に怪訝しながらも、ふと自分の管轄内であろう知識をひねり出した。

「そいつは軍備を強化しているんだろ、それに反対して民衆の反発を受ける理由と言ったら、国に軍資金がなくなり始めてるってことだ、物造りで金がなくなり国民から資金を徴収しても間に合わなくなってきたんだ、それだけの軍資金を使って造っている物、城を崩すとなると主砲を搭載した船が必要だ」

「なるほど船か、理に適った正論だね」

「たまにはまともなことも言うのね」

ルピナとヴェイの眼光が鋭く重なると、二人は同時にそっぽを向いた。

「ルベンスを失脚させることができれば、新たに王を即位させるこ

とができる。裁判が駄目なら直接本人の元へ赴くしかない、国を正しく統治できるは王族分家の末裔だ。歴史上では王族から国民になったけど、血は今でも受け継がれている、本人とは会談済みだよ」大義名分を背負うかのようにロインの瞳は怖いぐらいに精悍としていた。

「合法的なやり方じゃないけど、やってみる価値はありそうね。話を聞いてしまった以上付き合うしかないじゃない」

拳に力を込めたルピナは一戦交える際に表れる鋭利な眼差しを見せて、笑んだ。

「シルバーム新王政権に僕らが反旗を翻すんだ、しかも他国の王族が内乱に加わるんだからリスクは大きいよ、本当は許可のない戦の干渉は許されていないんだ」

ロインは剣呑な笑みをヴレイに見せた。

「お前達もしかしくなくても、オウゾクってやつ」

二人の放つ雰囲気我突然自分とは異質的なものに感じられて、漂ってくる崇高さに身を引いてしまった。

「「そうだよ」」

二人から言われて、默然するしかないヴレイは冷めてしまったコーヒーを飲み干し、思い立ったようにイスから立ち上がった。

「俺は別行動を取らせてもらうよ、世界が違うみたいだから、こっちはあるかないか分からない船を探してみる、もしかしたら城内にあるかもしれないし、もしあるとしたらその造船資材はどこから調達していると思う」

んーっと数秒考えてからロインは答えてくれた。

「シルバーは鉱物や宝石が採れるんだ、だから玉と交換に資材を調達している可能性があると思う、だから軍資金もここまでもったんだ」

「じゃあその取引先は直接インジョリックか、それとも他国から」
「僕もそこまでは、他国からだとなれば造船技術や機械化が進んだロマノ国、あそこは軍事国家だから可能性は高いよ、他大陸とも貿易が盛んだからあの国は、どれがどうかした」

ロインとルピナは慎重な面持ちでヴレイに視線を投げた。

「いや、グランドラインの技術だけで軍艦を造るのはさすがに難しいのになって、些細な疑問だよ」

怪しまれない程度に返答したヴレイは「おやすみ」と言って、その場から退散した。

二人と行動を共にしなくともシルバームに行けばどうにかなりそうだと思ったのだ。しかもこの二人と組んだ挙句、戦にでも巻き込まれたら厄介だ、と判断した結果だった。

＊ ＊ ＊

ヴレイが退席してから二人は自室に戻った。

二人部屋の船室は狭い。ロフト付きの二段ベッドと、おまけのようについているテーブルで部屋はいっぱいだ。

いくら幼馴染の仲とはいえ、着替えるにもベッドのカーテンを閉めてそこで着替えるしかなかった。

シャワーを浴びた後、枕を腕に抱いたロインがロフトから顔を出した。

「あのさ、僕考えたんだけど」

窓際のイスに腰掛けて刃を手入れしていたルピナが手を止めた。

「聡明な王子が何か思いつきましたか？」

剣を鞘に納めてると、イスから立ち上がり、もう一度抜いて凜と構えた。

天井を仰いだ刃先には痛く光を宿していた。

「新王軍を制圧するにベフエナの軍を動かすことはできない、だからと言って各地域に散っている連合軍が首都リベロットに到着するまで一ヶ月以上はかかる、ルベンスを落とすには一ヶ月では心許さない、だからこちらから先手を打とうと思う、それには召喚獣の精鋭部隊でシルバーム城を直接攻撃するほかないと思う」

「召喚獣ってそんなにたくさん召喚できるわけ」

「裏技かな、召喚術の専門書に載ってるからそれに習って召喚力を高めれば、三百体ぐらいは同時に召喚できる」

「すごいじゃない、いけるかもしれないわね」

ルピナは紺碧の瞳を輝かせて、剣を握る手に力を入れた。

大きな期待に反してロインは枕を抱く腕に震えが走った。

瞬間的に召喚力を大量に消費するため、大きな反動が返ってくるに違いなかった。その反動に体が耐えられなければ、召喚能力を一生使うことができなくなる、それ以前にこの決断が本当に正しかったのかさえ分からなくなりそうで、ロインは不安に駆られた。

「念のため首都圏で固まっている連合軍だけは集めさせたいわね」
「大丈夫、それは手はず済みだよ」

傲慢なロインの笑みに、ルピナは完敗の笑みを返すので精一杯だった。

自分のベッドに上がったルピナはふと思った疑問を投げかけた。

「そういえば、さっきあいつが言ってた造船材料のこと、何であいつが気にするの？ 所詮他大陸の人間でしょ」

ベッドに横になって、頭の下で指を組んだロインは眠そうな声で答えた。

「だからじゃないかな、グランドラインの機械文明が進歩すれば、それだけインジョリックの脅威になるかもしれないしね」

「だとしたら、そんなこと心配しに大陸を渡って来たあいつって何者」

「何か企んでいるような人には見えなかったけど」

「私だってそう思うわよ、でもただの観光客があそこまでするわけないじゃない、それに見たでしょ、あいつは魔力でもない力を使って護衛獣を倒したのよ、そもそもなんで私達の協力者みたいになってるわけ」

「まあ、でもさ今のところ僕らに危害はないわけだし、様子見ようよ」

「甘いわね、ロインは」

「ルピナは手厳しいな……」と言いながらロインの声は寢息へと変わってしまった。

明かりを消すと部屋は船体に打ちつける波の音に支配され、長くて深い夜に包まれた。

NEXT

第15話 決意の庭

「すでに連合軍の諸侯らが見えられています、首都からほど近い西部、北部、南部を統括している方々です」

庭園の一角に設けられたパーゴラ、藤棚とも言われる緑廊にはつる性の藤が勢いよく絡まっていた。四方には緑陰樹が植えられているので夏でも涼しい。

向かいのソファーに凜然と並ぶリーダー達は、写景的な自然形式の庭園では彼等の威圧感が強烈に引き立っていた。

豪華な城壁に掘られた石像が動き出してきたような風貌だった。みなぎる闘志を瞳に宿し、少し錆びついた鎧が彼等の体軀をさらに豪快に見せている。

屋敷の主レイスは従者から受け取った地図を、大理石のテーブルに広げた。

「ご足労感謝いたします、諸侯の方々。ご紹介に預かりました、ロイン・ノイレイザーです」

諸侯達の御前で深々と頭を下げるロイン。

「早速ですが、西部、北部、南部と各州ごと何所に軍勢を配しているのかと、その数を教えてください」

十四歳そこそこの少年に訊かれ、少々怪訝しながらも諸侯の一人が地図にペンを走らせた。

「西部は一万、北部三万、南部一万五千でそれぞれ州の中心市街圈内だ。首都リベロットへ軍勢を運ぶにしても三週間はかかる、その間に新王軍と鉢合わせになったら無事に着けるかも怪しい」

ペンを地図上に転げると、太い眉根を寄せて続きを言った。

「王都にはびこっている新王軍はおよそ一万、首都圏内の連合兵はノイゼストという町にいるが、その周辺地域の兵と合わせても五千弱しかない、長引く内戦に兵力は疲弊してしまっている」

諸侯が黙るとレイスが剣呑な表情を浮かべて口を開いた。

「これ以上紛争を続けたくないのは国民も同じです、兵力どころか国自体が崩壊してしまう」

「僕だってこれ以上戦ってほしくない、だからこれで終わってほしいんです。そこで僕の精鋭部隊を使ってほしいんです、数は六百あります」

全員目を皿にしてロインを注目した。

「お前さんが軍勢を持っているだと、それが真実であつても何故子供が」

「何者なんだ君は」

諸侯達はそろって顔をゆがませた。

「実はこの子、いやこの方はベフェナの」とレイスが言い掛けると、咄嗟にロインがソファアから立ち上がった。

「僕はベフェナの召喚士です。共にシルバームを助けない、見ての通りただの子供です、でも僕にも協力させてください、たったの六百じゃあ軍の足しになるか分からないけど」

あまりにも昂然とした発言だったので、レイスは目を丸くしたまま歓喜してしまい、言葉を発することが出来なかった。

「僕の召喚獣を使って空から城を制圧しようと思う、そこで首都圏に結集している連合軍だけでも一箇所に集めたい。新王軍はこちらが大人しくしている限り力を抜いている、そこを狙うんです、不意

打ち攻撃ならさほど数も必要じゃないはずだ」

「お、おい召喚士って、魔界から獣を召喚すると言う、実存が少ないあの」

「他国の為に、連合軍に召喚獣を与えるというのか」

諸侯達の顔はまるで狐にでもつままれているような表情を並べている。

信用されないことはロインも初めから分かっていたが、自分の決意を訴えるしか方法がなかった。

「僕が英雄ぶっているのはわかります、我がままだと思います、それでも僕に力を貸してください」

ロインは床にひざを突き、深々と頭を下げた。

その姿にレイスは慌ててロインを起こした。ひざに付いた砂利を払い落しながらレイスは声を潜めた。

「恐れ多いですよ、そのような姿を見せないでください」

ソファアに座らされたロインを見ながら、諸侯達は険しい趣で質問をしてきた。

「城を攻めるとして、そこから先の策はあるのかい？ 占拠だけでは落とせない、新王軍が騒ぎに気付いて援軍を送り込んできたら我々はひとたまりもない」

「その通りです、援軍が来る前に城を落とす必要があります、飛獣などの対空兵力はありますか？」

「年中待機している数はざっと三百ってところだ、それ以上はまだ兵力にもならん」

「その三百と僕の召喚獣合わせて九百を空から城を占拠させます。その際僕はルベンスの元に行きます、そしてルベンスを失脚させます」

唐突な発言に諸侯達は騒然とした。

「ルベンスの元へだと、何所にいるのかも分からんし、そもそも話し合いで失脚させる暇がどこにある」

「大丈夫です、僕にやらせてください、攻め入る際の人選と戦略はプロにお任せします」

揺るぎない威光を放つ深緑色の瞳に感服させられた諸侯達は、儼然に笑うしかなかった。

「子供を戦に参加させるのは心苦しいが、助力を必要としているのもまた事実、お前さんは俺達が死守する、絶対に死なせない」

「有難う御座います、でも護衛はすでにいますから、貴方達にはできるだけ民兵を守ってほしい、僕も犠牲を増やさないためにも全力を尽くします」

拳を握り締めたロインは少なからずもヴレイの動向にも期待していた。

「これ以降は連絡を待ってください、集まった兵は作戦開始前までにノイゼストの野外劇場に集めてください、あそこなら千人は入る規模ですよ、僕もそこに行きます」

＊ ＊ ＊

しばらく木々が風に揺れ、葉と葉が擦れあう音だけが響いていた。覚悟は彼等が去った後にやってきた。ずしりと重くのしかかったプレッシャーは自ら招き入れたのだと分かってはいたが、ロインは不安に駆られていた。

諸侯達を見送った後、ロインは庭先で巨大な鳥を召喚した。

レイスは彼の手を取って、召喚鳥の背に乗るのを手伝ってやりな

から、至極申し訳なさそうな顔で見上げた。

「ロイン王子、私が王になれる器量とは思えません、ましてや無事に王座に登極できるとも限りませんし、民もすぐには受け入れないでしょう。それでも貴方は誰に何を言われても、決意を揺るがすことはないと分かっています。聡明で賢いロイン王子が決断したことなら、お止めしません、ご助力お借りします」

頭を下げたレイスを見てから、ロインはシルバーム城がある方角に鋭い視線を向けた。

「僕の父上は僕の友達をすごく嫌うんだ。シルバームを救って召喚獣を認めてもらおうとする考えはシルバームを利用することになる、結局自分のためなんだ」

眉間に力が入ったロインは眩しそうに目尻を細めた。

「だとしても僕は最後まで皆を裏切らないし、皆を救いたい気持ちも変わらない。シルバーム行政にも相談せずに、強引に推し進めてしまつて、これでもし失敗するようなことがあったら……」

言葉を止めたロインの目元には溢れんばかりの涙がたまつた。

彼の決意をまざまざと見せ付けられ、レイスは闘志を奮い立たせた。決然と眉根を寄せ、励ますようにロインの手を強く握った。

「政府には王制復活のことは伏せたほうが良いです、作戦がルベンスの耳に入ったら、連合軍をつぶしにかかるでしょう、私は君を信じます、私達王族分家の末裔がシルバームを再生させます」

震える手でロインはレイスの手を握り返した。

「レイスさん、僕の我がままを聞いてくれて有り難う御座います」

ヒュッと指笛を鳴らすと、召喚鳥はふわっと宙に舞い上がった。長い尾が七色に艶めいて光を鈍く反射させる。

堂々となびく赤銅の髪は霧の中でもかすむことなく、遠くまでその色を明瞭に残していた。

N
E
X
T

第16話 煙草のテリトリー

馬車は城下町へとつながる街道を走るようになった。

街の遠方にはまだうつすら雪をかぶっている山脈の峰が見える。

湖を囲む石造りの家々は夕刻の支度を始めていた。露店の市場には地元の町人達がざわざわと買い物に来ていた。

「もうすぐ都だよ」

二百年前の時代から開花し続ける水上の古都。

三方を運河に囲まれたベフェナの首都モートル。その運河はドナ海岸までの距離を悠然と流れていた。

円錐形の赤土煉瓦の屋根で埋め尽くされた城下町には狭い用水路が張り巡らされ、幾本もの大小無数の橋で繋がっていた。果物や香辛料、花や布を売る小船または観光客を乗せたゴンドラが橋の下を行き交っている光景は、この街の伝統的姿だ。

百基の尖塔と豪華な彫刻に飾られた壮麗な神宮は城下町のシンボルでもあり、世界屈指の流行として都の中心地になっている。

正面の小高い丘には、六本の尖塔に囲まれた金殿玉楼なベフェナ城が愁色の夕日を浴びて、神秘的に浮かび上がっていた。まるで城そのものが一つの山のように見えた。

「あそこには寄っていくの？」

「うん、首を長くして待ってるよ」

馬車は城壁の手前から奥の角を曲がって、地下へ通じる下り坂を行った。

等間隔で点いているカンテラを頼りに馬車は奥へと進んでいく。次第に空気が熱くなってくるのが分かると、鉄と鉄がぶつかる甲高い音が耳に届いた。

その場所に到着すると、馬車は広い空洞の入り口前で止まった。馬車から降りるとヒリヒリするような熱気が顔や体に張り付いた。

「ゼル、ゼルッ」

二度目のロインの呼びかけで鍛冶士は手を止めた。

彼の後ろで、ぱっくりと口を開けた窯が轟音と共に灼熱の炎を上げていた。

鍛えていた剣を窯に戻した鍛冶士は額に巻いていた麻布をほどくと、頬から首に掛けて吹き出た汗を拭きながら歩み寄ってきた。

汗で濡れた作業服がよく似合う中年の職人男だ。剥き出しの二の腕には、たくましいガタイとは似つかわしい花の刺青が彫られていた。

「久しぶりだな、ルピナ王女。長いこと顔見せねえから心細かったぜえ」

「あんたが会いたかったのはこれでしょ、顔に書いてあるわよ」

「よくご存知で王女様、早速見せてもらおうか」

ルピナは緋色の鞆に納められた剣をベルトのホックから外すと、「任せた」と言うようにゼルの前に突き出した。

ゼルは鞆から剣を抜くと、刃先を真っ直ぐ天井に向けた。鋭利に反射する光を見据えたゼルは口端を上げて陰険に笑った。

それを見て安心したルピナは、壁に掛けられた武器を眺めていた

ロインの横に並んだ。

ここにある武器はどれも独創的で闘争心を剥き出しにしているものばかりだ。そのほとんどはゼルが作ったものだった。

「以前来た時より増えたわね」

「毎日増えてるよ、これを見てると、昔のことを思い出すよ」

「昔のこと……？」

二人はゼルの作品を眺めながら、額や頬にうつすら汗を滲ませた。「彼が亡くなった後、ルピナは我を忘れたように修行をしてて、無理にでも連れて来たのが最初だったよね。あの時はもう前のルピナには戻らないかと思ったよ」

「まだ正気じゃなかったもの、気付いたら剣を振ってた。あの頃の私にはそれしかなかったもの、でももしあの事がなかったら今の私はなかったかもしれない」

他人事のようにルピナは鼻で笑った。

「そんなことない、過去に何があろうとルピナは誰よりも強い剣豪だよ」

「……ありがとう」

二人は決然と武器を見上げながら、強く手を結んだ。

＊ ＊ ＊

シルバーム城下町のとある街角の酒屋には渴いた喉を酒でうるおそうと、一日の仕事を終えた男達が有象無象と化してたむろっていた。

天井付近には煙草の煙がたち込め、灯りを薄暗くさせていた。

店内の奥まった一角に、一人の青年が円卓の席を陣取っていた。

店の雰囲気を楽しむわけでもなく、ただグラスの中の酒を眺めていた。二十代前半であろうその青年は腰に下げていた短剣の柄に触れてから、少し目線を上げた。

「会うのは、二年ぶりだな」

一人で席を占領する青年に、薄手のコートを羽織った長身の男が軽く声をかけてきた。

何の抵抗もなく飄々と向かいの椅子に腰を下ろすと、上着の内ポケットから煙草を取り出し、火を点けた。

テリトリー内で鼻から煙を吐き出す男を睨みつけた青年は、陽気に言葉を返した。

「そっちこそ元気そうじゃん、また探検しに行ってきたのか、リウド」

煙草をくわえるリウドは少し機嫌の悪そうな目付きをして青年に言い返した。

「探検じゃない、仕事だ。グレイディウルの大学に帰るところだったから寄ってみた。ところで風の噂で聞いたぞ、シルバームの宰相は賞金首を雇って兵力を集めてるらしいな」

「そうらしいな」

「それでお前はシルバームの傭兵か、そんな宰相の部下になって何がいい、それとも「あいつ」を探し始めたのか」

その質問に青年は眉山を吊り上げ上目遣いをした。

「まあな、近くにいるような気がするし、軍にもぐりこんだのは正解だったよ」

「あいつを引き寄せたつもりか、「ザリ」に言うがお前はあいつに勝てない、僕が勝たせない」

「一応人格は俺の方なんだけど、聞こえてることを祈るよ、てゆうか言ってることクサイし」

「ふざけるなよ、自分の事なんだぞ」

「自分のことだからだろ。そんなことをいいに來たのかよ」

子供のように不貞腐れる青年を見て、溜息を付いたリウドは短くなった煙草を床に落として靴の裏で踏み消した。

「ザイド、「ザリ」の人格は二度覚醒した、これでお前の自我崩壊が早まった。植物状態の人間が覚醒するのと同じだって前にも話したろ。「あいつ」は村を襲ったのはお前だとは気付いていないんだろ、だったらあいつと本心で向き合ってみろよ、あれ以来会ってないんだろ」

ザイドと呼ばれた青年は黙ったまま、残りの酒を飲まずに眺めていた。

「あいつ、俺のこと覚えてるかな」

「さあな、僕は会ったこともないけど」

リウドは新しい煙草に火を点けて、椅子から立ち上がった。

「そろそろ行く。暇人と違ってこっちは定期学会に発表する論文に追われてるんだ」

「俺だって傭兵職はヒマじゃねえよ、せめて自由人と言え」

意味もなく威張ったザイドはどこか不安げにグラスを見つめながら、椅子から立ち上がったリウドに声をかけた。

「なあ、俺が望む結果を選んでいいんだよな」

同じ灰色の瞳が重なるとリウドが先に視線を外し、背を向けて答えた。

「後悔しないのなら。大学の研究室にいる、暇があったら顔出しに

来てもいいぞ」

自分の名前と研究室名が書かれた名刺をテーブルに置いて、リウドは酒場を後にした。

「それぐらいのヒマいつでも作るさ」

N
E
X
T

第17話 救世主の烽火

ベフェナ城に着いてから四日後、太陽がまだ地上に顔を出したばかりの早朝。

丁寧一枚一枚鍛えた銅板を重ね合わせて作られたブーツを履いて、鋼製の肘当てを装着する。手の平ほどある純白の羽根を一枚一枚縫い合わせたローブを腰に巻いたルピナは、部屋の扉を豪快に開け放ち、ゼルの元へ向かった。

「惚れちまうなよ」

受け取った剣を鞘から抜くと、天井に切っ先を向けた。

白く帯びた光に吸い込まれそうになって、全身の毛が逆立った。

その光だけで肌が切れてしまいそうなほどに、紙ほどの厚さもない刃が脈打ているようだった。

「すごい……」

「月光を浴びる真珠城だ。洗練して洗練してできた光の帯のことを、俺達職人はそう言う、相棒も喜んでるぞ」

「月光……」

「月の光は青白い、簡単に言えばそこから由来されている。だがそれだけじゃないしくてな、冷たく感じる中にも温かみがある真珠のようだ、言った奴もいる。剣は守る命の為に振るうものだ、感情任せに振ればたちまち剣は持ち主を操るだろう、分かるか、つまり武器を持つ意味を真に知る人間ならば、月光はいつまでも放っているということだ」

「例えこの剣が血にまみれても」

「そうだ。武器も剣も守るモノの為にあるんだ、戦うためじゃない、そこを取り間違えるな」

柄を握る手がこわばって震えた。

自分に叱咤するように強く頷いたルピナは剣を緋色の鞘に納めた。

辺りを見回し、胴を覆う手ごろな防具を見つけて装着し、金属ヘルメットを手にとった。

「行って来る」

振り向きざまのルピナの真っ青な碧眼は、打ちつけたばかりの灼熱の鋼の様に赤々と光を反射させていた。

「ロイン王子を守ってやれ。剣術も魔導も精進した者のみ与えられる芸当だ、力におぼれず試練に耐え抜くんだ、それでこそ一人前の剣舞士だ」

「ありがとう」と強く言い放ったルピナは熱い空気に燃える洞穴から、地上へと駆け出した。

壮麗なリブの回廊を抜けると、ロインと落ち合うことになっている天井の高いエントランスが眼前に広がった。少ししてから防具に身を包んだロインが待ち合わせ場所に現れた。

踵に付いた金具が大理石の床に当たってカチカチと音を鳴らす。

「お待ちください、殿下っ」

ロインを追い駆けてきたのは専属の侍女だ。

「サーシャっ」

ぎよつとしたロインは持っていた本をさりげなく後ろに隠した。

「その古文書、使えばどうなるかご承知の上なんですネ」

「さすがサーシャ、何でも分かるんだなあ」

「はい。私は貴方の侍女であり、貴方の御身をお守りする専属エス

コーナーですから」

サーシャの中指にはめられた指輪の石が小さく光ると、エントランスに突風が吹き荒れた。

生きているかのように渦を巻く風は、まるで毛並みの長い獣が不気味に頬をなぞってくるようだった。

本物の魔族しか操れない獣、これがサーシャの幻獣だとロインは理解した。

「じゃあ、その幻獣で僕を止めるの」

サーシャの柔らかい栗色の髪が風に揺れる。

怒っているわけではないが、彼女の凜然とした趣は息をのむ迫力があつた。

ゆっくりロインに歩み寄ると、白い手で王子の小さな頬に触れた。「信じています。信じて待っています。どうかご無事にお戻りください、必ず。何かあったらこの子と共に貴方に向かいに行きます」
「大丈夫、絶対に帰ってくる、約束する。だからこの事は父上と母上には黙っててね」

「貴方の名誉に懸けて、他言はいたしません。ルピナ王女もどうかお気を付けて」

サーシャは二人に向かって深く頭を下げた。

敬意の意味で強く頷いたロインとルピナはまだ朝靄がかすむ中庭に出てきた。待機させていた召喚鳥に二人は飛び乗った。

ふわりと舞い上がった召喚鳥を目で追いながら、ベフェナの空を仰いだサーシャは彼等の姿が見えなくなるまでいつまでも見送った。

＊ ＊ ＊

飛行船に乗り換えてから丸一日が経った頃、シルバーム国首都郊外の街ノイゼストを遠めで見る事ができた。

首都から近いほど街には賑やかさが無い。いつまた新王軍と連合軍が衝突するのかと怯える毎日で、民は憔悴してしまっただろうか。そう思うとロインは怒りの形相を隠さずにはいられなかった。

西の方角には我が王だと言わんばかりに、氷山のような角を天へと貫いている城があった。

その威圧感を絶やすことなく陽をいっぱい反射させていた。

「太陽の王冠と言われた、エントラールパレスね」

横髪を押さえるルピナが目を細めて呟いた。

「安寧の時代はシルバームの栄華の象徴だった、でも今はただのガラスの塊だよ」

飛行船の甲板から眺める地平線は格別なものだったが、地上の景色が雲間から覗くと二人の緊張感はいやに現実味を帯びた。

空港に降りてからはロインの召喚鳥に乗り換えた。

集合場所として指定した野外劇場は、雨天の時以外は天井を全開にしているので、ロインに指示された召喚鳥は旋回して劇場の舞台へと降り立った。

集められた連合兵士達は見知らぬ子供の登場で騒然とした。

ロインは兵士達が静まるのを待ってから堂々たる姿勢で口を開いた。

「私はロイン・ノイレイザー・ベフェナです」

少年が言った名に反応して場内はどよめいた。

「あの子供、ベフェナの王子だったのか、隣国の王子の顔すら知ら

なかったのか俺達は」

二階の観覧席から傍聴していた諸侯達はまさかと我が目を疑った。

「私はシルバームの国民ではありません、例え他国の人間だとしてもここにいる私は一介の召喚士です。皆さんが信じて付いて来てくれるなら、私と共に戦ってほしい、誇り高き仲間として。どこまで出来るかわからないけど、皆さんの力をシルバームの為に貸してください」

精悍なロインの演説に圧巻されたレイスは、目頭に熱く込み上げるものを感じて、グツとこらえた。

賢い知性があるにもかかわらず理論も文法もなく、その行動は感情的で指導者としてはまだ不合格だ、だがこれほどまでに信念の熱い後継者といつか肩を並べる日が来るのだろうかと思うと、レイスの胸は歓喜でいっぱいになった。

まだほんの子供だが、堂々としていて迫力のある言葉には誰もが圧倒され信服した。

「内乱の早期終結のためにも新王軍を压制し、新王を玉座から失脚させる、そして再びシルバーム王族を復活させる」

腰まで流れる赤銅の髪が吹き抜けた風に乗ってなびく。

「我々の救世主だ」

「これは奇跡じゃないか、他国の王族が我々シルバームの為に助力を下さるなんて」

「今こそ連合軍の力を結束させる時だ。俺達が立ち上がらなくてどうする」

「誇り高き救世主に、兄弟の血に乾杯だ」

劇場内は兵士達の闘志と熱気で包まれた。

惹き付けられる強烈な光がレイスの胸を熱くさせた。

稚拙な言葉でも彼の魂を感じた。恐れを知らない若さと可能性を秘めた未来の指導者に、レイスは握りこぶしを震わせ、自分の中で沸々と固い決意ができ上がっていた。

兵士達の歓声で聴力が失われてしまいそうなお中、大声でレイスの名を呼ぶ声が聞こえた。

空耳かと思っていたら、「レイスさん、初めまして」と背後から少女の声が聞こえて、レイスはハッと振り返った。

「すみません驚かせてしまって、次期シルバーム国王陛下、ですね。何度も呼んだんですけど、この歓声ですもんね」

いきなり何を言い出すのかと、どうしようとしたレイスは何度も瞬きを繰り返した。

「ご心配には及びません、私はロイン王子の協力者で、貴方が無事国王に即位されたら、もしかしたらまたどこかでお会いするかもしれません、そのご挨拶です」

黄金色の短い髪が良く似合うその碧眼は真っ直ぐ自分を見ていた。両耳には真っ赤な石が付いたピアスを揺らし、防具を身に纏っている姿はとても凛々しい。腰に下げている長剣の柄はメッキが剥がれ落ち、長い間使われている物だと窺える。純白の羽根を重ね合わせた腰巻ローブが翻ると、高貴な姫君にも見えてしまう。

「貴女はもしかして、王族ですか」

「今はそれに関して気にする必要はないわ、そんなことより勝利を祈って乾杯よ」

言ってルピナは両手に持っていたワイン瓶を、レイスに一本渡し

た。中身はアルコール度の少ない果汁だ。

「戦が平和を運んでくるなんて、あまり良い安だとは思えなかったけど、あの子がやろうとしていることは確実に未来につながるわ、そんな気がしませんか」

曇りのない彼女の笑顔にレイスは素直に納得させられた。

宣言が終わるとレイスはロインの側へ出向き再会を喜んだ。

「今から、召喚するね」

言ってロインは持っていたワイン瓶をルピナに渡した。

持ってきた本を開くと、そこに書かれた文面を歌うように読み始めた。ロイン以外の者は理解できない言葉だった。

読み上げて上空を見上げると、ここにいる全員が同じように空を仰いだ。

突如、空が光ったと認識した頃には、六百体という召喚獣が劇場を取り囲んでいた。

怖がる様子はないが兵士達は言葉を失ったまま、起きた現象に茫然としていた。

「一部の兵と救護班は地上で住民の避難と護衛に当たってもらおうようにして下さい」

「分かった、準備させましょう」

「お願いします。それと城下町上空には哨戒機が巡回しています、すぐに我々の軍勢は確認されるだろうけど、逆に向こうをパニック状態にさせられると思う」

「分かりました、詳細は後ほど伺いましょう、さあ諸侯の方々が待っていますよ。戦略について打ち合わせしたいそうです。ベフェナ

の王子と知ってさぞ驚いているでしょうね」

「怒るかなあ」

と、苦笑いを浮かべたロインは頭をかいた。

N
E
X
T

第18話 アヤシイ笑顔

二人と別れたヴレイは港でベフェナへの入国手続きを済ませた。街を散策することなく、シルバーム行きの鉄道に乗り込んだ。町に寄らなかつたのは、何故かあの二人の事が気になって、つい先を急いでしまった結果だ。

車両の寝台で二日目の朝を迎えた頃、シルバームの国境を越えた。窓の外は針葉樹林に覆いつくされた山々が悠然と連なっていた。それから数時間後、シルバームを入国してから最初の町に到着した。

国境ゲートにもなっていたこの町は旅人の休憩場みたいなもので、旅人や観光客用の宿場が多く点在していた。酒場にたむろう旅人達は疲れを癒しながら、不安そうにシルバームの事態を語っていた。

噂によるとシルバーム新王は軍国主義者で、ここ数年軍拡が激しくなるに連れて国民の生活は税で圧迫され、兵を招聘する裏では賞金首を集めて軍力を上げているという。

朝廷の政治は腐敗し始めていると言う噂までささやかれているほどだ。経済状況はあまり芳しくないらしい。

ロインが王制を復活させたいと思う気持ちも分からないでもない。でもそれはそれで政界の改造が大掛かり過ぎて逆にヴレイは心配になった。本当にどんな事ができるのだろうか。

煉瓦造りの建物が所々に点在する程度の平穏な集落だが、村人の割合に対して武装した兵がやけに多く歩いていた。国境ゲートの町

ならでわの光景なのか、兵士の側を子供が元気よく駆けていく。

一見、紛争があるとは思えなかった。

ヴレイは安そうな宿に入ると、決して身なりはいいとは言えない従業員に訊ねた。

「ここは西部の連合地域に属しているからな、集落もこうして貸し宿として軍に提供しているんだ、だから兵士が多いのさ」

こんな辺ぴな田舎にまで詳しい情報が流れてきているのはその影響かと納得した。

「ここから首都までどれくらいで着ける」

「そうだなあ、飛獣なら丸一日乗り続ければ着くだろ、今時リベロットに行くなんて、旅人さんだろ？ 観光には向かないぜ、通り過ぎちまうのが一番だ」

「そんなによくないのか、そのリベロットって言う所は」

「情勢はよくないぜ、避難民がでてきて街は荒れ始めてる、ベフェナやグレイディウルに渡る難民の数も増えてるって話だ。疎開してきた奴らも多くなってきたしな、これじゃあ鉱物がいくらあっても国が傾いちまう」

たいぶシルバームの内情が分かってきた。

話だけ聞いて立ち去るのは申し訳なかったので、ロビー兼パン屋で何個かパンを買うと、ヴレイは飛獣使いからレンタルした飛獣にまたがり首都へ向かった。

丸一日上空を飛び続けた。

首都の街並みが遠目で確認できるまでになったのは、翌日の朝だった。

眼下に広がる雄大な森林はまだ静かに眠っていた。初夏が近かつ

たので一夜を上空で過ごしてもさほど辛くはなかった。

太陽が南中に達しようとする頃、街の中で一際飛び抜けて巨大な屋根が、真昼の日差しを反射させていた。

「あれが宮殿か、まるでソーラーパネルだ」

巨大な宝石が地上に顔を出しているようだ。強烈なまでの威厳さと迫力感は頂点の座を見事に再現している。

あれなら駆逐艦級の船が隠されていてもおかしくない規模だ。

しかし、城を崩壊させるにしても、一気に崩せば城下町の住民は間違いなく被害を受ける。そんなこと新王だって分かりきっているはずだ、それでももし城内に戦艦があれば、城を崩壊するために建造した可能性が高い。

敵国がいるのなら、戦艦と城を同時に失うような危険なリスクは避けるはずだとヴレイは考えた。何にせよこれでやっとまともな報告書が送れそうだと、密かに安堵していた自分に嫌気を感じた。

都心に近づくにつれて飛獣の交通量が多くなった。都内にはそれ専用の離着場が幾つも設けられていた。多種多様な飛獣が出入りしていて、その光景を見ているだけでも面白かった。

しかし飛獣使いの話では飛獣を乗り回せる所は、餌となる砂金が採れる国の中だけだと言っていたので、次に行った国では使えないかもしれない。

とにかく疲労と睡眠不足で睡魔に襲われていたヴレイは飛獣を専用の施設に預けると、シルバーム城が見える宿にチャックインした。

部屋のバルコニーからソーラーパネルが一面に張り付けられたような巨大城が眺望できた。まだ少し距離はあるが、山のような城は正面から見るのが一番の絶景だ。

城の回りは特に変わった作りはされていない、異常に高い城壁があるわけでもないが、兵の数が半端ではない。まるで戦に備えて待機しているような重々しさだ。

怪しまれないように城に近づき、手ごろな兵を脅して身包みを奪い取り兵に成ります、などなど真剣に考えながらワクワクしながらベッドに横になると、ルピナとロインのことを思い出した。

今頃二人もここにいるのだろうか。

昼間から床に就いたヴレイは真夜中に目が覚めた。

宿の従業員が教えてくれた通り、深夜でも走っている中央路面電車でシルバーム城に向かった。ガラス製の建造物の中に、旧市街を思わせるような古い石造りの路地が折り重なってできたような街だ。

煌びやかではあるが、少し裏路地をのぞけば物物しい空気が漂っている。

両側に露店が並ぶ市場を抜けると、城に向かって敷かれた白石の道路が広場のようにだだっ広く続いていた。

道の両側には珠玉のように煌く閑雅な建築郡が連なり、中から明かりが漏れたいた。

城正面入り口の駅で降りると栄華を誇る大門が出迎えてくれた。

門前には兵が見回りをしていて、それどころか街中どこにでも兵が巡回していた。職務質問されたときの答え方を考えながら、裏路地に入って様子を窺うことにした。

同じ頃、執務室のバルコニーから彼は真夜中の城下町を見下ろしていた。高みの見物は城正面入り口の駅まで見渡せることができる。

「そうか、護衛獣をやった奴はベフェナ行きの船に乗っていた可能性があるわけか、それでそいつの足取りは」

新王ルベンスが訊ねると、バルコニーに出ていた青年は向き直って答えた。

「掴めてはいませんが、しかもその人物は私と共にラブラリンで賞金稼ぎをしていました。相当の使い手でした。では新たな情報が入り次第お伝えいたします」

会釈をした青年は部屋を通って扉の取っ手に手をかけた。

「シリウス」

呼ばれて青年は立ち止まった。

「ラブラリンでの賞金集めにはよくやってくれた、特別報酬はお前の口座に振り込ませた、確認しといてくれ」

「有難うございます」

「何故お前のような魔導士が特殊観察部に入隊してきたかは詮索しないが、最近私情を持ち込む奴がいる、そういう奴はうまく私に入るが、もし私の意思に反することをしたら承知しているな」

「心得ています」

シリウスは微かに頬をゆるませて執務室を後にした。

＊ ＊ ＊

ヴレイが様子を見続けて数分後。

正門の側に付けられた小さな扉が開くと、中から男が出てきた。長身で細身の体軀を包んでいるのは緑色のローブ、細い腰をしめる金メッキのベルトが印象的だった。

どこかで見たことがある風貌だった。

肩口まで伸びた茶髪の青年は迷わずこちらを見て近寄ってきた。暗闇にまぎれて隠れていたつもりだったヴレイは突然のことでの場から動けなかった。高ぶる警戒心と共に鼓動が高鳴り、右手が自然に腰のガンホルダーに伸びた。

「そんなに警戒しないでください、共に賞金首を掴まえた仲じゃないですか、また会いましたね」

聞き覚えのある声にヴレイは銃から手を離すと、建物の影から明かりのある場所まで出てきた。

優男風の顔をした青年は細い目に笑みを浮かべていた。

「あんたあの時の、どうしてここに」

「貴方が正面門前の駅から出てきたのを見て、下りてきました。何か御用ですか」

シルバーム城で使える者なのか、とにかく信用はできない。

「ちょ、ちょっと待て、シルバームの者なら何故ラブラリンにいた、じゃなかったらどうして城から出てくる」

「理由があります、でも今訊いているのは私です」

「先に俺が質問しただろ」

嫌気が差したヴレイは呆れて溜息をついた。

「ただ城を見学しにきた観光客ではありませんよね。真夜中に来る観光客なんていませんから。私はラブラリンの都心に手強い賞金首が集まっていたと聞いて、情報収集をしていただけです」

深い二重の中に埋まる茶色い瞳は細く笑みを浮かべながらも、微塵の隙もなくヴレイの紫紺色の瞳を捉えていた。

「城の者か」

「傭兵です。で、君はここに何か用があるのでは」
ニコリと笑うところがわざとらしくった。

剣呑な目付きでシリウスの様子を窺うヴレイは恐る恐る訊いてみた。

「一般人は中に入れないのか」

するとシリウスは少し困った顔をするが、すぐに紳士的な顔に戻った。

「特別に私と一緒に中に入れて差し上げても構いませんよ、深夜に尋ねてきたということで宿屋なしの旅人と言う名目でなら」

細い目がさらに細くなって笑んだ。

こんな所で、こんな形でまた彼と再会するとは思ってもみなかったが、何故か緊張がほぐれていくのが分かった。でも「怪しすぎるし、その笑顔」と、言わずにはいられなかった。

NEXT

第19話 潜入

城内を自由に探索したいところだがシリウスが目を光らせているに違いなかった。

細い笑みの裏に、罠があってもおかしくなかった、それにこうも簡単に侵入できてしまうと、逆に身の危険を感じいつにも増して周囲に警戒心を張り巡らせるが、グレイは初めて入った城に興味津々だった。

城内は外より静かでだだっ広い。やたらに高い天井が眼前に飛び込んでくると、回廊を挟むように何層もの橋廊が縦横無尽に伸びていた。

時々兵士と通り過ぎるが、横目で見られるだけで怪しまれてはいないようだ。

「なぜ不信感を抱かない、俺は不審者じゃないのか」

「それはたぶん傭兵の大半が賞金首だからですよ、でも内心は我が物顔で城内を闊歩する傭兵が邪魔でしようがないでしょうね、主役は新王軍なんですから」

国境ゲートの村で聞いた話と一致していた。

「じゃあお前も賞金首だったのか」

「いえ、私は情報収集金兼ね確保した賞金首をシルバームへ招聘するという契約の元、ここに雇ってもらいました。こんなところでまた会えるとは、運命ですかね」

「出来すぎた運命だな、それであんたラブラリンにいたのか」

「そうです、類は友を呼ぶんですね」

シリウスはニコツと笑って見せたが、グレイはその笑みには関わ

らないようにした。

「何の情報も無しにシルバーム城を偵察しに来たわけではないですよ、目的は何ですか」

どうにもでもかわせる質問にヴレイは情けないほど動揺してしまった。

瞬きもない細い目は人のどんな微かな動きも読み取り、あっさりと何事件を推理してしまいそうな眼光を放っていた。

ヴレイはその怜悯な眼光に気合負けしていた。

「途中、船に乗りませんでしたか」

何故シリウスがそんな質問をしたのか分からなくて、答えることができなかった。

「ならシルバームの護衛獣のことは聞きましたよね？　ずいぶん派手に報道されましたから」

「何が言いたい」

「君ならあの護衛獣を倒せるだけの力もあります」

「ああ、そうだよ、だからなんだ」

理解困難になると焼けクソになってしまう癖が出てしまった。ヴレイ自身、短所を抑えていたつもりだが、折れやすい自分に嫌気が差した。

「じゃあここに来た目的は何ですか？」

「質問攻めだな、考えてみろよ」

挑戦的な彼の笑みにシリウスは陰険な笑みを見せた。

「ただ賞金首のことだけを詮索しにいたわけではないですね、あの時君は別れ際に賞金稼ぎはお小遣い稼ぎと言いましたし、でも探してる匪賊のことで来たわけでもなさそうです」

堪のいい奴だと感心しながらヴレイは渋りながらも答えた。

「ここのお偉いさんが何かをしでかすという噂を聞いたんだ、理由があつて内情を探らせてもらいに来た」

「意外にあつさり話してしまふんですね。ちなみに私はラブラリンの首都から出ている大陸横断鉄道を使いました。値は張りますが快適でしたよ」

「こっちは散々だったよ。それに大して隠すことでもない」

「それはそうとして、夜の街はあまり出歩かないほうがいいですよ。つい最近大使館立てこもり事件が起きたばかりですし、少し前には反乱軍が謀反を起こしていますから」

セリフの内容とは裏腹にシリウスは超然とした面持ちで言った。

「強硬派だな。そこまで民に慕われない執政官じゃあ、先も思いやられるな」

「人格的にはできた人だと思うんですけどね、さて、今日はもう遅いですし客間へ案内したいところですが、君が城の内情を捜査したいのならいい方法があります」

「スパイを軟禁するつもりか」

冗談気に言ってみると、シリウスはまた細く笑んだ。

かなり歩いた頃、頑固な装飾が施された扉の前に案内された。来る途中に様々な扉を見たがそれらとは明らかに核が違う。

眼前の扉に啞然としている間に、シリウスが軽くノックをして扉の片方を押した。先に部屋の中に入るように促され、ヴレイは部屋の中へ足を運んだ。

当然のように設計された吹き抜けの天井は鋭角に伸びている、一面ガラス張りの窓には半分欠けた月が闇の中に浮かび上がっている。

た。

だだっ広い部屋の中央には両腕では収まりきれない机が置かれていた。

弾力のありそうな革製の椅子には偉そうに構えた男が腰をかけていた。

「お前か、そろそろ休むところだったんだぞ」

「夜分遅くにすみません、少しお時間よろしいですか」

男は渋った顔で返事をした。

「何だ」

「ベフェナ行きの客船に乗っていたという少年です。彼の力量は私もよく存じています、彼が護衛獣にとどめを刺した張本人です、本人も自白しました」

初めからこのつもりで会話させられてたと思うと、ヴレイはシリウスを睨まずにはいられなかった。

「ほう、まさかこんな小僧だったとは、手柄だシリウス」

鼻で笑った男はスツと椅子から立ち上がると、机の前に出てきた。

シリウスより長身だ。三十代だろうその男は育ちのよさそうな顔立ちに、掘りの深いくぼみには冷徹で鋭い碧眼が埋め込まれている。色素の薄い茶色い髪はオールバックで固められ、身を包む黒曜石のような軍服と肩に掛けられた黒豹マントが良く似合っている。

「私はシルバームの執政官ルベンスだ、君が護衛獣をやったのか？」
新王を目の前にしてヴレイは悔しくも、萎縮してしまった。

「あんたが新王か、弁償なんてしないからな、こっちは正当防衛だ」

クククツとルベンスは満足げに高笑いした。

「分かっている、謝罪金もすでにベフェナへ払い済みだ。ところで本題を言わせてもらうが、私の傭兵部隊に入らないか、護衛獣はお前の強い力に警戒したんだろう、その能力を見込んで報酬は倍にする」

まさかのチャンス到来だ。組織にもぐりこめば堂々と詮索できる。その時ヴレイはハツとして、シリウスを視界の端で見た。まさか、潜入の為に自分をここに連れてきてくれたのか、と疑念に囚われたが、もし護衛獣を倒した罪として拘束させられていたらと思うと、良い気分はしなかった。

「それも悪くないな、ちょうど金も欲しかったし、入隊する」
不安定な姿勢を立て直せないではいるが、目の前にいるのは国の頂点にまで伸び上がった権力者だ。その貫禄が微笑すると不気味な旋律をかもし出した。

「交渉成立だ、だが私を裏切った時はそれなりの制裁があるからな。では身分証を提示してもらう、外見からしてインジョリックサークの者だろ、大陸を出る際には国際旅券が必要だからな」

相手を見透かすようなルベンスの双眸をヴレイは黙って見据えてから、荷物に視線を落とした。乱雑に鞆の中を探ってから、身分証を取り出した。

「シリウス、受け取れ。ダグにそいつの登録をしておけ」
受け取ったシリウスはルベンスの机に設置されている端末コンピュータにデータを入力した。

「ヴレイ・リルデイクスというのか、では諜報部のシリウスと組み、

お前はシリウスが得た情報を元に動く特攻だ、直接の命令は傭兵部隊の統括が下す。登録したら身分証を返してやれ」

奪い取るようにシリウスの手から身分証を取ったヴレイは怪訝な面持ちでルベンスを凝視した。

「何か不満か」

「兵力が欲しいとはいえ、どこの馬の骨とも知らない者を何の審査もなしで雇ってもいいのか」

質問を聞きながら頷くルベンスは葉巻に火を点けた。

「情報を流すつもりならやればいい、別に私はインジョリックに興味はない、今はこの国のことだけだ」

良くも悪くもないつまらない答えだった。

「では本日から傭兵部隊統括、ザイド指揮官の直轄下に配属する。明日個室を用意させる、今夜は離れの客間が空いている、二人部屋だが狭くはない、ゆるりと使え、以上だ」

執務室を出ようとした際、ヴレイは目の端でルベンスを見送った。

N E X T

第20話 地下要塞

絢爛豪華なだだっ広い部屋はルベンスの言ったとおり二人部屋だった。

天蓋付きの広いベッドに掛け毛布が敷かれている。ご丁寧にもガウンが防寒具として用意されていた。

大窓の向こうに広がる夜景は額縁の中に描かれた絵画のようだった。

「こんな豪華な部屋で、野郎と二人っきりかよ」

嫌々と部屋の中に入ったヴレイは机の裏やベッドの下など、隅という隅を調べ始めたので、シリウスは鼻で笑って声を掛けた。

「盗聴器なんてありませんよ、もちろんダグ回線だってありません、スパイにダグノートなんて使われたら、城内を詮索されてしまいますからね」

「ご親切に。あんたもここに入る時、身分証を見せたのか」

「はい、軽い続きのようなものですよ、あれだけで済むなら誰でも傭兵になれますね」

「冗談だろ。ていうかルベンスの奴、シリウスと組ませて俺を見張るつもりだろ」

「私のこともルベンスは疑っているというのに、そんな無駄な策略を思い付くような人ではありませんよ」

とシリウスは言うが、ヴレイは疑いの目を向けた。

「それより、傭兵統括ってリーダーのことだろ、ザイドって言うってたよな」

乱暴に鞆をベッドのわきに放り投げたヴレイは全身の力が抜けた

ように、ベッドに仰向けになった。

「彼も傭兵のようですが統括という階級につけたのは、彼の能力に関係している噂だとか、時間ができたら紹介しますよ。彼がどうかしましたか」

「別に」とだけ言ってヴレイはベッドから起き上がると、大窓から城下町を眺望した。

星屑を散りばめたような夜景を作り出しているのは、ガラス製の建築物が明かりを反射させているからだ。

「この街を維持するのに自己資産を一番多く投資したのが、実はルベンスなんですよ。感服します」

独り言のように呟いたシリウスは隣のベッドにその長身を横にすると、分厚い本を開けて静かに読み始めた。

夜景に背を向けたヴレイは怪訝な面持ちで首をかしげた。

「そんな奴がこの城を本当に崩すのか」

「初耳ですね、もっと詳しく聞かせてください、君の探し物について」

開いたばかりの本から視線を上げたシリウスは細い目をさらに細くした。

「あいつは「聖冠」を創るためにこの城を真つ二つにしたいらしい、こんなでかい建造物を破壊するには戦艦並の威力を持つものじゃないと無理だ、時間を掛けて解体するなら話は別だけど」

「なるほどその話が本当なら、連合軍に責められる前に城を崩壊させたいわけですね、軍拡の理由もその説なら利に適っていますね。で戦艦とは動く要塞のことですか？」

「そうだ、何処にあるのか知ってるのか？」

ベッドに膝を突いて身を乗り出したヴレイは、本を閉じてベッドから起き上がったシリウスを目で追いながら答えを待った。

「それに答える前に、私達は手を組んだのですから、行動に移す時は私も一緒です。だから足を引っ張ることだけはしないでください
ね」

「俺が特攻だって言ってただろ、それに逆のパターンも大いにありえるだろ」

呆れ返るヴレイは溜息を付きながらまたベッドに崩れた。敵なのか見方なのかよく分からない相棒に振り回されっぱなしで、気が滅入ってしまいそうだった。

組んだばかりの相方はなにやら双眼鏡を取り出して外を眺め始めた。

そんな彼の様子を見ながらぼつりとヴレイは言った。

「一応礼を言う、あんたのおかげで城に潜入できた」

手助けしてくれたことに気付かず睨んでしまったことは悪いと思っただが、謝るのは面倒くさかった。

少々沈黙が流れた後、突然シリウスは双眼鏡を覗いたままこちらを向いた。

「私と君が顔見知りだっただけです」

「それだけで、協力したのか」

「まあ、それだけでも十分ですよ」

「なんだよそれ」と言いたかったが、双眼鏡を覗いたままの格好が可笑しくてにやけてしまった。

「それより反乱軍がノイズストに集まっているという噂を耳にしまして、ちようどこからノイズストが遠目に見えるのですが、やは

り情報は正しかったようですね、兵が集まっています」
双眼鏡を目から放すとシリウスは再び窓の外を見た。

まさかあの二人なのかと思ったヴレイは上半身だけ起こして、窓の外へ目を凝らした。

部屋に入ってから落ち着きのない彼を視界の隅で見張っていたシリウスが目ざとく訊ねた。

「何か心当たりでもあるんですか」

「いや、それで戦艦はあるのか？　ダグ回線がないから調べることができない」

「実のところ私にもよく分かりません、要塞には興味がなかったのだ」

他人行儀のように淡白に笑むと、「でも、城内が把握できればいいのですから」と、意味不明な言葉を発したシリウスは持っていた双眼鏡を床に置いた。

何も持っていない状態になったはずのシリウスの手に、何処からともなく現れた金メッキの鉄棒が水飴のようにうねりながら形を成型し、実体化したのだ。

一瞬何が起きたのか分からなかったヴレイは理解できるまで何度も瞬きした。

ずいぶん長い鉄棒は高熱で溶かしたかのように捻じ曲げられ、先端には巨大な水晶が嵌め込まれている。その杖を強く握り、一つ深呼吸をすると、シリウスは低い声で何語か分からない言葉で唱え始めた。

双眼鏡を中心に床が乳白色にぼんやり光始めた、その光は意思を持つかのように動き出すと、床に絵を描いたのだ。

「唱えた本人でなければ理解できませんが、これは城内の地図です。双眼鏡がのぞいてくれたんです」

「覗いてって、どうやってそんなことが、手品じゃないよな」

「時々面白いこと言いますね、私は魔導士です」

「マドウシって？」

ヴレイは眉根をゆがめた。

「魔導士を見たのは初めてですか」

「ああ、インジヨリックにはそういうものはなかったから」

「機械文明が発達した大陸に魔導は浸透しませんでしたからね。ここはやはり手を組んでいるのですから貴方の能力も知っておかなくては、シルバームの護衛獣を倒したのもその力なんですよね」

自然ながらも完全に見抜いてくる相方の態度にヴレイは溜息をついた。

「まあ、俺のは魔導じゃなくて、妖力って言うらしい。それより、その地図読めるんだろうな」

「え、はい……」

唐突に話題を変えられてしまったのでシリウスはヴレイを疑問視したが、特に今は詮索しなかった。

「方角は東ですね、そこに棟が群がっているはずですからそこから侵入しましょう。警戒するに超したことはありませんが、夜間の方が人通りは少ないはずです」

「じゃあ早速案内してくれ」

城内に大規模な要塞を持つ城は珍しいという。
そういった国は君主が主導する軍事政権力が強いのだと言う。

「シルバーム城はグランドラインの中でも指折りに巨大な城ですが、大陸最大のものは城そのものが一つの街になっているそうです」

漠然とそのイメージを頭の中に描いてもヴレイにはピンとくる映像が思いつかなかった。

目的地に繋がっている通路は幾つかあるとシリウスは言った。途中までは専用通路で行けるが、直接立ち入るのは目立ちすぎると言うので、裏通路に行くことにした。

双眼鏡が覗いてくれたおかげと言われると、何か変な感じだった。ダクトのような隠し通路を進んでいくと、広い吹き抜けの空間に突き当たった。

華やかな宮殿の真下に位置する広大な地下施設は、まるでセイヴァのドックを思い出させた。

造船工場は勿論のこと、極秘裏に建造されていたにはは大掛かりな工業コロニーとなっていた。

上の城が表の顔なら地下要塞は裏の顔といったところだ。

「ここまでくるにかなりの軍資金が必要だったでしょう。街の維持費と称してこちらに回った金もありそうですね、何よりこの造船材料をどこから買い集めたんでしょうか」

「同じように軍拡している国々からだろ」

平然と私見的な意見を述べるシリウスに対して、ヴレイは眼下に見えものに釘付けになっていた。

彼等が見下ろす先には巨大な軍艦が静かに眠っていた。

セイヴァで見慣れた船とはまったく形が異なっている。基礎外観は飛空艇そのものだった。グランドライン独特の奇抜さはあるが、やはり要塞と言うより船でしかないのがヴレイから見た印象だった。

「総勢二百名の駆逐艦つてところだな。これなら主砲もあるだろうし、何よりこれほどの規模にまで膨らんでいるってことは、ここだけじゃないんだろうな軍艦を所有している国は」

眼下の景色を悠々と見物するヴレイはいい情報を手に入れた喜びで、その至言は心なしか上機嫌だった。

面の兵の数より人影は少ない。天井の明かりも今は消灯され、下の方だけが作業できる程度に灯されていた。

「これだけの規模だ人員もそれなりに要るはずだ」

「それで賞金首を傭兵にして、連合軍を片付ける雑用役に回していただんですね。王軍だけではないぞという時の兵力を温存できなくなっていたんでしょう」

「なるほど」と言いながらヴレイはいざこれが動かされた時の事を考え、ふとあの二人の顔を思い出した。

何故今彼らのことを思い出したのかと不思議に思ったが、やはり二人が巻き込まれた時は助けたいと思う気持ちがあったからだった。

N E X Y

第21話 再会の握手

翌日、むせ返りそうな豪華な客室とは対照的に、心細くなりそうなほど質素に作られた傭兵専用の個室に案内されてから、傭兵部隊統括の元へ案内された。政治を管轄する宮殿とは離れた敷地に、王軍の基地が設けられていた。

ヴレイはシリウスの斜め後ろを歩きながら、いつになく緊張していた。統括の名前を聞いてからシリウスの前で平然を装うことに難儀していたからだ。

きつと同名なんだろう、と思いながらも心のどこかでは「あいつに会える」と期待する自分もいた。

幼い頃の記憶がよみがえる。短い間だの付き合いだったが、戦闘技術を共に鍛え、殴り合いのケンカもした友達だ。村を襲われた後にできた初めての友達は、心を閉ざしていた自分に拳を向けて笑ってきた。

八重歯をむき出しに笑う顔はいつも偉そうだった。

久しぶりに恋人に会うかのような緊張で、鼓動が外にまで聞こえそうなくらい高鳴っていた。

あれこれと考えながらついにその扉は開かれた。

「ザイド、昨日雇われた新人です」

「シリウスか、悪いけど忙しいから後に……」

部屋にいた男は見ていた資料から視線を上げると、シリウスの隣に立っていた少年を見て言葉を詰まらせた。

「知り合いですか」

「いや」

ザイドはヴレイから視線を外し、資料を机の上に置いた。

漆黒に艶めく大理石の机の前に出てきたザイドは腕を組んだ。

机に腰掛けると、木製のタバコケースから手馴れた仕草でタバコを取り出し火を点けた。

「ルベンス執政官からも言われたとおり、俺の直轄に配属となる、
と言っても傭兵は雑用の方が多いけどな」

二十代前半だろうその男はタバコを啜えながら口端を上げて笑った。

かなりの長身だった。人並み以上に背の高いシリウスでさえその背には及ばない。近寄れば頭ごなしに見下されそうだ。

黒髪で邪魔そうな前髪の向こうから覗く瞳は灰色だ。

「雑用って」

「連合派の残党狩りとか、あるいは連合軍の各拠点を探索するとか、
つまり掃除役だ」

「連合軍って言っても、新王政権の退陣を求める市民連合だろ、反
政府活動の鎮圧に軍隊まで介入させるなんて、しかも傭兵まで導入
させて、相手は国民なのに」

自分でも不思議なぐらい強きに発言していた。

「あっちだって武装してんだ、丸腰で迎える馬鹿がどこにいる、そ
れにクーデターが事態解決にならない事ぐらい両者とも分かってる。
そんなこと以前に傭兵ってのは金さえもらえれば何でもする、傭兵
の大半はこの国とは関係のない他国出身だし、しかも元賞金首なら
なおさらだ。あんたインジョリックの人間だろ、ここはグランドラ
インだ、勝手が違って当然だろ」

肩で息をしながら憤慨するヴレイを無視してザイドは握手を求めてきた。

「一応よろしくの挨拶だ」

八重歯を見せてザイドは笑んだ。

鮮明ではないが記憶に残る幼い彼の姿と重なって、ひどく懐かしい感じがした。しかし、どこか昔の彼と雰囲気違っていてヴレイは素直に手が出せなかった。

あれから八年、成長と共に容姿が変わっても当然だが、その変化とは違う。彼の中の何かが違っていた。外見は同じでも、エンジンだけが積み替えられたエアバイクのようだった。

ザイドの双眸を見据えてから手を差し出したその時、ヴレイの視界が闇に覆われた。

生き物なのか建物なのかも分からない焦げた臭いがして、全身の毛が恐怖で逆立った。耳を塞ぎたくなるような魔獣の呻き声で我に返った。

「大丈夫ですか、顔が真っ青ですよ」

気付いた時にはシリウスが顔を覗き込んでいたので、ヴレイは驚いた。

「大丈夫だ」

返事をした声が震えていた。

「体調が悪いなら自室で休んでいろ」

ザイドは手を引き戻し、机に腰掛けると短くなったタバコを灰皿に押し付けた。

「で、シリウスはこいつと組まされたんだろ、特別な命令でもあつ

たのか」

「いえ、それが何も。それよりもノイゼストの不穏な噂を耳にしたんですが」

シリウスは誰とでも気さくにしゃべれる人間らしく、ザイドとも違和感なく話していた。毒気に当たったかのようなヴレイはザイドを警戒しながら、彼らの様子を視界の隅で見ていることしかできなかった。

「連合軍が集結し始めてるって話だろ。数ヶ月前の市街戦でデモ隊から死傷者が出て、その後かなりの批判を浴びたらしいから、何か有効策を打ち出そうと王軍の諜報部まで刈り出されてるって話だ」

「そうして私達に与えられるのはその後始末ですか。その前に様子だけでも見に行っただけじゃいませんか」

「そうだな、掃除ばかりじゃつまらないし、ルベンスには伏せておく、行って来い」

＊ ＊ ＊

首都郊外のノイゼストは飛獣で一時間程度のところにある街だった。

赤い瓦と青銅の塔が連なる光景は優雅なものだった。石畳の細い小径を通ると住民が暮らす古い石造りの民家が所狭しと建ち並んでいた。

どこからともなく湿った土の香りが漂ってくる。興味本意で少し奥の道に入ると、剥き出しの水路に生活廃水でも流れているのか、鼻の奥にツンとくる臭いがしてヴレイは思わず顔をしがませた。

「ところでさっきはどうかしたんですか。顔は青ざめていましたし、

ザイドと口を聞こうともしませんでしたよ」

今はザイドのことを話に出されたくなくてヴレイはつい苛立ってしまった。

「だから何もないって、それより連合軍がどこに集まっているのか調べなくていいのか」

「集合場所を決めておいて、その日までは街中に散らばっているのかもしれないね」

「彼らが行動に移せば、ルベンスは連合軍を迎え撃つためにあの艦を起動させるかもしれない」

大通りに沿いに歩いていくと噴水を囲んだ劇場広場に辿り着いた。広場は閑散としていた。たまに商人が荷馬車を引いていたり、土建労働者が荷物を運んでいたりしているだけで、人影もまばらだった。それ以上に不思議なのは、芸術的な劇場区に多くの兵士が闊歩していることだった。

劇団のポスターが貼られるはずの掲示板に何も貼られておらず悄然さをいっそう引き立たせていた。

「何も貼ってない」

「こんなご時世ですから、娯楽どころではないんじゃないんですか」

シリウスの答えに納得できなかったヴレイは、劇場の表に面した道路をほうきで掃いていた老人に話しかけると、良く聞き取れないうわ言をぼやいてから答えてくれた。

「いつまた衝突が起きるか分からないし、どこの劇団も公演したがないのさ」

やっぱりシリウスの言うとおりと仕方なく納得したヴレイは次の情報を求めて、その場から立ち去ろうとしたその時、老人が思い

出したかのようにぼやいた。

「最近じゃあもっぱら劇場を使うのは連合兵士だよ、ノイゼストは連合派だから劇場の一つや二つ、使ってくれて構わないんじゃないけど、お前さんのように劇を楽しみにしている奴も多いんだ」

「そうですか」

ヴレイは老人に礼を言ってからその場を立ち去った。

「訊いてみるものですね」

「そうだろ」得意げに笑って見せた。

その後、ヴレイの提案で二手に別れることになった。

シリウスには軍艦の見張りを、ヴレイは宿を取って劇場の様子を見ることになった。もし軍艦が起動した場合のことを考えると、本当は艦の見張りをしたかったが、あの二人がここに来ないとも言い切れなかった。

その日の夜、ヴレイは外の静けさの中に響く慌しい足音に気付いて部屋を出た。

宿場を出て劇場区入り口までやって来ると、すでに兵士が厳重な警戒を布いていた。物々しい雰囲気にとだ事じゃないことを確認したヴレイは闇に乗じて広場に入ろうとしたが、「ここからは連合軍管轄だ、今は進入できない」と止められたしまった。

そこで飛獣を連れてもう一度広場に近づき、建物の裏側から屋上へ飛び移った。そこからはコンクリート建築を豪快に取り入れた、迫力ある劇場を眺望することが出来た。

中からは兵士達の覇気ある歓声が聞こえてくる。

地上が駄目なら上から侵入できると思っていたが、偵察兵が飛獣に乗って上空を巡回していたのだ。飛獣をまたがるヴレイは隙を見

ながら、密集する建物の合間を縫ってその距離を縮めていくと、野外劇所の門前まで接近することが出来た。

円形劇場は天井を開けた野外劇場だった。闘志を燃やした歓声が先より色濃く聞き取れた。

外壁の窓枠へ飛び移り、声が聞こえる方へ歩みを進めて行きながら、暗闇に乗じて警備兵の目を掻い潜り、最奥部へとたどり着いた先には、何万という連合兵が集まっていた。

劇場の舞台には人より巨大な鳥を傍に据えた少年の姿があった。言っている内容までは聞き取れなかったが、確かに少年は何かを演説しているようだった。

「まさかロインか」

彼がいるならピナもいるはずだと思って少年の周囲を確認してみるが、彼女の姿は見つけられなかった。

階下へ戻ろうとしたその時、眩い閃光が視界をさえぎった。

一瞬の光の後に変わっていたものは、何百という獣が劇場を囲んでいたことだった。突然の獣の出現に兵士達が慌てふためく様子は上からでもよく見えた。だがそれはグレイも同じだった。

起こった現象に気を取られ、近づいて来る兵士に気付かなかった。「誰だ、そこにいるのは」

NEXT

第22話 野外劇場

「お取り込み中申し訳ありません」

三人の兵士が一人の少年を拘束しながら、野外劇場の中庭にやってきた。

装飾が施されたタイル広場の中央には、円形の噴水が風になびいて激しい水飛沫を立てていた。

灯籠の回りに集まる諸侯達は突然の訪問者に、やむ終えず会議を中断させた。

「この者が劇場に侵入していたところを捕らえました、彼の持ち物の中にこれが」

兵士が差し出して来たのは一枚のカードだった。

「シルバーム兵の身分証、傭兵か。偵察にでも来たのだろう、そいつの面を見せろ」

諸侯の一人が連れてくるよう指示すると、拘束された少年は抵抗することもなく大人しく明かりの下に姿を現した。

「グレイ……？」

諸侯の陰に隠れていたロインとルピナが少年の正体を見て声をそろえた。

「彼は見方です、拘束を解いてくれませんか」

ロインの要求なら仕方がないといった面持ちで諸侯達はグレイの拘束を解くが、用件があるならここで話すよう命令した。

自由になったグレイは改めて身分を明かし、自分には敵意がないことを説明した。

「掴まらない限り君達に会えそうになかったからな」

無然な笑みを見せてから、ヴレイは剣呑な表情へと変化させた。

「シルバーム城内で軍艦を見つけた。城を崩すには持ってこいの主砲だ、王軍の他に傭兵部隊がいる、軍勢の数はおそらく向こうの方が多いだろう。どこまでお前達の援護が出来るかわからないけど、あいつに従うつもりはない」

ロインの肩を叩いて毅然とヴレイは頷いた。

「その話本当だろうな、お前が王軍に内通していない保証はあのか」訝しげにヴレイを威嚇する諸侯はロインとルピナの前に立ち塞がった。

「心配はない、軍艦の場所を教える、潜入ルートは確認済みだ、信用できないなら俺を拘束しろ」

戦に関して素人とは思えない精悍な相貌に対して、諸侯は反論できなかった。

「ここで少し俺からの要望を言わせてもらうと、民間人を巻き込むな、一部の兵は街へ回して民間人の護衛に当たらせろ、戦力が減ってもだ。それとノイゼストは怪しまれている、これ以上派手な行動はやめろ」

「は、はい」

強引な命令にもかかわらずロインはヴレイの凜然とした指揮を見て素直に返事をした。

思わず息を呑んだ諸侯達は彼の威厳に圧倒されてしまっていた。

「じゃあ俺はシルバーム城に戻る、他言はしない、君達の健闘を祈るよ」

諸侯と握手を交わしてから中庭を去ったヴレイは、飛獣を連れて

野外劇場の表まで出てきた。

正門広場で出発の荷支度を整えていると、ルピナが駆けつけて来た。

「ロインはまだ皆と打ち合わせしているわ。あの、ありがとう、協力してくれて、私達だけの情報じゃあ先の見えない作戦を立てることになっていたわ」

ルピナの素直さにヴレイは齒がゆさを感じながら、砂金を手の平に盛り飛獣に与えた。

「乗りかかった船だ、無視できないだろ」

砂金の入った袋を荷物の中にしまい、ヴレイは飛獣にまたがった。

冷えた夜風が吹いて、しばらく静かな空気が流れた。

「向こうで会える？」

「さあ、お前達を見付けられたら援護するよ、艦に潜入するんだろ」
決然としたルピナの頷きに、安堵したヴレイは「じゃ、向こうで」と言い残して飛び去っていった。

＊ ＊ ＊

ノイゼストの宿をチェックアウトし、城に戻ってからシリウスの部屋を訪ねたが留守だった。

夜通し艦を見張っているのかと思ったヴレイは、以前シリウスがまか不思議な力を使い、城内を詮索して見つけ出した、例の場所に行くことややはり彼はいた。

「あれ、連合軍の見張りはどうしました」

「連合軍に俺の知り合いがいた。おそらく夜明けと共にノイゼストを発つだろう、仲間が艦に潜入するから俺はその護衛をする」

「なるほど、私はすっかり連合軍の協力をしていたわけですね」

「すまなかった、共犯みたいなことをさせて、もしシリウスがザイドにこの事を知らせに行っても、それは仕方がないことだ、シリウスは仕事をただけだからな、それにあんたは俺が敵だと知っても後ろから不意打ちするようなマネはしない」

真っ直ぐ軍艦を見つめていたヴレイは「ねっ」と賛同を求める視線をシリウスに向けた。

「変わりましたね、私と初めて逢った時は全身に棘が生えたような有様だったのに」

「その時はあんたを信用してなかったからだ」

「そうでしたね」とシリウスは鼻で笑った。

「それよりこのまま様子を見て、動きがあれば潜入だ」

「連合軍が責めてくれれば自然にここにも情報がくるでしょう、いざという時は二手に別れましょう、君は外に出たいでしょうから、こっちは私が」

組んだ奴がこいつで良かったと思い始めてから、やっとこの国の深刻さに気付いたヴレイはセイヴァで初陣を迎え撃った時にも増して緊張していた。これから本当に戦が起きてしまうのだろうか、そんな茫漠なイメージだけが付きまとう。

連合軍の居場所を詮索したことも、彼らに残した言葉も、今思えば軽率だったのかもしれないと悔やんでしまう。それでも今は自分の任務より、目の前のことに集中しようとヴレイは拳を固く握った。

「シリウス寝てないだろ、時間を決めて交代しよう、寝たほうがいい」

「助かります」

自分はまだ大丈夫だからと、シリウスを先に寝かせた。

様子を窺い始めて数時間経った頃、ドック内がにわかに騒がしくなり始めた。高見の狭い通路から見下ろしていると、その変化が色濃く分かった。

吹き抜けになったケージ全体に明かりが点けられ、軍艦の姿が露になった。

「騒がしいですね。夜が明けたんでしょうか」

「連合軍のお目見えか」

「そう考えるのが自然ですね。ルベンスが何か情報をつかみ、軍を動かし始めたのでしょう、行ってください」

「ありがとうございます、シリウス」

相方の姿が見えなくなってからシリウスは内壁に据え付けられた梯子を降りた。常勤兵に職務質問されるとシリウスは身分証を提示し、うまいこと話を作って侵入を試みようとしたが、傭兵というだけでかなり警戒されてしまった。

常勤兵から脱せずにいると、ドック内にけたたましい警報音が響き渡った。

駆け回る整備員と乗り込む軍人とでドック内は人でごった返した。もはやシリウスを引き止めていた常勤兵もそれどころではなくなつて、乗艦許可を下ろしてしまった。

「ありがとうございます」

シリウスが乗り込んだすぐ後に、艦の正面の壁が真ん中からゆっくり開かれた。緩やかな勾配を作る射出口から地上の空気が流れ込んでくる。

駆動音をドック中に響かせ軍艦は地上へと上った。

N
E
X
T

第23話 元凶の瞳

飛獣にまたがり、行き先不安げな表情を見せるシルバーム城の上空へ上がって来た頃には、武装された飛獣とそれにまたがる何万という兵士達が上空接戦を繰り広げていた。

鋼と鋼がぶつかり合う金属音は本物だ。

初めて見る戦場にヴレイは目を見開いたまま放心状態になってしまった。

剣が胸を貫けば飛獣から人が倒れ落ち、あるいは腕を切り落とされ、人が地上へと落ちていく光景を目の当たりにしたヴレイは驚愕のあまり口に手を当てた。血の流れる戦いに、軍人とあろうもう者が恐怖した。

機械に乗って身を守りながら戦うのとはわけが違う。

直に自分の命が危険にさらされるのが戦場だ。それにもかかわらず勇ましく立ち向かってゆく姿に、今まで自分の見てきたものがすべて引っくり返されたような気分になった。自分達だって真剣に戦ってきたことに変わりはないが、己の尺度の狭さを痛感させられた。

艦長の座に就いていただけで傲慢になり、当たり前のように威厳を振りかざしていた自分がひどく滑稽に見えて、思わずヴレイは自嘲した。

インジヨリックサークは血の流れる戦いを避けるために、機械を発達させた、逃げてきた結果ではない、平和を望んだだけだ。だがそれを否定する者がいるのも事実。

守るために剣と剣をぶつけて戦っても、必ずどこかで悲しみと憎しみが生まれる、いつも世界の何処かでその繰り返しが続いているのだらうと思うと、ヴレイは虚しくなった。

城を守ろうとする新王軍と反政府連合軍の衝突で城下町は戦禍に巻き込まれ、恐怖から逃げ惑う民間人を自警団が決死に避難所へ誘導させていた。戦をするなら国民には迷惑をかけない場所を選んでほしいものだ。

裏路地や城壁の下でうずくまる避難民の姿が心苦しい。

もはや誰がどちらの兵士か見分けがつかない戦場を、遠目から監視していたヴレイは奇跡的に見付けたものに息を飲み込んだ。

ヘルメットをかぶっていたので顔は確認できなかったが、あの金髪と背格好は間違いなくルピナだった。自分の動体視力に二言はなかった。そして彼女と一緒に飛獣にまたがっているのはロインだ。

護衛に回ろうと手綱を引いたその時だった、突き刺さるような威圧感にヴレイは背筋を硬直させた。

視線を上げて真っ直ぐ前方を直視した瞬間、見えない鎖に縛られるような感覚に襲われた。それと同時に、九年前の悪夢が鮮明に蘇った。

戦慄したヴレイは全身を震わせた。胃液が吐き出てしまいそうな嫌悪感に、頬から冷や汗が流れ落ちた。

「ザ、サイド……、どうして」

猛然と視線を上げた先には彼がいた。

防具の上から漆黒の革コートを羽織り、まるで見せ付けるように

翻している。

首筋まで伸びた黒髪は乱れて舞い、風にみびく横髪の下から灰色の瞳が超然とした面持ちでこちらを見据えていた。まるで何かを訴えかけるような強い眼光だった。

「まさか……」

九年間探し続けていた元凶を見つけたにもかかわらず、ヴレイの中には「やはり」という言葉しか出てこなかった。ふと、ザイドと握手を交わそうとした時のことを思い出していた。

あの時から「もしかしたら」と、覚悟は決めていたが、改めて真実を突きつけられると、頭の中は真っ白になった。何もこんな時に正体を明かさなくていいだろと言ってやりたかったが、ヴレイは立ち眩みを起こしたように呆然としてしまった。

焼けた村から海岸まで逃げてきたヴレイは朦朧とする意識をなんとか奮い立たせて振り向いた。あの時確かにザイドの姿を見つめていた。

けたたましい爆音で我に返ったヴレイは、黒煙の中からルピナとロインが乗った飛獣を見つけた。

己の頬を叩いて、二人の元へ旋回したまさにその時、手筒砲を担いでいた傭兵が二人に向かって砲弾を放った。一瞬早くそれに気付いたヴレイは手の甲に字を描くと、拳から電流のような閃光を放射させ、砲弾を空中爆破させた。

「大丈夫か」

「何やってたのよ、遅いのよっ」

窮地を救ってくれた王子に見惚れるような顔をして驚いていたル

ピナだったが、いつもの不機嫌な顔に戻して怒鳴ってきた。

「再会を喜んでる場合じゃないぞ、艦が動き出す、教えたルートでケージへ侵入しろ」

大量に妖力を放出させたヴレイは切れ切れになりながら叫んだ。

逃がさまいと三人を包囲した傭兵達を、見事な太刀筋でなぎ払ったのは諸侯だった。

「お二人とも早くっ」

「有難うございます」

ロインに飛獣の操縦を任せ、飛んできた矢を剣圧で吹き飛ばしたルピナが諸侯に礼を言った。

二人を乗せた飛獣は追っ手を振り切り、シルバーム城へと飛んで行った。

彼らを見送った後、敵の足止めをしようと鞘からサーベルを抜いたヴレイは下唇を噛んで、腹をくくった。やらなくては、守りたいものも守れないのだから。

傭兵が傭兵に攻撃している様子に気付いた男が肩に手筒砲弾を担いで、ヴレイの前に現れた。

並みの賞金首の力量を遥かに凌駕しているだろう風格の男にヴレイは見覚えがあった。

「こんなところで会うなんてな、全国に指名手配されている賞金首ヴァリス」

背筋まで伸びた金髪を首筋で一つに結っていた。

長い前髪を手馴れた仕草でかき上げ、ニヤリと笑う上唇にはピアスの石が幾つも光っていた。

「おやおや、妙な傭兵がいると思えば、インジョリックを抜け出し

てきたのか？ それとも軍を首にでもされたか？ 隊長さんよ」
切れ長の目がヴレイを嘲笑っている。

「そんなこと気にしてどうする、牢獄行きのお前が」

「それはどうかな、ここはルールのある世界じゃねえんだよ、隊長さん」

「おしゃべりなんだよっ」

ヴレイの放った光弾はヴァリスを確実に捉えていたが、寸前のところで避けられた。

それでも防具の半分が焼失してしまったので、ヴァリスは仕方なく防具とコートを脱ぎ捨てた。

「そんな技も持ってたのか、おもしれえ、勝負っ」

手際よく手筒砲を組み換えたヴァリスは砲口をヴレイに定めて発砲した。

とっさに両手を構えたヴレイは先と同様の光弾を放った瞬間、砲弾と衝突し爆発が起こった。上空に強烈な爆音が轟き、熱を持った爆風が輪になって戦場に広がった。

心配になったルピナは振り返って見たが、現場は黒煙に包まれヴレイの姿を確認することはできなかった。

＊ ＊ ＊

豪快な爆発音は軍艦の中にまで響いて聞こえてきた。

「あれがお前の狙いかシリウス。傭兵は出撃命令が出ているだろ、それを無視して私の船に密航とはいいい度胸だ」

コックピットの主モニターは上空での接戦を映し出していた。

「私は諜報部員ですから、長が何を企んでいるかぐらいは嗅ぎ付けます。それに始めから私と彼は手なんて組んでいません、お互い自分の目的のために動いていたまでです、部下を管理できないのは長としての力不足では？」

一瞬コックピット内が静まると、ルベンスはこれ以上ない屈辱感にさいなまれ、怒りで双眸がゆがんだ。

「何をぼさっとしている、こいつを取り押さえろ、逆賊だ」

ルベンスの指示で兵士達がシリウスを取り囲むと、艦内にけたたましい警報が鳴り響いた。

「警備班は様子を見てこい、艦首と艦尾の非常口と甲板に兵を集中させろ、部外者は見つけ次第始末しろ。この作戦を邪魔されてはならない」

堀の深い窪みにおさまる冷徹な碧眼が、さらに鋭い眼光を放ってモニターを睥みつけた。

「さっさとそいつを軟禁しろ」

苛立つルベンスは言葉を吐き棄てた。

彼の命令を遂行しようと、兵士達はシリウスとの間合いを狭めていく。一人の兵士が威嚇用の鉄棒を振りかざしたが、それよりも早く杖を実体化させたシリウスが相手の腹を突いた。

そのまま杖一本で兵士達を薙ぎ倒すと、風のようにコックピットから脱出した。

「奴を捕まえろっ」

NEXT

第24話 独裁と愛情

ブリッジから脱出したシリウスは相方の進入ではなからうかと、外部と直結しているケージに向かって通路を走っていく。兵士と鉢合わせになっても、怪しまれていなければ傭兵証明書を見せて、「侵入者を探している」と言えば、問題はなかった。

甲板へ行く途中で、侵入者に斬りかかった兵士達が無念に返り討ちにされていたのを見付けた。既に侵入者の姿はなく、救護班が応急処置を行っていた。

その場から少し離れ、辺りに意識を集中させたシリウスはケージに繋がる機械室の扉を開けた。中に踏み入ろうとしたその時、天井にへばり付いていた侵入者が頭上から斬りかかってきた。

先に殺気を察したシリウスが瞬時に身を翻し、振り下りてきた刃を杖で受け止めた。

刹那的に対峙した両者の視線が鋭く交わった。

予想外な侵入者の正体にシリウスは一瞬たじろいたが、遠慮せず相手を振り飛ばした。

「ここは余所者が来るところではないですよ」

まだ十六、七の少女と、十歳そこそこの少年を目の前にして、シリウスはまだ信じられないでいる。

「捕まえようとしても無駄よ」

振り飛ばされたが、受身を取り体勢を崩さずに構え直した少女は剣先を相手に向けた。

「連合兵の者ですね、ルベンスの元へ行くつもりですか」

「邪魔するなら、あなたも倒れていた兵と同じ目に遭うわよ」

「それはどうでしょう」

男の不適な笑みに二人は厳しく警戒した。

シリウスと剣を構える少女の鋭い眼光が交差していると、殺伐とした空気に水を注すかのように艦内放送が流れた。

「艦がドックから出ます、どこかに掴まったほうがいいですよ。それで君達はどうしてここに軍艦があると分かったんですか、しかも地下にあるってことを」

地響きのような揺れの中でも、少女とシリウスは微動にせず、お互いの間合いに入るか入らないかの位置を保ったまま対峙し続けた。

「あんたには関係ないわ、で退くの、退かないの」

凜と研ぎ澄まされた紺碧の瞳に圧倒されたわけではないが、シリウスは構えていた杖をさげた。

「ブリッジまで案内しましょう。君達がどこまでできるか見てみたくまりました。おおよそ君達の協力者は予想がつかますので」

後から駆けつけて来た警備兵が三人を見付けるやいなや、得物を構えて襲い掛かってきた。即座に反応したシリウスが杖の先で兵の得物を受け止めると、後は護身術で相手の動きを封じてしまった。

素早い身のこなしに少女は口を上げてあ然としてしまった。

「早く行きましょう、付いてきてください」

言われるままに二人はシリウスの後に付いて行った。

「でもあんたここの傭兵でしょ、信用できないわ」

まだシリウスを警戒する少女は剣の柄を握ったままだ。

「元傭兵です。ついさっき解雇になりました、私も追われてます。

それに、貴方達を知る者と手を組んでますから、心配しなくても大丈夫ですよ」

「ヴレイを知ってるの？」

声を上げて訊いてきたのは召喚した獣の背に乗る少年だった。

「そうです、連合の中に知り合いがいるといっていました、君達のことだったんですね」

「あそこにいたぞ！」

警備兵の叫び声に反応した少年が「招来」と叫ぶと、空中に描いた陣の中から飛び出してきた獣が警備兵に襲いかかり、気を失わせてしまった。

「二人とも名は」

「僕はロイン、彼女が」

敵ではないと分かると生まれ持った社交性が自然と表に出せるロインを見て、警戒心が削がれてしまったルピナが呆れた様子で答えた。

「私はルピナ、あんたは」

「シリウスと呼んでください、フレイヤの王女とベフェナの王子はかなりの使い手であられる、さすがに驚きました」

「知ってたの？」

「名前だけ知っていたので、こちらに渡る前に少々文献で習っておきました」

かなり早くシリウスは走っていた。獣にまたがっているロインはともかく、話しながらでも余裕で付いて来るルピナに気付き、今更

ながら感心した。これなら警備兵に追いつかれる心配はない。

シリウスはこの二人に大きな期待感を持った。

シルバームを救おうと召喚獣を使って軍を率いたこの少年は幼いながらも、ヴレイとは異色の指導者になると分析した。

コックピットを守っていた衛兵が中に入れまいと、三人に得物を振りかざした。だが、ロインに召喚された猿型の獣によってその努力は無駄となり、ブリッジへ通じる扉は蹴破られた。

眼前に飛び込んできたのはブリッジが三段状になった司令室だった。

三段目のブリッジに我が物顔で突っ立っていたルベンスが階下の異変に気付いて、目を見張った。

侵入して来た三人を数十人の衛兵達が銃口を向けて取り囲んだ。

「外にいた兵は剣だったのに、ここに来ていきなり銃ですか」

無然に笑うシリウスに対して、ルピナとロインは尋常でないほど萎縮してしまった。

「侵入者は子供だったか、案内ご苦労だったなシリウス、良い機会だこいつらにショーを見せよう」

正面に広く取られたガラス板の向こうには、出撃している大半が傭兵の新王軍と市民連合軍の上空接戦が繰り広げられていた。

「すでにリベロットの上まで浮上していたのですね」

数の多い新王軍に対して、兵力の少ない連合軍が決死に攻めている戦場で、ヴレイとヴァリスが派手な攻防戦を繰り広げていた。

＊ ＊ ＊

「おい、あれ」

新王軍の一人が宮殿の方を見て咄然と呟いた。

「何だよあの船、見たことねえぞ」

「ただの飛行船じゃねえぞ」

軍艦の姿に気付きながらも兵士達は戦いを止めなかった。

派手な空中接戦を続けていたヴレイとヴァリスも動く空中要塞には気付かなかった。ヴァリスの額やわき腹辺りからかなりひどい出血が見られたが、相手の負傷を喜べるほどヴレイにも余裕はなかった。

肋骨を何本か折られているので動くたびに激痛が襲う。

気力的にも妖力を使えるのはあと一弾だと判断したヴレイは、手の甲に自分の血で印を描くと拳は青白く光りだした。

「また弾丸が、だがな二発目はきかねえぜ」

ヴレイが突き出した拳から先と同じような光弾が発射された。

放たれた光弾は湾曲し逃げる獲物を追う。気力を振りしぼって弾丸を避けると、突然ヴレイが視界に飛び込んできた、身構えることも出来なかったヴァリスは腹部を殴られ、そのまま彼の視界は闇に閉ざされた。

気を失ったヴァリスの体が飛獣から落ちそうになったのを見て、ヴレイがとっさに受け止めてやった。

二人の決着を見ていた諸侯が防具を揺らして近づいて来た。

「大丈夫か君」

「ああ、なんとか、それよりあれば」

ヴァリスを受け止めた時から戦艦に気付いていた。

「あんたらが戦っている間に浮上してきた」

「こいつを頼む、それと戦いをやめさせるんだ」

「何を言い出すんだ、この状況を見ろ、誰も耳なんてかさないぞ」

「少しでも努力しろ、でない後悔するぞ、それと城下の住民を城から遠ざけろ」

困惑する諸侯に無理矢理ヴァリスを預けると、手綱を引いて飛獣を軍艦へと向かわせた。

＊ ＊ ＊

「あいつが勝とうが、この艦は停まらない」

外の様子を眺めながらルベンスは階下のブリッジに下りてきた。

「あんたのやっていることは反逆と同じよ、民に攻撃するつもり」
猛然とした相貌を向けたルピナがルベンスに掴みかかろうとしたところを、シリウスが杖を横にして行く手を阻んだ。

「部外者に何が分かるっ」

場の空気が凍り付いてしまいそうなほどの怒鳴り声に、ルピナは生唾を飲み込んだ。

「王制をなくしたのは最後の国主が無慈悲なまねをし、聖冠の力を邪悪化させたからだ。しかしその聖冠を破壊したのは邪魔な分家だ、王制廃止後ますます治世は安定せず常に紛争と隣り合わせだった、王がいらないから秩序は不安定なままなのだ、だから私が王を復活させようとしているのではないか、本家の血を受け継ぐ私が」

本性をさらけ出し、言いたかったことをぶちまけたルベンスは勝

ち誇ったような高笑いをコックピットに響かせた。

異様に血走る碧眼にロインは冷たい汗をかいた。それは背中合わせになっていたルピナも同様だった。

「私が王になるのだ、オペレーター、あれの準備だ」
「はい」

「これで王制復古への秒読みが開始される」
指示を仰いだルベンスはオペレーターデスクの前に佇むと、手元のスイッチに触れて力強く押した。

NEXT

第25話 涙のわけ

「これで主砲が自動的に起動された。今のシルバーム城を破壊し新たな城の誕生と共に聖冠を復活させるのだ」

「誰も認めない、そんな王」

憤慨したロインがルベンスに掴みかかろうとしたのを、ルピナが後ろから抱くようにして止めた。それでもルピナの腕を振り解こうともがくロインは感情をむき出しにして叫んだ。

「民に謝れ！ 街がどうなっているか分かってるだろ、紛争でどれだけの人が犠牲になったか」

ついにロインはルピナの腕から離れると、取り囲む兵士達の足の隙間をすり抜け、ルベンスの顔面を掛けて拳を振り上げた瞬間、銃声音が鳴り響いた。

「発砲するな、執政官に当たったらどうする」

「す、すみません」

緊張のあまり引金を引いてしまった年若い兵士が、起きてしまったことに怖気づいていた。

足が思うように動かなくなっただのを感じたロインは、突然の激痛で床に転げ落ち、足首を押さえてうずくまった。

「ロインッ」

一瞬にして顔面蒼白の衝撃を受けたルピナはロインの元に駆け寄ろうと、取り囲む兵に剣を向けた時だった。怒りを露にした召喚獣がルベンスに跳びかかって行ったのだ。だが、それはさせまいと、二階のブリッジで銃を構えていた兵士達が一斉に発砲した。数十箇所を打たれた召喚獣は発砲音と共に、無残に床の上に倒れてしまった。

重たいものが床に落ちる鈍い音が響いた後、コックピット内は静寂に包まれた。

「……し、死んでる……」

ルベンスは血痕の飛び散った床を眺めてから、ロインとその召喚獣を見下した。

ロインを拘束しようと駆け寄ってきた衛兵をシリウスが杖の先で殴り飛ばした。次から次へと向かってくる兵士にシリウスはその軽やかな身のこなしと、杖一本で彼らの動きを封じてしまった。ルピナもそれに協力した。剣は杖に当たらないよう器用に間合いを取りながら、華麗に舞っていた。

ルベンスの近くで動き回る標的に兵士達はなかなか射程を定められないでいた。それに気付いたシリウスが床に転がった銃を素早く拾い上げて構えると、銃口に怯んだ兵士達は動きを止めるしかなかった。

「よくも、よくも僕の友達を」

押し殺したような声を発したロインは憎悪と怒りで抑えられなくなった感情をルベンスにぶつけようと、立ち上がろうとしたところを咄嗟にルピナが止めた。

「動いちゃ駄目よ、それにすごい汗じゃない」

ロインの額に手を当てた。

「すごい熱、打たれただけの症状じゃないわ、足は大丈夫、弾は擦れただけよ」

召喚獣のことで怒りを露にするロインの目頭からは、涙が溢れそうになっていた。

「よくも、よくもっ」

足の痛みを忘れたかのようにロインは突然ルベンスに飛びついた。油断していたルベンスは反応に遅れて床の上に突き倒された。片足

にしがみ付いて暴れるロインをもう一方の足で突き飛ばした。

そそくさと立ち上がったルベンスの背後にルピナが音もなく回り込むと、素早く両手首を拘束し、頸動脈に刃を当てた。

「それで勝ったつもりか」

肩を強打したロインは胸を苦しそうに押さえていた。ルピナにとっての頼みの綱が切れてしまい、もはや船を止める術も見つけられずにいたその時、コックピットに侵入してきた者がいた。

「やっときましたね」

銃を両手に構えるシリウスはヴレイの到着を安堵の笑みで迎えた。ケガと戦闘による体力の消耗で息を切らしていたヴレイは周囲を見渡した。状況を冷静に私見していると、銃を構えていた兵士の一人が「動くな」と警告してきた。

「あんた、遅いわよ！」

怒鳴ったルピナはルベンスの首筋に剣を当てていた。

「しょうがないから助けに来てやったんだよ」

「なによ偉そうに」

「それだけじゃないけどな、正しい戦艦の扱い方を知らないらしいから、注意してやろうと思って、そこのシンオウとやりに」

頬に流れた血を無雑作に服のすそで拭き取ったヴレイはルベンスの押したスイッチを確認してから、変わり果てた姿で倒れていた召喚獣を見て顔をしがませた。

「ふうん」と小さく呟いたヴレイは横暴にブリッジに侵入すると、オペレーターの首根っこを掴みデスクから無理矢理退かせた。代わりに自分が腰を下ろすと、手元のキーボードを凄まじい速さで叩き始めた。

ルピナとシリウスはヴレイのコンピューター操作に目を奪われた、

動きを封じられていたルベンスも言葉を失って見入ってしまった。

「まさか、これで空に飛ばすなんて、無理矢理にも程がある」
端末モニターを見てヴレイはあきれ返った。

「まだすべてのプロセスが組まれていないんだ」
近くにいたオペレーターが脂汗を浮かべながら答えた。

「そうだろうな、ダグシステムがバックアップしているものの、攻撃されたら落ちるだけの防御システムしか組まれてない、落ちれば街の住民が被害を受けるんだぞ、攻撃だけが戦艦の役目じゃない」
残り時間から解除システムの組み上げ完了までの時間を頭の中で割り出しながら、ヴレイの手は正確にキーボードを叩いていく。

「ダグシステム稼働率七十パーセント、相転移エンジン出力上昇中、起動率八十パーセント、粒子合成パイプの凍結解除終了か、順調に砲撃の準備がされているようだな」

「あの、平原まで艦を進行させ、そこで砲撃させたらどうでしょう」
オペレーターの一人が不安そうに提案してきた。

「ダメだ、発射完了時間までにその目的地に着くことはできない、距離と方角も自動設定だ、こういうのには全てを白紙に戻すコードがあるんだ、それをお前は知っているはずだ」

目尻を細めたヴレイは視界のすみでルベンスを見据えた。

「私がそれを知っていると思うか」

「知ってるさ、そうでなければ攻撃は許可されない仕組みになっているのがダグシステムだ。艦長がそのコードを覚えておくこと、そして解除信号をプログラムに組み込んでおかなくては、攻撃システムは武器として使うことはできない」

「だとして、お前なら解除できると言うのか」

「やるしかないだろ」

「これを解除したら、王は復活しないんだぞ」

「そんなこと俺には関係ない、無駄に血が流れない方が大事だろっ」
モニターに表を向けたままヴレイは声を張り上げた。

「今総出で街の住民を避難させているがこのままじゃあ間に合わない、俺はシルバームの人間じゃないし、この国の行く先に興味はない、王になりたければなればいい、でも軍用兵器で罪のない国民を巻き込むことだけは許せない」

振り向き様に帯びる紫紺色の鋭い眼光と彼の熱意に、構えを止めようとしなかった兵士達が次々と武器を下ろし始めた。

「陛下、どうかお考え直してください、停止させるべきです」

「民を犠牲にして国が成り立ちましょうか」

「お考え直してください、民が巻き込まれるのを私達も見たくはありません、民を守るべきです」

口をそろえて反論してくる部下を見て、焦りと戸惑いに駆られたルベンスはもの凄い力でルピナの手を振りどかし、内ポケットに隠し持っていた銃を取り出した。

「私に刃向かうつもりか、もう遅いっ、私が新王なのだ、この場で全員射殺するぞっ」

反射的にガンフォルダーへ手が伸びたが、ヴレイは銃を取るのを止めた。

銃口がこめかみに向けられているにもかかわらず、目の色一つ変えないヴレイの姿に、ルベンスは彼に逆らえないことを本能的に悟った。血走る碧眼を見開き、額に脂汗を滲ませる。

下唇を噛みしめたルベンスは震える手で銃口を端末モニターに向けて、それはさせまいと数人の兵士が執政官に銃を向けた。

「……ダグコード、アズだ」

「ありがとう」

その時ロインの目頭から涙が溢れた。視界の端でその姿を見たヴレイは小さく微笑んでから、作業に取りかかった。

一安心したシリウスはルベンスに近寄り、その手からそつと銃を抜き取った。まるで抜け殻のようになってしまったルベンスは茫然と立ち尽くしたまま、彼の作業に見入っていた。

「光学障壁展開、ダグ解除ルート検索、通信回路を封鎖、船内警戒態勢を解除、目標確認システムに誤認プログラムを送信、各員持ち場で確認しろ」

的確にヴレイが指示を仰ぐと、隣のデスクで作業をしていたオペレーターが即座に答えた。

「最終ルートまでのチェック完了しました」

『発射まで、二分前』

「カウントに入りました」

コックピットに緊張感が張り詰めた。

だが、ヴレイの手は前触れもなく突然止まってしまった。何が起きたのかとシリウスとルピナは息を呑んで様子を窺った。

「駄目だ、インジョリックの艦と規格が違う、俺のやり方じゃ解除できない」

「そんな、どうするのよ」

ルピナの問いかけにヴレイは困惑したまま答えられなかった。

NEXT

第26話 責任の重さ

「大丈夫です、ここからは私達に任せてください」

一人のオペレーターがヴレイに代わって作業を始めると、傍観していただけのオペレーター達も一斉に作業を始めた。

「この時の為に私達は密かに解除訓練をしてきました」

「私達は新王を最後まで信じていました。ここまで付いてきた私達が新王を助けなければ」

「粒電子パイプのベースフィールドを再設定、照合防壁をアズコード送信後のダグプログラム用に再構築します。貴方が解除コードを聞き出してくれたおかげです、感謝します」

ヴレイの隣で作業していたオペレーターがキーボードを叩きながら目尻に笑い皺を作った。

「エネルギー系統異常なし、コード変換開始されました」

『発射まで、一分前』

「ダグプランへの信号変換率二十パーセントです、暗号変換作業に誤差が生じて、これでは時間までに」

「なら主砲の作業レベルを可能な限りまで下げるんだ、下げすぎると変換作業に干渉される、サブ回線も開いて作業効率を上げろ」

突然ヴレイが指示を仰ぐとオペレーターはすぐさま対応し問題を処理した。

「粒子砲の出力装置にダグコード、アズの信号を送信、最終停止信号を解読しています」

『発射まで、三十秒前』

「主砲制御コードと照合中、少々時間を要します」

「間に合うの……？」

剣呑な様子で訊いて来たのはルピナだった。誰もその質問に答えることができず、待たされている時間だけがとてつもなく長く感じた。

沈黙する司令室は次のアナウンスに騒然とした。

『発射まで、十秒前……、五秒前』

「もう間に合わないわ」

カウント後、端末モニターに何十桁もの数字が提示された。

「アズの出した解除信号です」

オペレーターが言い終わる前に、瞬間的に数字を読み取ったブレイは即座にキーボードを叩いた。

「ゼロ……」

司令室は水を打ったように静まり返った。

モニターに表示された文字を見て、オペレーターはしばらく安心してから結果を言った。

「主砲発射は中止されました」

オペレーター達はお互いに手を叩きあって喜んだ。

歓声が沸き起こる中で、溜息と一緒に肩をなでおろしたヴレイはイスを半回転させ、ルベンスに席を譲った。

「彼らを止めるのはあんたの役目だろ」

閑寂と立ち尽くしたルベンスは主砲起動停止のサインを提示しているモニターを茫然と見詰めながら指示した。

「艦をゆっくり前進させろ、彼等の目の前まで接近させろ、それと將軍に伝えろ、残っている王軍は現場へ赴き円滑に両軍を撤退させろと」

「了解、執政官」

何度か深呼吸を繰り返し、数秒間まぶたを閉じてからマイクのスィッチを入れた。

「私は執政官ルベンスだ。王軍に命ずる、直ちに攻撃を停止せよ、直ちに攻撃を停止せよ」

全体が静まるには時間を要したが、兵士達の動きは波紋のように静まっていた。

「両軍にシルバーム執政官からの最後を勅命を下す、両軍直ちに撤退せよ。この場を借りて、深く陳謝する。内戦を誘発し、国民を危機的状况に追いやったこと、全て私の責任である」

突然の発表に上空は一時騒然となった。

「私は正当なる裁きを受ける所存である、執政官の職を退官する、正当なる王が即位されるまでは議員に一任する、以上だ」

静かにマイクのスィッチを切ったルベンスは大きく深呼吸をした。一人また一人と兵士達が防具の帽子を脱ぎ執政官に向かって敬礼をした。

映画のワンシーンのような光景にも気付かず、呆然としたままマイクを見下ろしているルベンスの肩を、ヴレイは叱咤するように叩いてやった。

我に返ったルベンスはぼんやり回りの光景を見渡すと、皿のような目を向けたまま言葉を失った。

「解除コードを書き込んでおかないと艦の攻撃システムは起動しない、それは本当だ、でも艦長も覚えておかなければ起動しないって文句は嘘だ」

やっと瞬きをしたルベンスは困惑した顔でヴレイを見上げた。

「いくら高性能なダグでもそんなことできるわけないだろ、賭けてみたんだ、お前がどれだけ非情でへそ曲がりな奴か、でもあんたはちゃんと解除コードを覚えていた、あんたが覚えてなくてもあんたの仲間が停めてくれただろ」

「ずいぶん危険な綱渡りですね」

ロインの傷口を服の切れ端で止血していたシリウスが他人事のよう
に鼻で笑った。

「やり直したいと思ったわけじゃない、ここまできたからには王座
に就くしかない、王座に就けば国の道を正せると思ったが、道を見
失っていたのは私だった、ミイラ取りがミイラになった愚かな話だ」

＊ ＊ ＊

元執政官ルベンスの身柄がシルバーム城へ移されてから数日後、
ベフエナ城に戻ってきたロインとルピナに処分が言い渡された。

上部から取り付けられた天蓋付きの席からベフエナ王と王妃が毅然
と控えていた。何事にも動じない超然たる両陛下の姿に、処分を
受けようとしている二人は恐ろしいほど緊張していた。

「ベフエナ国王子ロイン・ベフエナは王国家法を違憲し、召喚能力
を使い無断で他国の内戦を干渉し、多くの犠牲者を出した、これは
我国の存亡を危機的状况にも招く行為に相当する。同じくそれに加
担したフレイヤ国王女ルピナ・フレイヤもこれに同罪なり、すでに
フレイヤ王から処分許可書も受け取っている、因って処分を言い渡
す」

ロインとルピナは生唾を飲み込んだ。

「両者のやったことは重罪だが、その結果一つの国を救った、是英
名なり、因って軍法評議会への報告は取り消された、その代償とし
て神殿の煉獄室で聖母の誓いの碑石に碑銘を掘ること、ちなみにこ
の名誉処分はシルバーム次期執政官レイス陛下から頂戴したものだ、
以上勅命である」

ベフエナ王は読み上げた文面を丁寧に丸めると、階段を下りて口

インの前まで歩み寄ってきた。

親子としてお互いに視線を交わしたと同時に、頬を叩く音が響いた。

「馬鹿者がっ、お前は自分のしたことに責任を持てるほどの人間だと思っっているのか、一歩間違えば取り返しのない事態になるところだったんだぞ、現に多数の死傷者が出ているんだ、安易な考えで戦を起こしては決してほならない、もしお前が死んだら、私が黙っていると思うか」

「父上……」

ロインは叩かれた頬を強く押さえ、今にも溢れそうな涙を必死に堪えたが数秒もしないうちに無駄な努力だと気付いた。

「ごめんなさい、父上、母上、ごめんなさいっ」

ベフェナ王は床に膝を付き、車椅子から降りてきたロインを胸の中で強く抱きしめた。

「親である私が倅の周到な準備に気付かなかったことにも責任がある」

人の話も聞かず声を上げて号泣している息子の頭をベフェナ王はそっと撫でた。

まだ小さな背中には必死に自分を役目を探してもがいている最中だった。そうとも知らず、ただロインの気持ちだけを優先させたことにルピナはひどく後悔した。

「ルピナ王女、この度はこのような事態に巻き込んでしまっただけに申し訳ない」

膝を折っていたベフェナ王はその場に立ち上がり、深く頭を下げた。恐れ多い姿にルピナは戸惑い、舌の上で言葉が詰まってしまった。

「とんでもありません、私も同罪です、私がもっとよく考えていればロイン王子を止めることもできました」

さらに続きを言いかけたルピナの肩をベフェナ王が大きな手で包み込んだ。

「この馬鹿息子を守ってください、心から感謝の意を表します。さぞ怖かっただろ」

「えっ」と顔を上げたルピナの目頭には、溢れんばかりの涙が溜まっていた。

「無事いてくれて何よりだ。フレイヤ王には私から話しておく、説教はお父上から頂戴した方が良いだろう、落ち着くまでここで養生すればいい」

寛大な笑みを見せるベフェナ王の手は大きくて温かった。

張り詰めていた糸がほどけるかのように、安堵感が胸の奥から込み上がった。下唇を噛んでグッと堪えていたが、涙は無情にも大粒の雫となって頬をつたった。

「この期に及んではなってしまうが、この馬鹿息子をこれからよろしく頼みます」

「いえ、こちらこそ」

涙でかすんだ声は嬉しさと混じって震えていた。

NEXT

第27話 平和への光

『シルバーム元執政官の軍拡行政止める、ベフエナ王子とフレイヤ王女の活躍』とベフエナ城下町新聞の一面記事に記載されていた。

「ダグの情報通信にも載ってるよ。高騰した税はルベンス元執政官の行き過ぎた軍閥資金に回っていた。王制復活でシルバーム城は再び輝きを取り戻すのか、なあシリウス、煉獄室の碑石に名前を彫るとか、王様の言っている意味が分からないんだけど」

治療を受けたヴレイは首からすっぽりかぶるだけの患者用の服装に意を包み、ベッドの上でダグノートを見ながらシリウスに訊いてきた。

「処分を取り消した変わりに、今後一切、罪を犯さない誓いをすることです。もし誓いを破ってしまった場合裁判もなしに投獄されるんです、罪が重ければ死刑もあります、でも名誉処分された者はよほどのことがない限り今後犯罪者になることはありませんよ」

「じゃあベフエナ国外で犯罪を起こしたらどうなるんだ」

「他国で法を破っても処分は同じです、当たり前のようにいて難しかったりするんですよ。それよりもこれからシルバームは大変でしょうね、賛成多数で王制復活が認められたものの世論もありそうですし、レイス氏は戴冠して直ぐの大仕事ですね」

新聞を脇に挟み、飲み物を運んできたシリウスはカップの一つをヴレイに渡した。

ベフエナ都内にある旅行者向け医療機関兼宿泊施設には個室ごとダグ回線が繋がっていたので、シルバーム内戦についての記事を端末から観覧することができた。

「にしても雨風が入ってこなければ病院じゃなくてもよかったのに、
ここの宿泊費結構高そう」

ダグノートを棚の上に置くと、横になっているばかりで退屈な足
腰を十分に伸ばした。

「私が医者に見せなかったら君はひびの入った肋骨を今でもそのま
まにしていたんですよ」

「痛みで分かってたけど、もっと小さな病院でも、それよりあいつ
らが新聞に載るなら、俺達にだって謝礼があってもいいだろう、ヒ
ーローを影から助けた英雄がいたってことをさ、嗅ぎ付ける記者さ
えないなんて、やっぱり遅れてるな」

「だったらあの時、ロインとルピナに付いて行けば今頃君の想像し
ていた通りになったんじゃないんですか。あの二人とはこれでお別
れなんですかね」

窓の外に目を向けたヴレイは天にまで伸びるベフェナ城を気長に
眺めた。

三階の窓からはまるで挿絵がそこに貼ってあるかのように、赤茶
けた三角屋根が無数に広がっている景色が見えた。ちらほら見える
建物と建物の間には橋が架かり、その下を流れる川にはゴンドラが
行き交っていた。

「そうかもな」とヴレイは素っ気無く呟いた。

「あっさりしてるんですね、それもセイヴァの軍人だからですか」

「別にそうじゃないよ、あの二人がくっ付いてたら目立つちまうだ
ろ、シリウスが俺の正体を隠ぺいしてくれたのは助かったけどさ。

誰にも言わないつもりだったのに、ルベンスに渡した旅券だって護
身用に偽造したものだったんだ」

「さすが念の入ったことですね」

シルバームの軍艦がドックに戻った後、ヴレイは顔が知られる前に退隊し、そのままシルバーム城から脱したのだ。その時、共に行動したいと言って勝手に付いて来たシリウスには自分がセイヴァという国防機関の軍人で、何故グランドライン大陸に来たかを話した。シリウスは他大陸の人間だった上、ルベンスが捕まった以上敵でも味方でもなくなったわけだが、それでも完全に信用の置ける人物かといったら、今一つ確証がなかった。

「あんたには一回騙されてるし、信用性がない」

「あれは君が不法侵入しようとしたからじゃないですか、でも私のおかげで傭兵部隊に潜入できたんですから」

「それはそうだけど、どっかの誰かに言うなよ、しゃべれば直ぐに分かるんだからな」

「なら君の任務が終わるまで同盟を組みましょう、君の正体は誰にも明かしません、私も目的達成の為に、君に協力してもらいたいですし、何かと私を使ってくれて結構です」

ヴレイは少し考えながら下唇を噛むと、視線だけシリウスに向けて「しょうがないな」とでも言いたげな笑みを見せて、かたく握手を交わした。

「ではメールアドレスを交換しておきましょう、その方がいざという時便利です、グランドラインで携帯電話を持っている人間は来航者ぐらいですからね、信号通信にしましょう」

「普及させれば何かと連絡だって簡単にできるのに、ダグシステムがなかったら携帯電話の信号すら飛ばせないじゃないか」

面倒くさそうに溜息を付いたヴレイに対してシリウスはいたって当たり前なそぶりを見せた。

「簡単で便利だからこそこ個々の存在維持が危うくなってしまうんで

すよ、王族制度は干渉を避けます、国家を治める側としたら邪魔者は極力排除したいと言う意識があるみたいですから、簡単に内情が把握できるようになってしまえば、好き勝手に戦艦も造れませんか」
言ってシリウスはお茶をすすった。

「性能はともかくシルバームにあそこまでの軍艦があったなんて、きっと他の国にもある、国防のためだろうがインジョリックサークの脅威になりそうな要素は持ってる」

顔を強張らせるヴレイを尻目にシリウスはいたって平然さを崩さない。

彼の冷静沈着を見ていると、自分がしている仕事も大したことではない気がして、ヴレイは虚しくなった。

「そうでしょうね、国防に関してはグランドラインもアレルギーのように敏感ですから、内戦や紛争もまだ頻繁にあるみたいですし、インジョリックとの交易があるからこそその軍拡とルベンスも言っていました。意外と君は勉強熱心なんですね」

シリウスは淡白な笑みを見せてきたが、ヴレイはとても笑みを返せるような気にはなれなかった。それでも無邪気に笑顔を返すほどシリウスのように社交的ではない。でも彼の閑雅的なところが妙に安心できた。

「そうじゃない、ただ、何も起きてほしくないだけだ」

無然と呟いた言葉には重みがあった。

薄暗くなってゆく日差しを背にシリウスは、孤高な眼差しを外へと向けるヴレイの横顔を見つめた。

NEXT

&1 t.; 3章& g t.; 第2 8話 世界の空（前書き）

第三章スタートです。

&l t; 3章&g t; 第28話 世界の空

断崖絶壁の上に建てられた空中都市はその歴史にまだまだ多くの謎を残している。

真っ青な虚空の中に浮かぶ空中都市はいまや遺跡となって、額縁の中におさめられていた。ロマノ王はその絵画を自分の部屋に置き、たいそう大事にしていた。

調査部から届いた報告書に目を通すなり、ロマノ王は大理石の机に書類を叩き付けた。

「シルバームの軍艦は部外者によって止められたということか、せっかく鉱物と交換で安く軍艦の材料を渡したと言うのに、こう公になっってしまったば、もうしばらくは使えんな。それで艦を停めたのは誰だ、主砲発射を自動設定にしてあったにもかかわらず」

「表向きはシステムの欠陥による緊急停止となっていますが、うちの工員がシルバームを調査したところ、ベフェナ王子とフレイヤ王女の他にも侵入者がいたと分かりました。その人物が主砲発射の阻止を協力したようです」

「そいつの身元は」

「誰かが行為に情報を隠ぺいした痕跡があり、怪しいのはインジョリックサーク出身の傭兵です。外見は十七、八歳の少年、登録データを見る限り一般人のようですが、証言と告示しますし、開戦前に入隊し内戦後直ぐに退隊しています」

革の椅子に深く腰掛けたロマノ王は額を軽く叩いた。

「一般人ではあるまい、艦に詳しいとなると奴は軍人か、それなら公の情報に載ってこないのも頷ける、おそらくルベンスに提示した旅券は偽物だ」

「グランドラインの内偵でしょうか、足が付く前にシルバームから出たのでしょうか、どうしますか」

「引き続き調べを進めろ、だが奴を見付けても拘束はするな、何らかの手段でインジヨリックに連絡されたら真っ先にここが怪しまれるからな」

「御意」

凜と返事をした諜報部員は踵を返して部屋から出て行った。

ロマノ王は絵画を眺めながら溜息を付いた。溜息は口癖だ、その後に必ず、今朝見た夢を語るような口調で、遺跡の絵画のことを話す。

「何故ダルカйм族は空中都市を捨てたのだろうか、敵からは絶対に見えない空中要塞でもあった都だ。現代まで続いていたら我々が空中都市を受け継いでいたのかもしれないのに、似たような意味でルベンスも惜しいことをする、城を新生していれば「あれ」の力で未来への礎にしてやったものを」

「そうですね」

いつもと同じ言葉で答えた執政官格軍司令官は散らばった資料を、整えて机の上に置いた。

分厚い脂肪が付いた体を椅子の背もたれに押し付けていたロマノ王は重い尻を椅子から持ち上げ、ゆっくりソファーに移ると、太い葉巻を金の箱から取り出し火を点けた。

深く吸って白い煙を吐き出すと、部屋の中に光の筋ができた。

「体の調子はどうだ、フォーメス宰相閣下」

「陛下のおかげでございます。すっかり前と変わりありません、さすがロマノの化学です」

口元に笑みを見せたフォーメス執政官はロマノ王の御前で深く頭を下げた。

光沢のある深緑色のシャツと黒革のズボンが彼の貴賓さを引き立たせている。ベストの胸元にはロマノ国章が刺繍されている。なめした革のブーツの踵には金の細工が施され、部屋の明かりを鈍く反射させている。

「海溝の遺跡調査の方はどうだ」

「順調に進んでおります、空中都市を築いた彼らの置き土産にもう直ぐ手が届きます」

宰相の答えに満足したロマノ王は分厚い瞼を閉じて、葉巻の香りに浸る。だが宰相は剣呑な趣で言葉を続けた。

「ですが事に移る前に気になることが、まさか彼がシルバームを召喚獣で攻めるとは、シルバームの戦艦資材がここから渡っていると知ったら、協力を断るところかロマノにまで」

「心配は要らんぞフォーメス、シルバームと違いロマノはインジョリックとの外交歴が長い、ロマノがインジョリックと保安条約を結んだからこそ、防衛として軍艦の造船を許可されたんだ、聡明な王子なら理解できているはず。他大陸への距離が縮まればそれだけ資源も入ってくる、そうなれば貧困や飢えに苦しむ国も少なくなる、と彼は信じている。理論上は間違っていないのだからな」

昂然と言い切ったロマノ王は葉巻を吸いゆっくり煙を吐いた。

「今調査している「世界の空」はロマノの更なる神秘を約束している、魔導と機械の融合が世界を変えるやもしれんのだ。なんとしてもベフェナ王子をロマノ城へ招待して差し上げるのだ」

「御意、陛下」

凜と声を響かせたフォーメスはマントを翻して部屋を出て行った。

NEXT

第29話 築かれた輪

ヴレイは窓を開けた。

観音扉の窓は床から天井までの高さがある。幾何学模様の棧に色ガラスを入れた窓の外は広い露台だった。

窓を開けると夜の冷たい風がそよいだ。白い石が敷かれた張り出しのテラスは建物の周囲をめぐる、ちょっとした庭ほどの広さがある。

大理石の手すりの足元には目がくらむような断崖が眼下を支配した。

一望できる城下の街は宝石箱をひっくり返したような輝きを放っていた。遙か遠くにはドナ海の水平線まで見渡せる。レタン河が首都モートルの中心を悠然と流れ、国中を見守るようにそびえるベフエナ城は高さだけならシルバーム城より十数メートルは有に高い。丘陵に建つ六塔の小塔に四方を囲まれたベフエナ城には街の光はとどかず、月明かりが青白い霧となって城を包んでいるように見える。

そんな幻想的なベフエナ城を拝めたれた理由は、シルバームを救うために共に戦ってくれた異国人に何か感謝すべきだと、ベフエナ王直々にヴレイとシリウスを城に招待したのだ。

もちろんロインとルピナが二人のことを説明した。

「もしかしてあんたもこの階の部屋なの」

予兆もなしに突然、女の声がしてヴレイは振り返った。

「おどかすなよ」

「なんで私があんたと同じ階の部屋なの、一般人はもっと下でもいいでしょ」

足首まで隠れるローブを羽織ったルピナは自分の肩を抱きながら身震いさせた。

「偉そうに、俺にとっちゃあ王族も庶民も同じだね」

同じように肩を身震いさせたヴレイを見て、眉を吊り上げたルピナはスタスタ歩み寄ってきた。

「王族のこともよく知らないくせに、分かったような気で偉そうに言われたくないわ」

怒鳴った後に残ったのは怒りで紅潮した彼女の頬と、鋭く睨みつけてくる紺碧の双眸だった。その瞳に圧倒されて、つばを飲み込んだヴレイはそっぽを向いた。

「ごめん、そんなつもりで言ったわけじゃない」

二人の間に強い夜風が吹きぬけた。

「お前がいつもそうやってピリピリしてるから、こっちだってつい」「ついなによ、ついお前って呼ぶわけ、お前はやめて」

言い放ったルピナは近くの手すりに寄りかかり、月明かりに照らされた城下町を見渡した。後を追ってヴレイも手すりに寄りかかり、同じ景色を眺めた。

しばらく沈黙が続いて、妙に気不味くなってしまったヴレイが先に口を開いた。

「ルピナは王女なんだろう、こっちの大陸のことなんて分からないけど、王族ってのは城でくらしてて、何不自由のない生活してるんだろ、ここみたいに、なのに外に出たって大変なだけなんだぞ」

「知らないからそういえるのよ、裕福に暮らせるのはその分国の責任を担っているからよ、私にはまだそれだけの責務は課せられていないけど、王位を継承する前に世界を見ておきたいの、やりたいことをやっておきたいの」

「やりたいこと」

「あんたはやりたい事とかないの？ 仕事とかじゃなくて」

簡潔で分かりやすい質問だったが、答えが何も浮かばなかった。浮かんだとしても、仇のことや、ザイドのことしか出てこなかった、それを今彼女に話すつもりもなかった。

「初めて聞かれた、そんな質問」

「考えたことないの」

不思議そうな顔でルピナは聞き返してきた。

これ以上考えてもセイヴァやノアの事ばかりで、ヴレイは考えることを諦めた。気付けば仕事ばかりでやりたいことなど考えたこともなければ、ノアとそういう話題をしたこともなかった。

「話題は変わるが、その剣、付き合い長いのか」

「まあね、私の相棒よ」

「その剣で剣士を目指してるのか」

「私はすでに一級剣士なの、まだ見習い階級だけど、でも次の階級に上がれば見習いは卒業なの、けど次の階級に上がるには幾多の技と経験を積まないとなかなか取れないのよ、いくらこの私でもね」

ルピナにしては弱気だが自信に満ちた笑顔が月の明かりに照らされて、ヴレイはつい見惚れていると、視線に気付いたルピナがきつく横目で睨んできた。

「あんたはここまで何しに来たのよ、ベフェナ王と接見した時はグランドラインの文化を勉強しに来たとか、嘘臭い事言ってたじゃない、やりたいことも浮かばなかったくせに」

「うるさいな」
あの質問を受けてから胸の真ん中にポカリと穴が開いたようだった。

一瞬言葉に詰まったヴレイだったが嘘を考える素振りは見せず、

本当の事は伏せて話した。

「王に言ったことは嘘じゃないよ、大学から離れられない知り合いに頼まれて、グランドラインの機械化を調べに来たんだ、野暮用もあつたし」

「そうなんだ」と平然に納得したルピナはそれ以上詮索はしてこなかったが、眉をゆがめてまた質問してきた。

「でもあんただただの旅人じゃないでしょ、護衛獣に放った光の弾とか、シルバームでの戦闘とか、あの戦闘技術は素人が一夜漬けでも覚えられるものじゃないわ、他に目的があるんでしょ」

そう思われても仕方なかった、でもこれ以上内情に興味を持たれでは面倒だったので、適当にあしらって話題を変えた。

「生まれつきなんだよ、ってゆうか、あんたって言い方やめろよな」
「私のことお前って呼ぶくせに」

逆に言い返されたヴレイが悔しそうに唇を尖らせたので、思わず笑いが込みあがったルピナは無邪気にクスクス笑った。

「楽しそうじゃないですか、何の話ですか」

同じ階の部屋を与えられたシリウスが露台に出てきた。

シャワーを浴びたばかりなのか、髪はまだ束になって湿っているようでもあつたし、白かった頬は薄紅色に染まっていた。なにより首にタオルを掛けていた。

「湯冷めするぞ」

細目を少し大きく開けたシリウスは鼻で笑った。

「明日は雨かもしれませんね」

「人が親切に言ってやってるのに」

またヴレイは唇を尖らせてそっぽを向いてしまった。

「どうして旅してるのかって話よ、シリウスは確か魔導士って言うてたわよね」

手摺に寄りかかっていたルピナは体をくの字にしてシリウスの顔を覗き込んだ。するとシリウスは首に下げていた革紐の先を服の下からスツと出した。

紐の先には銀で作られた小さな板がぶる下がっていた。板の真ん中には碧い石が嵌め込まれ、板の表裏には針の先で書いたような細かな字が隙間なく書かれていた。

見たこともない代物に言葉が思いつかない二人は興味津々にその板を見つめている。

「何なのよ、これ」

シリウスは首から取ると、尋ねてきたルピナの掌に乗せた。

ただの冷たい板だ。そう重くもない。目を凝らすがやはり何と書いてあるかは解らない。ひとしきり見物するとヴレイに渡した。

「それは、私の師匠が持っていた魔導古文書の封印を解く鍵です」

二人とも同じ顔をして息を呑んだ。

「魔導古文書とは伝説の魔方陣が何百と描かれた書物です。本は師匠の元にありましたが、「アゲハ」と呼ばれる匪賊が師匠の片目と共にその古文書を奪ったのです」

ハッと視線を上げたヴレイは一瞬自分の耳を疑った。その微かな動揺も見逃さなかったシリウスの細い目がさらに細くなった。

「師匠の瞳には玉が嵌め込まれていました」

「眼の中にか」

痛々しそうな感覚を想像させた二人は顔を引きつらせた。

「はい、その玉を嵌めた瞳なら古文書に書かれた文字を読むことができます。取り返すためには「アゲハ」を探し出す必要があるんです、奪われたのもう何も前の話ですが」

「じゅあ彼らがまだそれを持っているか分からないじゃない」

「分からないから探すんです」

「それも、そうね」

やっこのことで会話が弾み、笑って話せるようになったヴレイとルピナだったが、すっかり湯冷めしてしまった顔になっていた。

「まだライセンスを持っていないので正式な魔導士ではありません、だから公の場で魔力が使えないくて、勉強はしているんですが、焦ってこちらに渡って来てしまったばかりになかなかその機会に巡り合えず」

話しているうちに、シリウスはいつもの穏やかな笑みに戻っていた。

「シリウスが無計画に動くこともあるんだな、それでマドウシって何」

怪訝な様子でヴレイが質問したその時、風が渦を巻いて吹き荒れ、三人の前に召喚鳥が露台に着地した。鳥に背にはロインが乗っていた。

「部屋はどう、気に入った？」

「怖いぐらい眺めのいい部屋だよ」

「それはよかった」

安心したロインは召喚鳥の首の裏を撫でながら嬉しそうに笑った。

恐々召喚鳥に近寄ったヴレイはロインが撫でたところと同じところをさすってみた。

「体は大丈夫なのか、かなり無理をしたらしいじゃないか」

「大丈夫だよ、召喚能力の反動はなかったみたいだし、撃たれた傷も塞がってるしね」

「ですが次ぎやったら、今度は召喚能力を二度と使えない体になってしまいますよ、しかも体が完全に回復していない時にそうやって召喚すると、体にまた負担が掛かります」

「はい」

突然シリウスにきつく言われ、しゅんと俯いてしまったロインを見てヴレイは「そこまで言わなくても」と、シリウスに耳打ちするが、逆効果だった。

「君も同じですよ、完全に治るまでは無理に動き回らないことです」
「おせっかい」

ヴレイの唇を尖らせた顔を見て、クスクス笑い声を響かせたのはルピナだった。

N E X T

第30話 世界の理

一歩踏み込もうとしたヴレイの足が止まった。

一般庶民とは無縁の部屋に圧倒されその場で突っ立ったままのヴレイの背中を、シリウスが押してやった。

ロインは白亜の大理石のテーブルに世界地図を広げた。すると地図上に描かれていた四大陸の山や川、平野までもが立体的に浮かび上がり、国境線が引かれ、海の名前や大陸名、国名が浮かび上がった。

「すごっ、どうなってんだこの地図」

「ちよっとした仕掛けがしてあって」

自慢げにロインが地図を見せると、シリウスが知ったような口調で言ってきた。

「魔力が掛けられていますね、地理学者の魔力でもかけてあるんですか」

「半分あたりで半分外れ」

「地理学者じゃないと出来ないのか？」

不思議そうな顔でヴレイが訊いてきた。

「世界の地形や理を知らなければ出来ない芸当です、それに地図に魔力を留める技は簡単ではありません」

「へえ」と感心したヴレイはここぞとばかりに、あれやこれやと地図以外の事についても尋ねた。嫌な顔一つ見ないロインは全ての質問に答えてくれた。とても十三歳の少年とは思えないほどに政治や経済に歴史と、長けた知識を有している聡明な王子だった。

窓の外は既に闇夜に包まれていた。

夕餉は日が落ちて直ぐだったので、夜が長く感じられた。

「そういえばルピナはこの国から来たんだ、ここから近いのか」
「フレイヤ国、結構遠いわよ、最西端の国だから」

「ここだよ」とロインが地図に指を示して説明してくれた。

「ふうん、王制ねえ、俺には良いのかも悪いのかも分からないけどな」

不思議そうに地図を眺めるヴレイに、ロインは先生になりきって説明した。

「グランドライン大陸の大半は王を中心とした議員で政は行われる。国によって議員の選抜の仕方は変わるけどね、シルバームが特異だっただけだよ。グランドラインと似ているのがコーラルブルー大陸で、三大州と言われる三大大陸にはそれぞれ王の名前が付いてるんだ。太古の昔、神から選ばれた三人はそれぞれ一つずつ大陸を与えられ、王となって何千年も大陸を治めた伝説がある」

「何千年も一人の人間が？」

「あくまで伝説だよ、それぐらい安寧の時代が続いたってこと。多くの古代遺跡が残る最古の大陸だよ、考古学者や冒険家は競ってコーラルブルーで遺跡を発掘してるよ」

「へえ、そんな所があるのか」

童心に戻ったかのような顔をしているヴレイはまだ見ぬ地に夢を抱いたような目で見つめていた。

その様子を見て、ソファアにすんぞり返っていたルピナが怪訝そうな顔をした。

「あんた勉強不足でしょ」

「うるさいな、今ベンキョー中なんだよ」

唇を尖らせたヴレイはふとロインの傍らにいた獣に気付いて尋ねた。

「その魔獣は危険じゃないのか」

「これは魔獣じゃない、召喚獣って言って、異空間から召喚した生き物なんだ」

「なら召喚した獣が召喚者を攻撃したりしないのか」

「しないよ、召喚した時点でその獣の主になるんだ、力が弱いものは限られた数しか召喚できない、訓練が必要だから。それに召喚士は魔導士とも違うんだ、魔導士が連れている幻獣と召喚獣は違う生き物なんだ」

「魔導士が連れてる……？」

ヴレイはシリウスを見て眉根を寄せた。

「まだ私は修行中の身ですから」

濁したような笑みに「ふうん」とわざとらしく相槌を打ったヴレイはそれ以上詮索するのは止めた。

「その魔導士ってなんだ、ようはシリウスみたいな奴らのことか」

あまりにもぶっきら棒な言い様に、陰険な顔を見せたシリウスがロインに代わって答えた。

「率直に言うそうですが、もっとまともな言い方をしてください。四大陸の中で最も魔力が生きている大陸、フォーリスタークが私の出身です」

「どおりでね」

公然と腕を組んでいたルピナが当たり前のように納得した。

「だからその魔力って何だよ」

眉間を寄せて苛立っているヴレイに対して、シリウスは根気よく説明をした。

「この世界とは別の世界があり、そこから渡ってきた魔獣や魔族が魔族の血を広げたという一説があります。発祥地はフォーリスタークだと言われています。それが君の場合、妖力だったということだ

す、種類が違っただけですよ」

「な、なるほど」

無理矢理納得させられたような気がした。

「何よその妖力って、さっき私が聞いた時は答えてくれなかったくせに」

「余計なことを言うな」とでも言いたげな視線をシリウスに向けたヴレイは溜息を付いてから答えた。

「だから生まれつきなんだってば、俺だって親から聞いたんだ、詳しいことは聞いてないけど」

「種類が違って魔力と判断されたら、無免許ということで罰則を受けますから、気をつけた方がいいですよ」

他人事のように笑うシリウスに心底怒りの視線を向けるが、無意味だった。

ロインとほぼ同じ身長 of 獣は顎の下を撫でられ、嬉しそうに長い尻尾を振っていた。

野犬にも似たその獣は琥珀色の毛並みを持ち、大きな瞳は血のように赤かった。ロインはその召喚獣の毛並みを撫でながら話を話した。

「魔法律って言うのがあって、使用許可を得た魔導士だけが公の場で魔力が使えるんだ。だから魔導士や魔術士になるためには非公開で行われる試験でライセンスを取得しなくちゃいけない」

「なぜ試験が非公式なんだ」

「魔力の乱用を避けるためじゃないかな、魔力を使って世界を支配したがる者が現われてもおかしくないからね。千年前、世界を巻き込んだ世界大戦があった、その頃はまだライセンスとか魔法律がなかったんだ、だからその戦争を期に力を持つ魔族が議会を開き、法を制定したと言われている。ちなみに共通語も大陸法も同じ頃に作られたんだよ」

「魔族って人間なのか」

「それって君が言うセリフですか」

シリウスを見てヴレイはまた眉をゆがめた。

「発祥地フォーリスタークには現在六割の魔族がいると言われている、でもその半分は自分が魔族だとは気付いていない人達も含まれている、発祥地から一番遠いインジョリックサークには生粋の魔族はいないと言われているんだ」

「登録されていない魔族もいるなら、正確な数なんて分からないだろう」

「大体の数を知るのは魔法律を制定させた委員会だけなんだ。魔族の中にも魔族の血が濃い者と薄い者がいて、後者はライセンスを取得するまでの力がない、だからライセンスを取得したくても出来ない者や、魔力があっても自覚がない人達がいる。境界線は曖昧なんだ」

「じゃあ誰が魔族とかそうでないとか、見た目じゃ区別できないな」

「ですが完全に区別されえは人種差別が起きてしまいます。まあフォーリスタークには魔導士養成学校もありますから、家柄などで小規模な差別やいじめが社会問題になっている地域もあります、地域格差や身分差別もあります、だからこれ以上線がハッキリしない方がいいんですよ」

大観的なシリウスの言葉にヴレイは「そうだな」と静かに納得した。

団練の時間を過ごしているとロインの膝の上に顎を乗せて、聞き耳を立てていた召喚獣が小さく鳴いて扉の方に鼻を向けた。

「きっとサーシャだ、僕の侍女だよ」

ロインは嬉しそうに扉へ駆け寄ると、召喚獣が口を使って器用に

扉を開けてやった。

部屋の中に入ってきたのは大きな茶色い瞳が印象的で、肩にかかる巻き毛が愛らしい女性だった。薄紅色の頬に赤い唇が寶の良さを漂わせていた。

ポットやカップ、焼き菓子に乗せた銀メッキのワゴンを押して来た侍女はほがらかに笑んで客人に会釈をした。

「ロイン殿下の専属侍女、サーシャと申します。以後お見知りおきを」

「そもでもって、あの世界地図に魔力を掛けた張本人だよ」

「えっ」と目を丸くした三人は同時にサーシャを注目した。

NEXT

第31話 脱獄者

ロインの専属侍女サーシャの物言いは上品で、暖炉に当たっている様な温もり感があった。

初対面のヴレイとシリウスは握手を交わしながら、自己紹介をした。

「ヴレイです。よろしく」

「シリウスです。ロイン王子から世界地図を拝見させてもらっていたところです、長けた知識をお持ちで感服いたしました」

「ええ、それはもう、ロイン殿下の得意分野ですから、ね王子」

砂糖を入れてかき回した紅茶をロインに手渡したサーシャは嬉しそうに笑顔を見せた。

「まあね、十八番だから、でもサーシャには負けるよ」

「そういえば、あの世界地図を作ったのは貴方でしたね」

紅茶を受け取ったシリウスは彼女に畏敬の念を込めて地図を見つめた。

「いえ、今はもうロイン殿下の方が勝っておいんです、さあ皆さん紅茶のお変わりをどうぞ、お菓子も召し上がってくださいね、殿下の大好物なんですよ」

「ねえ、サーシャもここにいて」

「あら、団欒にお招きくださるのですか、嬉しゅう御座います」
ロインに手を引かれながらサーシャはソファに腰を下ろした。

「サーシャは侍女でもあるけど、僕の身辺警護をしてくれている専属エスコーターなんだ。それじゃあ次はヴレイにインジリックサークルのことを話してもらおうかな、僕もよくは知らないんだ」

期待と興奮でキラキラした瞳をヴレイに向けた時だった、部屋の扉がノックされて召喚獣がロインの膝の上から起き上がった。

サーシャが立ち上がって扉に歩み寄ると、扉の片方だけを少し開けて、そのまま廊下へ出て行ってしまった。

「宮殿付きエスコーターと言うことはライセンスを持った正式の魔導士、しかも宮殿付きとなれば格の高い魔導士と言うことですね」

紅茶を軽く口に含んだシリウスが珍しく悄然とした表情を見せたので、「そうなんだ」とヴレイが相槌を返してやった。励ましの言葉の一つでも掛けてやろうと思ったが、他人行儀になりそうだったのでやめた。

カードゲームしながらサーシャを待っていると、数分してようやく部屋に戻ってきた。

戻ってきた彼女の趣がずいぶん深刻そうだったので、心配したロインが声をかけた。曇り眼のサーシャはソファアにそっと腰を下ろしてから答えた。

「それが皆様に大変申し上げにくいのですが、シルバーム前執政官ルベンス氏が招聘なさった指名手配集団は、友好関係を結んでいた五ヶ国を代表してグレイディウル国のギールヴェン牢獄に移送されたのですが、一人だけ監獄を脱獄した者がいるとの報告が入りました、既に搜索令状が出されています」

「誰が脱獄したの」

ロインの質問に、皆の視線が同時にサーシャへ向けられた。

「賞金首集団のリーダーだった、ヴァリスです」

「ヴレイと戦ってた奴ね、でもあの牢獄を一人で脱出できるかしら」ルピナの大きな碧眼に鋭さが帯びる。研ぎ澄まされた眼光は長年剣と真剣に向き合ってきた剣士独特の目を作り出していた。

「おそらく脱獄に手助けした者がいたはずです、おそらく賞金首以外の者、そして力を持つ者と言ったら傭兵部統括ザイドが有力かもしれない」

「短絡的すぎじゃない、根拠は」

ルピナの鋭い碧眼にも動じずシリウスは飄々と答えた。

「手を組んでいた可能性だって否定できないじゃないですか、リーダー同士ですし、根拠なんてありませんけどね」

「当てにならないわね」

シリウスの淡泊な笑みに茶化されルピナは重い溜息を付いた。

「とりあえず彼らの事を知っているのはルベンスだ、今はグレイデイウル国の首都大聖堂にいる、僕が神祇官に会って面会を許可してくれるように頼んでみる」

するとサーシャが心配そうな顔を向けたので、ロインは「無理はしないよ」と言って彼女を安堵させた。

「では私が護衛も兼ねてロイン王子に付いて行きます」

「とか言っちゃって、傭兵として仕事をしていた間の報酬の事とかを訊きたいんでしょ、あの後直ぐに城を出たから、正式な傭兵に対しての処理がどうなったか知らないんでしょ」

「ええ実は、でヴェイはどうしますか、一応ヴァリスは君が捕らえただですよ、このまま逃がしといていいんですか」

そこまで言われると、嫌でも追わなければ気が済まなくなってしまうが、それよりもザイドが本当に手を貸しているかの方が気になった。同盟を組んでいるからといって全てをシリウスに話す必要はないと思っていたが、これ以上ザイドとの関係を隠し切れそうにもなかった。

「その前に聞きたいことがある、グランドラインの機械化や軍拡の

ことをよく知る人物を知っていたら教えてほしい」

すると関心を示したロインは召喚獣の背中を撫でていた手を止めた。

「他大陸の勉強をすることはいいことだともうよ、勉強しながら旅をするなんて憧れるな、父上もヴレイのこと褒めてたしね」

ロインに怪しまれていないことが何よりの救いだと察したヴレイは思わず苦笑いしてしまった。

それならとロインは地図に記された国を示して答えた。

「だったらゼノレフ国の王子が適任じゃないかな、ねえルピナ」

「何で私に聞くのよ」

「だって僕は謹慎になっちゃったから父上に頼み込んでもグレイデイルまでだし、旅を許可されているルピナなら案内できるじゃない、ゼノレフ王子とも最近会ってないんでしょ」

「そ、そうだけど……」

「助けてくれた僕からのお礼として」

重たい溜息を付いたルピナはキツとヴレイに視線を向けた。

「ロインに感謝しなさい、その代わりこれからの旅路の間だけ私の剣術修行の相手をして、剣の扱いぐらいあんたにだってあるでしょ」

「ないことないけど、ルピナの相手になれるほど剣は知らないよ」

「だったら体術でもいいわ、タダでは案内しないから」

「分かったよ、それならたぶん大丈夫」

ルピナの勢いに押されヴレイはただ従うしかなかった。

「そうと決まったら、私はもう部屋に戻るわ」

言葉の端々を鋭く言い放つルピナはサーシャに部屋まで先導させる従者を呼んでもらうと、あっさりロインの部屋から出て行った。

ルピナが出て行った扉を見つめたままヴレイは独り言のように呟いた。

「あいつって変わり者だろ、怒りながらしゃべるぞ」

「そうかな、ルピナはあれでもフレイヤ城下町では人気者なんだ、ヴレイには特別なんじゃないかな、ほら乙女心ってやつ？」

「はあ」

顔中の肉がしわくちやになぐらい度肝を抜かれた。

その顔を見てクスクス笑うロインはベッドの上で胡坐をかいた。

「それに初めての旅仲間って言うのもあると思うけど、なんとなくいつもとは違う感じ」

後味の悪い疑問を残しながらヴレイは露台に出ると、後を追ってきたシリウスに声をかけられた。裏面を隠すようなシリウスの笑みにはいまだに慣れることが出来なかった。

城下町の煌びやかさは闇夜が深くなるに連れて、さらにその灯りの数を増やしたようにも見る。

揺ら揺らと陽炎が街一面に広がっているかのように、街の灯りはちらちらと瞬いていた。

「私の勘ですけど、「アゲハ」と私が言った時、君が動揺したように見えたんですが、心当たりがあるなら教えてくれると助かるんですが」

シリウスは申し訳なさそうに笑む。

瞼にかかる前髪が邪魔そうに揺れている。そしてヴレイを見下ろしてきた視線は冗談ではなさそうだった。

頭一個半を有に超える高さから威圧感を持って見下されると、ヴレイは自分の身長の高さを強調されているような気がして、また苦笑いになった。

「俺、十歳の時に家出したんだ、ガキだったから行く当てもなくて、路地裏で倒れてた俺を拾ってくれたんだ」

ヴレイは手すりに寄り掛かって、街を遠くまで眺めた。

N
E
X
T

第32話 儂く遠い昨日

ちらちらと揺れる街灯りの向こうには、月明かりでうつすら光る水平線が闇の中で浮かんでいた。

「実はザイドが先に入団していたんだ。あいつは確か十四、五歳ぐらいだった、俺の方が先に退団したからザイドがいつそこを出たかは分からないけど」

「お知り合いだったんですか、でもあの時ザイドと再会した君はズいぶん深刻そうでした、普通再会を喜んだりするものじゃないんですか」

「本当に人をよく見てるんだな」

情けなく眉端を下げたヴレイは憮然に笑った。

「あいつを見た瞬間、村を襲われた時と同じ感じがして、動けなくなった」

「村を襲われた？」

唐突に言われた言葉をシリウスは直ぐに理解できなかった。

「九歳の時、住んでいた村が焼かれたんだ。母と姉が殺され、一人になった俺を親父が引き取った。何故か分からないけどあの時の事はほとんど覚えてないんだ、でも思い出そうとすると酷い頭痛に襲われたみたいになって、吐き気がするんだ」

「それはたぶん精神的ショックを受けたことで、本能的に記憶を封印しているか一部失われたかだと思います」

「そうなのか、人の体ってよくできてるな」

シリウスを見ながらヴレイは目を丸くして驚いた。

「それでもザイドを見た瞬間、あの時の恐怖とかがリアルに蘇ったんだ」

その時の事を思い出したのか、こめかみを押さえて酷く渋った顔になった。

「シルバームの内戦の時、上空であいつに逢った時も怖くて動けなくなつて、まるで「村を焼いたのは自分だ」って言ってるような目で俺を睨んでた。アゲハに居た間はいつが俺の仇だったなんて夢にも思わなかった、あいつといふのは楽しくて、ケンカしては二人で怒られてさ、今でも時々思い出すんだ、まるで昨日のことみたいで、あの頃からザイドは俺の……」

「友達、だったんですね」

ハッと顔を上げたヴレイの目頭には水が溜まり、月明かりで滴が光っていた。

「ああ、でも今のあいつは俺の仇だ」

眉根をゆがませたヴレイは正面を直視したまま続きを言った。

「シリウスが「アゲハ」って言った時、正直嘘であってほしいと思つた」

「残念ながら嘘ではありません、彼らが面倒見のいい連中だったかは知りませんが、ヴレイの持つ能力に目を付けた人物が戦力として育てたかったのでしょう、現に君の戦闘力は並外れてますし」

「かなりしごかれたからな、あの三年間は。妖力の使い方を教えてくれたのは団長だ、シリウスの言うとおり種類が違うだけで魔力とさほど変わらないって言ってた」

話しているヴレイの表情はどこか懐かしさに浸っているような穏やかな笑みだった。

「一ついいですか、彼らは目的の為なら躊躇なくアクセルを踏みます、少なくとも君は彼らのようにはならないでください、どんなに大きな力を持っていようとも」

何事にも動じそうにない茶色い瞳を見つめ、ヴレイは強く頷いた。

「その代わり、シリウスがそいつらと接触することがあれば先に俺に教えてくれ、協力したい」

初夏を運ぶ夜風が二人の髪を強くなびかせた。上空では月光に照らされた積雲が早く流れていた。

返事をしないシリウスは遠くを眺めながら、少し考えているようにも見えた。

「その時がきたら期間限定の同盟ではなく、本当の仲間になっていたらいいですね」

はつきりしない答えではあったがヴレイは嬉しそうに安堵の笑みをこぼした。

脳裏にうつすらと彼等の顔が浮かぶ、非道な盗賊集団だった彼らに感謝する気持ちは一生消えないだろうとヴレイは悟った。

「話は変わりますが、ルピナが同盟に加わったみたいですが、本当のことを言わなくていいんですか、行動を共にすればどうせ嘘なんてバレてしまうんですよ」

「そうは思ったけど」

「そもそも何故始めから本当の事を言わなかったんですか、彼女が君の事を誰かに言いふらすとも思ってたんですか」

「でも彼女は仮にも王族だ、グランドラインをスパイしに来たなんて言ってみろ、俺のことを敵だと思いかもしれないだろ、その時がきたらちゃんと言うよ」

「ザイドが仇だということとは」

訊かれてヴレイは首を横に振った。

「教えておいた方がこれから協力してもらうには都合がいいと思います」

「分かってるよ、ザイドは既にシルバーム城を出ている、追うにし

でも彼女を危険な目に合わせられない、様子を見ながらザイドの情報を集めればいい」

「ふうん、意外です」

わざとらしく目尻に笑みを浮かべていたシリウスに気付いて、ヴレイは「何が」と唇を尖らせて訊いてきた。

「いえ別に、取り合えずザイドを追う口実が出来たんですから感謝してくださいよ」

飄々と身を翻したシリウスは露台からそのまま自分の部屋に戻っていた。

再びロインの部屋にお邪魔したヴレイはグランドラインでは主流のカードゲームに夢中になっていると、いつの間にかロインは召喚獣の背を枕にして小さく寝息を立てていた。

腰まで伸びた赤銅の髪は、絹のように召喚獣の背を流れていた。

「あらロイン王子、いつの間にか眠っていらしたのですね、ベッドで寝ないと風邪をひいてしまうわ」

「ベッドまで運びますよ」

熟睡しているロインを軽々抱きかかえ、余裕で大人五人は横になれそうなベッドにロインを寝かせてやった。折り重ねられた毛布をかけて薄いレース生地の日蓋を下ろした。

「すみません、お客様にお手数をかけてしまつて」

「いや、こっちこそ泊まらせてもらっているんだ」

ヴレイは静かに眠るロインを見て呟いた。

「こう見るとただの子供なんだな」

「そうですね、私にとっては可愛い弟のようなものですわ」

ソファアールに戻ってきたヴレイは一見犬とそっくりな召喚獣の顎を撫でてやりながら、どこか不安げな口振りで語った。

「ロインは賢くて知識もある、それに王子の身分なら軍だって従えることが出来る、もしかしたらそういう才能が彼にはあるのかもしれない」

「幼い頃から戦争に興味を持つのは、これからの成長に影響すると思う？」

「ロインは純粹にシルバームを救いたいと思って軍を率いたんだと思う、でも戦が物を動かすという考えはあまり持ってほしくない、ましてやこっちの戦は命が懸かっている、召喚の力は凄いのだと思う、すごいからこそ何の為にその力を揮うのかこれからも忘れないでほしい、でも君が傍に付いていればその心配はなさそうだ」

二杯目の紅茶を飲み干すと、ヴレイはスッと立ち上がった。

「正義感もないし、命を懸けて戦ったこともない軍人の俺がそんなこと言っても説得力がないけど、『お前は何の為に力を揮ってるんだ』、ロインを見てたらある人にそう言われたことを思い出して、すまない長居しすぎた」

「お部屋までお送りいたしますわ」

「一人で構いません、おやすみ」

ヴレイが扉の前まで歩むと、呼び止めるかのようにサーシャが口を開いた。

「私はいつまでもロイン王子のお傍を離れません、遠からずこの国を背負って立つ王になれる、この子は強そうに見えて、その重さをいつもあの小さな肩で感じておられます、その重荷を少しでも軽くするのが私の仕事でもありますから」

「ロインは良い人と巡り会えたみたいだな」

安堵した笑みを見せたヴレイが部屋から出て行くのを見送ったサーシャは深く頭を下げた。

「お休みなさいませ」

N
E
X
T

第33話 遺跡の町へ

ロインの体調が回復してから出発することにした。

ベフェナ城は飛行場を持たないので、首都郊外にある空港へ向かうことになった。召喚獣の使用は避けるようにとシリウスからしくく念を押されたので、一行は半日列車に揺られた。そして今回は専属エスコーターのサーシャも同行することになった、それはベフェナ王からの命令だった。

グレイディウル国はシルバームの隣国だった、さらにその隣のベフェナから行くとなると、飛行船でも五日は掛かる距離にあった。空港に到着すると自動的に入国手続きが済まされ、ロインに促されるまま首都リンベルの大聖堂へ向かった。

全体的に白い壁と赤い屋根で統一された街だ。千年前から傾くことのない安寧の時代を築き上げてきた国。現代にまで残る柱や壁には目を奪われるほどの豪華な彫刻や装飾が施されている。

街角の各所には市民が集うための中庭が作られ、彫刻が施された胸壁の廊下に囲まれている。色鮮やかな花に飾られた小径が歩くたびに現れる、樹林庭園の古城を中心に高い建築群が並んでいた。

大通りにはケーブルカーが行き交い、蒸気自動車が走る活気溢れた古都だ。

「首都なのに城が見えない」

ヴレイは不思議そうに呟いた。

「グレイディウル城は首都に置いてないんだ。郊外の山脈のふもとに、山一つほどの巨大城が千年前に建立され、今では城のふもとに城下町が栄えているんだ」

物知りなロインが観光ガイドのように答えてくれた。

ルベンスは大聖堂内にある煉獄室に拘留されていた。煉獄室は罪を犯した者の魂を洗練する場として使われている。牢獄送りの前に罪人が一時的に身を置くことが許されている場所だ。

煉獄室はだだっ広く堅牢にしては壮麗だった。天井は高く、細かな色ガラスの細工が嵌め込まれた崇高な大窓の向こうには、灰色の空が広がっていた。

天井から掛けられた天蓋の奥には紅玉の祭壇が薄い浅黄色のベールに包まれていた。

名誉も威厳も失墜したルベンスは軍服ではなく、神官と同じ祭司服に身を纏っていた。薄い萌黄色でゆったりとしたつなぎの服だ。

「今回のことは本当に感謝している」

あれからルベンスの容貌は百八十度変わったように思える。

ここ数日で頬のふくらみがなくなり、細い顎があらわになった。

前はオールバックだった髪は短く散髪され、澄んだ碧眼が来客を認めて驚いていた。

握手をしてから今回面会に来た経緯を話すと、快く承諾してくれた。

「ザイドは私の管轄下の傭兵ではない、シルバームとロマノ国は軍事協定を結んでいて、彼はロマノからの派遣兵だ。理由は分からないが何か目的があってシルバームへ志願したのだろう、個人情報ロマノによって厳重に保管されている。出身がグレイディウル国だということしか分からない、シルバームでの契約はこの件で解約されたのだから、もう多国籍軍にはいないだろう」

ルピナとロインはルベンスの掠れた声がやっと聞こえる離れた所から、一部始終を見守っていた。

「どこに行ったか心当たりはないですか」

差し込む光を浴びながらシリウスは尋ねた。

「分からないが、たぶんロマノからの帰国命令が通達されるだろう。あいつとはよく話をする機会があったが、掴めん奴だった、時折奴の顔が違って見えるときがあった」

「違う顔……」

窓から入る朝方の湿った涼風がルベンスの髪を静かに揺らした。

「それで本題は賞金首のヴァリスが牢獄から脱獄したということだったな、それにザイドが協力した可能性があるということか、奴は賞金首部隊の中でだんこの高額賞金だったな、一人で脱獄した可能性もあるだろ、なにしろ出身がインジョリックサークだ」

「それも十分に考えられる、ヴァリスはインジョリック内でも起用に逃げ回ってたからな」

淡泊な笑みを見せたヴレイを落ち着き払った様子で眺めていたルベンスは瞼を伏せた。

「そうか、訪ねて来てくれたのは山々だが、力を貸せなくて申し訳ない」

「いや、いい情報をもたらったよ、ありがとう」

丁寧に礼を言ったヴレイにルベンスは謙遜に頭を垂れた。

「これから、がんばってね」

握手を求めてきたロインが煉獄室に声を響かせた。

ルベンスは穏やかに微笑むと、ふと不安感を抱いて慎重に言葉を並べた。

「ロマノで何かが動き出している、シルバームの比ではない、気を付けた方がいい」

鋭い碧眼がロインの深緑色の瞳を剣呑に見据えていた。

シルバームの頂点まで上り詰めた男は磨りガラスの向こう側に広

がる街を閑寂な面持ちで眺めてから、凜とした姿勢で四人に頭を下げた。

＊ ＊ ＊

ルベンスと別れ、大聖堂の大門を出ると既にロインの迎えの馬車が控えていた。別れを惜しんでいたが、素直に馬車に乗った。

一人一人と固い握手を交わしながら悄然な笑みを浮かべた。

まだロインの怪我が完全に治っていない分、城に帰ってくれた方が三人にとっては安心できた。

「力を貸せなくてごめん」

「謝る必要はありません、これも学ぶべきことです」

シリウスは撫で落ちたロインの肩を叩いてやった。

「うん、分かった。皆気を付けてね」

寂しそうではあったが、その笑顔に後悔はなさそうだった。

馬車は夕刻近い街の中を走っていった。雲が避けた西の空は鮮やかな愁色から夜の顔へと変化していった。上空を横切る雲は流れ去り、濃紺色から闇夜のベールに包まれるまではあっという間だった。西部と東部の貿易中継地点として商業が発達したグレイディウル国の首都リンベルには酒屋も多く点在していた。一定区域ごとに市場があるので街は広く分散されていた。

憩いの場としていたる所に設けられた広場には、夜になると酒場や飯屋が競うように軒を連ね、商売で活気づいた昼間とはまったく違う顔を作り出した。

宿にいただけでは情報が入らないと言い出したルピナがヴレイとシリウスを連れて近くの酒場にやってきた。

初夏も近いこの季節の夜はさほど寒さも感じなかった、ドラム缶の中で火が焚かれているが当たるほどではない。

温まった果実酒でルピナの頬は薄紅色に染まっていた。

「ヴァリスの足取りも分からないし、どうするのよこれから、ダグ情報にはヴァリスの情報をくれたら賞金を出すっていう掲示サイトばかりだし、私が思うに追うのは中断して先にゼノレフ国に行くっていうのはどう？」

提案してきたルピナは残り少ない果実酒を飲み干した。だがヴァイスは腕を組んで突っ立ったまま何やら考え込んでいた。返答がないので、待ちくたびれたルピナはお替りをしに露店に戻っていった。

「どうしますか、ルピナが言うようにゼノレフへ行った方が得策かもしれませんよ、ザイドがロマノからの派遣兵だったことも気になります、遅かれロマノに行くのなら今はゼノレフでしょう。あくまでヴァリスを追うことは建前まんですから」

眉根を寄せるヴァイスは広場の中心で焚かれた火を見つめていた。

「そうなんだけど、なんかしつくりなくて、ヴァリスは何人かの仲間と動く奴なんだ、仲間を置き去りにして一人で脱獄するなんて」
カップの中の酒を茫然と眺めながら抑揚のない声色でシリウスは答えた。

「ならギールヴェン牢獄に戻ってくる可能性もありますね、彼らがヴァリスの仲間ならですけど」

「それもそうだな。でも念のためもう一度ダグノートで調べてみるか」

「しかしグランドラインはまだ電子情報が流通していないので、最新情報が入手できるとは限りませんよ、使い方だって上手くありませんし、これなら紙媒体情報の方がよっぽど確実ですね」

その時果実酒をお替りしてきたルピナが無邪気に駆け戻ってきた。

彼女の手には鶏肉を揚げたつまみと新聞が握られていた。

「おい、飲みすぎるなよ」

楽しそうにはしゃいでいるルピナを見ているとこっちまで楽しくなるが、調子に乗って酒を水のように飲んでいる様子を見ると、後で大変な目に遭うんじゃないかと思ったヴレイは仏教面になった。

「大丈夫よ、それより見てよこれ、ファビ・ナラードっていう遺跡発掘現場で召喚獣と推察される化石が発掘され、召喚獣の手には謎の宝珠が握られていたって、ねえ見に行こうよ、どうせこれから行く方角はこっちなんだし」

「噂をすればですね、通り道ならぜひ案内してもらいましょう。おもしろそうじゃないですか、それに何か手がかりがあるかもしれないませんよ」

二人の提案に黙って耳を傾けていたヴレイは裏面に掲載されていた記事に気付いて、ニヤツと口端を上げて笑んだ。

「どうやらそうみたいだな」

ルピナは裏面をめくって見ると、そこには『脱獄犯ヴァリス、バクコウ窟で騒動起こしそのまま逃走』と言う見出しで書かれた記事があった。

「丁寧に地図が載ってる、ガヤ砂漠っていうところにあるんだなその遺跡も。何々、ファビ・ナラード遺跡とバクコウ窟が近いことから、ヴァリスは遺跡の宝物狙いで現れたのか、観光地に姿を現すのは大胆不敵だ、だとさ。決まりだな」

得意げに鼻で笑ったヴレイは新聞の端を指ではじいた。

NEXT

第34話 眠る宝珠

「ロマノの研究室に移管ですか」

女性発掘作業員は上司でもある男性作業員から資料を受け取ると、黒髪を結っていたヘアゴムをほどき、休憩所として設けられたテントへ向かった。

「そうだ、二、三日後にはロマノからの派遣兵が宝珠の受け取りに来るらしい、その時は君から引き渡してもらうよ。その後我々は発掘作業をグレイディウルの政府に委託する、引継ぎが終わり次第インジョリックに戻る」

資料も見ずに女は渋々頷いた。

「そうですか、現地がそう言っているなら仕方ありませんね、あれは研究価値が高いだけに残念です、インジョリックの考古学会にも朗報だったのに」

無然とした笑みを浮かべた彼女は紙コップに入れたコーヒーをそっと啜ると、長い黒髪が肩から撫で落ちた。

「急いで帰る必要はないさ、観光して行くのもいいだろう」

「そうですね、でも帰って研究記録をまとめなきゃいけないので」
積もった砂埃を払うことなく椅子に腰を下ろした。

「そうか、論文もいいが少しは気晴らしもしろよ、お疲れさん」

「お疲れ様です」

何事にも気さくな上司は別のテントへ移動していった。

入れ違いに年若い女性作業員が寄ってきて、何やらそわそわした様子で話しかけてきた。

「ねえソラ知ってる？ 牢獄を脱獄したヴァリスがバクコウ窟で騒

動を起こしたって話。もしかしたらこの近くにいるかもしれないわよ、ほらあいつってインジヨリックで宝物や遺跡狙いの盗賊で有名だったじゃない」

「そういえばそうね、でも残念ね、そいつここに来たとしても発掘された宝珠はロマノ行きだから、でもなんとなく宝珠をロマノに渡すのが不安なのよね、あそこって奇妙な研究してるって噂だし」

「そうね、ロマノに渡るって聞いた時は正直私も気が進まなかったな、ソラが地道に調査を積み重ねたから発見できたのに、横取りされた感じじゃない、ソラの手柄なのに」

目の大きな女性は唇を尖らせて「もうっ」と最後に付け加えた。

「おだてても何もでないわよ」

「もお、そんなこと言わずに仕事が終わったら観光していかない、他にも何人か誘ってさ」

ソラはコーヒーを飲み干すと、椅子から立ち上がって髪を結った。作業ズボンの裾をブーツの中にしまい、革紐をきつく絞めた。

「ごめん、論文も待ってるし、それにちょっと寄る所があるから」

「そっか、じゃあ暇があったらいつでも来てね」

「ありがとう、じゃまだ続きが残ってるから、また後でね」

友達と別れ一人現場に戻ってきたソラは、宝珠が埋め込まれていた後を見て、直感ではあるが頭に霧がかかったような不安を覚えていた。

「ロマノが宝珠を欲しがる理由か……」

砂の上にしゃがみこんだソラは刷毛を軽く握り、幻獣の化石から丁寧に砂を取り除いていく。澄んだ碧眼が微かな異変も見逃さない鋭い眼光で化石を捉えていた。

そもそも遺跡発掘を依頼してきたのは、グレイデイルの同盟国

であるロマノだった。グレイディウル国の北西部からロマノ国の南東部はこの広大なガヤ砂漠が覆っていた。過去に国境付近で幾つもの遺跡が発掘されたことにより、遺産を共に管理する事を約束していた。

それでも、グレイディウル側の遺跡だったにもかかわらず、ロマノが強引に発掘許可を下ろさせ、しかもインジヨリックサークの発掘調査チームに依頼させる慎重さと不審さに、ソラは苛立つほど気になっていた。

「『宝珠』を握る双頭の幻獣か。確か『世界の空』を創った地系魔術士の傍らにいた幻獣も双頭の獣よね、そしてロマノに渡る『宝珠』」

ソラは眉根を寄せて化石全体を見回した。

「地系魔術士の幻獣はガルタイム空中都市の護衛獣でもありながら、『宝珠』も守っていたはず。この幻獣が本当にガルタイムの護衛獣だとしたら、この『宝珠』は『世界の空』を起動させるための召喚力を引き出すことが出来る」

宝珠が埋め込まれていた跡をルーペで覗き込み、何層にもレンズを嵌め込んで度を上げた。慎重に刷毛で砂を取り除くと、そこには精巧に刻まれた印があった。

ソラは分厚い本を無雑作に開くと、あるページを開いて確認した。「やっぱり召喚陣、もしかしてロマノが宝珠を欲しがった理由って」

髪をかき上げたソラは首から下げていた携帯電話を上着のポケットから取り出し、ある人の元へ電話か掛けた。

「久しぶりリウド、今グレイディウルにいるって言ってたわよね、――そう、例の遺跡のことで貴方にも見てほしくて、早くて二日後にはロマノ兵が宝珠を受け取りに来るのよ、だからなるべく早く来られない？」

すると受話器越しの男は渋りながら「分かった」と了承した。

「ありがと、じゃあファビ・ナラードで待ってるわね、あ、それからザイドのは元気？ ロマノの傭兵になたって本当なの」

電話口で煙草を吸って吐く動作的な音が聞こえた。

「もしかしたら宝珠の受取人って彼の事かもしれないわ、大学に寄って行くんじゃない、あの子お兄ちゃんっ子だから」

クスクスとソラが笑うと、電話口の男は齒に噛みながら怒鳴っている。

「冗談よ、取り合えず落ち着いたら連絡して、ザリのことも少し話したいし、じゃ」

電話を切ると、ズボンのベルトに挟んでいたタオルで額や首に流れた汗を拭った。

化石の現場から少し離れると、近くで作業していた男性作業員に声を掛けた。

「やあ、ソラまだやってたのか、君の友達はとっくにあがってるぜ」

「まあね、でもちょっと気になることがあって、あの宝珠に埋め込まれていた部分に陣診たいな印があったことは知ってた？」

「ああ、知ってるよ、資料ちゃんと見なかったのか、まだ何なのかハッキリしてないが専門家の話だと召喚陣だってことは確かだろう、それがどうかしたか」

眩しそうに目を細める彼は額の汗を手の甲で拭き取った。

「双頭の幻獣は滅多にいないわ、もしあれが「世界の空」を創った者の幻獣だったら、あの「宝珠」は「世界の空」を起動させるための」

「ちょっと待て」

突然男はソラの言葉を止めた。

「確かにそう言われてみれば、明らかにそうだろうと言いたくなる、

でも資料にそのことを載せてないのはお前が言おうとしたことを外部に漏らさないため、だとしたら」

「何のために」

男は少し現場から離れると、妙に深刻な顔で続きを言った。

「そもそもこの遺跡発掘を依頼してきた元締めはロマノだろ、俺が思うに調査権を移されたのは、これ以上「世界の空」のことで嗅ぎ回ってほしくないんだ、理由は分かんねえけどな、まあ焦って結果を決め付けない方がいい、確率で判断しない、それが君のやり方だろ」

彼は調査中の化石と、腑に落ちなさそうな顔をするソラを交互に見ながら軍手で鼻の下の汗を拭いた。

作業員は皆砂まみれになって同じ顔の色をしている。夕暮れも近いせいか、辺りは褐色の大地へと変化していた。来た頃は焼けるような西日に参っていたが、もうここ数ヶ月で肌は強烈な日差しを慣れてしまった。

眉根を寄せたソラは手に持つ刷毛を何度も持ち替えていた。珍しく落ち着かない仕草に男は気付かないフリをした。

「ダルカйм空中都市出身の魔術士が「何か」を創ったって歴史は聞いたことあるが、他所様の厄介事に首突っ込まないほうがいいぞ、なんにしても俺達の仕事はここまでだ」

「そうね」

ソラはだるそうに片手を腰に当てると、後ろ髪と同じように長く伸びた前髪をかき上げて乾いた唇を舐めた。

「もう休みなよ、後は俺達がやっとくから」

「ありがとう、そうさせてもらうわ」

「あ、ねえソラ、今夜とくに用事がなければ、一緒に晩飯食いに行かないか」

少々きこちない彼からの誘いにソラの頬がゆるんだ。

「今日は先客がいるの、また今度ね」

刷毛をヒラヒラ振って、お疲れ様と皆に挨拶を交わすとソラは夕刻近い日差しを浴びる現場から立ち去っていった。

N
E
X
T

第35話 受け継がれたモノ

日が暮れてからグレイデイルの首都リンベル大学を訪れると、すでに学生の姿はなく、建物の中だけに明かりが灯っていた。

堅固な正面門は閉じられていたので、通用口の警備室で控えていた守衛に「幻獣生物工学第四研究室の……」途中まで言って、訪問相手の名刺を見せた。守衛は男の身なりを細い目で窺ってから通用口の門を開けた。

本館から離れた実験棟の廊下はひっそりとしていた。

いくつかの研究室からは明かりが漏れていたので、学生や研究者がそれぞれ自分の研究に没頭しているに違いないと思った。

目的の研究室の前まで着くと、ノックをする前に「入れよ」とごもるような声の中から聞こえてきた。

ドアを開けて部屋の中に入ると、中は乱雑に置かれた資料の山に埋め尽くされていた。珍獣がホルマリン漬けにされた円柱のガラス容器が、何十本と棚の上に並べられたまま、埃がかぶっている始末だ。

深緑色の黒板には本人にしか読めないような下手くそな字で、何かを書き散らしたままになっていた。

足の踏み場もろくに作らない部屋の奥へ、いろんな物を踏みつけて進んでいく。

資料に囲まれた一角で、今にも灰の落ちそうな煙草を啜えたままダグノートと睨めっこをしているリウドが「まあ、そこら辺に座れよ」と呟いて、やっと煙草を灰皿に突っ込んだ。

吸殻を何日も溜めっぱなし状態になった灰皿はまるで針山のようにになっていた。

「お前のような奴によく国が研究室を提供するな」

呆れたザイドは適当な椅子を見つけて、邪魔な資料の山を別のところに置いて座ると、持っていた煙草に火をつけて一服した。

「また吸い始めたのか」

ダグノートで何やら論文に使う文章を作成しているリウドは、キーボードを打ちながらほんやりと訊いてきた。

「別にいいだろ、人のことより少し掃除しろよ」

「この方がどこに何があるか分かりやすいだろ、それより結構早かったな、ロマノに戻るのか」

また訊ねられて、ザイドは煙草の灰を灰皿に落としてから答えた。

「帰国命令が出たからな、その帰りにファビ・ナラードで発掘された宝珠を受け取りに言ってこいとき、リウドも幻獣の遺跡なら観に行くんじゃないかと思って、行くんだろ」

白いワイシャツと綿生地のスボンはめりはりもなくしわしわで、短髪の黒髪は寝癖でぼさぼさのままだ。眼鏡のレンズも汚れたまま、眉間に掛けられていた。

身なりさえ整えればそれなりに女の二人や三人は簡単に落とせるだろうに、本人はそんなことに関心も示さず、世界中を飛び回り、時々帰ってきてはただ黙々と研究に没頭する日々を過ごしていた。

「昨日、ソラから連絡があってその件で観に来てほしいと言われた。しかも彼女の言ったことがここまでの中するとは、相変わらず勘のいい女だ」

「ソラが言ったこと？ 何を言ったんだよ」

ザイドの質問を無視して、やっとダグノートから目を離したりウドは傍にあったカップを持って、隣の給湯室に移動した。

そこには簡単な調理場が備え付けられてはいたが、湯を沸かす程度にしか使われていないようで、薬缶とカップ以外は食器すら見当たらない。料理とは無縁の存在に成り果てていた。

「コーヒーでいいか」

「酒とかないのかよ」

「アルコールランプ用のアルコールならあるぞ」

「さぞかし美味しいんだろうな」

湯が沸くのは意外と早かった、手際よく二人分のコーヒーを入れ

て戻ってくると、リウドは片方をザイドに私、また同じ椅子に腰掛けた。

「そう言えばヴァリスが脱獄したって新聞に載っていたが、お前が手助けしたんじゃないのか、あの監獄を一人で抜け出そうとしたら協力者がいないと無理だろ」

コーヒーを飲もうとしたザイドは思わず鼻で笑った。

「何で俺があいつの協力なんてしなきゃいけないんだよ、一人で脱獄したあいつが仲間を脱獄させるために手伝ってくれて、わざわざ俺の居所を探し出して来たよ」

「へえ、でどうしたんだ」

訊ねたリウドはザイドと同じ灰色の瞳をずり落ちた眼鏡の上から覗かせた。

「お前を監獄に入れた奴を連れてこられるなら手伝ってやってもいいって言ったら、「そいつは自分が倒す」って言い張って帰ったよ」

「相当根に持ってたんだな」

「いっそのこと連れてきてほしかったよ。俺の中に「ザリ」って奴の人格がいることを話したらどんな顔をするか見てみたかったよ、俺でさえいまだに半信半疑なのに」

「でも自覚はあるんだろ」

「さあね」とでも言いたそうにザイドはそっぽを向いて、煙草の煙を天井に向かって吐いた。

「ラセツとザリが決着を付けたがつていようがいまいが、俺とあいつの勝負はアゲハに居た時から付いてないからな」

思い出を懐かしむザイドの眼は彼との対峙を望んでいるようには見えなかった。寧ろ自分の中にいる人格が彼を傷付けてしまうだろうと予期し、再会を悔やんでいるようにも見えた。リウドは黙って煙草を吸った。

「あいつ、俺があの時村を焼いた犯人だって気付いたらしい」

「マジか」

目を丸くしたリウドは珍しく表情を陰しくさせた。

「本人から直接聞いたわけじゃねけど、おそらく気付いてる。だからって俺に復讐してくるわけでもなかったし、特に何も話さずシルバームで別れたからな、あれで本当に「ラセツ」の力を受け継いでるのかって感じだな」

背もたれにもたれ掛かり、くるくると椅子を回転させるザイドは天井を仰ぎながら続きを言った。

「ザリはラセツに裏切られ、恨みと憎しみを抱いて死んだ。その邪念がザリの魂と力を俺に隔世させたとソラは言った、ラセツ一族を抹殺するために。それを見越してラセツがあいつに「力」を隔世させた話は信じるが、何故ラセツの人格があいつには隔世しなかったんだ、俺がザリの人格を隔世したように、ラセツだってザリとの決着が望みなんじゃないのか」

長い独り言のようだった。

ザイドがもらした疑問にリウドはしばらく考えてから、愛想のない口調で答えた。

「さあね、ラセツ本人に聞いてみるよ、そもそもラセツの本心なんてその小僧でも分からないだろう、それどころかソラはあいつに何も話してないんだろ」

「らしいな、まったくよあの女も何考えてやがる」

空になった煙草の紙ケースを握りつぶすと、ゴミ箱に投げつけた。

「ソラに会った時にでも聞けよ」

「それにヴレイもヴレイだ、「よお」とか「元気そうじゃん」とか何か言うだろ普通、すんげえ久しぶりに会ったんだぜ」

「じゅあお前はそうやってヴレイに話しかけてやったのか」

「えっ」と不意を突かれた様な顔したザイドは苦笑いをしたまま黙ってしまった。

「人のこと言えねえじゃん、ガキかよお前らは」

「だってさあ、握手しようとしたのに向こうが無視したんだぜ、マジで怖い顔でさ」

「じゃあその時気付いたんだろ、村を焼いたのはお前だってことを」

「たぶんな」

長い溜息を付いたザイドはむしゃくしゃして頭を掻くと、そのままイスから立ち上がり大きく伸びをした。

「でファビ・ナラードに行くんなら泊まってもいいだろ、どうせここで寝泊りしてるなら大人一人ぐらい泊まらせろよ、まさかこんな汚ったねえ所に女を連れ込まないだろ」

「本の山がベッドになればいつでも連れてくる」

滅多に聞かないリウドの冗談を聞いて、ザイドは思わず笑いをこらえてしまった。

他愛のない話で眠気も忘れてしまった頃はすっかり夜も深まり、砂埃で曇った窓の向こうには満月の月が鋭い光を反射させていた。

N E X T

第36話 運命があれど

グランドライン文明の発祥地、最古の都とも言われているファビ・ナラード遺跡。

数千年にも渡って君臨してきた都の歴史的建造物はこのガヤ砂漠のいたるところで発掘されている。古代グレイディウル帝国の都として栄えていたが、砂漠が隆起してきた影響で都は現在の首都リンベルに遷都された。

数百年前から歴史的建造物が砂に埋もれないように、遺跡の周りには塞き止め用の巨大な建造物がいくつも建設され、緑地化の動きも進められている。

ファビ・ナラードの駅もその一部で、コンクリート建築の大きなプラットホームが観光客を出迎えた。

「まさか本当にザイドが宝珠の受取人だったなんて、ロマノの傭兵なんだって」

仕事は休みだと言いながら、作業ズボンと着古したTシャツ姿で二人を出迎えたソラはフツと鼻で笑った。

「まあな、元気そうだな」

顔を半分隠しているサングラスを少し上げて、ソラを見下ろしたザイドは久しぶりに会う友人に向かってニツと歯を見せて笑った。

「ええ、おかげさまでね。さっ行くわよ」

ソラはザイドとリウドの背中を叩くように押して、強い日差しの下に出た。

プラットホームを出たとたん数千年前にも及ぶ歴史の光芒を味わうことができた。

当時の建築技術を物語っていると言うコンクリート建築の神殿、原型をほぼ残した豪華な凱旋門、庶民の家々の遺跡が建ち並ぶのはファビ・ナラードの中心地だ。

剥き出しになった柱や倒壊した石壁の中を歩いていると、圧倒的

な存在感が肌身に迫ってきそうな感覚に襲われた。

「それにしても二人とも久しぶりね、久しぶりかしら」

ソラが顎に指先を突いて考えていると、サングラスの眉間を上げたりウドが淡々と答えた。

「僕が幻獣学術ライセンスを取得した時以来だな」

「ってことは三年ぶりね、なのにあんたたちは相変わらずね、いつまでも若々しい君達が羨ましいわ」

二人の前を歩くソラは後頭部で一つに結った黒髪を大きく揺らしていた。黒髪の中には幾束か赤く染めた髪も同じ調子で揺れていた。誰もやらないような独特なヘアスタイルでもソラには良く似合っていた。

空色の瞳とミルクのような肌に上品な唇はぷっくり膨らみを持っていた、彼女ほどの恵まれた容姿なら十分若者には負けない輝きがあった。三、四歳年上だが同じ二十代だというのに、時折そうやって自分を歳寄り扱いするようなそぶりを見せるので、せっかくの別嬪もそれでは台無しだと思いつつも、二人は黙って見過ごしていた。

話しながら街の奥まで案内されると、少し傾斜のある高台に黒い柱だけが残る神殿へと案内された。

既に一般観光客が入らないようバリケードで広範囲を封鎖していた。警備兵に身分証を提示するとバリケードの中に入ることができた。警備兵の左胸にはロマノ国を表す徽章が付けられていた。

「この柱焦げてるのか」

サングラスを外したリウドがソラに訊ねた。

「そうよ、天井は焼失しその瓦礫と一緒にこの幻獣が発掘されたの。この幻獣は「世界の空」を創った地系魔術士の幻獣だって事が証明されそうなの、この幻獣はダルカйм空中都市の護衛獣でもあって、このファビ・ナラードは空中都市の姉妹都市のようなものだったから、この子の主もこの街で最期を遂げたって噂もあるし、でもその真相は闇の中だけだね」

ソラは自分なりに気付いたことを話すと、リウドもそれに納得していた。

「部外者はもう必要無いってことだろ。僕は「世界の空」の事はよく分からないが、専門家に結果を出させる前に自分達のところに移管させるなんて、それに警備していたのはロマノ兵だ、いかにもきな臭い」

「やっぱりそう思う、取り合えず宝珠の元に案内するわ」

今度は遺跡保管局兼ね博物館に案内された。

博物館はファビ・ナラードの概観を壊さないために、遺跡と同系のコンクリート建築で建てられていた。これも砂が隆起してくるのを防ぐ為に建てられているため、近くで見るとかなり迫力のある建造物だった。

紹介を受けた館長はリウドとザイドの身分を確かめると、奥の金庫から木箱を持ってきた。

確認のため、錠の鍵を開けて重い鉄製の内蓋を開放した。箱の中をのぞくと、そこには琥珀色をした宝珠が暗闇の中で静かに煌いていた。

貴重な物なんだろうが、二人にはただの鉱物の塊にしか見えなかった。事務的に宝珠を確かめると、箱はザイドの手に渡された。

「受け取った、責任持ってロマノに届ける」

正式な書面での受け取りが済むと、三人は見晴台にもなっている博物館の屋上へ登った。

屋上には強い日差しが照りつけていた。幾本か植えられた樹木の影が絵の具で塗られたかのように、くっきりと色濃く浮かび上がっていた。木陰の下にベンチが備え付けられ、ちょっとした公園のようになっていた。

柵から眼下を見渡すと、暑さで遺跡全体から陽炎が立ち昇っていた。乾燥しているので汗は掻かないが、直射日光は肌をジリジリと焼いた。

「でさあ、「世界の空」って何、俺ロマノの宰相からは何も聞かさ

れてないんだ、ただ持つて来いって」

「ザイドには関係ないわ、それに証明されない限りまだ憶測なんだから、君はそれをロマノに届けるだけでいいの」

子ども扱いされた気分になりザイドは眉間にしわを寄せた。

宝珠が納められた箱をへその前で抱えながら、眼前の遺跡を眺望した。だが幻想的な遺跡群に感動するわけでもなく、どこか浮かない顔をするばかりのザイドにソラは強い風で舞い上がる髪を押さえながら、まるで我が子を心配する母親のように声を掛けた。

「一番聞きたい質問をしてないんじゃない、何かあったんでしょ」
少し離れたベンチに腰を下ろしたリウドは煙草を吹かしながらその様子を窺った。

「シルバームであいつに会った。目が合った瞬間、あいつは俺が村を焼いた犯人だと気付いたらしい」

眩しさで目尻を細めるザイドは無然に笑っていた。

平然な態度を示すザイドにして、ソラは半信半疑な顔を向けていた。「それでどうしたの」と直ぐには訊けず、ソラが思っていた以上に大人だったザイドに驚いてもいた。

「あいつには話してないんだろ、ザリとラセツのことも俺達の事も」
「ええ、話してないわ」

申し訳なさそうにソラは眼下に視線を落とした。

「あんたから話せないなら俺から話す、それでいいんだよな」
「ごめんなさい」

「何であんたが謝るんだよ、それと一番聞きたかった質問、何故あいつにはラセツの人格が隔世しなかった、ザリとの決着が望みなら、俺と同じように人格が隔世してもおかしくないだろ、ラセツだってザリに怨み持つてるんだろ」

「それはザリが本当に彼の城を襲い、彼の妻を殺していたらの話よ」
「そうなんだろ、いまさら違うってのか、あんたなりの推論があるんだろ」

予期せぬ不確定要素の登場にザイドは猛然とした視線をソラに向

けた。

「あるわ、でもただの憶測だし今話すつもりもない、それより彼と接触する前にあの村へ行ってみれば何か手がかりがあるのかもしれないわ」

「バイティス・ザリか、ラセツの弟の子孫がいるとか言う村だろ、でもいいや面倒くさいし、あんたが教えてくれないならこのままあいつに話すだけだ」

「ちょっと面倒くさいって何よ、それに私は本当に知らないのよ、ラセツとザリの間に起きたことは話せても、ラセツの本心までは伝わってないし、君には話せてもヴレイには話せない理由が言えないのよ」

「分かってるって、何度も聞いたから。それにどんな事実があらうとこうなっちまった以上、運命は避けられないし、せめて俺の望みどおりにケリがつけば後悔しないですむ」

飄々と手を振ってザイドは階段を下りて行ってしまった。

ソラは後を追いつながら、しかしと言葉を続けた。

「運命だからってどうでもいいわけ、分かってるでしょ君には時間がないのよ、自分の人生がザリと言う魔族によって犠牲になってしまいかもしれないのよ、ヴレイと会うにしたってもしその時ザリの人格が覚醒したら、今度こそ……」

階段を下り切ったザイドの肩を、掴んで止めたソラは彼の前に立ち塞がった。息を上げるソラは大きく胸を動かしながら呼吸を整えた。

「どうでもいいわけねえよ、でも俺は俺のやり方でケリをつける、それだけだ」

毅然と言い放ったザイドをそれ以上引き止めることは出来なかった。

沈黙したソラの横を通り抜けたザイドは荒々しく博物館から出て行った。

N
E
X
T

第37話 逃亡者を追って

街から離れて造られたギールヴェン牢獄は海岸の先に突き出た、岩山の上にそびえる古城だ。岩をくり抜いて造られ、堅牢な塔と岩壁が古城を何層も囲んでいる。その周囲を警備の塔がいくつも連なっていた。

「ドナ海側の国の中でトップと言われるだけはあるようね、よくこんな所から脱獄したわねヴァリスって奴、ザイドの協力があつたとしても、すごすぎよ」

ガヤ砂漠をひた走る横断鉄道の客室からは、観光地でも名高いその牢獄を正面から見る事が出来た。

「元はファビ・ナラード帝王が溺愛する王妃に送るために建立された古城だそうです。他にも国中に王妃のための城を立て、建築費で一度は王朝が傾きかけたとか」

「それが今じゃ牢獄になってるんだから、立派な社会貢献だな」シリウスの説明を聞いて鼻で笑ったヴレイは窓枠に寄り掛かって、規制正しい振動に身をゆだねながら後方へ通り過ぎていく光景を気長に眺めた。

二時間ほどでガヤ砂漠のど真ん中に位置する町、バクコウ窟の駅に到着した。

「この町に来たのねヴァリスは」

「新聞の一面記事に載っていたんだ、手掛かりぐらいはあってもよさそうだ。ヴァリスはインジョリックで骨董や宝物、遺跡を中心に盗みを繰り返してきた奴だ、ファビ・ナラードへ行く途中に寄ったのかもな」

言いながらヴレイはプラットホームから出ると、初めて目の当たりにした地平線と広漠な砂の大地に圧倒され、語尾が溜息となって消えた。

熱風の暑さにどっと汗が出たとたん、悠然な景色に鳥肌が立った。

巨大な砂漠地帯に回廊上に連なるオアシスの一つ敦煌から、砂と岩だらけの荒涼とした大地に続く道が伸びていた。乾いた溪谷の中に、隆起する砂に埋もれながらも、砂山の断崖に建てられた十層にもなる赤い屋根の石窟建築物が一つの町となっていた。

乾いた空気の中に砂が混じっていた。

バクコウ窟の楼門を抜けると建物の一階は市場の喧噪と砂の鳴る音で響いていた。

天井は高い吹き抜けになっていて、断層状に上へと連なっているのは住居や宿、商店だ。一階が酒屋で二階が宿というスタイルが主流なのは、旅商人や旅人が多く訪れるからだ。その中には女郎屋らしき看板まで見受けられる。

どうの酒場からも、昼間だというのに酔客の罵声やふざけた笑い声が聞こえてくる。そして何故かやたらと巨漢な男が多い。

「ここは鉄が採れるのよ、町の奥が採掘所と繋がっているから、バクコウ窟の住民のほとんどがその労働者よ」

それでかとヴレイは納得した。荷馬車いっぱい鉄を積んでいる行商人とすれ違うのはそれでかとシリウスも納得していた。

「それより、ヴァリスが騒ぎを起こしたところって何処かしら」

「自警団に行ってみれば分かる」

道路標識のように町のいたるところに道案内の看板が掲げられていたので、迷わず自警団本部へ行くことができた。

「バクコウ窟の中はずいぶん赤いんですね、土が赤いんでしょうか」
「このまま砂漠を西へ行けばフレイヤだから、土もそうだけど西文化の影響を受けたものが多くあるのね」

「フレイヤって確かルピナの国だよな、だいぶ西へ来たってことか」
するとルピナはくすつと喉で笑って、どこか恥ずかしそうに呟いた。

「まさかあんた達とここまで来るなんて思わなかった」
ルピナの嬉しそうな笑みに、少しだけヴレイは気の安らぎみたいなものを感じた。ベフェナで彼女と別れていたなら、どこか物足りない

い旅だっただろうと素直に思えたが、やはり旅の真意を黙っておくことは心苦しかった。

しかし、いつの間にそんな事を思うようになったのだろうか、自分自身に疑問を抱いてしまった。

標識に沿って町の奥へ進んでいくと、広場のような空間を抜けた先にまた楼門が姿を現した。三層の屋根が連なる建物が前と左右にそそり立っていた。

役人や軍人のような輩が右往左往に出入りしていた。

石窟の中に建物があるのはどこか妙な感じだ。外界では日差しがさんさんと降り注いでいるのに、町の奥は地下室のようにひんやりしていた。町中の灯籠や篝火は年中灯されているに違いない。電気が通っているだけまだマシだ。

「たぶんここだな」

「そうね、行きましょ」

不審な旅人に横柄な態度をした自警団に対して三人は苛立っていた。

やたらと賑やかではあるがどこか陰気臭く、人相柄の悪い輩が徘徊する通りを歩いているとその苛立ちは一層高まった。

一階が開けた酒場からはお祭り騒ぎのように賭け事をする酔客でたむろしていた。

そんな通りのど真ん中を歩きながら、何故あんな対応をされなくてはいけないんだ、と機嫌を損ねるヴレイは独り言を吐き捨てた。

額を搔いたシリウスは溜息を付いて、当たり障りのないように声を掛けた。

「この自警団はヴァリスの捜査を都心警察に任せています、現場の酒場は何事もなかったかのよう客がたむろするだけで、一般大衆は久しぶりの事件に好奇心程度の興味をわかしただぐらいで、このような町ならヴァリスのような輩がいくらいても不思議じゃない感じですし」

「そうね、これじゃあヴァリスの足取りなんて分からないわよ、さつさとファビ・ナラードに行きましょ」

ヴレイの前を歩いていたらルピナが腕を組んで言ってきた。

それもそうかと彼女の意見に賛成しようとした時、通り過ぎようとした酒場の入り口でなにやら不審な集団の中心に女性らしき姿が見えて、ヴレイは立ち止まった。

女性の手に刃物らしき鋭い光が見えて、まだそのことに気付いていない二人に声も掛けず、ヴレイはその集団に昂然と近寄った。

真正面から堂々と現れたヴレイに、下衆を見下すような視線を向けた男達はそれぞれに下品な野次を飛ばした。

その様子に気付いたシリウスは面倒臭そうな溜息を付いて、ヴレイの背後に歩み寄った。嫌がっていたルピナは仕方なくシリウスの背中にくっ付いた。

怯えていた女性の腕が野郎の一人に掴まれているのを見て、ヴレイは紫紺色の瞳を陰しく細めた。

「放してやれよ、嫌がってるだろ」

女性は紙袋に詰まった荷物を大事そうに抱えていた。瓶詰めや小枝を素のまま掴んでいるところを見ると、この輩とぶつかった拍子に荷物を落としてしまったようにも見受けられた。握っているナイフは護身用で取り出したものだろう。

すると店の奥から、決然さを備えながらもあからさまに陰険な目付きをした男が踵を響かせて表に出てきた。

「肝が据わってるじゃねえか小僧、そんなに放してほしければ、博打で俺に勝ってみろ」

陰気臭そうな酒場の中へ促されると、中ほどの円卓にその男とヴレイが対になって席に付いた。

心配するルピナはヴレイの背後に歩み寄ると、肩の服をぎゅっと握って「ちよっと、大丈夫なの」と恐る恐る訊ねた。

「スリルを楽しむと思えばいいんだよ」

自己中な発想にルピナは重たい息を吐いて、シリウスの背後に戻

っていった。

姿勢の良いその男は太い葉巻を咥えて火を点けると、口端から煙を吐いた。背後にいた部下から、木製のカップと小指ほどの小さな鉛板を二本受け取った。その板には米粒ほどの小さな石が一つ嵌め込まれ、その裏面には二つの石が嵌め込まれていた。

「簡単なゲームだ。このカップにこの賭け札を入れる、どの目がいくつ出たか当てるだけだ。勝負は三回、「チェック」と先に言った方が予想した目の数を言う、分かったな」

ヴレイは怜悯に笑むと、男も同じように口端を上げて嘲笑した。そして男は賭け札をカップに入れると、円卓の上にカップの口を叩き付けた。

一瞬その場は静まり、カップの中では賭け札の落ちる音が響いた。「チェック、一つの目が二つ」

先に言ったのはヴレイだ。

「一つと二つの目が一つずつ」

続いて相手の男が言う。

その場の空気が水を打ったように静まった。

NEXT

第38話 腐敗する町

カップの中で賭け札の落ちる音が響いた。

「チェック、一の目が二つ」

先に言ったのはヴレイだ。

「一と二の目が一つずつ」

続いて相手の男が言う。

その場の空気が水を打ったように静まった。

上げられたカップの中の賭け札を見て、思わずルピナが「ヤツた」と声を上げた。

逆上した男達は吠えるように罵声を吐き散らし、ルピナにまで手を出そうとしたので、猛然と怒りを露にしたシリウスが男達の前に立ち塞がった。

「うるせえぞ、お前えら静かにしろや」

怒鳴った男は賭け札をカップの中に入れると、逆さまにしたカップの口を円卓の上に叩き付けた。

「チェック、二の目が二つ」

今度は男が先に言った。

「一と二の目が一つずつ」

迷うことなく後に続いてヴレイが言った。

カップを上げて喜んだのは男達だった。馬鹿騒ぎのように吠えて歓喜する。

ちっと舌打ちをしたヴレイは彼等の歓喜に苛立ちを覚えた。そしてその時ばかりはヴレイもカップから目を離していた。

再びカップが円卓に叩きつけられ、その場は一瞬静まった。

賭け札がカップの中で転がって落ちる響きは吐息ほどの儚さだったが、ヴレイはその微かな違和感に気付いた。

札が落ちきると、男達の罵声や野次でその場は再び盛り上がりが増した。

明眸な目元に笑みを浮かべたヴレイは剣呑な男の双眸を嘲笑した。少年の不吉な笑みに困惑した男と、ヴレイは同時にチェックと言った。

「先に言っていないか、俺が負けたら有り金全部くれてやるからさ」突拍子もないヴレイの言葉にルピナとシリウスは勿論、男達も度肝を抜いた。対の男は顔をしかめたまま許可を下ろさなかったので、ヴレイは勝手に答えを言った。

「二つの目が二つ」

その答えにカップを掴む男は凝然と目を見開き、その表情は憎悪にも似た顔付きに早変わりした。それを見て思わずヴレイは我慢していた笑いを吹き出してしまった。

「当たり前らしいな」

ぎくりと男は生唾を飲み込んだ。

男の不審な影に気付いたルピナが端麗な眉根を寄せると、剣の柄を握ってシリウスの前に出てきた。

「カップを上げなさい」

憤慨するルピナは剣の柄でカップを払い除けた。

円卓の上にはヴレイの言ったとおり、石が二つ嵌め込まれた賭け札が二枚上を向いていた。

口元に不敵な笑みを浮かべたヴレイはその賭け札を手にとって確認した。二枚の札を裏返すとそこにも二つの石が嵌め込まれていた。

「表も裏も二の札にすり替わってる、如何様ね」

ルピナが剣を抜こうとしたのをシリウスがスッと手を添えて止めた。

「こ、こいつヴァリスの仲間じゃねえのか」

輩の一人が怯みながら言葉を漏らすと、ヴレイと対で座っていた男が余計なことを言うなど言いたげに部下を睨み付けた。

「いつの間にか札がすり替えられていたのには驚いたけど、表裏合わせて四つの石が付いた札は当然前の札より角が多くなる、二枚ともそうなるわけだから微かに音の響き方が変わってくる、三回目が

一番細かく音が響いていた気がしたからかもしれない。二枚とも如何様の札に変えないと自分達が確実に勝つ保証はないからな、まぐれでも正解してて良かった」

微妙な音の変化などに気付くことも出来なかったシリウスは呆気無くヴレイに感服されてしまった。だが即座に気持ちを切り替え、眼光を鋭くさせたシリウスは拘束されていた女性を、男達から引き離して安全圏まで遠ざけた。

「脱獄した手配犯であろう者が何故新聞沙汰になるほどの暴動を起こしたのか、これなら合点がいきますね」

「ヴァリスもハツタリを見破ってぶち切れたってことだな、短気な奴。にしても誰でも「チェック」と言う前に数秒は考える、考えない奴もいるだろうけど、次に何が出るか分かっていたら相手より先にチェックと言えるのは当たり前だ、このゲームは始めから如何様前提だったんだ、でもあんた等がズルしてくれて助かったよ、運だけで勝てる自信はなかったし」

軽快に言い放ったヴレイは「やり返してやったぞ」と言いたげな笑みを浮かべた。

悔しそうに罵声を上げる男達はヴレイに襲い掛かろうとそれぞれに得物を手にしたが、リーダー格の男の「やめろ」と言う一声で部下達は悔しさを抑えた。

陰気な通路を抜け活気のある通りまで出てくると、その女性は「有難う御座いました」と丁寧にお辞儀をした。

「この自警団は警備が甘いようですね」

シリウスが呆れたように呟いた。

するとナイフを鞘に収め、荷物を抱えなおした女性がそれに答えた。

「巡回兵はいるんですが宿場街だけは手薄にしているのよ、ああいう輩が鉱山で微量に採れるスパイスを賭けやゲームで密売しているの、精製されたスパイスは麻薬にもなるから処分される決まりなんだけど、薬としての需要も良いから非合法での取引が後を絶たない

のよ、中には自警団の人間も手を出してるって噂もあるから」

「取引の巢になっている宿場の警備はなるべく避けたいわけね、町の治安を守る自警団がグルになってそんなことするなんて、信じられない、腐ってるわ」

心底憤慨するルピナはその女性が抱えている荷物を見て首を傾げた。

「貴方薬屋さん？」

「ええ、近くで薬を作ってるの、その買出しに來た歸りに彼等の一人と肩がぶつかって、その時落としてしまった薬の材料とか見て、私が薬剤師だと分かったのですね、医者や薬剤師との闇取引となると高値になるらしいわ、仕事柄で私も公式なスパイスを買っているから」

「それでしつこく付き纏われていたんですね」

「はい、でも貴方達のおかげで助かりました。最近ではファビ・ナラードに訪れる観光客にも売り付けてるって噂だから、治安がどんどん不安定になっているのよ」

剣呑に呟いた女性の言葉を聞いてヴレイがふと視線を上げた。

「まんまと密売の巢になってるってことか、改善の目どはなさそうだな」

「ええ、それ目当てで来る外国人観光客には高値で取引されるの、医師免許や薬剤免許を持っている人間でなければスパイスは買えない規則だから」

「そうか」とひとつ納得してヴレイは視線を伏せると、女性の抱えている薬の材料を目の端で見据えた。

女性を楼門まで見送ると、広大な砂丘を眺めながら駅へ向かった。赤褐色の砂の大地は照り付ける射光で熱せられ、息苦しくなりそうな陽炎を立ち昇らせていた。

自分の影に視線を落とさなければ歩く気力さえ湧かないほど、視界は眩しさを増していた。

「おそらくヴァリスは仲間も脱獄させようと軍事資金を集めるため、

博打でスパイスを入手しようとしたが、奴らのハツタリを見破りぶちギレた。奴は遺跡好きでしかも仲間の奪還を考えているなら、スパイス入手かあるいは発見されたと言う宝珠を強奪しにファビ・ナラードへ行く可能性はある」

曖昧だが一応結論を出したヴレイは額に滲む汗を手の中で拭いた。「そっか、でも追われてる身で観光地に行くかしら、私だったら人目を避けるけど」

「行ってみないことには俺達だって動きようがない、だったら行くしかないだろ」

ヴァリスの行動を追っていけば、ザイドに近付けるのではないかと気持ちは躍起になる。だがこれといった収穫があったような無いような、中途半端な確信をゆるい紐でひきずりながら、列車は砂丘の中を颯爽と進んで行く。

途方もない砂漠を眺めているうちに列車は目的の駅に到着した。

N E X T

第39話 真昼の決闘

一時間もしないうちに列車は目的地のホームで終電を迎えた。

ガラス張りの天井を持つ巨大なプラットホームからは、迫りくる砂の山が直ぐ近くで見えた。

「さすがに砂漠地帯は暑いわね」

ルピナは綿製の上着を脱いで薄着になるが、強い日差しが直接肌を照らすので逆効果だった。

ヴレイも上着を脱いで袖をまくった。

乾燥しているのだからまだ汗は出ないが、直射日光を浴びた赤褐色の強い遺跡地帯は目に沁みた。

「意外と緑が多いんだな」

言いながらヴレイは早足で木陰の元に入った。

「ちょっとなんで休みのよ」

「俺がいた所の夏はこんなに暑くなかったからさ」

「もうバカじゃないの、シリウスあんな奴おいて行きましょう」

眉を吊り上げたルピナはシリウスを連れて奥へと歩いて行った。

観光シーズンでもあるので遺跡には各地から足を運んできた観光客で賑わっていた。

遺跡の楼門周辺には小ぢんまりとした露店がいくつも設けられ、パンフレットやお土産が売られていた。ルピナはパンフレットをもらってその場で広げると真剣に検分を始めた、その様子を二人は後ろから覗き込むと、突然パンツとパンフレットを閉じて、ルピナは声を張り上げた。

「行くわよ、宝珠の発掘現場が一番奥みたい」

言われるままに二人はルピナの後ろを付いて歩く。

どこも似たような廃墟をしばらく歩いていくと、期待が外れてブツブツ文句を言う観光客とすれ違った。そして三人も同じように肩を落とすことになった。

目的地までまだかなりの距離があるにもかかわらず、立ち入り禁止用のバリケードが敷かれていた。

案内掲示板には宝珠をロマノ国へ移送すると言う断り文が書かれていた。

「これじゃあヴァリスが宝珠狙いで来るとは思えないわね」

三人はその場で溜息を漏らすと、来た道を引き返した。

「スパイスの線で当たってみるか」

ヴレイの提案にシリウスが渋った様子で言い返した。

「非合法ですから公には探せませんよ」

「それもそうだな」

釈然としない面持ちでヴレイは古代遺跡の街を途方もなく見回した。

当時、キャラバンや商人が長旅の疲れを癒しに立ち寄ったオアシス都市は、蜃気楼かと思まがうような城壁都市だったに違いない。屋根を除いてほぼ当時のままの姿を止めている神殿郡、柱廊の天井を飾る繊細な彫刻や迫力満点の胸像など、おびただしい数の装飾は見事だった。

ルピナが歩み進めるまま廃墟と化した建造物の中を通り、一際巨大な円形闘技場まで足を延ばした。

円形の観客席が高い外壁を作り、その中心に戦士達が戦い合うコロッセオがあった。

「でかい闘技場だな」

「このコロッセオでは囚人を猛獣と戦わせる見世物が行われていたそうよ」

「昔の人はグロテスクだな」

観光客らしき人影がちらほらと闘技場の中を見学していた。

「もっと凄いのがこのコロッセオの構造よ、水を張れば模擬海戦も行える設計になっているの、現代の多目的ドームの原型になっているわけよ」

ルピナが得意げにガイドをする。

「ずいぶん詳しいんだな」

「幼い頃専属のエスコーターと何度も遊びに来たから」

懐かしそうに呟いたルピナは微かに泣きそうな笑みを零した、心配はしたがヴレイは気付かなかった振りをして「そうなんだ」と明るく返した。

ヴレイは観客席の中を通る階段を下りて行く。

外観より内側から見るその圧倒的な存在感に、全身に鳥肌が立ち、声にならない歓声が溜息となって漏れた。

「すっげえ迫力、確かに観戦するには良い所だよ」

見上げているうちにヴレイはその場にドスツと腰を下ろした。

いつもの変哲もない空が、今だけは迫ってきそうなほど大きく感じた。乾いた砂の香りが異国間をさらに引き立たせる。

「ここなら派手にルピナの相手ができそうだ」

歯を見せてニツと笑うヴレイに対して、ルピナは呆れた笑みを返した。

そうしてグルッと観客席を見回していると、階段を下りてくる一人の男が見えた。その男も他の観光客と同様、闘技場の迫力に見惚れているようだった。風景の一部として気にしないでいた。

コロッセオの中まで降りてきた男は金の髪を肩に落としていた。

シャツを腕まで捲し上げて二の腕を剥き出しにしていた。

腰を下ろしたままのヴレイの側まで寄って来た男は首から下げていた携帯電話のカメラで、闘技場の様子を撮影し始めた。インジオリックサークの観光客なのか熱心に撮影をしている、脇にはパンフレットを挟み、見るからに観光客だ。

「初めて来たんですか？」

「ああ、遺跡には目がなくてよ、そっちこそ金髪の彼女と旅行か」
撮影しながら男は陽気に答えて、チラッとヴレイに視線を落とした。すると男は掛けていたサングラスを眉間まで上げた。見上げていたヴレイも目を凝らし、よくよく男の顔を覗き込んだその時、二人は同時に声を上げた。

「お前っ、こんな所で何やってんだよ」

ヴレイは咄嗟に立ち上がって飛び退いた。

二人の男の叫び声に気付いたルピナとシリウスは何が起きたのか理解できず、眉間を寄せたまま二人の様子を窺った。

「まさかこんなバツタリ再会するとな、ヴァリス」

「え、ウソでしょ観光客かと思った、すごいプライベート見ちゃったかも」

ルピナはシリウスの側まで下りてくると、遠巻きにヴレイとヴァリスの様子を注目した。

「こんな所で騒ぎを起こしたくない、お前一人なのか、ザイドは」
二人とも回りの観光客に怪しまれないように、極力自然体で構えた。

「奴のことは知らない」

「脱獄する時、ザイドに協力してもらったんじゃないのか」

ヴァリスはサングラスを外し頭の上に掛けた。

「バカか、あんな牢獄抜け出すのに誰の力もいらねえよ」

微かな期待が外れてヴレイは小さく舌打ちをした。周囲を素早く見回すと何人かの観光客が近くを歩き回っていた、今ここで対峙するのは避けたい。

挑戦的な眼光でヴァリスはヴレイを見下した。

「今度は脱獄できないように手足を折らないと気が済まないか、それともインジョリックの国際警察に身柄を引き渡してもいいんだぞ」
「やってみろよ」

双方の間に見えない閃光が散った刹那、二人は地を蹴った。拳と拳が衝突して風が小さく渦を巻いた。

「ちよっとこんな所で始めないでよ」

ルピナの言葉を無視して、鈍い音が何度も響く。観光客を気にしているのか、拳の打ち合いが続く程度で収まってはいるがそれも時間の問題だ。

「シリウスこのバカ達を止めてよ」

「そうですね、場はわきまえないといけません、私はヴレイを止めます、その隙にルピナはヴァリスを」

「手段は？」

「お好きに」

ルピナは剣呑に笑んで了解の合図を示した。目標を定め深呼吸をすると、ぎゅっと柄を握って素早く跳躍した。

その間にシリウスは魔力で棍棒の様な杖を実体化させ、自分の身長よりも長く伸ばすと、研ぎ澄ました動体視力で一瞬の隙を見切ると、ヴレイの脇腹を狙い凄まじい力で杖を振るった。

突然のことにヴァリスは動きを止めると、その隙にルピナの一振りがヴァリスの首筋を強打した。

「なるほど、剣は抜かずに鞘ごと使ったんですね」

「そうよ、ちゃんと気絶したかしら」

その場に昏倒したヴァリスを仰向けにして、気絶していることを確かめた。

シリウスの杖に突き飛ばされたヴレイは脇腹の激痛にもだえながらヨタヨタと起き上がった。

「自警団に連絡するか」

「まったく本当にバカなんだからあんた達は」

苛立つルピナは脇腹を押さえるヴレイを陰しく睨み付けた。

「でもさあシリウスもそんなバカ力で脇腹殴らなくても、肋骨折れるかと思った、すっげえ痛い」

あまりの痛さにヴレイはシリウスの肩をグッと掴んで寄り掛かった。

「すいません、君なら平気かと思って」

のん気にシリウスは笑うが、痛みでヴレイの笑顔は不気味に引きつっていた。

同じ頃、博物館を出てきたザイドは胸騒ぎを覚えて、その場で辺りを見回した。

それに気付いたりウドも屋上から駆け下りてきた。

異変を感じ取る二人の様子にソラは合えて声を掛けなかった。砂埃が混じる横風が強く吹き荒れ、三人の黒髪を激しくたなびかせた。リウドは札を取り出し、小さく呪文のようなものを唱えながらザイドの背中に手を当てた。

「語法童子を憑けた、ザリの人格を制御してくれるが、長くはもたない」

「それはどうも、そんな深刻になるなよ、ここは観光地だぜ」
ニツと歯を見せてザイドは笑うと、その方角へ歩き出した。

NEXT

第40話 追えない背中

観光客からの通報で警備員がコロッセオに駆けつけて来ると、気絶したヴァリスを連行して行った。

物珍しそうに現場を取り巻いていた野次馬が散り散りになると、コロッセオは再び静けさを取り戻した。静けさを取り戻しつつ、見覚えのある背格好がコロッセオの観客席にあった。

己の背丈ほどあるロングコートを風に任せたまま翻し、こちらを見据えていた男はサングラスを外した。その見覚えのある顔にヴァイスは双眸を見開いた。

「ザイド」

「なんであいつがここに、ヴァリスはあいつに協力してもらってないんでしょ」

顔を強張らせたルピナは険しくザイドを睨んだ。

知った者の顔だったのでシリウスは特に警戒することはなかったが、ルピナの腕を掴んで後方へ下がらせた。

太陽が観客席の向こう側に沈み、コロッセオの中は影に覆われた。乾燥地帯は陰るとたちまち気温が下がり、肌寒ささえ感じた。

「偶然にしては出来すぎますが、帰国ついでにロマノへ宝珠を送る手はずだったのですか」

腰の横で抱えられた木箱を確認したシリウスに、ザイドは「久しぶりだな」とでも言いたげな様子で軽く手を上げて見せた。

相変わらず飄々とした態度を見せるザイドの背後から、観光客ではなさそうな男女が近寄ってきた。様子からしてザイドの知り合いのようだった。警戒するわけではないが、二人の男女はこちらを意識して見下ろしていた。

階段を下ろしてきたザイドは沈黙したままヴレイと向き合った。

二人の威圧感は呼吸すら満足できないほど緊迫した空気を作り上げた。ルピナはシリウスの背後から出てきてヴレイの袖を引っ張る。

陰険なザイドの瞳は澄んだ灰色で、有無を言わせない畏怖を感じさせた。

ここで袖から手を放せば、彼がどこかへ行ってしまうのではないかと、急にヴレイの存在がルピナの中で大きくなった。

「久しぶりだな、シリウスと一緒にだったのか、あの後急に消えるから心配したぞ」

「ま、まあな」

「まあ無事ならよかった、じゃあな」

さっとザイドは踵を返して、背を向けた。

「リウドそろそろ行くよ、また大学に顔出し来るからよ、その時はもっと部屋片付けとけよ」

ザイドと趣のよく似た短い髪の男は気だるそうな生返事をした。見納めのようにザイドはクロスセオを見渡すと悠々と階段を上り始めた、何事もなかったかのように平然と。

そんな彼の背中を見て息が詰まりそうになったヴレイは意を決して呼び止めた。

その場に足を止めたザイドは横目でヴレイを見た。

しばらくの沈黙が続いてから、一向にヴレイは言葉を発さないで、呆れたザイドは鼻で笑った。

「呼んどいて沈黙ってなんだよ、それでも俺は多忙な身なんでね、言いたいことがあるなら早くしろよ」

ヴレイは迷っていた、九年前の事を今ここで問いただす時なのだろうか。

本当の真実を知るためには本人に直接聞くしかないが、もし本当に彼が仇だったら、敵を討つことができるだろうか。

沈黙している間に、ザイドは飄々と手を振って階段の続きを上り始めた。

「待ってください、駅まで私が送りますよ」

シリウスが前へ出てくると、昔馴染みの旧友を向かい入れるかのようにザイドは快く歓迎した。

闘技場を出て駅の方へと歩いていく二人の姿を茫然と見送ったヴレイは、突然袖をルピナに引っ張られてハッと我に返った。

「やっぱりシリウスってよく分からないわ、何であいつに付いて行くのよ」

ルピナに独り言を言わせたままヴレイは自分達の他に残された二人を見た。

まだ暑さで気だるそうなりウドはサングラスの眉間を少し上げると、そのままそっぽを向いてこの場から立ち去ろうとしたので、隣にいた女が「ちょっと」と言って引き止めた。

「紹介が遅れてごめんなさい、私はソラ、こっちはリウド」

勝手に紹介されたリウドは不貞腐れた子供の様にツンツンした短い髪を掻いた。

「彼は幻獣生物学者、私はインジョリックの歴史研究協会のフリー考古学士、よろしくね。もしかして貴方はフレイヤのルピナ王女ね」

「は、はい」

困惑するルピナは何度も瞬きを繰り返す。

「こんな所でお会いできるなんて光栄です、フレイヤの歴史書に写真が載っていたわ、少し前の写真なのね、まだ髪が長かったから、で君がヴレイね」

「何故俺のこと」

「それは」とだけ言ってソラはチラッとリウドを見上げると、「任せる」と視線が言っていた。

不安そうなルピナはヴレイの腕を掴んで、リウドとソラを交互に凝視した。

「私ここにいてもいいの」

少々判断に迷ったヴレイは後のことを考え、いても良いことを頷いて示した。

「私は君とザイドの両一族の歴史を蒐集する一族よ、ラセツの妻の妹の子孫。ザイドには私の知っている限りを話したつもりよ、彼には全てを知ってもらおう権利があるの」

「権利って、何の？　っていうかラセツって何」

話の真意がつかめないヴレイの様子を見て、ソラは苦渋の色を見せて続けた。

「そのことも含めて、私の口からは説明ができないの、ザイドから話してくれない限り私からは話せない」

眉根を寄せたソラは長く伸びた黒髪を梳き上げた。

残念がるわけではないが、口を閉ざしたヴレイは彼が上っていった階段を見据えた。追えなかった背中を思い出し、拳に力が入る。

「君の村の事、気に已んでいたわ」

「村って……？」

疑問に思ったルピナは隣で沈黙を守っていたヴレイを訝しげに見つめた。

問うつもりはなかったが、ルピナは思わず口を突いて出た言葉に後悔した。人の事をしつこく詮索はしたくなかったが、真剣に彼を心配している自分が意外でもあった。

下唇を噛みしめていたヴレイは彼が上って行った階段を見つめたまま、低い声で答えた。

「ザイドは俺の仇だ、九年前俺と俺の家族が住んでいた村を焼いたんだ」

まるで作り話のような話に、ルピナは言葉が出てこなかった。まだ知り合って日は浅いが、ヴレイの過去を知っただけで、突然彼が知らない人のように見えてしまった。

「だからもう一度会いに行く」

掴んでいた袖が手から離れる。

ソラを不安げに見据えたヴレイは駅に向かって走り出した。振り向くことなく、彼の背中は見るとうちに小さくなり、闘技場の外へと遠のいて行った。

NEXT

第41話 覚醒

「ザイドは俺の仇だ、九年前俺と俺の家族が住んでいた村を焼いたんだ」

まるで作り話のような話に、ルピナは言葉が出てこなかった。

「だからもう一度会いに行く」

掴んでいた袖が手から離れていく。これ以上彼の後を付いて行くことが出来ずルピナは彼の背中を見送った。

砂っぽいことに変わりはないが、駅までの道には多くの樹木が植えられていた。

日が大きく傾くとプラットホームに明かりが灯った。灼熱の釜の中で溶かされたガラス球の様な太陽は砂漠地帯のファビ・ナラード遺跡を愁色に染め上げた。

長く伸びた影を連れながら観光客は早足でプラットホームに向かう。

「まさかロマノからの派遣兵だったなんて、ロマノはグランドラインで最強と評される軍事国家、それなのによく一個人の人間が入隊できましたね」

感心しながら鼻で笑っているシリウスはザイドの脇に抱えられた木箱を見た。

「俺の能力と「ザリ」の事を話したら即入隊許可をもらったよ、もちろん体力試験はパスしたけどな。意識は残るが俺と言う人格を保っているられるのもそう長くない、だからこの能力をとことん利用するの悪くないだろ」

「悪くないです、あなたの人生ですから。それよりルベンスが退位してしまったので傭兵契約が自動的に解除されてしまった為に、無職になってしまいました」

「じゃあお前もロマノに会いよ、俺からの紹介なら入隊できるかも

しれないぞ」

「いささかおもしろそうですけど、あの少年に引っ付いてゼノレフ国に行くのも悪くなさそうです」

「ソラの言ってた村がある国か、まあ俺には関係ないけど、シリウスがそうしたいならそうしろよ」

「村」の意味が気になったが、それよりもシリウスはヴレイとザイドの関係の方が気になったので素直に訊いた。

「聞きましたよ、ヴレイの幼い頃の話。あなたもアゲハにいたそうですね、でもその時ヴレイは、あなたが村を焼いた仇だったとは気付かなかったみたいです」

「だから厄介なことになってるんだろ」

空言のようにザイドが呟いたその時、聞き覚えのある声が二人の足を止めた。

大きく呼吸を繰り返して息を整えるヴレイは生唾を飲み込んで、背中を向けたままのザイドをひたすら見据えていた。様々な想いが頭の中を駆け巡りながら、やっとのことで彼は口を開いた。

「アゲハを出る時、俺はザイドも一緒に出てほしかった、それで一緒にインジョリック中を旅できたら、楽しいだろうなって思ってた。俺の村を襲ったのがお前だと分かった時、正直ショックだった、でもこの仇は諦めてもいいと思った」

「それは俺が犯人だと知ったからか」

「グランドラインに来る前から仇は探してたけど、正直言って諦めかけてた、もしそいつを見つけられたとしてもそこからどうするか考えてもなかったし、それがザイドだった以上もう仇は諦めてもいい、いくら犯人を憎んでも死んだ者は帰ってはこない」

ザイドは背を向けたまま一つ鼻で笑った。

「やっぱりソラから何も聞かされてないのか、それでなくてもおめでたい奴だな、死んだ奴らがそれで安らかに眠れるとでも思ってるのか、相変わらずトロい奴だな」

「だとしても俺は復讐することが全て正しいとは思わない、殺され

たから殺し返すなんて、少なくとも母さんや姉さんは喜ばない」

まるで自分自身に言い聞かせているかのようなヴレイの顔は悲痛でゆがんでいた。

「それで軍人やってるなんて笑わせるぜ。お前弱くて俺の拳全然よけてなくて、ボコボコにされてもバカみたいに俺に付いてこようとして、大怪我しても俺にキレたり憎むことは絶対にしなかったよな。本当にバカな奴だったよ昔から」

蹴散らすように肩を揺らして笑うザイドはしばらくうつむいてから、虚空を仰いだ。

「お前の村を襲ったのには理由がある、それはラセツの末裔を抹殺するためだ。それが俺の運命って奴らしい、俺にはザリって奴の魔力と人格が隔世し、お前にはラセツって奴の妖魔族の力が隔世されているらしい」

「ザリ、とラセツ？」

理解し難い話を怪訝な顔で聞いていたヴレイは、背中を向けたままのザイドに返答する言葉が見つからず、汗ばった手の平をズボンの裾で拭き取った。

「アゲハにお前が来た時、何故か分からないが俺の中のザリは眠ったままだった、ある意味それが今では裏目に出たわけだ。こうなる運命なら偶然アゲハで出逢ったあの時に決着を付けていればよかったんだ」

こちらに表を向けたザイドの灰色の瞳は微かに濡れているようだった。

外見は七年前の少年をそのまま成人にしたような姿だったが、お互いの間にあるぎこちない距離感がまるで別人と向き合っているかのような錯覚を生んだ。

ヴレイの中で無性にやるせない思いが込み上げ、拳に力が入った。「ザリは俺の祖先、ラセツはお前の祖先だ、奴らは魔界の支配者的存在だった、勢力争いで衝突しながらも、ガキの頃の俺達みたいに技量を競い合うライバルだったらしい。ある時ザリはラセツから同

盟の話を持ちかけられた、だが約束していたその日、ラセツのアジトが何者かに襲われた。だがラセツは犯人をザリだと決め付け殺した。濡れ衣を着せられ、恨みをのんで死んだザリはお前達ラセツの血を引く一族を憎んでいる、その異常な復讐心と執念によってザリの人格と魔力が俺に隔世したってわけだ、だからここで会ったのも偶然じゃない、ザリがお前を追ってるんだ」

まだ整理が付かないヴレイは双眸を見開いたまま、言葉を詰まらせた。

「ま、魔界って、そんな神話みたいな話を信じろって言うのか、俺はお前と戦いたくないだけだ」

「現にお前だってザリと同じように復讐心を持ってここまで来たんだろ」

「俺はザリとは違う、それに話を聞く限り俺達が戦う必要ないだろ、昔の奴らのすれ違いでこうなってるなら他に方法があるはずだ、目を覚ませよ、ザリって奴に操られてるだけだ」

「そうは言っても俺の中のザリは再び覚醒した、もう時間がないらしい」

「時間って」

暗闇の中を歩くかのように、一歩ずつ足を前に出しながらヴレイは訊ねた。

「俺の人格がこうやってお前と向き合える時間だ、でもザリの人格に変わっても俺の意識は残る、ザリの意志に反抗しないことを約束し、俺の意識だけが残るよう契約したんだ、ずいぶん昔にな。村を襲った時もちゃんと覚えてるぜ、だから俺を憎むのはあながち筋違いじゃないぜ」

ニツと八重歯を見せて笑うことが癖になっているザイドは、険しい表情のヴレイを見て笑みを消した。

「もし俺が宝珠を運べなくなったら、シリウスが代わりにロマノに行ってくれないか」

「安くはありませんよ」

彼らしい答えを聞いて目尻に笑いしわを作った。

怪訝しつつも怒りが闘志となってヴレイを包んでいる様子がザイドには手に取るように分かった。ザイドは記憶に残る彼の幼き頃の姿をふと思い出した。真剣な眼差しが当時と何も変わっていないかったので、思わず嬉しくて笑みがこぼれた。

「あんたは分かかってザリに従い、わかって俺の村を襲い皆を殺したのか、答えろザイドっ、あの殺戮はあんたの意思もあったのか、どうなんだ」

怒鳴り声に驚いた他の観光客が遠巻きに彼らを見ながら通り過ぎていく。

「ああ、そのつもりでやった」

長年眠っていたかのよな憎悪と怒りが、頭に血が上るかのように沸々と湧き上がった。

「どうだ、アゲハにいた時のように全力でぶつかる気になったか」

ザイドの叫びは自分自身への覚悟のようにも聞こえた。戦わせるための挑発だと分かっているながら、震える拳をこのまま冷静に押さえることも苦痛で、ヴレイは目頭に涙を浮かべた。

砂と木の葉を踏みながら、ルピナを先頭にリウドとソラが駆けつけて来た。

「リウド、術の効果が切れたわ、それと彼に話したようね、私が話すべきことを」

奇妙に吹き荒れる風に長い黒髪をなびかせるソラは顔を強張らせた。

「っち、世話の焼ける奴らだ、おい小僧、駅の反対側に行け、あるのは砂だけだ」

「はあ」

サングラスを掛けたままのリウドに言われて、眉をゆがめたヴレイは戸惑いながらも、崩れた外壁を越えて駅の反対側へ回る。後からザイドも駅の裏側へ回ってきた。

吹き荒れる風と一緒に砂塵が舞っていた。

警備兵に見つかるのは厄介だと思ったヴレイは駅を遠目で見えるぐらいまで、逃げるように遠ざかった。

まるで現実味がない、誰かが意図的にセッティングした舞台に立っているようで、ヴレイはひどく戸惑った。それなりに戦闘訓練は積んでいるもののあくまでそれは軍法に沿っているものだ、しかも賞金首を掴まえる時とも違う身を裂くような緊張感に吐き気を起こしそうになった。

対面した彼の灰色の瞳は既にザイド本人の眼光を帯びてはいなかった。かなりの距離をあけているにもかかわらず、相手との自分の力量の差が痛いほど伝わってきた。しかも荒々しい横風で砂塵が視界を狭めてしまっている。

何故自分がこんな突然、こんな局面に立ってしまったのかと憤慨な感情に駆られてヴレイは下唇を噛んだ。

口元に笑みを浮かべたザリは数歩ヴレイに近づいた。

風が一瞬止まったその時、ザリは目を皿のように見開いた。その刹那、空気の砲弾に撃たれたかのような衝撃がヴレイの腹部を襲い、その勢いで後方の砂丘まで飛ばされた。

激しい土煙を上げ、あまりの一瞬の出来事にその場は騒然となった。

「ヴレイっ」

駆けつけようとしたルピナの肩をシリウスが掴んで止めた。

砂をかぶったヴレイは腹を押さえながら、砂の中に足が埋もれた状態のまま立ち上がった。砂が衝撃を和らげたので全身を強打することはなかった。

沈黙するザリは異様なまでに近寄りがたい邪念を放ち、それを目の当たりにしたルピナは恐怖という一言では言い表せない戦慄を感じ取った。

ザリは上着の内ポケットから漆黒な札を取り出した。

吹いていた風が札に巻き付き小さな旋風を作る。ザリが腕を振るうと、その旋風は刃物のように鋭く飛来して、ヴレイの体中を容赦

なく切り裂いた。

砂で足が取られているのもあるが、それでもなくても旋風の速さは並みの動体視力では動きすら見えない。

ザリはまた腕を振る姿勢を見せたので、ヴレイは全ての迷いを捨てて意識を全身に集中させた。

「この程度からセツの末裔は」

不気味な笑みと共に旋風が放たれた。

先の倍の旋風を放ってきたことを確認すると、肌で受けた風の動きを読み取りヴレイは起用に体を曲げながら、寸前のところで旋風を避けていく。だが全てを避けきれず、新たに傷を増やした。

砂の上に深紅のしみをいくつも作った。

そのしみを見て「ここで死ぬのか」、そんな言葉がリアルに脳裏をよぎった。

見るに耐え切れなくなったルピナは傷口を押さえるヴレイの元に駆け寄った。

「バカっ、来るんじゃない」

「でも傷が」

ヴレイはルピナを追い返そうとしたが遅かった。

ザリの拳から発せられる赤赤とした光体は、天空を飲み込んでしまいそうなほど膨らみ、傷口を押さえるヴレイとルピナに向かって投げられた。

NEXT

第42話 闇に浮かぶ笑み

見るに耐え切れなくなったルピナは傷口を押さえるヴレイに駆け寄った。

「バカッ、来るんじゃない」

「でも傷が」

ヴレイはルピナを追い返そうとしたが遅かった。

ザリの拳から発せられる赤赤とした光球は、天空を飲み込みそうなほどに膨らみ、傷口を押さえるヴレイとルピナに向かって投げられた。

避け切れない、と判断したヴレイはルピナの頭得を伏せて、自分上から覆いかぶさった。咄嗟にルピナがヴレイの手を掴んだその時、敏捷な動きで二人の目の前に立ち塞がった者がいた。

光弾はその者の杖に直撃した後、放射状に分散されたが攻撃を受けた体は焦げ付いた煙を漂わせ、しばらく放心してから昏倒した。激しく砂塵が舞い上がり、土煙でザリの姿が見えなくなった。

「シリウスッ、何で飛び出して来るんだよ、おい、しっかりしろ」部分的に焦げ付いた箇所から弱い煙が上がっていた。

「シルバームで君を騙したことは、これでチャラですよ」

口元に笑みを浮かべてシリウスはそのまま気を失ってしまった。

「おい、シリウスッ、ルピナは平気か」

小さく頷いたのを確認して、ヴレイはルピナにシリウスを託し、ここから遠ざかるように言った。その様子を見ていたソラが手を貸しに駆け付けた。

煙が晴れお互いの姿が露になると、ザリは手に持っていた幾枚もの札を風船の様に膨らめると、それは大砲のような威力を持ってヴレイ目掛けて放たれた。

放たれた数は多かったが、ヴレイは俊敏な脚力と並外れた反射神経で砲弾をかわしていくが、いくつかは体をかすめた。皮膚が切れ

た瞬間、高熱に焼けた刃で斬りつけられたような激しい痛みにも襲われた。

身をもだえそうな痛みで、両膝が砂の中に崩れ落ちた。

歩み寄ったザリはヴレイの喉襟を掴んで高見にまで持ち上げた。

「案外タフじゃないか、だが生半可な攻防ばかりでは何の意味もないぞ」

傷の痛みで抵抗することもできない。

やり場のない憤りをぶつけるかのように、ヴレイは嘲笑するザリを心底憎たらしく睨みつけると、急激に目の奥が熱くなるのを感じた。

「いい目だ、怒りで我を忘れた瞳は青く発色する、それはラセツから受け継いだものだろう」

「それがなんだっ」

痛みを堪え、無我無心でヴレイはザリの額に頭突きをかました。

突然の衝撃に不意を衝かれたザリはヴレイを離し、痛さのあまりうめき声を上げた。だが頭突きをしたヴレイにもひどい頭痛が起きていた。

『罨に掛けたな』

頭痛が波打ちながら、聞き覚えのない声が聞こえた。

見知らぬ光景が広がり、突然映画館の世界に飛び込んでしまったかのような、奇妙な感覚に襲われた、おそらくラセツと言う者の記憶だ。

何者かが血に伏す傍らで、ラセツは返り血を浴びたまま悄然とその者を見下ろしていた。今にも泣き出してしまいそうな悲しげな顔で。

次の瞬きをした刹那、ヴレイの視界は元の景色に戻った。

「忌々しいラセツの末裔が」

あまりのザリの素早さにヴレイは避けることはおろか、何の反応もできずに首を掴まれた。強靱な握力で首を絞められ、呼吸ができなくなった。唾が喉に溜まり、ザリの手から逃れようともがくが、

奴の腕はビクともしない。

「何故ラセツは「力」をお前に隔世させる必要があったんだ、俺を罠に掛けたのはあいつだ、どもまでも小賢しいマネをしやがって」
双眸を血走らせ、ザリは憎悪の念を込めてヴレイの首を締め上げた。

逃げようのない絶望的な苦しみによって、本能的に死という恐怖に襲われた。だが恐怖と共に闘志は湧き上がり、瞳を真っ青に染め上げたヴレイは魔獣のごとく唸り声を上げ、ザリの腕を折れんばかりに強く掴んだ。

「こいつ、ラセツの力を抑えきれないのか」

我を失いかけていたその時、再び見知らぬ光景がヴレイの眼前に映し出された。

断片的な記憶の映像がフラッシュバックのように通り過ぎていく。

「違う……」

ヴレイは朦朧とする意識の中、蘇る記憶を推察し言葉にした。

「ラセツの妻は人間だった、ザリはラセツの妻に魔物の群衆を差し向けた、妻を守ろうとしてラセツは仕方なく、ザリを手に掛けたんじゃないか」

突如の告白に驚愕するザリはヴレイの首をさらに強く絞めた。

「あの日の事は忘れもしない、俺はあの日約束した場所で待っていた、だが同じ頃あいつの里が魔獣に襲われた、異変に気付き様子を見に行くと、里を襲ったのは俺だとラセツは決め付け無残に殺したんだ、どこまで俺を愚弄すれば気が済む」

憤まんする邪気は離れて様子を窺っていた者達に、身の危険を本能的に感じさせるほど凄惨なものだった。

「戦いの神と称された妖魔族ラセツの末裔よ、妖魔族の血は名高い、だが真は腐っていたようだな、俺はあいつを信じていた、何故俺にこんな惨いことをさせる」

悔しさの念を耐え凌いでいるかのようなザリはヴレイを砂の上に叩き付けた。

弾みで土煙も一緒に吸い込みヴレイは激しく咳き込んだ。

「お前がラセツに裏切られたというなら、それは何かすれ違いがあったんだ、本当の真実があるんだ、ラセツはお前が憎くて俺に力を隔世させたんじゃない」

確信はなかったが、ヴレイの中で一つだけ確かなことがあった。

この生まれ持った「力」に怖さを感じたことはあっても、恨みや憎しみを感じたことはなかった。

「だがもう遅い、真実がどうであれ俺の憎しみが消えることはない、共に奈落へ沈むがいい」

立ち上がろうとしたヴレイの肩を踏みつけたザリは、彼が全ての元凶かのように憤然と立ちはだかった。

砂の中に肩が押しつぶされながらもヴレイは一抹の希望を持って叫んだ。

「その前に、ザイドを返せ」

「冷徹な妖魔族が、人の血などやはり通ってはいなかった」

「ザイド、聞こえてるなら何とか言え」

ガンフォルダーから銃を抜いた。

「撃てよ、だが撃てばこいつの命はない」

言われなくても分かっていた。

それが分かっているがらわざと嘲笑い挑発してくるのだ。憎みきれない怒りでザリに定める銃口が微かに震えていた。これでは何の為に銃を抜いたのか分からない、銃口の先にあるのは間切れもなくザイド本人でしかない。だが意識があるのなら声は聞こえているはずだと。

「どうして抵抗しなんだ、お前はそんなヤワな奴じゃないだろ、ザイドッ」

膝の上にシリウスを抱えるルピナは固唾を吞んで見守っていることしかできなかった。

ザリは黒い札を取り出すと、瞬時にヴレイの顔面を鷲掴み、短く呪文を唱えた。

突然のことで驚いたヴレイは条件反射的に乱射してしまい、ザイドの身の安否を心配するという隙を見せたので、ザリは邪魔そうに銃を払い飛ばした。

「永遠の悪夢がお前の魂を蝕む、自分の創り出す幻想に苦しむがいい、そこで俺を裏切ったことを後悔するんだな」

ザリの不気味な笑みだけが闇に浮かんで消えると、辺りは暗闇に支配された。顔を掴まれていたはずだったが、己を縛るものはいく何もなかった。

不安に駆られてヴレイは夢遊病者のようにふらついていると、黒く焼けただれた少女がヴレイの手を掴んだ。皮膚は焼け落ち、溶けた眼球が自分を見上げていた。鼻がもげてしまいそうな焦げた匂いに吐き気を覚え、あまりの恐怖で声も出ずに手を振り解いた。

鼓動が皮膚の一枚下で高鳴っているようだった。

「生きるのよヴレイ、強くなって、大切なものを守るように、約束よ」

「姉さん」

どこから声が聞こえてくるのか分からず、慌てて振り返った先には、変わり果てた姿で倒れている母と姉だった。全身が硬直した。暗闇の中から現れた村人たちは無残に焼きただれ、血まみれの手で得物を振り上げながらヴレイを取り囲んだ。

逃げろと自身に命令するが金縛りにあったかのように体はビクとも動かない。喉は渴ききって声すら出てこない。

「ごめんなさい……」

涙がスツと一筋頬を流れ落ちた。

「皆を助けないで、俺は逃げたんだ、皆は巻き込まれただけなのに、母さんも姉さんも友達も俺のせいだ」

常闇の世界にヴレイの叫び声がこだました。

その様子を遠くからザリは眺めていた。手に持っていた札に指を突き刺すと、村人たちの幻影はヴレイに向けて得物を振り下ろしたのと同時に、飛んできた白い札が黒い札に張り付き炎を発して札を

焼失させた。

「ザリ、失せろ」

リウドはもう一枚札を取り出すと、札からザリに向かって稲妻を落雷させた。だがザリは高く跳躍して悠々と攻撃をかわした。口元に薄笑いを浮かべ、コートを翻すとシリウスの落とした宝珠を拾い、馱のホームへと姿を消してしまった。

一先ず肩を撫で下ろしたルピナがヴレイの元に駆けつけると、砂の中に倒れたまま、見開いた双眸はほぼ白目を向いていた。

「ヴレイッ」

思わず手で口を覆ってしまった。

「どうしようヴレイが、シリウスも火傷がひどいし」

「僕の知り合いの医者がバクコウ窟近くで店をかまえてる、案内する」

少し遅れてリウドがシリウスを背負ってやって来た。

「待って、先に私のキャンプに案内するわ、二人に応急処置をしてから向かった方がいいと思う、貴方もケガの手当てをした方がいいわ」

砂の中からヴレイを起こしたソラは困惑するルピナの肩に手をついて励ました。

「時間が惜しい、早いところ行くぞ」

NEXT

遺跡調査隊の医療班がけが人の手当てをしてくれた。

シリウスはすぐに目を覚まし自力で歩くことも出来たが、設備の整った所でちゃんとした治療を施した方がいいと言われた。

「これぐらいしかできないけど、お医者様に見せればきっとよくなるわ、私はまだここでやることがあるから、近いうちに訪ねるわね」心配していたソラだったが、気絶したヴレイを背負うリウドはいつになく真剣だったので、安心して彼らをファビ・ナラードの駅まで送り届けた。

真夜中の月光を浴びるバクコウ窟駅からリウドの知り合いと言う家までは、歩いて数十分のところだった。火傷の痛みを堪えて歩くシリウスにはかなり遠く感じられた距離だった。

案内された家に着いたとたん、シリウスは玄関口で崩れ落ちた。あわてて駆け寄ってきた医者は腰まで落ちた黒髪を振り乱し、ルピナに手伝ってもらいながらシリウスを居間のソファアまで運んだ。

「夜中に悪いな、デイル」

デイルと呼ばれた女性はリウドが連れてきた者達を見るなり酷く深刻そうな顔を見せた。

「いいのよ、それよりこの人達は」

突然の訪問者に驚いてはいたが、リウドから事情を簡単に聞くと手際よくけが人の治療に当たった。

気絶しているヴレイより、体中に火傷を負っていたシリウスの方が重症だと理解した。検診するなり酷く皮膚がただれた部分は手術を施した。

麻酔から覚醒したシリウスは三日三晩、熱と焼けるような痛みでうなされながらも葉草を煎じた苦いお茶を水代わりに飲み続けた。それから数日が経つと、火傷した皮膚は早くも再生し始め、スパイスで痛みをやわらげながら車椅子で動き回れるまでになった。

「彼の様子はどうですか？」

訊ねられてルピナは首を横に振った。

「変わらないわ、ずっと怯えたまま」

今にも泣き出しそうなルピナの目の下には隈が浮かんでいた。

「何日も怯えたまま、私を見るたびに悪魔でも見たみたいのパニックになるのよ」

閉ざされたドアを悄然と見つめていたルピナは、一人平然と佇んでいた男に鋭い視線を投げた。

窓枠に寄り掛かり、火の点いていない煙草を口に咥えたまま、リウドは淡白な視線だけをこちらに向けて答えた。

「ザイドはある能力を使って小僧自身の過去や潜在意識を強制的に開放させたんだ、心の内で封印していた記憶を見せられ精神は崩壊した、今小僧に何を言っても無駄だ」

「精神が崩壊って、過去ってまさか」

顔をしがめいたルピナを見てシリウスもあることを思い出した。

車椅子を引きながらシリウスはヴレイがいる部屋のドアノブに手をかけた。ゆっくりとドアを開け進めたと同時に中から叫び声が響いた。その声はドアを開けようとする者への威嚇の叫びだった。

それでもシリウスは怯むことなく部屋の中へと車椅子を進めた。心配したルピナとデイルも後に続いた。

ドアの回りには投げつけられたクッションやシートが散らばり、自分で閉めようとしたカーテンは無残に引き千切られ、中途半端な日差しが細く射し込んでいた。

部屋の隅で小さくしゃがみ込んだヴレイはまるで自分が襲われるんじゃないかと身震いしながら、皿の様な目で猛然とシリウスを見据えていた。

薄暗い中から青く光ったり消えたりする瞳が異様に人間離れしていて、ルピナとデイルはその場で足がすくんでしまった。

艶やかだった黒髪は掻き耑ったように荒れてしまい、何日も泣いた後の瞼は腫れ上がり、頬には涙の筋が残っていた。

「以前彼から聞いたんですが、幼い頃ザイドに村を襲われ母と姉を亡くしたそうです、その時巻き込まれた村人達も大勢亡くなったそうです、当時の記憶が一部思い出せないと言っていました」

「それはたぶん精神病の一種よ」

一歩踏み出したデイルは医者目線でヴレイを検視しながら続きを説明した。

「過度の心的ショックやストレスを受けた時になる障害で、このパニック症状もその一つよ、ザイドから受けた攻撃によって精神障害が悪化したか、または新たな病なのかも」

「ヴレイが精神病……」

ルピナは即座に理解できなかった。だが次第に冷静になる思考が嫌でも現実を突きつける。

目頭まで怒りを込み上げたルピナは必然的にリウドを睨みつけた。

「あんたザイドの知り合いなんでしょ、どうにかしなさいよ、ヴレイを元に戻してよ」

「僕にキレないでほしいな」

「他人事みたいに言わないで」

「ルピナ、何も彼のせいでああなったわけではないんですから」

険悪な空気が立ち込めると、煙草を咥えたままのリウドがヴレイのそばまで近寄った。肩をビクつかせ酷く怯えたヴレイは言葉にならない声を上げた。

「妖力とやらの使い方を忘れているようだな、んじゃ、こいつの中に潜ってみっか」

突拍子もなくリウドはヴレイの手首を掴むと、我を忘れた子供のように怯えるヴレイを無理矢理立ち上がらせベッドに押し倒した。まるで野獣の魂が乗り移ったかのように叫喚するヴレイを、力づくで押さえ付けるにはリウドの腕力だけでは危うかった。とっさにルピナがヴレイの胸を押さえつけた。

唸るような叫び声が耳の奥まで響いて酷い頭痛を起こしそうになった。

「でもそれは両者の精神に負荷を掛けることになるのよ、ヴレイの精神は混濁しているし、失敗すれば無事に離脱できなくなるのよ」

「僕の「陽術」なら自らを守りながら潜入できる」

デイルの意見にリウドはまるで聞く耳を持たず、か細く冷えたヴレイの手を強く握った。

「あなたが何故彼の為にそこまでしてくれるかは分かりませんが、可能性があるのなら、私は賛成します」

それが確実な手段なのだと悟ったかのようなシリウスの眼差しは、有無を言わせない威圧感があった。

「あんたに賭けるわよ」

「僕に賭けるな、賭けるなら小僧の信念に賭けるんだな、僕は別にこいつの為にものぐるんじゃねえし」

陰険に笑んだリウドはヴレイの方に向き直り、彼の額に手を添えて呪文を唱え始めた。

紡ぎ出す呪文の旋律を徐々に早めると、次第にリウドの意識は遠のいていった。

頬に付いた砂の感触でリウドは目を覚ました。

石と砂だけの果てしない砂漠は茜色に染まっていた。太陽が見当たらない空は薄く黄色がかった。

日差しが弱いわりには、陽炎が地平線上に立ち昇り、まとり付くような暑さは確実に体力を消耗した。これも深層意識への侵入を拒絶している反応だとリウドは理解した。

灼熱の大地をひたすら歩いた。

少年が何処にいるかも知れず、ただ途方もない孤独感が大地を埋め尽くしていた。

自分の呼吸が耳に障る。額やこめかみから滝のように汗が流れ落ちる。

歩き疲れ、石のように重くなった足が止まった。

風も吹かない茫漠の砂の大地を見回していると、何かの影が自分

に向かって走ってきた。影は狼の群れだった。狼はリウドを警戒しながら取り巻いたが、攻撃してくる様子はなくまた群れになって遠ざかると、群れは一塊になった。

リウドは駆けつけて様子を見に行くと、一塊になった狼の群れは巨大な鳥の死骸となって横たわっていた。すでに腐敗した死臭が漂い、鼻の奥を痛くした。

「動物の死骸か、答えを導き出そうとしても見つけれない葛藤か」
するとどこからともなく二羽の鳥が羽ばたいてきて、その死骸の上止まった。

「つがいの鳥、選択肢に迷っている」

何周カリウドの周りを飛ぶと、誘導するかのように付いて来られるスピードで飛び始めた。

砂に足を取られながらもやつのことで砂丘を越えたところで、ナイフによって切り落とされたかのような断崖絶壁が眼前に広がっていた。

その断崖の端に幼い少年らしき人影が膝を抱くようにして座っていた。肩に落ちた黒髪と、華奢な体に涙で濡れた紫紺色の大きな瞳を見ると一見少女ではないかと身間違えてしまいそうだった。驚かさないうちにそつと少年を覗き込むと、頬に涙の筋を残し、眼下を茫然と眺めていた。

少年が見据える先に広がっていたのは機械文明が発達した都市だった。その街がインジョリックスパークにある都市なのだろうとリウドは解釈した。

「お前と話がしたい、そっちに行ってもいいか」

少年の顔が少しだけこちらを向くと、とたんに立ち上がって走り出した。

「おい、待てッ」

NEXT

第44話 想いの露

「おい、待て」

走り出したヴレイの後を咄嗟にリウドは追いかけた。砂に足を取られ、回復しかけた体力がまた奪われる。

息を切らしたリウドは膝に手を付き、うな垂れるように深呼吸を繰り返した。立ち止まったりリウドに気付きヴレイも足を止めた。

悄然とした面持ちでリウドを見つめているヴレイの拳は小刻みに震えていた。

「ヴレイ、話をしたいだけだ、もう怖いものはない」

しゃべるとまだ息が上がってしまうリウドはヴレイを怖がらせないようにゆっくりと話した。

言葉を聞き入れたヴレイは唇をもそもそ動かすと、声を震わせながらたどたどしく答えた。

「怖い夢を見た、たくさんの人が炎に包まれて、魔獣がみんなを襲ってた」

しゃべりながら小さな肩を震わせると、目頭から大粒の涙が零れ落ち、声を押し殺して泣き出した。

「すぐく怖くて、逃げるのに精一杯だった、みんなを助けられなかった」

「仕方ないこともある、逃げて当然だ」

「俺のせいで友達も母さんも姉さんも殺された、だからみんな怒ってるんだ」

「怒ってなんかない、誰もお前を責めちゃいない」

「ウソだ、そう言ってみんな怒ってるんだ、やめろっ、その目で俺を見るなあ」

叫び声と共に吹き荒れた突風は刃となってリウドを襲った。身を返して致命傷は避けられたが、皮膚をかすめた切り傷からは生暖かい血が淋漓した。

「俺がこんな「力」を持っているから、村のみんなも殺されたんだ、俺はいちやいけなかったんだ、だがお前もここから出て行け」

渦となって吹き荒れた突風は砂と一緒にリウドの体を中にさらい、高見まで巻き上げるとそのまま地上へ叩き落とした。

腕や肋骨に鈍い音が響き、鳴咽と共に吐血した。じわじわと広がる激痛に体がかがめてリウドは痛みに耐えた。

虚ろと上げた視線の先には、頭を抱え込み言葉にならない呻き声を発するヴレイ。

彼の姿を見詰めながらリウドはどうか上半身を起こした。朦朧としながら下唇を噛みしめ意識を失わないように堪えた。

「泣きたいだけ泣け、気がすんだらここから出るぞ」

声に反応したのか、猛然と顔を上げたヴレイの瞳は紺碧色に発色していた。

「ちっ、我を忘れてやがる」

舌打ちをしたリウドは全身に電流が走っているかのような痛みと戦いながら、ふらつく足取りでヴレイに近寄り、殴りかかるかのような勢いで喉元を掴み上げた。

「馬鹿かテメエは、ここから出ない限り何も解決しねえんだ、それでいいなら勝手にしろと言いたいところだが、ボランティアでお前の中に入ったんじゃない、ここに閉じこもっていることは守れなかった人達への償いにはならねえんだ」

怒鳴り声に圧せられてヴレイは震える瞳を皿の様にしてリウドを見上げた。

「後ろを見ろ」

言われて後ろを向くとそこには一人の女性が立っていた。

白いドレスを身に纏っている。細身で長身の女性はリウドと同じ黒髪と灰色の瞳をしていた。

「僕のお袋だ、僕の一族は自然界の「力」を借りることができる能力を持つ、世間一般に言われる魔術士と似たようなものだが、またそれとは種類が違う。自然界には陽と陰が存在する、僕達はその「

天秤の力」を借りる」

リウドは女性の方に手をかざすと、一人の青年が現れた。

「あの人、ザイド」

「陰陽は自然界の天秤を水平にしている、あいつは「陰」の力を借り、人の記憶を使って夢や幻覚を見せることができる、その結果、お前は自身の記憶に侵され深層意識に閉じこもった」

すると女性は樹の幹に縛り付けた縄紐の輪に首を通した。

「あっ」と声を上げたヴレイはその光景を直視したまま愕然と立ち尽くした。人が死ぬ瞬間を目の当たりにし、焼かれた村で死んでいた母と姉のことを思い出した。

たまらなく目の奥が熱くなり、目尻からドツと露があふれ出した。「ザイドにザリの力が隔世していると知ったお袋は正気を失い、あいつの前で自らの命を絶った、僕が駆けつけた時は手遅れだった、この記憶は僕の「陽」の能力を使い現場で起きたことを垣間見たんだ。これ以上ザリを野放しにしとくわけにはいかねえ」

二人の姿が消え、再び砂の景色に戻った。

肩をヒクヒクと震わせ、嗚咽をもらしながら泣きじゃくるヴレイを冷徹にリウドは見下した。

「ここにずっと居るのもいい、選ぶのは自分だからな、でもここから出ない限りお前の時間は止まったままだ、大事なものをまた守れないんだぞ、また助けられないんだぞ、僕はボランティアで言うてるんじゃないぞ」

砂の上に尻を付いたリウドは内ポケットから煙草を取り出して火をつけた。肺まで煙を吸い込むと、空へと煙を送った。

「もう足踏みしてる暇なんてねえ、僕は望んだ未来を現実にするためにここまできた、お前はもうしたいんだ、このまま自分を責めてクサるか、やるべき事のために目覚めるか」

荒々しかったヴレイの瞳はせせらぎの様に静かな紫紺色へと戻っていた。

茫漠な砂の荒野を見つめる眼差しはまだ不安そうに彷徨し、必死

に答えを探しているようだった。

流れ落ちた涙が砂の上に落ちた時、あたり一面は地平線まで見渡せる広大な草原地帯に変貌した。青々と茂った草の上を青嵐が吹きぬけ、薄い雲が地平線の真上に大きく寝そべっていた。

「ザイドを助きたい、でもあいつとは戦いたくないんだ、友達だから」

咲き乱れていた花の花卉が辺り一面に撒き散る中で、ヴレイの体は子供から大人の姿へと変化した。漆黒の髪が風になびいて、光を纏う。強く吹き荒れ始めた風がお互いの服を激しくなびかせる。

予兆もなく地平線の向こうから龍の様などす黒い雲が雪崩のように迫ってきた。

「おい、ヴレイ落ち着け」

「一度妖力が乱流したらきつとザリを倒すまで戦い続ける、セイヴァでもそうだった。幼い頃から俺は体力も運動能力も人間離れしていたから皆俺を怖がって軽蔑してた、妖力の影響だって母さんから聞かされてた。アゲハでザイドに会うまでは、仇とか復讐とか偽の正義感を振りかざして過去と戦ってきた」

その時轟音と共に大地は地響きに襲われ、突如大地に亀裂が走るとリウドは逃げる間もなく、亀裂の狭間に吸い込まれた。とつさに割れた地面を掴んだが、闇を吸い込んだような狭間はリウドだけではなく大地をも飲み込もうとしていた。

「でも俺はあいつに会って変れたんだ、そのおかげでセイヴァでも何とかやってこれた、この力であいつを傷つけてしまうなら、こんな力なくなればいい」

このまま狭間に落ちれば離脱できなくなると感じたリウドは、愕然と狭間を見下ろしながら我を失い掛けてるヴレイに怒鳴ることしかできなかった。突風はさらに強くなり、稲妻が暗雲の中で轟いていた。

「ヴレイっ、自分だけが苦しいと思うな、誰しもが自分の中にある何かと苦しみながら生きてるんだ、だからどこまで逃げようが無意

味だつてことがわかんねのか」

地を掴む手から徐々に握力が抜けていく、軟くなった地面は少しの振るえでも崩れ落ちそうだった。宙吊りになった足の下方には闇が大きく口を開けていた。

「くっそ、もうもたねえ、過去を変えることはできない、でも未来はこれから決められるんだ、ヴレイっ」

その時、掴んでいた地面が割れた。

一瞬時が止まったかのようにだった。

息も止まった刹那、落ちる寸前で手首を掴まれ、危機一髪のところで闇に吸い込まれずにすんだ。

決死に手首を掴むヴレイは闇に引きずられまいと奥歯を噛みしめ、目頭に溜まった露を必死になってこらえていた目からはもう戸惑いや迷いは消えていた。

「帰りたい、皆のところに」

よしと頷いたりウドはもう片方の手で地を掴み、ヴレイの力を借りて地上へと這い上がった。

N E X T

第45話 星霜

視界が鮮明になるまで日の光が眩しくて目の奥が痛かった。それでも近くに誰かいることを察したヴレイは渴いたのどを開いて声をかけた。

「ノア……」

まだ目の覚めていない虚ろな呼び声にその者は振り返った。

「目を覚ましたみたいね、ヴレイ君」

見知らぬ女性だった。腰まで落ちた髪は金髪で、毛先は丹念に切り揃えられていた。洗濯物をしまい終えたその女性が日向の下に出てくると、白い肌に新緑色の瞳が透けてしまいそうで印象的だった。

するとその女性の後ろから、心配そうな顔をしたルピナが猫の様に身がかがめて出てきた。眉間にしわを寄せて今にも泣き出しそうだった。

「よかったあ……」

顔中のしわを中心に寄せて笑う彼女を見て、泣かれるのではないかと思ったヴレイは胸を撫で下ろした。

枕から頭を起こそうとしたが、気持ちが悪いほどの倦怠感と圧迫されるような頭痛に襲われた。

「どれだけ寝てた」

「三日間よ」

妙に彼女の声が懐かしかったので、瞼をこすりながらヴレイは思わず頬をゆるませた。

「なによ、人の顔見て笑うなんて」

ルピナが恥かしそうに唇を尖らせた。

二人の様子を見守っていた女性はベッドに腰を下ろすなり、横になっていたヴレイの額に手を当てた。

「熱はない見たいね、バクコウ窟ではありがとう、私はデイル、リ

ウドの知り合いで薬剤師兼医者をやっているわ」

「じゃあここは」

「私の家よ、うちと言ってもこっちは薬を売ったりこうやってケガ人を治療する離れよ、すぐ隣に住居があるわ」

消毒液や薬の匂いにするのはそのせいかと納得した。

気付けば体のいたる所に包帯が巻かれていた。着せられている服は麻生地ゆったりとしたワンピースだ。たぶん患者用の服だろうとヴレイは袖を見ながら思った。

「そうか、手当てありがとう」

「肋骨が二本折れていたわ、傷口は深くて五針縫う傷があったけど大丈夫よ、安静にしていれば全治四ヶ月ってところね」

「四ヶ月も」

目を丸くした頭を起こそうとして、力を入れた腹部に痛みが走った。

「まだ起き上がれないわよ」

苦笑いをしたデイルは引き出しに常備されている治療道具を確認し始めると、部屋のドアがノックされた。

「無事帰還しましたね」

ドアを開けて顔を出してきたのはシリウスだ。頬や首にガーゼを当てている箇所は火傷を負ったところだと察した。手にも包帯を巻いているところを見ると、服で隠れたいる部分にも包帯が巻かれているのだろうと、負い目を感じたヴレイは顔をしがませた。

引き出しの整理を終えたデイルは「洗濯した服も一緒にしまっておいたからね」と言って、後からやってきたリウドの肩を軽く叩いて部屋から出て行った。

黒縁で幅の狭い眼鏡を掛けたりウドは寝癖の付いたままの髪をかいて、ドアの縁に気だるそうに寄りかかった。

「君の荷物は無事ですすよ、ダグノートとか大事そうなものが入っていたので」

「悪いな、ありがとう」

小さな戸棚にダグノートと携帯電話が丁寧に並べられ、その下には長旅で汚れた鞆も置かれていた。

様子を窺いながらヴレイは少し恥ずかしそうにうつむくと、リウドへと視線を上げた。

「あの、ありがとう、リウド」

不適に笑んだリウドは近くにあった丸椅子に腰を下ろした。その長い足を組み、腕を組むと猫背になった。鋭い眼光を放つ灰色の瞳や取っ付きにくい顔立ち、見上げるようなその長身といい、見れば見るほどザイドとよく似ていた。

リウドは笑んだだけで何も話さなかった、代わりにルピナとシリウスが他愛のないことを延々と話していた。その内、お昼の準備をするからとデイルの呼び声がかかり、皆が部屋を出て行くのを見送りながら、最後に部屋を出ようとしたシリウスを呼び止めた。

背もたれに分厚いクッションを入れて上半身を起こしてもらった。

「ランチの後に話があるとは、どうしましたか」

火傷の箇所が痛むのか、椅子に座ろうとしたシリウスの動きはぎこちなかった。膝を曲げるにも何かを支えにしなければ傷に響いて辛そうな様子だ。

「話した方がいいと思って、ていうか聞いてほしいんだ」

シリウスの茶色い瞳をまっすぐ見据えてから、布団に視線を落として話し始めた。

「拾われた日は雨が降ってた」

野良猫のたまり場は多少の雨風も防げる建物の隙間が多かった。ここしばらく弱い長雨が降り続き、幼いヴレイは空腹と寒さで身を縮めているしかなかった。無断で父の元を飛び出した手前、簡単に帰ることはしたくなかったが、小さなプライドは子供の我がままでしかない事も分かっていた。

「母と姉を目の前で殺され、まるで生きる気力がわかなかった。姉

との約束は守りたかったけど、それすらもうどうでもよくなつた、こんな不気味な力を持った子供の居場所なんてないと思つてた、現に住んでいた村でも偏見の視線を受けてきた、親父は俺を探そうとしなかった、その証拠にセイヴァの公安部は誰一人来なかった」そんな苛立ちも募らせ、無気力だったヴレイは裏路地の隅から動こうとはしなかった。そんな時、ザイドと知り合う切っ掛けをあつた男のとの必然的な出逢いによって果たされるが、同時にネジが外れたままの歯車も動き出した。

「俺のことなんてほつといてくれ」

「お前が死ぬのは勝手だ、だが死んで何が分かる、お前に何があつたかは知らないが死んだつもりで生きてみる」

若干十歳のヴレイは何も言い返せなかった。生きる術と約束を果たすためには男に従うしかなかった。

シリウスは黙つてその話を聞いていた。

「アゲハの団長がそう言つて、幼い俺を拾ってくれた。この力の使い方も教えてくれた、手の甲に印を描いて妖力を手に集中させる、それを爆発的な威力を持たせて放出させる技を覚えてくれたのは団長だ、それなりに戦い方も教えてくれたけど、俺はそこにずっと居ることはできなかった」

団員になつて丸三年がたった頃、ヴレイの求める「強さ」と匪賊である彼らのしている事は、明らかに相反していた。彼らにそれは間違つていると告げる勇氣もなく、だからといって警察に通報できる度胸もない。拳を震わせながら少年は団長にアゲハから退きたいことを告白した。

団長は膝を曲げてヴレイと同じ視線になると、うつむくその顔を上げた。

「お前にこの仕事をする覚悟がないことは分かつていた、臆病で弱い奴だ、だからここに入れた、お前は自分でここから去ると決めたんだ、だったら自分の信じる道を進め、それだけ強くなれたんだか

らな」

幼いヴレイは込み上げる想いを抑えきれず、涙した。

「皆いい人達でした、でも皆がすることをこれ以上見たくないんだ、だから、今までお世話になりました」

頭を深く下げると、瞼に涙がたれて床にぼたぼたと雫が降った。

唇を噛み締め、水のような鼻水を何度もすすった。

それが団長に言った最後の言葉だった。そしてザイドを見たのもその日が最後だった。

「それをシリウスに言っておきたくて、やるべき事の為に、そこから出ないと何も変らないってリウドが言ってたけど、あの時の俺はちゃんとそれを知ってたんだなって思い出して、また見失うところだった」

情けなく笑ったヴレイは瞼を伏せた。

「何も深く考えることはないですよ、所詮後悔の連続なんですから、なんて言えるほど私はデキた人間じゃありませんが、話してくれて嬉しかったです」

穏やかに笑んでシリウスは椅子から立ち上がった。

「シリウス、庇ってくれてありがとう、おかげで俺もルピナも軽症ですんだ、それにあの時助けてくれなかったら、きっと俺はこの手でザイドを……、俺もアゲハの奴らと同じになる」

語尾を口の中で濁したヴレイは太い眉根を寄せて苦々しく顔をゆがめた。

「君なら大丈夫ですよ、彼らとは違います」

シリウスはヴレイの肩を軽く叩くと、ローブを翻し部屋から出て行った。

離れの表に出るとあまりの眩しさに一瞬視力を奪われた。目を細めた先には、真昼の日差しで赤褐色の砂丘が淡い薄紅色に変色し、踊るように陽炎が立ち昇っていた。

傷を痛めないようにゆっくりと隣の住居に向かっていった途中、直

立不動で剣を構えたままのイルピナを見つけた。太陽に表を向けたまま目を瞑っている、静かに深呼吸をするとそっと剣を下ろした。首筋まで流れ落ちていた汗を、手首に巻いた汗止めの布で拭き取った。

「熱心ですね、傷はもう痛みませんか」

「こんなのかすり傷よ」

言いながらも剣を鞘に収める際、包帯を巻いていた腕の動きが鈍かった。

「ヴレイの容態は」

「良好ですよ、心配ならお見舞いに行ったらどうです」

「心配なんてしてないわよ、完治したらみっちり私の稽古に相手してもらうんだから」

砂漠地帯ではあるがオアシスに近いデイルの家の周囲には、樹木が多く生えていた。ファビ・ナラードほど砂漠地帯という印象はない。

少し見回せばバクコウ窟の楼門を近くで見ることができた。楼門周辺には縁日のように賑わう市場に大道芸人や軽業師が芸を披露し、食事ができそうな屋台が軒を連ねていた。

積荷を運ぶ馬車が近くの舗装道路を行き来していた。

時折、旅人やロバに荷台を引かせた商人などが「薬・治療」と書かれた看板を見付け、薬を買いにデイルの店に立ち寄りたりしている。そんな穏やかな喧噪に目を配りながらシリウスが口を開いた。

「時に何故ルピナは彼に協力しようと思ったんですか」

唐突に訊ねられルピナはヴレイの寝ている離れに目を向けた。

「協力ってほどでもないけど、それは」

NEXT

第46話 失恋

「何故ルピナは彼に協力しようと思ったんですか」

唐突に訊ねられてルピナはヴレイの寝ている離れに目を向けた。

馬車が通り過ぎた後に残る風が、硝子の様に透き通る黄金色の髪をふわりと揺らした。

「成り行きみたいなものかしら、シルバームで私達に協力してくれた時からなんとなくまだ一緒にいる感じかな、それにあいつ戦闘慣れしてるじゃない、だから私の修行相手にぴったりだと思って、素直にそれだけよ」

曇りのない碧眼は真っ直ぐヴレイに向けられていた。

「じゃあゼノレフ国に着いてしまったら寂しいですね、先生がいなくなってしまうって」

「変なこと言わないでよ寂しいわけないでしょ、シリウスこそなんでもまだ一緒にいるのよ、てっきりザイドと行くのかと思ったわ」

「ロマノ国にも興味はありますが、探し物の手がかりになるのなら、何にだって付いて行きますよ」

淡泊にシリウスは笑みを見せるが、ルピナはその薄情そうな笑みに目を細くした。

「それにしては体をはって守るのね」

木陰の下で立ち止まったシリウスは乾燥した荒野を眩しそうに見つめた。ただでさえ切れ長で細い目がさらに細くなって、線のようになくなってしまっている。だがその隣でルピナも線のように目を細めた。

昼を過ぎてからさらに強い日差しが大地を照らし、陽炎が遠くで踊っていた。

「ザイドはヴレイにできるだけ戦闘心を持ってほしいと思っているでしょう」

「どうということよ」

「それが唯一ヴレイをザリから守る方法だからです。自分自身の手では彼を守れないと覚悟しているんですよ、もしかしたらザイドはヴレイに殺されたいと思っっているのかもしれませんが」

口が半開きになったままルピナはあっ氣にとられた。

「まさか、でも仮にその話が本当だとすると、あの場でシリウスがヴレイを庇ったのって、ザイドの願いを考えての行動よね」

「半分は合ってますが、半分違います。庇わなくともヴレイはあそこで絶命はしなかったでしょう、それよりも彼が痛手を負うことによって力を錯乱させてしまい、ザイドを殺してしまうと思ったからです」

「力が錯乱って、そんなこと……」

シリウスが口にした意味不審の言葉に疑念を抱き、ルピナは眉根を寄せた。

「魔力にもあるんですよ、興奮したり危機的状況に置かれたりすると自分では制御できなくなる障害です」

「また障害」

「リウドがヴレイの中に潜る前、彼は我を忘れてパニック状態になってましたよね、戦闘時にああいうことが起こるのと同じですよ、妖力を受け継ぐ血筋とはいえ彼の場合は「ラセツ」と言う者から隔世された力が強すぎってしまったのでしょうか」

「何かと問題の多い奴」

腕を組んだルピナは溜息をついてから、ハッと何かに気付いてシリウスを見た。

「ちょっと待って、って言うことはシリウスはザイドを守ったの？
どうして」

また不審な顔をしたルピナだったが紺碧色の瞳は興味心身だ。
樹の幹に背を預けたシリウスは情けなく薄ら笑みを浮かべて、「んー」と首をかしげた。

「聞きたいんですか、驚かせちゃいますよ」

「何よそれ、まさかザイドのことが好きなの、ちょっと待て、同性

よ」

突然体をシリウスから引いたルピナは、瞼が潰れてしまいそうなぐらい眉をゆがめて、愕然と目を見開いた。

数秒の沈黙を置いて、噴出し笑いだけが響いた。

「驚きました？」

「当たり前でしょ、はあ、ウソでしょ」

「ウソです。昔、ザイドに似た人に出会ったんですよ」

「まさか、男？」

「だからさっきのは冗談ですよ。ライセンスも取らずに、逃げるようにグランドラインに渡って来たのもそこにあるんですが、まあ失恋ですよ。ある屋敷で護衛をしていた頃です、いろいろあって魔導士になるのを止めようとしてののを、引き止めてくれた女性がいたんです、その女性が勇猛果敢の魔導士で、でもザイドのように不器用なんですよ」

「何が？」とルピナが訊ねたところで、身なりを整えたリウドが表に出てきた。

サングラスの眉間を少し下げると、こちらに気付いてヨタヨタと歩み寄ってきた。

「めずらしいツーショットだな」

「リウドこそ、どこに行くのよ」

乾燥しているからまだいいものの、この灼熱の暑さの中で黒い革ジャケットを着ている様は、二人に渋い顔を作らせた。思わずルピナは訊いてしまった。

「暑くない？ その格好」

「中はシャツだけだぞ、袖ないし」

「そういう問題？ どこに行くのよ」

「ファビ・ナラードに行ってくる、ソラが小僧の様子を見に来たいと連絡があったからな」

「迎えに行くわけね、仲がよろしいこと」

「ヤイいても何もでないぞ」

サングラスの眉間を上げたりウドは踵を返すと、「あ」っと言っ
て付け加えた。

「デイルが消毒の時間だから帰ってこいとき」

飄々と手を振るリウドは足早に行ってしまった。

「あいつ本当に学者？」

あきれ返ったルピナは、シリウスが背もたれにしていた幹に自分
の背を預けると、葉屋で養生を続ける彼の帰りを気長に待つことに
した。

「失恋か」

NEXT

第47話 魂の淵

朝方はまだ空気が冷え込んでいた。火が焚かれて暖かくなった部屋で朝食を終えた頃、リウドはソラを連れてデイルの家に帰ってきた。

日が昇りきって気温が上昇すると、容赦なく陽射しが照りつけた。ベッドの側に置かれていた椅子に腰を下ろしたソラは、シリウスに手伝ってもらいながら上半身を起こしたヴレイの様子を見て苦笑いをした。

「だいぶ重症だったようね」

「笑いごとじゃないし、で早速だけどあんたは俺とザイドが何故こうなったかを知ってるんだな」

うつろに上目遣いをしたヴレイの目元に隈が浮いていた。眠れていないのか、瞼に深い二重を作っていた。

「ええ、知っているわ、少しやつれたみたいね」

ヴレイは何も言わなかったので、ソラはしがめいた唇を舐めるとそのまま続きを話した。

「こうなることは分かっていたわ、もっと早く君に伝えたかったけど、ザリとラセツの話はザイドから聞いたでしょ」

「ああ、その点で一つ訊いていいか」

直視してくる紫紺色の瞳が酷く険しかった。

ソラが承諾する前にヴレイは質問をした。

「どうして俺達がこうなる前に俺には話さなかったんだ、あんたはインジョリックサークにいたんだろ、それに俺が何処にいたかも知っていたんだろ」

「ええ、ジルニクスの護衛軍セイヴァ、でしょ」

「だったらどうして来なかった」

押し殺したような怒鳴り声に圧せられソラは生唾を飲み込んだ。近くで見守っていたルピナもヴレイの憤然した形相を見て息をのん

だ。それよりもヴレイが軍人だと言うことにも驚いていた。

「それには理由があって、私に憑いていた呪縛はラセツとザリに降り掛かった悲運に関係しているのよ、長い話になるわよ」

「それでもいいから話せ、昔の奴らのせいで俺とザイドはこんな事になったんだぞ、無視できない」

「そうね」

熱心なヴレイの視線に一筋の希望を感じたソラは、肩に押し掛かっていた積荷を下ろすかのように安堵すると、話し始めた。

魔界が本当に存在するのかは今尚皆無だが、太古の昔、妖魔族がいたことは発掘された遺跡や、長年の調査で明らかにされつつある。既に血は絶えていると言われている妖魔族、架空の地と言われている世界に悲運を共にした彼らはいた。

妖魔族であるラセツは両大な勢力を誇る一族の長でありながら、人間の女性と結婚した。

彼女はソラの祖先「ミコト」の姉だった。だがミコトは妖魔族を姉の結婚相手として認めることができなかった。

結婚して数年後のこと、ラセツの弟が「ザリ」との同盟話を持ちかけてきた。

ザリは魔族でありがらラセツと対等に話をするができる唯一の人間だった。そしてラセツと本心で話し合える友でもあり勢力争いの敵でもあった。

だが交渉当日、ラセツの城を構えた里が魔獣の群集に襲われてしまった。ラセツの妻は魔獣に襲われ、多くの民が命を落とした。

城内にいたザリが真犯人だと言う情報を弟から入手し、ラセツはやむなくザリを手に掛けた。

ザリが血に伏す傍らで、ラセツは何故こんな事になってしまったのかと永遠と無念の淵に落ちていた。

「何故俺を殺める、罠に掛けたのか、ラセツ、この恨みは必ず果たすぞ」

ザリが死んだ直後、魂と魔力は冷たくなった軀から抜け出し、遙か未来の時空へと飛び去ったのだ。

子孫へ力を隔世させたことに気付いたラセツはザリを追うように、自分の力を未来へ隔世させる為に、自らの命を絶とうと決意する。命を絶つ前にラセツはミコトに頼み込み「ある」呪いを掛けることにした。

ある呪いとは、今日起きた事を歴史として代々記憶し続け、そしていつかの未来で力を隔世した二人の子孫が出会うその前に、この事を伝えるよう呪いを掛けたのだった。

「力を隔世させられた者達にこの事伝える役目が私の中で覚醒したけど、ラセツを認めていなかったミコトは姉を危険にさらした恨みが、ラセツの子孫には話せない呪いも掛けられていたの」

長い話に区切りが付いたらしく、部屋の隅で聞いていたルピナとシリウスは肩の力を抜いて、小さく深呼吸をした。

「それで俺には話せなかったのか」

「ザイドから君に話されない限り、こうやって話すことが出来なかった」

理由を知らなかったとはいえソラを怒鳴ってしまったことに負い目を感じたヴレイは「すまなかった」と素直に謝った。

「いいのよ、むしろ安心したから」

ヴレイにはソラの発言が分からなくて眉をひそめていると、足を組みなおしたソラが改めて口を開いた。

「話は変わるけど、母親のこと覚えているかしら」

「まあ、なんとなくは」

唐突の質問に戸惑ったヴレイは二、三度瞬きをした。

「ラセツの血を引く家系だから、妖魔族としての妖力は潜在能力として生まれつき持っているもの、本来なら君もそうだったはずなの、母親のように無理に目覚めさせない限りね」

その言葉に、封印していた記憶が微かに甦り、ヴレイは目に掛か

る前髪の間から、鋭くソラを睨みつけた。

「だけど君の場合、ラセツの力がそのまま隔世遺伝してしまった、血を受け継いでいるとはいえ人間の体には負担が大きいのよ」

「つまりどうということだ」

慎重に訊ねたヴレイはソラの碧眼をどこか不安げに凝視した。

時折吹き込んでくる風がルピナには静寂すぎて落ち着かなかった。ソラの長く落ちが黒髪がまぶしいくらいに艶めいている、その後ろで沈黙を守るリウドはヴレイの安否を気にしながら、まるで立会人をしているかのように見えた。

「乱流って知ってるわよね、力が制御できなくなること」

「それって、セイヴァのディウアースのことじゃ……」

床に視線を落としていたシリウスの細い目が微かに上を向いた。ルピナがそれに気付いてシリウスの袖を少し掴む。彼女の言いたい事は分かっていた。昨日、二人で話した事とよく似ていたのだ。

「そうよ、その兵器は君の妖力を源に動いているでしょ、君の母親が潜在能力を使って開発したシステムよね、母親は君の「力」を案じて、我が子がその力に取り込まれないように、使い方を誤まらないように鎧を作った、でも結果その鎧が逆に君の体を蝕むのよ」

「な、なんだよそれ、今更あれに乗るなってことか」

「乱流がこれから何回も続けば、いずれはその反動が君を妖魔族にしてしまうかもしれない。ラセツとザリがいた時代から何千年もの時が経って、現代の一族は普通の人間と同じなの、乱流が起きるのは心身に負担が大きいからよ、だからすぐに決断しろとは言わないけど、君が望めば妖力の封印ができるわ」

「妖力を封印……」

怪訝するルピナとシリウスは足の裏に根が張ったように、その場に漠然と立ち尽くした。

口が開きっぱなしのヴレイは布団の上に視線を落とし、あ然としたまま固まってしまっている。

「まるで現実感のない話だな、でも事実なんだろう」

ソラは一つ頷いた。

「決めるのはザリとの決着がついてからでもいいのよ」

「決着って、俺はあいつと戦いたくない、ザイドを助けたいんだ、勝手に決め付けるな」

八つ当たりのような口調でソラに怒鳴るヴレイを見て、あきれ返ったリウドがようやく沈黙を破った。

「理解しろよ、ザリの人格は二度も覚醒してる、一度目はお前の村を襲った時、二度目はお前がグランドラインに来た頃と同時期だ、二度目でザイドの人格の寿命はいつ終わってもおかしくない、時間がないんだ」

「そんな……」

酷く意気消沈したヴレイだったが、次の言葉が出てくるまで時間は掛からなかった。

「それでもザイドを助ける方法を見つけ出す、ラセツとザリの間にすれ違った何かがあったんだ、でなかったら力を隔世させてまでラセツに復讐しないだろ、微かに俺はラセツの記憶を見たんだ、それにソラが話した目線はラセツのものだろ」

「その通りよ」

「じゃあ、ラセツの見ないところで誰かが糸を引いていたかもしれない、二人を貶めた本当の真実がまだあるのかもしれないだろ、ソラはそこまで知らないんだろ」

期待はしてないが、焦燥するヴレイは思わず身を乗り出した。他にも何か隠しているのではないかと、訝しげに眉根を寄せた。

もはや彼に意見するのをやめたリウドも様子を見守る他なかった。外の気温が上昇する一方で、この部屋の中の空気は時間を追うに連れて張り詰めたものになっていた。

ベッドと真正面に対したソラは腕を組み、その返事をした。

NEXT

第48話 これからの道

「誰かが影で糸を引いていたのかもしれない、二人を貶めた本当の真実がまだあるのかもしれないだろ、ソラはそこまで知らないんだろ」

期待はしてないが、焦燥するヴレイは思わず身を乗り出した。他にも何か隠しているのではないかと、訝しげに眉根を寄せる。

外の気温が上昇する一方で、この部屋の中の空気は時間を追うに連れて張り詰めたものになっていた。

ヴレイと真正面に対したソラは腕を組み、その返事をした。

「ラ・バジデイスという村へ行きなさい、その村にラセツの弟の血を引く子孫がいるわ」

「弟……、その村ってどこに」

「ゼノレフ国にあるわ、ちょっとした森の中にあるの、ゼノレフ王子にあったらついでにその村の事も聞いてみるわよ」

バルコニーへと続く窓際に寄り掛かっていたルピナが頼もしげに言ってきた。だがヴレイは「ありがとう」と返事をするものの、どこか剣呑な表情を隠しきれていなかった。

「その人の元にはミコトが書き残したとされる「記憶の書」があるわ、私の家に代々受け継がれてきた書を彼に渡したのよ。そこにはラセツがザリと弟に当てた想い、もろろん事件当時のことも書かれていたわ、ザイドにもその村へ行くよう薦めたんだけど」

「断ったのか」

時おり、じゃれては引いていく風に髪を揺らすヴレイは友人の顔を思い出しながら、バルコニーへと視線をのぼした。

「記憶の書」を読めば何か手掛かりがあるかもしれないという、微かな希望を胸に抱きつつ、どこかで弱気になっている自分を見付けてしまう。見えない時間を拳で捕らえて、自分を叱咤させる。

爪が手の皮膚に食い込むが、不安は消え去ることなく寧ろ濃霧に

襲われていた。

「村へは行こうと思う、でも力の封印はしたくない。昔はこの力が嫌いだった、こいつのおかげで普通の人生を歩めなかったんだからな、でも今はこの力を失いたくない、守りたい国や大事なものがあるから、だから軍人をやめるわけにはいかない」

あらためて「軍人」という言葉を聞いたルピナは、突然ヴレイが別人のように思えた。

「実はそれでルピナに嘘をついてたことがある」

話が自分の方に向けられ、ルピナは少し驚いた。

「実は俺、ジルニクス国護衛艦隊の軍人だ、ジルニクス国はインジヨリックサークにある俺の故郷だ。グランドラインに来たのは機械化や軍拡を進める国を調査し、インジヨリックの脅威になるかどうかを内偵するためだ、嘘をついて悪かった」

ヴレイは布団に付きそうなぐらい頭を下げた。

ベランダからその様子を眺めるリウドは平然と煙草に火を点けた。やっと煙が吸えたという幸福感に一人酔いしれていたが、超然とした日向の熱さを浴びながらではゆっくり煙草を味わってる余裕はなさそうだ。

黙って話を聞いていたルピナはチラッとシリウスを見上げて質問した。

「私にだけ話してるってことは、シリウスは知っていたってこと」

「はい、同盟を組んでますから」

曇りのないシリウスの笑みに向かってルピナは唇を尖らせたが、腕を組んだ肩は力なく撫で下りていた。

「別に隠さなくなっただけなのに、あんたがスパイだろうとなかろうと関係ないわよ、おかしいと思ったのよね、戦闘には慣れてるし、シルバームの戦艦を停めちゃうし、これで謎が解けたわけだ」

「さすがお心が広いですね、彼はルピナとの縁が切れてしまうんじゃないかと心配で言えなかったみたいですよ」

「おもしろくないんだよ、誰がそんな心配するか。俺の仕事に他人

を巻き込みたくないって言ったただけだ、取り合えず俺にはこの力は必要だし、職も失いたくないから」

無然に鼻で笑うヴレイを見てソラは変に気が抜けてしまった。

そんな話をされても現実味がないのかもしれないが、決然と面を上げるヴレイの姿勢にソラ自身が励まされたような気分になった。

彼と話せてよかったと、抜けるような空を仰ぎながら思った。

「転職する気になったら私が口聞いてもいいわよ」

「あんた顔広そうだしな、そんな時はよろしく」

最後に握手を交わした。

ファビ・ナラード遺跡に戻ると言ったソラは腰まで落ちた黒髪を絹のようにゆらしながら椅子から立ち上がると、身構えるかのよう
に一つ呼吸を整えた。

「ヴレイ君」

「あ、はい」

「その力がなくとも大切な人は守れると思うわ、君のような人ならそれが分かる時がくる、きっと」

「ありがとう」と返事をした声が小さくて、窓に風がぶつかった衝撃音にかき消されてしまったが、ソラは畏敬の念を込めて頷いた。

リウドに付き添われたソラをバルコニーから見送ったルピナとシリウス。

日差しが暑くて、部屋の中に戻ってきたルピナは額に浮いた汗を拭きながら、あまりの暑さに気だるい笑みを見せた。

「この暑さ卑怯よね、夜になると途端に寒くなるんだから」

それでも家の中はまだ涼しかった。この地で生き抜いてきた者達があみ出した建築技術は、日中患者がベッドで寝ていても寝苦しくない程度の室温に保たれるよう、特殊な技術が施されているのだ。

「あのさ、ルピナ」

「なによ」

妙に改まったヴレイの姿勢にルピナは汗を拭いた手を無意識に後

ろへ回した。

「ソラとも話していたように、俺には制御できない力がある、それにこれからもザイドのことでまた危険な目に遭うかもしれない、シリウスに助けられなかったらルピナも大怪我をしていたかもしれない、この先ルピナを守りきる自信はない、それでも一緒に来るつもりか」

あ然と口を半開きしたルピナはシャキッと我に返って、ソラが座っていた椅子にドカリと腰を下ろした。

「何偉そうに言ってるんのよ、自分の身は自分で守るわよ、あんたに守って欲しいなんて思ってもないわ、私が勝手に付いて来てるだけなんだから、バカね」

「バカっていうな」

恥ずかしそうにヴレイは頬をゆるませると、浚いの風に吹かれたかのように清々しい気持ちになった。

まだ問題は山積しているが、話を一緒に聞いてくれたこの仲間達となら、根拠はないが「大丈夫」だと思えた。

N E X T

第49話 月が鏡となれ

バクコウ窟駅で鉄道を待ちながら、ソラは髪を生ぬるい風に乗せながら「あっ」と声を上げた。

「忘れるところだったわ」

ガサガサと鞆の中をあさると、一冊の本を取り出しリウドの前に差し出した。

「頼まれてた例の本よ」

ずっしりと重みのありそうな本の表紙には、天秤の絵柄が刻み込まれていた。

大事そうに本を受け取ったりウドは「悪いな」と言いながら、自分のかばんの中にしまった。それからリウドは何も言いそうになかったので、我慢を切らしたソラが堂々と質問をぶつけてきた。

「それで何をしようとしてるのか、察しはつくわよ。大丈夫なの？ ヴレイの中に潜った後、気絶したって聞いたわよ、あんたはそれ以上に危険な事をしようとしてるのよ」

「いつから母親面するようになったんだ」

上着のうちポケットから煙草を取り出したリウドは気だるそうに火を点けて、煙を吐き出した。

二人の間で煙が気ままに揺れては、風で押し流されていく。

「あいつは僕の力でしか葬ることが出来ない、だからもう口挟むなよ」

頭を掻き毟ったりウドは歯茎が見えそうなぐらいに口端を曲げると、煙草の端を噛みつぶした。苛立つと無意識に出る彼の癖を、久しぶりに見たソラは気付かれない程度に溜息を付いた。

「あの子、私のことあまり好きじゃないみたい、シャイなのかしら」喉で笑って見せたソラはリウドからの返答を待った。

「そうか？ まだ整理が付かないだけだろ、小僧は純粋にザイドを助けただけだ」

「それなのに「記憶の書」のことや村のことはあまり訊いてこなかったわね」

長く煙を吐きながら、リウドは煙の行く先を大観な眼差しで見つめた。

「自分の目と耳で確かめたかったんだろ、でないと信じるにも証拠がないしな、小僧はバカ正気な奴だ、自分が納得するまで諦めないだろ」

「あら、彼の事なんでも分かってるつもりね」

「対象の深層意識の中に入るってことは、セックスするより相手のこと分かっちゃうんだぜ」

気の抜けた笑いが煙と一緒に鼻から抜けていった。

能天気な地平線を眺めながら、躍起になる気持ちをふざけた会話で掻き消そうとしている姿に、ソラは気付かないふりをするしかなかった。

病室でも情報収集が出来るように公衆用のダグ回線がひかれていた。

そのおかげでヴレイはダグノートからセイヴァ本部に報告書を送ったり、ノアとメールのやり取りをすることが出来た。

本部からは「目立った行動はするな」とお叱りのメールが届き、ノアからも同じような内容のメールが届いた。

だが頻繁にメールのやり取りをするには難しかった。いくら軍専用のダグ信号を使っているとはいえ、他大陸と通信するにはかなりの時間を要した。おまけに時差もあるので、一度に伝えたい事を書き込んだら後は相手からの返事をひたすら待つという、手紙のようになり取りしかできなかった。

ヴレイはソラから聞いた話をノアにはまだ教えることができなかった。それに自分だけが持つ能力とはいえセイヴァの軍事力にも関係してくるので、さすがに自分だけで決断してしまうことには戸惑いを覚えた。それこそ妖力の封印は現実から逃げるような気がして

ならなかった。

そんなことよりザイドの事を思い出し、途方もない闇が目の前に広がった。

それからは眠れない夜が何日か続いた。眠れない夜が何日も続くのは入隊時以来のことだった。

歩けるようになってからはベッドから出て真夜中の砂漠を散歩した。

明るい夜だ。夜とはいえ足下にはくっきりと影を落としていた。

自分一人の足跡だけ残す静寂な砂漠はひどく悄然としていた。

明瞭な月が刃の様に光を射し、幻想的に砂丘の稜線を浮き上がらせている。反対側には砂丘に埋もれそうなバクコウ窟の楼門が闇の中でひっそりと佇んでいた。中からは町の光が漏れて愉快に煌いている。

頭上には乳白色の大きな銀河が夜空を横断していた。

今にも降り落ちてきそうな星々が様々な色に瞬き視界の全てを覆いつくした。

冷えて乾いた風が背筋まで落ちるヴレイの黒髪を乱して揺らす。

ヴレイは満天な夜空にふと祖国の夜景を思い出した。ビル郡が織り成す人工の夜景。

夜空に浮かぶ星は微かにしか見えないが、都心の明かりはその街に住む人々の生活を一つ一つの灯火となって映し出していた。それはそれで自然には負けない儚さもあり、人間の強い生命力を感じさせた。

じわりと故郷を思い出し息が詰まって涙が浮く。

守りたい街ではあったが、あの待ちを故郷だと思ったのは初めてだった。

街とセイヴァーにいる仲間、そして「彼女」をなつかしみこのまま忘却の彼方へ逃げ出したくなったヴレイはしゃくり上げて泣きたい衝動に襲われた。

あの街に帰りたいと本心から思った。

「不眠症ね」

診察に來たデイルが淡々と言った。

「目が充血してる、顔色も悪いわね、一応睡眠薬を出すわ」

茫然と窓の外を眺めているヴレイを目の端で盗み見てから、棚の上に睡眠薬を入れた小箱を置いた。

すっかり憔悴している少年にデイルは母親のような口調で声を掛けた。

「先ずはケガを治すことが先決よ、考えるのはそれから」

布団の上に力無く置いていた手に、デイルの手がそっと触れてきた。

視線を室内へと戻した先には、日差しに当たって透けてしまいそうな金の髪が絹のように流れていた。励ましてくれているつもりだろうが、子ども扱いされているようで恥ずかし反面、悪い気はしなかった。

その日の夜は言われた数だけ睡眠薬を飲んで寢床に就いた。

乾燥地帯は夜になると気温がぐっと下がるので、一人で寝るベッドがやけに冷たく感じた。身を縮めて孤独さをひしひしと耐えるのが切なかった。

浅い眠りの中にいたヴレイは何度も寢返りを繰り返し、その度に小さな呻き声上げていた。何度も同じような夢を見て、うなされていることに本人も気付いていた。

夜中に目を覚ましてしまうと、それからしばらく寢付けなかった。布団の中でふとノアの顔を思い出して、枕元に置いてあった携帯電話を手取る。こっちにくる前に皆で撮ってきた写真を見ようとしたが、見ればきつとまた帰りたくなると思い、携帯電話から手を離れた。

デイルは一日の大半を仕事場で過ごしていた。

ヴレイの寝起きしている看護室の階下が薬剤作りの作業場になっ

ている、その作業場と繋がっている表側の部屋が薬売り場として開放されていた。たまに旅商人や常連客が立ち寄っては世間話をして薬を買っていく。

階段をゆっくり下りてきたヴレイに気付いてデイルは顔を上げた。

「寝てないと傷が閉じないわよ」

「傷は大丈夫だ、それより睡眠薬を増やしてほしいんだ」

「えっ」と一瞬驚いたデイルは一先ずヴレイをベッドへ戻すと、蜂蜜を垂らした薬湯を作って持っていた。

「睡眠薬は増やしてあげられないわ」

「じゃあ酒は」

「何バカなこと言ってるの、完治してからじゃないと駄目に決まってるでしょ」

後ろで一つに髪を結っているデイルは困った顔をした。

「じゃあ精神安定剤をだすわ、試しに二日分ね」

「ありがとう」

情けなく肩を撫で下ろしたヴレイは軽く薬湯を口に含んだ。

苦かったらしく渋い顔を作るヴレイをデイルは複雑な心境で見つめていた。何故ならザイドと対峙することになるだろう彼が苦悩していたからだ。リウドが連れてきた患者だろうと、デイルにとって彼はザイドの敵にしか見えなかったのだ。

だが敵だと思っていた人物はベッドの上で眠れぬ夜を毎晩と過ごしていた。目の下に隈を浮かせ、一人で静かに苦心する彼を責めることはデイルには出来なかった。彼もまた大切な人を月の鏡に映し、悲運に翻弄された友達を想う、普通の少年だった。

カップを見下ろすヴレイの瞳が、紫紺色をしていたことにデイルは初めて気付いた。

「ザイドのこと考えてるの？」

訊かれて、ヴレイは少しだけ視線を上げた。

「まあ、嫌でも考えるよ」

「みんなと相談した？ いっぱいいっぱいって顔してる。勇ましく

助けてくれた君はどこにいったの」

「あの時とは事情が違うから」

ゆらゆら揺れる葉湯に視線を落とす姿はひどく孤影な印象を与えた。声を掛けることもはばかってしまうほどに寂寞だ。

そんな姿に対して、端然とした漆黒の髪が艶やかに肩に落ちていた。ずいぶん長く伸ばしているんだなとデイルはふと思った。

「調子を見ながらリハビリを兼ねて運動しなさい、体力を付けた方が治りもいいから、ずっと心配してる彼女の為にもね」

目尻を細くして笑うデイルの深緑色の瞳が、陽に当たって宝石のように輝いた。

「あの、シリウスの火傷の容態は」

「順調に回復してるわ、炎症もないし、君より先に良くなるわよ。にしても、痛み止めを打っているとはいえ普通の人なら激痛と熱でうなされるのよ、超人人間だからって無理ばかりしないでよ」

「はいはい」

はにかむヴレイの笑顔を見て、完敗させられたデイルは素直に安堵の笑みを浮かべることができた。

N E X T

第50話 オアシス

セイヴァの入隊初日に形式的な基本剣術を習った程度ではルピナの剣術稽古の相手にはならず、リハビリを兼ねた体術トレーニングに変更された。

だがこの灼熱の日差しの下ではまだ体力の戻っていないヴレイには辛いものがあった。健康なルピナでさえ数分もたないうちに日射病になりそうだったので、近くのオアシスで一旦休むことにした。「三ヶ月のケガを二ヶ月で完治させるなんて、本当に超人人間だったのね」

「だから変人扱いするなって、って冷た」

子供のように無邪気なルピナは湧き水をヴレイにかけてはしゃぎだした。恥ずかしさをかなぐり捨てヴレイも粒濡れになりながら中腰姿になってかけ返した。

お互い粒濡れになった姿を見るなり噴出して笑った。

さすがにこの場で脱ぐわけにはいかなかったので、水を含んだ髪や服の裾をきつく絞ってから、陽の当たる所で腰を下ろした。中州に突き出た石に腰を下ろしたルピナは足を湧き水につけて、揺らめく水面を眺めた。

「にしてもシリウスが自分のことを話すなんて珍しいな、女にフラれてから、グランドラインに来た方がいいがライセンスを取る機会がなくなったなんて、人間らしいところもあったんだな」

シリウスの片思い話を思い出して、ヴレイはつい鼻で笑ってしまった。後で本人に直接聞いてみようかなと思いつながら、ぐしょぐしょになった靴を脱いで日向に干した。

「あいつ、探している匪賊がいるってベフェナ城で話してたことがあったろ、俗称「アゲハ」って言って、俺は十歳の時アゲハのリーダーに拾われたんだ、二年間弱そこにいた」

「え、あんた盗賊の仲間だったの」

「仲間ってどうか、俺はそこで戦い方を教えてもらっただけで、って言っても盗賊の中に身をおいていたことに変りはない、それで実はザイドが先にアゲハにいたんだ、まだ十四、五歳だったけどな」
「十四歳って、じゃあザイドはアゲハで盗賊の仕事をしていたってこと」

「いや、俺と一緒に体術修行してた。シリウスはアゲハを探してるみたいだから、何か協力できないかと思って同盟を組んでいるつもりだ」

「そうだったの」

視線を空に投げたルピナは足で水を蹴った。

穏やかに笑いつつも、碧眼の奥から発する眼光は鋭く、傍らにいた剣を見つめる視線はどこか切なげな旋律を奏でているような気がした。

「この剣ある兵士からの譲り物なの、私は幼い頃から剣士に憧れた、あんたの話聞いてあげたんだから、今度は私が話す番よ」

鮮やかな緋色が印象的な鞘だ。柄の装飾は年季が入っているようで、銀メッキの光沢が剥がれ落ちていた。

鞘の腹を指先ですつとなぞりながら彼女は崇高に語り始めた。

「もう五年位は前かな、私は専属エスコーターだったグリーンフと古代の神殿に遊びに行ったの、危ないから奥まで行かないようにって言われたのに、なのに私は彼の言うことを聞かなかった」

水鏡に映された過去に視線を落としながら、ルピナは話し続けた。
「その日、地震が起きたの、震度が大きくて、もろくなってた神殿は崩れ落ちた。私を探しに来たグリーンフは崩れてきた瓦礫から私を守って、命を落としたの」

哀しさも悔しさも見せない無感な表情をするルピナに、掛ける言葉が見つからなかった。

「しばらく泣き続けて、それから朝から晩まで剣術にはげんだわ、私は二度とあんな思いをしないために剣を抜いたんじゃない、ただ私は私のせいで死なせてしまったグリーンフへの償いをしたかっただ

けなのかもしれない、それでしか償える方法が思いつかなかったものの」

強い日差しが水面を反射した。

足で水しぶきを上げると、切ないまでに雫が宝石のように煌いた。「グリーフの分まで強くなって世界一の剣舞士になるって決めたの、だからフレイヤを出たの」

「王族のことは分からないけど、よく決断したな」

ルピナは憮然に笑うとまた足で水を蹴った。

ずいぶん昔からこうして彼女と色々な話しをしてきたような気がして、ヴレイは不思議と安心感を待った。

「ところであんたの力、封印しないと危険なんですよ、そのままにするつもり」

「まだ分からない、でも封印したくない」

「なら後はあんたの努力次第ね、ヴレイが選ぶ道なんだから信じて進めばいいのよ、なんて臭いこと言ってみたりしてね」

どこかで聞いたような言葉だったが、妙に胸の内に響いて嬉しかった。

ルピナは石の上に立ち上がると、陸地へと飛び移った。水を吸った麻生地が陽射しで透き通り、鍛えられていながらもしなやかで女性らしい曲線を露に縁どっていた。

オアシスに降り注ぐ陽射しで金髪はガラスの様に透けている。生い茂る新緑の中で彼女は妖精のごとく蠱惑だった。

あまりの婀娜っぽさに見入ってしまったヴレイはハッと視線を逸らして、熱くなった顔を湧き水で乱暴に洗った。

ついでに全身を水に浸けたいぐらいだった。

「ねえ、ヴレイの住んでいる国とか軍ってどんなところ」

「どんなところって、そうだな」

大きな目をさらに見開いたルピナが身を寄せて聞いてきたので、理性とは反して鼓動が高鳴ってしまったヴレイは身を引いた。

気を取り直して胡坐をかいたヴレイは軍のことから説明し始めた。

話しているうちに喉が渴いて、何度か湧き水を口にした。時間も忘れて話しに夢中になっていると、日はだいぶ南中を過ぎていた。

靴は外側だけは日干しのように乾いていた、粒濡れだった服も水分を飛ばしていい感じで乾いていた。

「軍専用の街があるなんて想像付かないわよ」

「専用って言っても、周りの街と外見は変らない、でも緊急用に常備された地下鉄や電車があるから少し違うかな、住むにもいい所だし」

「いつか行ってみたいなあ」

「行けばいいさ」

「じゃあ案内してよ、街やヴレイの友達や……」

突然ルピナは言葉を詰まらせたが、そのことにヴレイは気付かなかった。

「来いよ、シリウスも一緒にさ、あでもあいつは自己中だから来るかわかんねえな」

そして二人は同じような顔で笑った。

ほんのひと時、ザイドの事も、妖力の事も夢だったのではないかと、錯覚してしまいそうなほど穏やかな時間が流れて、ヴレイはふと泣きそうになった。

「ねえ、私も同盟組んでいいでしょ、あんたの正体分かっちゃったんだし、私と別れたくて嘘までついたんでしょ、本当に情けない奴」「だからそういう意味じゃなくて、なんでそうなるかな、シリウスの解釈がおかしかっただけで」

「誤解されそうな台詞を言う奴が悪いのよ」

それからくだらない口喧嘩は続いた。

大陸も文化も違う環境で生きてきたお互いの話しは、興味がわく話題ばかりで、デイルの家に帰る間もずっと話していた。

その夜、いつも通り検診をしているとデイルがふとヴレイの顔を覗いて、「いい顔をしてるわ」と言った。

N
E
X
T

第51話 切なる願い

絹の様な金の髪をゆらす幼い少女は摘んだ花を丁寧に編んでいた。出来上がるとその花輪を隣にいた少年の頭の上に乗せてやった。

歳も同じ頃の少年は嬉しそうに笑うと、少女も嬉しそうに笑った。その光景をザイドはしばらく時を忘れて眺めていた。だがその平穏な時は無残に碎け散った。

突風が吹き荒れ、全ての花を舞い上げた。大量の花びらが闇の中へと消え去ると、辺りは、一方的な殺戮に逃げ惑う人々の阿鼻叫喚が地響きのようにこだましていた。

黒煙と炎が渦を巻いて民家を呑み込んでいく。

鼻がもがれそうな死臭は無残に変わり果てた村人から漂ってくるものだった。まるで地獄絵でも見ているような凄惨な光景だった。吐き気を覚えたザイドは口に手を当ててその場から離れた。

逃げ惑う人々は誰一人としてザイドの姿に気付かず、空気のように彼の体を通り抜けていた。

一軒の民家の前まで来ると、母親を呼び叫ぶ少年がザイドの目の前に飛び出してきた。まだ二十歳前の女性に腕を掴まれる少年は、燃え盛る家に向かって必死に腕を伸ばして泣き叫ぶ。

「お母さんっ」

唸り声を上げる魔獣がその家に群がると、母親の体は強い閃光を放って爆発した。あまりの惨劇にザイドは双眸を見開いたまま、愕然と立ち尽くした。

「ヴレイ逃げるのよ」

放心状態になるヴレイを黒髪の女性がその手を掴んで走り出した。まだ起きたことが理解できずにいたヴレイは言われるがまま決死に走る。

ザイドも二人の後を追って走った。

逃げる二人の目の前に燃え尽きた民家が横倒れになって押し寄せ

てきた。咄嗟にヴレイを自分の腕の中で抱きしめた女性の真横に、灰となった民家が崩れ落ちた。

別の道を走り出したその時、背後から聞こえた叫び声にヴレイは無意識に振り向いた。

ザイドも振り向いて見付けたのは、ヴレイの頭に花輪を乗せた少女だ。

「そっちへ行っちゃダメだ」

少女はヴレイの声に気付いて振り向いた。恐怖に怯えた大きな瞳はすっかりヴレイを捉え、大きく腕を伸ばした。

一瞬の出来事はまるで時間が止まったかのような錯覚を起こさせる。柱が燃え尽きた民家が少女に向かって崩れ落ちると、轟音と共に家は燃え盛る瓦礫の山と化した。

「イヤだあつ」

ヴレイの手を引く女性は唇をかみ締め、泣き崩れる弟を強引にでも引きずって走り始めた。だがその女性は脆くも灰に変わり果て、残された少年は両耳を押さえて、その場に膝を突いた。

日が昇って直ぐ目が覚めたシリウスは、まだ夜の空気を残した砂漠を眺めていた。

台所で薬湯を作って部屋に戻ってくると、丁度良いタイミングで携帯電話が鳴った。こっちに來てから仕事以外で鳴ることはなかったので、着信音を聞くのはかなり久しぶりだ。

「誰かと思えば、君から電話してくるなんて予期してませんでしたよ」

電話口の相手は煙草を吸い込んでから、ケラケラ笑った。

「笑いごとじゃないですよ、君のおかげで火傷を治すのに一ヶ月も掛かりましたよ」

『わりい、見舞いにいけなくて』

「相変わらずですね、で突然電話とはどうしましたか？ 彼の様子が気になるんですか」

すると電話口の相手は言葉を発さなくなった。

煙草を吸い込む呼吸音が聞こえてから、「なあ」と唐突に声を飛ばしてきた。紛れもなく真剣な声色だったのでシリウスは受話器を当てた耳に意識を集中させた。

『あいつ、村が襲われた時の夢をよく見るようだな』

「え、ああ、襲われた時の記憶を思い出したそうですから、でも何故ヴレイがその夢を見てると？」

怪訝な顔をしたシリウスはベッドに腰を下ろした。

『覗き見た』

へへへと声を上げて笑うが、罪悪感で打ちひしがれた鳴き声が混ざって聞こえてきそうな自嘲笑이었다。

『でさあ、あいつの電話番号知ってたら教えて』

「え、ヴレイのですか」

『ああ、あいつも持つてるだろケータイ』

一瞬、彼に教えてもいいのだろうか迷った。

いくら二人が幼少期からの旧友同士だとしても、今は複雑に入り組んだ状態だ、だからと言って黙っておく理由もなかった。

「ザリがヴレイに掛けることはあるんですか」

『人とケータイで話すタイプじゃないだろ、心配するな』

「相変わらず適当ですね、分かりました、君を信じます」

冗談交じりに笑いながらも、希望を託すかのようにシリウスはヴレイの携帯番号を教えた。

「一つ訊いてもいいですか」

『ん？』

「君はヴレイに助けてもらいたいんですか？ それとも彼に殺されたいんですか？」

予期していなかった質問だったのだろうか、電話口の相手は思わず高笑いを響かせた。この時ばかりは本当に笑っていた。

そこまで笑う必要はないだろ、と心の内では呆れながらも、いつもどおりのザイドに安堵が湧いてきた。こうやって何事もなかった

かのように電話をしていると、ソラの話していた事などただの作り話ではないかと錯覚してしまいそうだった。

『あいつに助けてほしいなんて思ってたねえよ、自殺願望もねえ、まあいづれ俺から掛けるから、あいつにはこのこと黙っててくれ』

「しょうがないですね、ところで今ザイドはどこにいますか」
するとザイドは深く煙を吸い込んでから「じゃあな」とだけ言うて、電話を切ってしまった。

携帯電話から顔を上げた頃には、日はすっかり昇りきり大地に強い日差しを燦々と降り注いでいた。

太陽は毎日昇る、だが彼らの想いは暗い地平線から這い上がることが出来るのだろうか。這い上がった光が無残にも屈折するのではないかと、シリウスは切に朝日を眺めていた。

N E X T

第52話 夕映えした嘘

果実が赤々と熟れた様な太陽はなかなか完全には沈まず、空はいつまでも夕紫色を保っていた。

暖まったテラスで薬草の目利き練習をしていたシリウスは、離れで仕事をしていたデイルが休憩のため戻って来たことに気づいた。顔の上に開いた本を乗せて、ソファーに横になっていたリウドはコーヒーの香ばしい香りで目が覚めた。

「僕にも淹れて」

「淹れてきたわよ」

本をテーブルに置いて、代わりにコーヒーを受け取ったリウドは大欠伸をした。

「最後にここに来たのってあなたが幻獣学術ライセンスを取った時よね、もうあれから二年も経つんだ」

「気だるそうにリウドは頭をかいて、コーヒーをすすった。

「そんなに前だったか」

「そうよ、何の連絡もくれないんだから」

「むくれながらも鼻で笑ってデイルは続けた。

「初めて私のところに来たときのこと覚えてる？ 当時は首都のリンベルで母が薬屋やってたのよね、ザイドが足に大怪我をして、泣いてお店に駆けつけて来たわよね、まだ十歳ぐらいで、ついこの間のことみたい」

「大昔の話じゃねえか、よく覚えてんなそんなこと」

「あれから十三年、全然変わってないわ、まだ足に傷跡ある？」

「さあ」

笑いながらもデイルはどこか寂寥な顔を見せたが、気を取り直して訊ねた。

「このことが終わったら、リウドはどうするの？」

「このことって」

「だから、ザイドとあの少年のことよ、二年前うちに来た時話してくれたじゃない」

コーヒーを眺めるリウドは茫然としながら言葉を並べた。

「さあ、とりあえずは定期論文を完成させないと委員会がうるさいからな、それから考える」

「もうザイドに会えないのかな、会いたいなあ」

心細そうに呟くデイルの声を聞いて、目頭が熱くなったリウドはコーヒーカップをテーブルに置き、ソファーに横になると本で顔を隠してしまった。

しばらくの沈黙の後、突然鼻水をすするような音が聞こえた。押し殺しながらもデイルの泣き声はテラスまで響いてきた。すると横になっていたリウドがソファーからむくっと起き上がると、唐突にデイルを抱きしめた。

「あんたに抱きしめられても嬉しくない」

「あいつが帰ってくるまで僕で我慢しろ」

その一部始終をテラスから拝見してしまったシリウスは二人に背を向けて知らないフリをした。

デイルが泣き止んでからしばらくすると、場の空気を一瞬にして入れ替えるかのように、騒々しく廊下を歩いてきたヴレイとルピナが居間に入ってきた。

相変わらずテラスではシリウスが薬学書と薬草を交互に睨めっこをしていた。

だがなんとなく静まり返っていた居間の様子に「何かあったの」と訊きたかったが、二人は言葉を飲み込んだ。

デイルがお茶を入れに行くと、ルピナは手伝いに行った。

「で、あんたザイドの兄なんだろ、直接訊くのは初めてだよな」

あまりの唐突さにルピナとシリウスは目を丸くした。二人の作業はパタリと止まり、頭の上には疑問符がぶる下がっていた。

「小僧には僕の記憶を見せたからな」

「ああ、それによく似てる」

「お前の目は節穴か、全然似てねえし、ったく。僕達兄弟は「自然界の天秤」を操る能力を持っている、陰陽と言って『陰』を受け継いだザイドは昔から僕より勝っていた、ザリの力も加わり今では僕の『陽』力など足元にも及ばない」

ふんぞり返っていたソファアから起きると煙草に火を点けて、気の長くなるような一服をした。

紅茶を淹れたカップをトレーに乗せて、ルピナがそれぞれの様子を見ながら居間に戻ってきた。

「ザイドは十三歳の時、魔獣や盗賊を引き連れて俺の村を襲った、九年前だ」

「陰の能力で影法師を創る術がある、その賊は術者の分身だ、それもザリの力だと言える」

テラスにいたシリウスが居間の中に戻ってきて、ルピナから紅茶を受け取った。冷たい紅茶が香ばしくのどを流れる。

「確かザリと契約したと言っていましたよね、ザリの人格になっても自分と言う意識は残るように、そして九年前はすでにザリと契約していたと」

煙草の灰を灰皿に落としたリウドは狐にでもつままれたような顔をして、煙草を奥歯で噛む。

「あいつがそういったのか？」

「はい、そうです」

リウドの怪訝な顔つきに、異変を感じたヴレイは「どうかしたか」と冷静に訊ねながらも、心中では貧乏ゆすりをしたいぐらい落ち着かなかった。

「それは嘘だ」

持っていたカップが落ちそうになった。

「契約したのは二年前だ、母親が自殺した直後だった、村を襲った時もそうだったらしいが、ことが起きてから我に返るとザリだった時の事を全く覚えていなかったらしい、自分の中に別人格があると分かり、覚えていないのが嫌で、何なら意識があった方がいいと決

断した結果だ」

「どうして、嘘を」

困惑した視線が行き先に迷ったかのように中を泳ぎ、そのうち一点だけを見つめて、彼が嘘をついていた時の様子を思い出しているようだった。

シリウスの隣に寄り添うように立っていたルピナが恐る恐る口を開いた。

「復讐心を持ってほしかったんじゃない」

それは前にシリウスも口にした言葉だった。

「ザリから身を守ってほしいから」

ルピナを見上げる紫紺色の瞳は今にも泣き出してしまいそうなほど、露でぬれていた。

「いつかは村を焼いた賊を見つけ出して、仇をとるつもりだった、でもその仇がザリに乗っ取られたザイドだと知った以上、俺なりに考えてそれから対峙する」

断固とした頑迷さにリウドはため息すら出てこなかった。

「前にも言ったけど、あいつは完全にザリの力に乗っ取られてる、努力次第でどうにかなると思うな、クソガキ」

リウドの強い言動に圧倒され、言い返す言葉が押し殺されそうになる。

「やってみないと分からないだろ、ザリの魂をザイドから解放する。リウドは未来は自分で決められると言って俺を助けてくれた、だから選ぶ」

「くどい、やってみてからじゃ遅いこともあるんだ、この戦いを終わらせるには、小僧がザイドをその手でやるしかないんだ」

聞き間違いではないこと確かめたヴレイは情けなく苦笑いし、「えっ」と無意識に訊き返していた。

NEXT

第53話 分断する未来

「この戦いを終わらせるためには、お前がその手でザイドをやるしかないんだ」

聞き間違いではないことを確かめたヴレイは情けなく苦笑いし、「はあ」っと無意識に聞き返していた。

「ザイドをやらない限り終わらない、あいつにも自由はないんだ」また意味の分からないことを言っていると思ったヴレイはネジが抜けたような笑いをふりまく。茫然としながら次第に憤慨な感情が、沸騰した湯のように湧き上がってきた。

「じゃあ俺がやられればザイドの中からザリは消えるんじゃないか、何故ソラとリウドは一方的にザリを倒すことばかり言うんだ、方法は他にもあるはずだろ、どうかしてる」

誰に当たるわけでもなく、居間中を歩きながら怒号するヴレイは、どうしようもなく熱くなる目頭を手で隠す。

「もしザイドがお前を消したところで人格が戻る保証がない、言い換えれば小僧があいつを消しても、お前からラセツの力が消えないことと同じだ、お前が死んだところでザイドは戻ってはこない」

放心状態のヴレイから目を背けることなく、ただ見守ることしかできないシリウスの横顔に西日が当たると、細い目をさらに細くした。

「僕から言えることはお前がザリを倒せ、ザイドの解放は僕がやる」その言葉に全員の視線がリウドに向けられた。

「リウド、それはあなたの能力でということですか」

窓枠に佇んだシリウスからの質問にリウドはしばらく沈黙し、ヴレイはその答えを待った。

「そうだ、でもそれは小僧が決断できればの話だ」

怒りも混じった鋭い眼光がリウドに向けられる。反論意見の一つも言ってやりたそうな目つきだ。

お互いの頑固たる強い意志が険しい視線となってぶつかり合った。視線を目で見ることができたなら、おそらく電流と電流がぶつかり眩い雪花を中に散りばめているだろう。

「まあまあ、そんなにいがみ合ってもザイドの運命が変わるわけではありません、ヴレイはもっと冷静になってください、それでは正しい判断ができません」

「少し一人で考える」

と言い残してヴレイは乱暴に居間から出て行った。

＊ ＊ ＊

シリウスはテラスに戻って腰を下ろした。長い間息をつくとも葉草と本を片付けて、静まり返った居間に戻ってきた。

人数分のカップがテーブルに置き去りにされたまま、皆の意識はばらばらに枝分かれしているように見えた。

「取り合えずここからゼノレフ国への進路を決めたいわ、誰か地図持っていないの」

気の抜けたため息を付いたルピナはソファーにふんぞり返った。

「あるわよ、ちょっと待ってて」

緊張感に解放されたデイルは明かりを点けた様にぱあっと笑顔を作って、グランドラインの西部地域だけが載っている地図を持ってきてテーブルに広げた。飲みかけのコーヒークップを無造作にリウドに渡す。

「グレイディウル国には確かにゼノレフ国と隣接している所もあるけど、グレイディウルの南東部の大部分は未開の大山脈なの、年中雪があるから人が通れる陸路は作られていないわ、だから少し遠回りだけどフレイヤ国を経由に行くしかないわね、フレイヤへは陸路で国境ゲートを通ったほうが無難よ」

デイルの丁寧な説明に、ルピナは内心やっぱりそうなるのかとため息が出た。

「詳しいんですね」

「旅人さんに道案内することが多いから」

金髪を梳き上げて顔を上げたデイルと目が合い、何故かシリウスはリウドとの抱擁姿を思い出し茫々とした。

「それカルピナに家用機を出してもらって直接ゼノレフ城に行くっていう手もあるんじゃない」

気軽に提案したデイルは何故か嬉しそうだ。

「それいいじゃん、おいルピナ、どうにかしてフレイヤ王に取り繕えないか」

悠々とソファアを陣取り、横になったリウドは熱いのか服をパタパタと仰ぎだした。

「簡単に言わないでよ、ただでさえシルバームの件があつたばかりで、強引に国を出ている身分なのよ、それにフレイヤ城は飛行船ドックを持ってないから、どのみち首都を離れて北空港に行かなきゃいけないのよ」

眉間にしわを寄せたルピナは親指の爪を軽く噛んだ。

「それがダメなら公共飛行船でゼノレフの西空港に降りて、そこから公共交通機関で行くしかないわね」

面白そうに笑むデイルを見てシリウスは笑みを引きつらせた。

「それって交通費が一番かかるルートじゃないですか」

「こうなったらダメもとでフレイヤ城に行くぞ、それにフレイヤの首都ミュードルは学問の都で有名だ、特にフレイヤ城の図書館はグランドラインの中で五本の指に入る規模を誇ってるからな、寄せろ」

「それは是非行ってみたいですね、これで口実もできましたし、私の火傷もだいぶ回復したのでいつでも出発できますよ」

調子に乗ったこいつ等に文句を言っただけだったが、現実的に交通費のことも考えると、渋々ルピナは祖国凱旋を余儀なくされた。

NEXT

第54話 故郷

デイルの店に立ち寄った旅商人の馬車に四人は便乗させてもらった。

バクコウ窟を東へ進みフレイヤへの国境ゲートに到着した時は、すでにデイルの家を出発してから半日以上経っていた。砂漠地帯の狭い溪谷を抜け、突如として眼前に広がったのは、赤褐色の岩石をそのまま建造物にした巨大門だ。

円柱で装飾された荘厳な姿は、まるで砂漠の岩山に忽然と出現した神殿、もしくは霊廟のようにも見える。柱の上部には一人一人の人間の仕草や表情まで彫られた造形が今にも動き出しそうだった。

観光客やロバで積荷を運ぶ旅商人がゲートを行き来していた。

馬車三台分ほどの幅しかない細い通路、この道の両端を高さ百メートルはある巨岩に挟まれ、中に入ると肌寒ささえ感じた。

ゲートの前で荷馬車から降りしてもらい、謝礼として商人に少なからずの金を渡した。

一キロ弱の道のりを三十分かけて通り抜けると、ゲートの先は劇的に現れた。グレイディウルとフレイヤを別ける深緑あふれる山脈が連なっていたのだ。

視界いっぱいの大自然にヴレイは思わず感嘆な声を上げた。

「すげえ……」

湿気を多く含んだ空気はのどの奥まで清々しかった。

フレイヤは偏西風の影響で海からの湿気を上空に停滞させている

ので、グレイディウルの砂漠地帯とは違って、緑生い茂る地帯なのだ。トルピナが説明してくれた。

そこからは山道を走る寝台列車を使い数日掛けて首都郊外までやって来ると、さらに特急列車で二時間辛抱した後、ようやくフレイヤの首都ミュードルに到着した。

この時点で交通費だけでもかなりの出費だ。

城下町はほぼ見渡す限り赤レンガで覆われているが、古い路地沿いにはくすんだ白い建造物が続いている。旧市街と最近の街が入り混じっているように見えた。

繁栄と興亡を繰り返し、さまざまな文明と文化が交錯し混在してきた時代を六百年間という長きにわたり極めてきた都。時代や宗教によって翻弄された建造物が数多く佇んでいる。

今もなお威厳を放つ聖堂や寺院は、かつての栄華を今日に伝えていた。

丘陵にそそり立つそれには一際目を惹いた。外周を囲んだ城壁の向こうから、漆黒で堅牢な塔が何本か見える。レンガと木材に彩られた鮮やかな街並みに対して、その堅牢さと鮮烈さは目を見張るものがある。黒真珠の色で染められたレンガを集めて建立された王宮には、鋭角な屋根が針山の様に付いているのが特徴だ。

「ここが首都ミュードルよ、ここは北の商業区とも言われているわ、東から玉や宝石、鉱物がこの街を通り、南からの農作物も一度はここに集まり各地へ売買されるから人が多く集まるのよ」

山脈に垂れこめる雲が彼方に流動し、大河を前にして悠々とした時間と歴史の流れを感じさせる。

その悠然とした河には、物売りや食料を売る色鮮やかなテントを

立てた小船が何十艘も浮いている。そんな河沿いの市場はひどく賑わい、人が川のように行き来していた。

「丘の上に見えるあれ、フレイヤ城だろ」

浮いた声で言ったヴレイが人と人の間から丘の上を指差した。

「そうよ、市場を回ってから王宮に案内してあげる」

「あれ、ルピナの実家なんだよな」

シリウスとリウドの耳元でぼそりと呟いた。

「そうですね」

「まあな」

三人はあっけらかんと城を捉え、どこか楽しそうなルピナの背中と見比べてしまった。

＊ ＊ ＊

観光兼ねルピナの買い物が終わると、やっと宮殿に案内された。

「ようこそフレイヤへ」

見張り台の付いた多角形の城郭に挟まれた、大手の楼門で出迎えてくれたのは純白の靄をかぶったような長身の女性と何人かの従者だった。

「ルービィ」

久しぶりの再会でルピナは声を上げてその女性に飛びついた。

「お帰りなさいませ、ルピナ王女」

「帰ってきたわけじゃないわよ、紹介するわ、宮殿付きエスコーターのルービィよ」

「初めまして、ルピナ王女の専属護衛を任されていますルービィと

申します、以後お見知りおきを。ではさっそく皆様方を王宮へご案内いたします」

ルービィと従者に先導され四人は城壁の先にある、宮殿という聖域へ足を踏み入れた。

「ルピナ殿下が無事にお戻りになられて、嬉しゅうございます」

「さっきも言ったけど帰ってきたわけじゃないのよ、ちょっと用があつて寄つただけ」

ルピナが口を尖らせて言い返すと、ルービィは朗らかにのどで笑つた。

リウドと同じぐらい長身のルービィは波打つ柔らかな金の髪を腰まで落とし、横髪を後頭部でまとめている。金の髪を包むように被せられた半透明のベールが白くぼやけて見える。鉱物のような玉葉色の瞳がその神秘さを引き立たせていた。

「世界大戦終結後、その国も生きるために必死になっていたグランドライン復興時代の真っ只中に、フレイヤは建国されました。大戦前から哲学や医学、文学に精通し今では大陸中から優れた留学生や研究者が集まる、学問の都と謳われるようになりました」

立体アーチ型の高い天井は装飾的で輝かしかった。

石を組み合わせて紋様が描かれ、大理石の床は磨き上げられている。細かな細工が施された光沢ある木製の窓枠が並び、その大窓から西日がいっぱいに差し込んでいた。

そんな回廊にただ圧倒される三人は言葉をなくしたまま啞然と歩いていた。

「驚くのも無理ないわね、グランドラインの中でも指折りに美しいと評されるフレイヤ宮殿だもの、ちゃんと目に焼き付けておきなさい」

ルピナの高く澄んだ声が一番大きく回廊に響いた。

赤レンガと白い石を馬蹄形に組み合わせられたアーチが、合わせ鏡に映し出されたように広々と続いていた。

「この回廊はリブの森と言われています」

「リブの森」

見上げながらヴレイが呟くと、ルービィが説明した。

「上に向かって伸びる尖塔アーチを形成する交差枝をリブと言います。リブがいくつも交差し美しい丸天井ヴォールトを作り上げています。リブが交差する点には花模様の複雑な石飾りの彫刻が施されています。何千年にも渡って王侯に愛されている代表的な作品です。リブの全てに歴代の王達の国訓が刻まれているそうです」

天井を見上げ続けて首が痛くなったヴレイは正面に顔を向き直した。

リブの森を抜けると、謁見の間へと続く長い回廊に入り、絢爛豪華な柱が立ち並ぶようになった。

上等な絨毯を踏みしめながら、ルピナに引き連れられた三人は物珍しげに辺りを眺めながら歩みを進めた。

廊下の角を曲がって少し行くと豪華な彫刻と塗装の施された、背の高い扉の前にたどり着いた。そしてルービィがその扉を大きく開けた。

夕焼け射し込む謁見室の玉座から立ち上がった人物は、一瞬驚いた顔をしていた。

「おお、やっと来たか、連絡を聞いて待っていたぞ」

N
E
X
T

第55話 思わぬ申し出

「やっと来たか、連絡を聞いて待っていたぞ」

陽気で気さくな感じがルピナと似た雰囲気を漂わせていた。

白髪交じりの漆黒の髪が首筋でゆるやかに束ねられ、凜と太い眉毛の下には穏やかな茶色い瞳が深い窪みに納まっていた。警戒しているわけではなさそうだが、大観したようなフレイヤ王の眼差しに黙って見据えられると、三人の背中には定規が入ったかのように伸びきった。

この中の誰よりも長身で、四十代後半だろうが鍛えられたその大柄な体軀には迫力があつた。

子との再会の抱擁が終わると、フレイヤ王は三人に表を向けた。

三人の背中に張り付いたままの定規はますます硬化した。

「ようこそフレイヤ国へ、私はフレイヤ国王、ジラだ、君達にあえて嬉しいよ。うちのじゃじゃ馬娘とはるばるよく来たね、さぞ疲れただろう」

「そりゃあもう、疲れたなんの」と言いたかったが、父親の言った冗談を笑い飛ばしたルピナを見て、ヴレイは仕方なく言葉を飲み込んだ。

三人がジラと握手を交わしながら自己紹介をしていると、風が鳴るような小さな鈴の音が聞こえてきた。

音が聞こえてくる方へ三人は視線を上げた。

左右に伸びる広い階段から下りて来たのは、長く落ちた黄金色の髪を豪華にゆらす女性だ。その髪は月光のくしで梳いたように艶めき、玉が散りばめられたティアラが額の上で光を集めていた。

青紫色した麻生地に、濃い紅色の帯で締められた簡素なドレスを身に纏っていた。

あまりのこ惑さに三人は同じ顔をして目を見張ってしまった。

「後のヴァレンナだ」

王が紹介すると、王妃は裾を持って腰を軽く落とした。

薄く影を落とす長い睫毛の下にはルピナの瞳と同じように、大海を映したような紺碧色の瞳が納まっていた。目尻の下の泣き黒子が印象的だ。

この場に似合った挨拶が思いつかず三人は同時に立礼した。

「こんな所で突っ立っていてもつまらなくてよ、さあ皆様には部屋を用意しました、今日の夕餉は賑やかになりそうね」

＊ ＊ ＊

一人一部屋与えられた広すぎる客室で、夕餉のために支度を終えた三人はこれもまた広すぎる部屋に案内された。部屋というより、何とかなの間と名前が付きそうな空間だった。

巨大なシャンデリアの灯火で艶光する大理石の食卓には、初めて見るような料理が所狭しと色鮮やかに踊っていた。鳥の丸焼きはまだ分かるが、寒天状の中に花びらが散りばめられている食べ物らしき物には目を引いた。

だが最も我が目を疑ったのは皿の両サイドに並べた数本のナイフとフォークだ。ベフェナでは侍女から直接渡されたので戸惑うことはなかった。

「何でこんなにたくさん、どれを使えばいい」

ヴレイは小声で隣席のシリウスに尋ねると、一番外側のフォークを持って見せてくれた。

フォーク一本持つにもガラス細工を扱うかのように、指先にまで繊細な力が入った。

三人の男達の向かいでその存在感を際立たせている御妃は金のワイングラスを持ちながら、二度目の自己紹介を終えた三人の顔をゆっくり目視した。

どうもこの華やかさと豪華さが気分を落ち着かせない、心地よさを感じないわけではないが、緊張してしまうヴレイは唐突に后と目

が合って硬直した。

「ヴレイと言ったわね、ルピナと同年に見えるけど、お幾つですの」

「十八です」

「まあ、ルピナよりお一つ年上なのね」

「たいして私と身長が変わらないくせに」

発言は乱暴だが、食事をする様には貴賓がある。これが一般人と王族の違いなんだろうかと、ふとヴレイはルピナとの距離を感じてしまった。

食事をたしなみながら皆の会話を静かに拝聴している国王に対し、御妃の無邪気さがルピナの強情な性格をそのまま物語っている。

「インジョリックサークといえば世界で最も機械文明が発達した大陸なのでしょ、文献で読んだことがあります、是非行ってみたいわ、歴史を守るグランドラインではあるけれど、機会音痴なものですから」

目を輝かせる王妃にヴレイは口を開けたまま茫然としてしまう。

好奇心溢れる優美な女性であるが、間違いなくルピナの血縁者だと三人は確信した。

「機械はこれから作れます、でも受け継がれてきた歴史は作り直せません、可憐で壮麗な街並みは自然でとても美しいと思います」

「そう言ってくれて嬉しいわ、ヴレイはルピナとさほど変わらない年なのになにぶんしっかりしているのね、子のこにも見習わせたいわ」

「母様っ」

隣席のルピナが口に運ぼうとした鶏肉を皿に戻して唇を尖らせた。「そんな子ども扱いするようなこと言わないでよ、それより私は頼みたいことがあって来たのよ、この人達を紹介しに来たんじゃないんだから」

「ルピナ言葉遣いが悪いぞ」

口を閉ざしていた王が言葉を発したことによって、この場の空気

がぴりつと引き締まった。

「シルバームで例の件を起こしてから日も浅く、本来なら謹慎処分を受けてもおかしくないお前を、大臣に無理を承知で外出許可を下ろさせたにもかかわらず、何の頼みがある」と

言い返す隙が見つからず、威勢の良かったルピナが手も足も出なかった。

だがこの状況下でヴレイは何を思ったのか、それとも王宮の雰囲気能耐え切れず気でも狂ったのか、フォークとナイフを皿の上に置いて、口を開いたのだ。

「無理を承知でのお願いだということは重々承知しています、ゼノレフ国に赴くため、飛行船を貸していただきたいのです」

「えっ」と顔を上げたルピナは何も言えないまま、ヴレイに碧眼を向ける。

「自分はインジョリックサーク、ジルニクス国護衛機関の軍人です、グランドラインに来た目的はこの大陸の急増な機械進歩が我々の大陸の脅威になるか、内偵するためです」

リウドとシリウスは黙ってヴレイの話に耳を傾けた。

「自分はルピナ王女とシルバームで出会い、内戦を止める協力をしました。ルピナ王女は私を信頼し機械化に詳しいというゼノレフ国王子の事を教えてくれました、新たに加わった仲間もゼノレフ国へ共に行くと言ってくれました」

舌を嚙まないよう必死のヴレイは自分でも何を言いたいのかわからなくなってきた。

「ですから仲間の旅費を助ける意味もありまして、私が無理を言っ
てルピナ王女に頼み込んでしまいました、ご迷惑でなければご助力をお貸ししてほしいのですが」

もはや頭の中は真っ白だった。顔から日が出そうなほどの羞恥で、穴があったら入りたい気分だった。

両殿下を直視したまま、意識下では言い切ったという自己満足で一杯になってしまい、手には汗を握っていた。

ジラ王は布巾で口元を軽く拭くと、一つ頷くように笑みを浮かべてヴレイに答えた。

「このような仲間を持ててルピナは幸せ者だな、感謝しなさい。運は君達に見方したと思いなさい、近々そのゼノレフ国王子がフレイヤに来日するそうだ。王子と共にゼノレフに帰国したい気持ちがあるのなら、私から帰りの飛行船に同行できるよう王子に取り繕う。良い目をした子達だ」

この答えを聞いてヴレイは胸を撫で下ろした。同じく安堵したシリウスとリウドは横目でヴレイを見ると、よくやったと言うようにテーブルの下からガッツポーズを見せた。

「え、ちょっと待って、ガディルがここに来るの」

訊き返したルピナは金メッキのグラスを持ったまま、道に迷った子猫のように目を丸くしたのだった。

N E X T

第56話 二人の時間

静寂としたやわらかい月光が大窓から部屋いっぱいに射し込んでいた。青白い明かりは天井までとどかず、闇の中にぼんやりシャンデリアが浮かんでいた。

旅の間には使うことはなかった大理石の鏡台には、宝石箱や装飾品を詰め込んだ箱が発した日と変わらずそこに置かれていた。銀縁の手持ち鏡に映る顔、街へ遊びに着て行く服、演舞会用の衣装、どれも懐かしく思えた。

また合ったねという感じで部屋の中の物を触ったり見たりして回った後、月明かりに照らされた自分のベッドに仰向きになった。

天井を見つめながらも、黒真珠色の鞆に収まる一本の長剣が、部屋の角の壁に掛けてあるのを視界の隅で捉えてしまった。否応無しにその剣をしばらく見つめると、再び天井に視線を戻した。

手足を大きく伸ばして、改めて帰ってきたことを実感する。やはり居心地の良さは否定できない。

大窓の外へ視線を移すと、出発前日の夜空を思い出した。

草丈の短い丘陵に寝そべるルピナの頭の横には、緋色い鞆に収められた剣が置かれていた。

「明日はここを発つのか、ゴルディオンはしばらく会えないのね」
ルピナの横で星を見る男は名残惜しそうに答えた。

「外に出ればたくさんのお友達ができるでしょう、良い仲間を見つけてください」

「仲間か、いいわよ一人で」

「何をおっしゃいます、同じ目的を志す者との出逢いは必然なんです」

「必然？」

仰向きのルピナは顎を天に向けるように、ゴルディオンを見上げた。

「仲間がいることで視野も広がり、物事の見方も変わります。大切なことを学ぶ切っ掛けにもなるでしょう、それが何よりの鍛錬に繋がります、剣術を磨くことだけが修行ではありません」

「大切なこと、か」

ルピナは起き上がり、これから共に旅をする相棒を握り締めた。

「ご無事に帰ってくることは第一ですが、せっかく旅を許可されたのですから、その剣と共に貴重な収穫をしてください、師匠として最後のお説教です」

もう初夏だというのに、春先のような冷たい夜風が吹いてルピナの黄金色した髪をゆらした。

亡き兵士の笑顔を思い出しルピナは目頭を熱くさせた。剣を抱くようにして背中を丸くすると、ゴルディオンはもっていたガウンをルピナの肩にかけてやった。

＊ ＊ ＊

等間隔で並ぶ大窓は半分ほど開かれ、どこまでも続く回廊に目の

覚めるような強い朝日を入れていた。

朝食後、城内を散歩がてらルピナに案内された図書館に踏み入るなり、三人は予想以上のスケールに直面し、田舎から出てきた子供が都会を初めて見たような顔で絶句した。

「魔法書は南側よ、はしごも机も自由に使っていていいわよ、本を館外へ持ち出すときは受付で手続きしてよ」

説明しながらルピナは奥にあるカウンターに指をさす。

大窓から見下ろせる絶景もさることながら、この膨大な本から漂うインクと紙の香りではしば酔いそうになった。異常なぐらい天井が高く、床から壁の半分ぐらいまで本棚が恐ろしいぐらいに伸びている。

はしごの先には本棚をグルッと一周する足場が設けられていた。その足場にもはしごが掛かり、さらに階上の足場へと繋がっていた。どのはしごもローラーで移動できるようになっているらしいが、恐ろしく高い。高所恐怖症なら絶対に登ることなど不可能だ。

部屋の中央には高さ二メートルほどの背中合わせになった本棚が、迷宮を形作っているかのように整然と配されていた。

「セイヴァの図書館も広がったけど、足元にも及ばないよ」

三人は山を眺めるように見上げた。

「恐れ入ったぜ」

小さく口笛を鳴らしたりウドは早速本の物色を始めた。

「魔法書がありました、すごい数でしね、これなら時間の許す限り

堪能できそうです」

いつの間にか二階の足場まで上がっていたシリウスが、分厚い本を手に持って嬉しそうに言ってきた。

「ルピナはこの本どのくらい読んだんだ」

「魔法書は読んでないけど、それ以外は全部ってわけじゃないけど、ほとんど読んだわ、内容は忘れちゃったけどね」

彼女は冗談を言ってるのだろうか、三人はルピナに注目したまま言葉を失ってしまった。

「このほとんど？」とヴレイが果然と聞き返すとルピナは飄々と答えた。

「と言っても私の場合、分野が片寄ってるみたい。本の影響でもあるかな、世界を見たくなったのは。中にはフレイヤ語とか各国の言葉で書かれたものがあるから」

「なにそれ」

「知らないの、母国語よ。その国の言葉、共通語と一緒に読み書きを習うのよ」

「へーえ、言葉がたくさんあるのって大変そうだな」

常識の違いに果然としたルピナは呆れたように首を振った。

二階の足場ですっかり本に集中していたシリウスが思い出したように言ってきた。

「私が育った大陸では母国語と共通語の両方が使われてました、場所によっては共通語が通じなかったりします」

「じゃあ共通語だけで十分だ」

独り言のように呟いて図書館全体に視線をやりなげた。本に興

味を示さないヴレイに気づいて、リウドが珍しく気をきかせた。

「僕とシリウスはここにいるから、ルピナは小僧を他へ連れていけ、ゼノレフの王子とやらがお出でなすったら、従者を呼んでくれればいい」

「そう、じゃあヴレイ……」

声をかけようと振り向いた時には、図書館の扉口から手をこまねいてルピナを呼んでいた。

＊ ＊ ＊

図書館を出ると、庭園に作られた四阿に案内された。磨かれて艶光する木材を組み合わせ、腰の高さまでの囲いがなされていた。白い玉石を敷き詰められた床の上にはソファが置かれている。それに腰掛けると、傍付きの侍女がルピナに尋ねてきた。

「殿下、何かお持ちいたしますか？」

「そうね、コーヒーとクレープがいいわ、レーズン抜きね」

「かしこまりました」

使用人が王侯にものを申す些細な気配りから、手入れの行き届いた左右対称の庭園にいたるまで、ヴレイは住む世界の違いを思い知った。

水を打ったような静けさの中で鳥が鳴く。

外界から切り離されたような四阿に清涼な風が吹き抜けると、ルピナが先に口を開いた。

「ヴレイが私の代わりに父に頼んでくれた時は嬉しかった、ありがとう」

初めてルピナからの「ありがとう」を聞いて、ヴレイは思わず戸惑ってしまったが咄嗟に平然を装った。

庭に植えられた樹木には玉露のような赤い花が咲いていた。貝の裏側の部分を映し出したような七色に光る羽で羽ばたく蝶が、その花に集まっていた。

「デイルの家でリウドと喧嘩みたいになってから、あんた部屋にこもりきりだったから、大丈夫かなって」

前髪をいじりながら恥ずかしさを隠すルピナを見て、ヴレイの頬は面食らったように熱くなった。気にかけてくれることが嬉しくて、全力でその嬉しさを隠すもか歯に噛んでしまっていることに気づいていない。

「お前がそんなこと言うてくるなんてビ、ビックリだよ、マジで」
「心配したっていいじゃない、で最近ちゃんと眠れてるの？」

気づかれていたことに驚いて、ヴレイは情けなく笑った。

「まだ隈ある？」

「うん」とルピナは唇を尖らせて頷いた。

「一時期は大丈夫だったんだけど、最近少しな」

背もたれに寄り掛かり、自嘲的な笑みを浮かべたヴレイにルピナはひどく苛立った。

「あんたばかでしょ、仲間をこれ以上心配させてどうすんのよ」
「ごめん」

なぜか謝っていた。

綿菓子をちぎったような雲が流れる空を仰いだから、頬を紅潮させるルピナの横顔を盗み見た。

視線に気づいてルピナは首を傾げるように視線を上げてきた。

いつもとは違う緊張感が二人の間でゆらいでいる。

こうして彼女と一緒にいることにヴレイは理由も分からず安心した。会ったばかりの頃は喧嘩ばかりしていたのに、いつの間にか隣にすることが当たり前になっていった。

制止してしまったかのような時の中で、碧玉のようなルピナの瞳にヴレイは吸い寄せられていた。

N
E
X
T

第57話 移植された魔力

静止してしまったかのような時の中で、碧玉の様なルピナの瞳に
ヴレイは吸い寄せられていた。

吐息がかかりそうならいルピナの唇が間近に迫っていたその時、
侍女が「お待たせいたしました」と言いながら、クレープを運ん
できた。

ぎよっと我に返ったヴレイはとっさに顔を背けた。

皮一枚のところで鼓動がバカかのように高鳴る。今自分が何をし
ようとしたのか思い出すことさえ恐ろしい。

まともに顔が上げられず、ルピナからクレープが差し出されても
ヴレイはうつむいたまま、余所余所しくクレープを受け取った。

今背後から驚かせたら、絶対にクレープを落とす自信がある、そ
れどころか誰か来てくれとヴレイは内心泣きそうな思いに見回れて
いた。

同じ頃、ヴレイが泣きそうになっていることなどつい知らず、図
書館で読書を堪能していた二人はインクと紙の匂いに身をゆだねて
いた。

「今頃二人はどうしてますかね？　少しは本音とか言えてるんでき
ようか」

シリウスは本に視線を落としたまま、いたずらを楽しむ子供のよ
うに笑んだ。

「興味ねえなそんなこと」

「冷たいですね、ヴレイが不眠症になっていることも知らないわけではないですよ、あの隈見ました？　寝ることに恐怖しているようです」

「僕のせいだと」

「そんなこと言ってません」

シリウスが気に入って離れない南側の大窓には、本棚と本棚をつなぐ渡り廊下が設置されていた。そこへゆったりとした動きでリウドが上がってきた。

「うわっ、高すぎだぜ、城下町の彼方まで見えるぞ」

リウドの歓声にシリウスも本から目を放し、眼下に広がる街並みを眺めた。

「そういえば、リウドは魔族のようですが幻獣を連れていませんね」

尋ねられて、眉をひそめたりリウドは掛けていた眼鏡を外して答えた。

「一応魔族の分類には入るらしいが、代々受け継がれてきたのは「陰」と「陽」の力を借りることができる能力だ、普通の魔族とは違う、そもそも幻獣って何だ、聞いたことはあるが」

火の点いていない煙草を咥えたりリウドは不思議そうにリウドは顔をゆがませた。

「魔族の血が流れいる者なら、一度だけ魔界から幻獣を召喚できるんです、そして一生配下として連れ添うことができます。同時に魔導ライセンスも必要になってきますが」

「ああ、ライセンスがないと魔導系の職に就けないんだっけ？　裏ではどうだか知らないけど。じゃあお前も幻獣を召喚できるんだろ」

眼鏡のレンズを服の裾で拭いているリウドの隣で、悄然と佇むシリウスは本を閉じて手すりに身を預けた。

「私は魔族ではありません」

「意味がわからねえぞ、魔族じゃなかったら何なんだよ」

眉間に深いしわをきざんだリウドは煙草を吸いたくてたまらない気持ちを抑えながら、同じように手すりに身を預けた。

頓着もなさそうにシリウスが答えるのを待つ。自分のことを話すつもりではなかったし、リウドに対して親近感が沸いていたわけでもなかったが、彼の淡泊な調子になんとなく気持ちが開放的になってしまったのだ。

「私は物心つく前に魔力を体内に植えつけたんです。私の場合、師匠の魔力を媒体にしました、体内に定着させるには長い時間と忍耐を要しましたが、習得すれば上辺だけの魔力は身につきます、ですが」

「血に魔力は流れねえってことか」

「そうです」

シリウスは街を背にして、また手すりに寄り掛かった。

こげ茶色の髪が日差しに当たって、明るい茜色に染まって透けた。

「だから私は幻獣を召喚することはできません、てっきりリウドはわざと幻獣を連れていないのかと。確かに貴方はライセンスを持っていますでしたね」

「基本的に僕は力を日常生活で使おうとは思わねえからな、ちなみに僕が学問で扱っている幻獣はパラレルワールドからやってくる意味不明な獣じゃねえからな、この世界にいる希少価値の高い生き物だ、一応言っておくが」

「分かってますよ、学者さん」

やはりリウドは自由奔放主義者だ。

「にしてもいつ頃来るんでしょうか、ゼノレフの王子様は」

「さあね」

気だるく答えたりウドは火の点いていない煙草を耳に掛けて、午前の日差しを浴びながら大欠伸をした。

NEXT

第58話 色褪せた写真

真夏はまだ遠くとも、昼間の強い日差しは燦々と街に降り注いでいた。

いつ来るかも分からない王子を城でじっと待つより、ヴレイは城下町を散策したいと申し出て、一人城を抜け出した。

赤レンガが敷き詰められた通りは馬車が二台ほど通れるように整備され、装飾豊かな珠玉のような建築郡が通りの両側に立ち並んでいた。極端な貧富のさなければ、秩序も保たれているらしいが、少し裏の通りを覗けば暗くて怪しげな路地裏が時おり顔を出す。

護衛軍や警察官以外は武器の持ち歩きが禁止されていたインジョリックサークでは見られなかった鍛冶屋や、個性的な武器屋が様々な所で軒を構えていた。やはり住む世界の違いが身に染み入っていた。

ヴレイはゆっくり街の中を歩いて行くと広場に出てきた。やや中央に赤や黄色の鮮やかなサテンで建てられたテントが一際目立っていた。

看板にはフレイヤ語と共通語でチケット売り場と書いてある。興奮と好奇心が入り混じる思いでテントの入口に掛けられた布をめくって、顔を覗かせてみると一人の男商人がカウンターで札束を数えている。

「いらっしやい」

チラッとヴレイに視線を向けたがすぐにまた札束を数え始めた。だがなかなか注文をしてこない客に商人は数えた束を整えてから、

少し高見のカウンターから身を乗り出した。

「観光客かあ」

「ああ、何のチケット売り場だ」

「注文してくればなんでもさ。船、列車、飛行船、劇場のチケットなら今すぐ手に入る、お前さんグランドラインに来て間がないのかい」

「まあな」

テントの内側には多種多様なチケットや観光土産用の国旗、アクセサリーや旅行の思い出を綴った手紙が飾られ、そして数多くの写真が貼られていた。真新しい写真もあれば、ずいぶん昔に撮られたモノクロ写真まで所狭しとひしめき合っていた。

その中に一つ、色あせてはいるが額縁に入れられた写真があった。

波打つ黄金色の髪と海の青さを映したような碧眼、屈託のない堂々とした微笑とは対照的に、優美で壮麗な軍服衣装を身に纏っている少女。彼女の手には金メッキの鞘に収められた剣が握られていた。

少女の隣にはまだ年若い青年が佇んでいた。黒い瞳は穏やかでいながら兵士らしい力強さを感じた。その男の腰には緋色の鞘に収められた剣が下げられていた。

「お客さんいい目をしているね、その写真はルピナ王女と専属護衛兵の写真だよ。七年前ぐらいの写真だ。今はばっさり短く髪を切り、見違えるほどお綺麗にご成長なさっている。心の広いお方でな城下町によくいらしていた。普通王族ってのは王宮から出ない人種だからな、女神のような姫様だよ」

姫という聞き慣れない言葉に新鮮さを感じ、そんな人物と数ヶ月

も行動を共にしていることに妙な感動を覚えた。

「髪を切った理由でもあったのか」

商人は無精髭をかきながら答えた。

「ああ、それはお可哀想だった。大地震で隣に写っている兵がルピナ王女を庇い、命を落としたんだ。その後だなルピナ王女が大切になさっていた美しい金の髪をお切りになったのは、それから剣術にもかなり力が入ったそうで、つい最近国を出たとも聞く」

客観的に捉える第三者から話を聞くと、どれだけルピナが自責の念を募らせたのか痛いほど伝わってきた。

「彼女は固い決意で国を出たんだろうな、そいつのために本当に強くなろうと。でも国民は不安にならないのか、国を背負って立つ人間がもし帰ってこなかったらって」

商人は写真を遠い目で眺めながら、葉巻に火を点けた。

「おいおい愚弄はよしてくれ。俺達はルピナ王女が国を捨てるなんてことはこれっぽっちも思っちゃいない、むしろ旅をして更に成長なされた王女が返ってくると信じているからな。心根の強い王女だ。これぐらい聞けばいい社会勉強になったろ」

「ああ、ありがとう。営業の邪魔をしたみたいで、すまない」と言ってテントから出ようとした時、何やら外が騒がしくなっていたことに気付いた。

「騎兵隊の行進だ、王族のお通りかな、ほら見に行ってみな」

「お、おう」

まるで小さな子供がパレードでも見に行くかのようにヴレイは大通りに駆け寄った。

大通りの歩道には人だかりができていた。大通りを進んでくる行列に人々は今か今かと待ちわびていた。

背伸びをしてなんとか大通りを覗き込めた。進んできたのは騎兵隊に先導される豪華な馬車だった。馬車の周囲を五、六人の護衛兵が厳重に取り囲みながら行進して来た。

もしやと脳裏をよぎったヴレイは列が通り過ぎる間もなく、さっきのテントに戻ってきた。

「あれ誰なの」唐突な質問にも商人はいやな顔一つせず答えてくれた。

「あの国章はゼノレフ王族のものだな。お隣の大国さ。あの国には王子が二人いて、第一王子がゼノレフ国王位を継承され、去年戴冠式を挙げられた。たぶんお越しになったのは第二王子のガティル殿下だ。美女とも言える美形なことでは有名だぜ。ルピナ王女の幼馴染で、婚約者候補って言う噂さもあるほどだ」

「こ、婚約者っ」ヴレイは思わず声が裏返りそうになった。

「ああ、それは第一王子が即位される前から挙がっていた話だ。フレイヤの将来の国王、もしくは宰相閣下に就くかもしれないお方だ。俺的にはルピナ王女が女王陛下の座に即位されるべきだと思うがね」

「へ、陛下って……」

聞き慣れない言葉に圧せられつい言葉が詰まってしまった。

「そうか、いろいろありがとう」

「いいってことよ、また何か知れたかったら顔出しな兄ちゃん」

礼を言ってテントから出ると、ふて腐りながらもヴレイは遊園地で見えるパレードの様な行進をもう一度見学しに行った。

「ガティル、か」

N
E
X
T

第59話 晩餐会の衣装

馬車が王宮の正門に到着すると、ガデイル王子とエスコーターが馬車から降りてきた。馬車を囲んでいた護衛兵が鋭い視線で周囲を警戒する。

「よく来られた。少し見ない間にご立派になられた」

「ジラ陛下もお変わりなくお元気そうでなによりです。突然の訪問に申し訳ございません。シルバームの件を聞き、居ても立ってもいられず、失礼ながら直接出向いてしまいました」

「いやいや、こちらこそ御足労を掛けてしまった。心から大歓迎するよ」

「感謝いたします」

ガデイルはホッと肩を撫で下ろすとジラ王に促され、広々とした白亜の階段を上がっていった。

彼らの周囲を護衛兵とエスコーターが取り囲んでいる。両者の騎兵とエスコーターが一堂に会すと、それはかなりの大人数になってしまっている。一般人から見ればさぞかし重々しい光景に見る。

「今日は王子に紹介したい者がいるのだ」

少々驚きながら王子は階段の頂上へ視線を上げた。

「久しぶり、ガデイル」

階段の上から懐かしい声が聞こえて、ガデイル王子は思わず駆け上がった。

絹生地ドレスに着替えていたルピナは、階段を上がってきたガデイルを腕の中に迎えた。

ルピナと抱擁を交わし再会を喜んでいたガデイルは、正装に着替えさせられたシリウスとリウドに気付いて二人に表を向けた。

「フレイヤに戻っているとは思わなかったよ。会えて嬉しいよルピナ王女。こちらのお二人は」

人形のように丹精整った王子の顔をおがんだ二人は口が開きっぱなしになっていた。視線が向けられシリウスとリウドは背筋が伸びた。

「二人は私の旅仲間よ。実は私、フレイヤに帰ってきたわけではないの、少し用があつて寄っただけなの、でもこうしてガデイルに会えたのは本当に嬉しいわ」

普段のルピナからはそんなお世辞のいい言葉など想像が付かない。二人はあ然として黙ったまま、いまだに街を徘徊している小僧を思い出した。

「僕もだよ。旅のお連れ方にも会えて、この出逢いはハレルヤの導きです」

ガデイルが手を差し出してきたので、二人は戸惑いながら握手を交わそうとすると、ガデイル王子のエスコーターが無条件に厳しい視線を向けてきた。

「実はもう一人いるんだけど、ちょっとまだ支度が間に合っていない」

＊ ＊ ＊

今頃、馬車は宮殿に到着しているのだろうと思ったヴレイは遅刻しての登場は気が引けたので、来た道に戻ろうと踵を返した。だが逃げるには一歩遅く、突然強く肩を掴まれ、腰に備えた銃を咄嗟に握って振り向いた。

「ビックリした、ゴルディオンだっけ」

「驚かせて申し訳ない、先ほどゼノレフ国のガディル王子が城にご到着されまして、至急お戻り願いたい」

パレードの野次馬も徐々に通常の生活に戻っていく。その様子を見て何も起きなかったことに、ゴルディオンは安堵の表情を見せてから言った。

「皆様には晩餐会に出席してもらいます。私もその護衛でお供させていただきます」

「ば、晩餐会……?」

ヴレイはまた声が裏返りそうになって顔を洩らせた。

三十歳前後の青年のようだがその貫禄と気迫に圧倒されたのと同じに、古めかしい頑固な防具が視界を占領した。肩を掴まれたまま、否応無しにヴレイは宮殿へ連行された。

城に向かいながらゴルディオンは、ルピナとガディルと言う王子の事を話してくれた。

フレイヤとゼノレフの友好関係についてや、ルピナとガディルは幼馴染で親友以上の絆があるとか、まるで自分の子供を自慢するかのように語られ、今から会うだろうその王子との対面にヴレイは複雑な心境を覚えた。

「年の頃はお前さんより、五つほど年上で、伸長も」
「高いんだろ」

「まあな、気にするな」
ハハハッと笑って、むせ返りそうなバカ力でヴレイの背中を叩いた。

話している間にリブの回廊を通り抜け、なぜか自分の部屋に連れて来られた。部屋の前ではルービーが待っていた。

「お待ちしておりました。まず部屋の奥にセトルームがありますので、そこで用意された正装に着替えてもらいます。中ではお着替えを担当します侍女が待機していますので」

「え、侍女って女だろ、俺は一人で着替えられる、侍女なんていないっ」

必死の訴えは虚しく、並外れたゴルディオンの腕力に無理やり部屋へ押し込まれ、取り囲んできた数人の侍女が手際よくヴレイの着替えを始めたのだった。

疲れきったヴレイを見て高笑いするゴルディオンは、次の場所へ向かった。

頭から足の先まで窮屈で仕方ない。絹地のシャツが肌に張り付いてあまり気分が良くない、おまけにベストのような衣装が体を強く締め付けた。何より重みのある豪華な上着を着せられ肩がこりそうだった。

底の厚い先の尖った革靴は踏み出す度にキュキュツと音を鳴らした。

耳障りな足音を引き連れるながらやっと目的の部屋に到着した。そこにはすでに皆が席に着いて、食前酒らしきものを飲みながら歓談していた。

貴賓漂う中でシリウスとリウドはそれなりに落ち着き払って席に収まっていた。

「す、すいません、待たせてしまったみたいで」

自分の登場によって広い空間が静まった。良心的なジラ王が席から立ち上がって、わざわざヴレイの元まで歩み寄ってきた。

「見違えたよヴレイ君、よく似合っている王侯貴族様様だ」
大きな口を上げてジラ王は満足気に高笑いした。

不自然ではないよう嬉しそうな顔をしたヴレイは軽く会釈をした。従者に席を案内され、椅子に腰掛けようとして前屈みになると喉襟に付いていたリボンが揺れた。しかも吹き付けられた香水が鼻につき、じりじりと嫌気が溜まっていくのを我慢した。

王と王妃の装いは普段着とは比べ物にならないほどの崇高あふれる高貴な衣装に変わっていた。人まで変わってしまったような変貌振りに圧倒され、喉がひどく渴いてきた。

「ガディル王子、紹介しよう彼がインジョリックサーク出身のヴレイ君だ」

「初めまして、お会いできて光栄です」

まともにガディル王子の顔を拝むことができず、嚙まないように挨拶するのがやっとだった。

「僕も会えて嬉しいよ、ヴレイ君」

情けない愛想笑みを作った後、ようやくシリウスとリウドの隣席に落ちついた。小さな銀のボールに注がれていた水を見つけて一口飲んだ。

「おい、その水」

リウドが顔をしかめてこちらを睨んできたので、ヴレイは意味が分からず眉間にしわを寄せる。シリウスが小さく咳払いをして銀ボールの中に軽く指を入れて見せた。

「手を洗う水です」

「えっ」思わずギョツとしたヴレイは皆の視線を感じて赤面した。

ルピナが噴出して笑うと、釣られてガディル王子も喉で笑った。するとジラ王がワインの入ったグラスを高く掲げて口を開いた。

「面白いなあヴレイ君は、それに若者達は威勢がいい、いつもの夕餉より数段賑やかだよ。若者達の出会いに今宵は祝いの席だな」

言い切ってジラ王は圧せられそうな笑い声を、やたらと高い天井まで響かせた。

耳まで赤くしたヴレイは顔から火が出そうな羞恥を耐えながら、華やかに晩餐会は始まるのであった。

N E X T

第60話 盲目王子

ヴレイは喉元に息苦しさを感じながらも、華やかに晩餐会は始まった。

初日見た料理とよく似たものがテーブルに並べられた。見たことのない練り料理と鳥の丸焼きが一緒に盛られ、皿の様に平たいパンのような焼きものが用意された。見た目は豪勢だがヴレイはあまり食欲がわかなかった。

民族的な衣装を身に纏う楽師達が静かに演奏を始めた。見慣れない軽音楽器と吹奏楽器の協奏曲が場に馴染めない客人の肩を和らげた。

洗い終わった手で、ぎこちなく鶏肉を切り始めたヴレイはガディル王子に少し視線を向けた。長身で細身な体躯を上等の布地で作られた、凛々しい武人の礼装に包んでいる。

落ち着いた趣は、商人の言うとおり美女ではないかと見まがうほどの眉目秀丽さだ。細い顎に通った鼻筋、荒れ一つない頬は白過ぎず適度に日焼けした色だ。長い睫毛は影を落とし、朝露でも乗りそうなほど長かった。

文句の一つでも言いたげなヴレイに、ガディルはクスツと鼻で笑ってから口を開いた。

「僕は幼い頃から目があまり見えないので、見苦しいところを見せてしまったのなら、非礼を詫びよう」

それを聞いてヴレイは危うく鶏肉を喉に詰まらせるところだった。

ガデイルの灰色い瞳が見ている先は、いささかヴレイとリウドの間を素通りしているような違和感があった。

「言われてみれば、でもこの部屋まで普通に歩いてきましたよね」
リウドが少し驚きを見せながら言った。

「もう見えなくなって長いので、目以外の感性が鋭くなったみたいです。貴方達が見えなくとも声や雰囲気、仕草の音で人物像が浮かんだりするんだよ」

三人は半口を開けたまま驚嘆した。

ガデイルは意外に気さくな人物だった。シリウスとリウドの質問にもよく答え、会食に不慣れなヴレイにもちゃんと気配りをする紳士ぶりだ。非の打ち所が無いとはこういう事なのかと、三人は身をもって体感した。

量はともかく食味的にあまり満足できない食事が済むと、両陛下はその場で退席し若者達だけ隣の団欒室に移動した。

崇高しなければ罰が当たりそうな空間からは開放されたものの、今度はお茶会のような雰囲気になった。一秒でも早く着替えたいヴレイは首をしめていたリボンを解いて、大きく息を吸った。

親切にルピナがヴレイの事情を説明すると、ガデイルは真剣に答えてくれた。

「歴史を残す文明進化も必要だと僕は思うよ。数十年前からダグコンピューターや機械の乗り物を導入しているし、軍備の方面では護衛艦を各地で建造している。でもそれが歴史の足跡を壊し戦争を引き起こしかねないとしたら、止めるべきだと思う」

「ロマノやシルバームなど劇的に機械化する国々はインジョリックでは目を付けられている。他大陸を干渉しない為に国際空港は一つの大陸に、東西南北の四箇所だけと決められている程なのに、それでも艦は造られている」

ヴレイの言い分にガディルが涼やかに返した。

「確かにそうだね。僕はこの四大陸の文明の違いこそが、世界の人為的淘汰を起こさない為の神の布いた秩序だと思っている。すなわち均衡の崩壊は第二次大戦を引き起こすのではないかとね。これはあくまで推論であって僕の内に秘めていた論題なんだけどね」

「立派な私論だが、機械の繁栄が第二次大戦の引金になるなんて短絡的すぎじゃねえか」

対抗してか突然言葉遣いが乱暴になった、火の点いていない煙草を啜えてリウドはそのまま続けた。

「その前に対機械の魔導技術が出てくれば、インジョリックでも対魔導兵器が開発され、そうなれば大戦よりまず先に勃発的な対立が各地で起こってもおかしくないと思うぜ」

紅茶を冷ましながらかん憐憫な物言いをするリウドに対して、シリウスが不適に笑って口を挟んできた。

「結局のところリウドの仮説も王子の推論に行き当たるんじゃないんですか」

何も言い返せなかったリウドは「お前はどっちの見方だ」とでも文句を言いたそうにシリウスを睨んだ。

彼らの会話に口を挟む隙がない、それどころかパズルのピースをはめていくかのような調子で話を聞くヴレイはしがめいた面で頭をかいた。

お茶一つ飲むにも会議のような会話に水を差すんじゃないかと思
いながら、誰にも気付かれないようにお茶をすすった。

自分も抗論に参加したかったがどうにも知識が付いていかない。
それでも意見は言おうと唇を舐めた。

「とにかくインジョリックに対抗しようと思う国が出現してしまえ
ば、リウドの言った未来はすぐ来ると思う」

稚拙ながら自分なりに未来予想をしたヴレイは無然に視線を落と
した。

「君は素直で優しいんだね」

ガデイルは少々真人間なところがあるらしい。そんなことをまじ
めに言われては、言われた方が恥ずかしいと言うことぐらい分から
ないものかとヴレイは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「で、ロマノはどんな国だ」

横暴的なリウドからの質問に対しても、平然なガデイルは盲目の
瞳で皆を見回した。

N
E
X
T

第61話 機械化国家

「で、ロマノはどんな国だ」

横暴的なリウドからの質問に対しても、平然なガディルは盲目の瞳で皆を見回した。

「ロマノはグランドライン一の独裁国家でおまけに軍事国家です、インジョリックとの貿易が一番多い国でもある。機械化や造船技術、科学技術などは他国より数十年は進んでいると聞くんが、その一方で他国との温度差が激しいことが懸念の一つですね。噂では生体工学の研究なども行われているとかいらないとか、今だ憶測の域を超えませんが」

ガディルは紅茶で喉を潤し、続きを話した。

「ロマノと一番結びつきが深かったシルバームは先の内戦で戦艦を公にしました。あれの建造材料はシルバームで採れる鉱物や宝石などと交換に、ロマノから材料を買っていたに違いなのです。そしてロマノはその鉱物で戦艦や要塞の造船材料をインジョリックから買っているはずですよ」

「合点はいくな」と呟いたりウドはいつもの調子でソファーにふんぞり返った。

「またもや理解し難い図柄が並びヴェイは頭痛を起こしそうになった。そもそもなんとか頭の中で整理していると、シリウスが難しい顔を浮かべて質問をした。」

「そこまで強引な独裁政権を布いた切っ掛けがあったんじゃないんですか、それともそれほどまでにインジョリックに対抗意識を燃やしていたんですか」

「ロマノには鉱山がありそれなりの収入源はありました、だから作物や畜産物のほとんどは外国からの輸入に頼っていた、しかし数十年前から鉱物が枯渇しました。その代わり以前から取り組んでいた機械化政策に拍車がかかり、軍事国家へばく進させる切っ掛けになったのだと思います」

「そうね。特にルチル前宰相閣下の時は財政難で鉱物輸出の停止が決まり、任期満了を前に独裁政権で有名だったフォーメス現宰相閣下に首が挿げ替わってしまったのは、ちょっと気の毒だったわね。宰相の座を降りてからは属州総督の任に就いているらしいけど。そのルチルって人、ロインの友人なんだって、友情に歳なんて関係ないのかもしれないけど二十も歳が離れているのよ」

含み笑いをしたルピナは果実酒を上品に口に運んだ。

「今日は能弁だなあ、ルピナ」

リウドがからかうと、眉山を吊り上げたルピナがいつものようにへそを曲げて怒鳴り散らした。

彼女の怒鳴り様にガディルが口を開けて笑う姿が妙に新鮮で、ヴレイは茫然とその様子に浸った。

「ヴレイ君、これでも参考になりましたか」

「ああ、ありがとう、それとついでもたいで悪いんだけど、ラ・バジティスっていう村にこれから行きたいんだ、それで」

「ヴレイ」

毅然と声を掛けて止めたルピナは「自分で話すから黙っていて」と視線で言ってきた。

「本当に世話かけちゃってごめんなさい、私達もゼノレフ城まで一緒に同行させてほしいの、それからは自分達の足で行くつもりだから」

するとガデイルは少し顎の下をかいて、思いついたように返事をした。

「それなら村に親しみのある僕の専属エスコーターがいます、城へは僕の飛行船に乗っていいければいい、村へは城から飛行船を出して差上げますよ」

「そこまでしてもらうのは悪いわよ」

「僕がしたいって言っているんだ、それを利用しないと」

ガデイルはルピナの手をとって、拒む意志を消沈させてしまうほどの笑みを作った。

「じゃあ、甘えようかな。ありがとうガデイル」

言ってルピナはガデイルを抱擁した。

感謝の意味でそうしているのは分かっているが、その光景に面白いくない顔するヴレイはそっぽを向いて窓の外に視線を投げた。
切なくなるほど、満天の星空が広がっていった。

NEXT

第62話 震える声

玉座の間は円柱の形をしている。八本の柱で支えられた天井は球を半分に割ったように弧を描いていた。

深紅の厚いカーテンは柱の隅に束ねられ、壁の全面が分厚いガラス張りになっているので、フレイヤの首都ミュードル市街の夜景を三百六十度眺望することができる。頭の上には銀の砂を蒔き散らしたような天の川が悠然と流れていた。

昼間晴れていれば東側にグレイディウルの大山脈、北側にドナ海の水平線まで見ることができる。フレイヤを治めてきた先代の王達はこのから国の行く末を見つめ、統治の有り方を見極め続けてきた。

ジラ王は玉座に深く腰を埋め、重い溜息を付いた。

夫の様子に妃のヴァレンナがドレスの裾を翻して訊ねてきた。

「浮かない顔をして、どうかなさったの」

「親の心子知らずとはよく言ったものだな」

「と、言いますと」

「ルピナをまた旅に出させていいものか考えていた。あいつのやりたい事はやらせてやりたい、だが将来この国を背負っていく人間だ。それなりの学業も国の事も、学ばなければならぬことがまだ山ほどあるのだ」

「そうですね、あの子も分かっているはずですよ。ただ自分の口から言えないだけで、やりたいことも山ほどあるのだから」

「だがシルバームの件を簡単に見過ごせるほど甘い私でもない」

「あなた……」

無然と眉を歪めたジラ王は玉座から立ち上がり、ヴァレンナの手をそっと引いた。窓の前まで歩んできたが街の夜景には目もくれない。

「ガディル王子にルピナへ婚約を申し込んでもらうよう説得してみる。ルピナは私の話には耳を貸そうとしないからな」

「だからってあなた、それは無理やり過ぎるわ。まだ帰って来たわけではないとあんなにあの子も豪語していたではありませんか。シルバームの事はもう眼を瞑ったはずでしょ」

「仕方がないんだ。またいつ事に巻き込まれるか分からんからな」
ヴァレンナの言い分を無視し、ジラ王は玉座の間を横暴に出て行ってしまった。

＊ ＊ ＊

初夏の日差しに照り映える青々とした芝生の上に、流れる雲の陰が落ちて通り過ぎていく。

今日は少し蒸す。従者は汗止めの布を額に巻いていた。

白い大理石の階段を上がって宮殿の中に戻り、中庭の真中を通る廊下を早足で歩いていた従者は、探していた者を見つけて声を上げた。

「ルピナ殿下」

ようやく「殿下」や「王女」と言う響きに抵抗がなくなった。初めてそれを聞いた時三人の男達はハトの様に目を丸くさせ、面食らっていた。

濃い緑の肩布の房と、煉瓦色の帽子の房を揺らして、従者は四人に向かって礼を取る。足を止めた四人もそれに倣う。

「あなたはロバース従者、ご苦勞様」

「恐れ多くも、有難うございます」

従者ロバースは嬉しそうに微笑んで、帽子を振り下ろして頭を下げた。

「殿下、陛下がお呼びでございます。玉座の間でお待ちになつておられますので、私がお部屋までお供いたします」

「父様が、分かったわ、私は一人でいいから三人をガデイルのところに案内してあげて、三人に弦樂器を披露してあげるよう私が頼んでいたって言えば分かるわ」

「はい、承知いたしました」

三人に飄々と手を振って、従者ロバースが来た廊下を戻って行った。玉座の間に向かいながらルピナは不思議と嫌な予感はしていた。覚悟はしつつも、やはり予想したことが当たるとルピナは重い溜息をついて意気消沈した。

父親が腰掛ける玉座の隣には、金の眉をハの字にしたルービーが佇んでいた。怒りを顕わにするルピナを、どうしようもない様子で見据えていた。

「お前の気持ちは分かっている、だがお前は王女だ、将来この国を背負って立つ人間になるのだ。一度はシルバームの件にも目を瞑ったが、私の目が黒いうちに意を固めるのだ」

厳然とした父親の態度に初めて足がすくんだ。出そうとする声が震えて、自分が恐ろしく情けなくなつた。

「それはできないわ、私は剣豪になりたいの。まだまだ見たい世界もあるし、それにヴレイやシリウスやリウドともまだ一緒に旅をしたい」

言いながら感情が高ぶり、ふと目頭が熱くなつたルピナは俯いてそれを隠した。

ジラ王は玉座から立ち上がって俯くルピナの肩をとった。

「わかつてくれ。縛り付けるつもりはないが、お前の身に何かあったらどうする。それに今は剣術より、ここでやるべきことをするのだ」

言っていることは正論だ、だが正論であればあるこそルピナは苛立った。

どうしても納得することが出来ないのだ。言われたまま城にこもることが必ずしも正しいとは言いきれないじゃないかと、怒りを押さえ込もうと犬歯で唇を噛んだ。

「王女だからなんだって言うのよ、何をすべきかは、私が決めるわ」
声を張り上げた瞬間、頬がジンジンと脈を打っていた。

ルピナは引っ叩かれた頬を押さえながら父親に鋭い眼光を向けると、そのまま向きを変えて玉座の間から出て行った。

NEXT

第63話 風乗る音色

「王女だからなんだって言うのよ、何をすべきかは、私が決めるわ」

声を張り上げた瞬間、頬がジンジンと脈を打っていた。

ルピナは引っ叩かれた頬を押さえながら父親に鋭い眼光を向けると、そのまま向きを変えて玉座の間から出て行った。

娘を叩いた掌を見つめるシラ王は苦渋の色を浮かべ、崩れるように玉座に腰を落とした。

ガラス窓の向こうには、夏が近くなる時期によく現れる背の高い雲が、悠然と虚空を流れていた。

雲を呆然と眺めていられる気分でもなく、何故こうも世話が焼けるのかと言いたげに、ジラ王は額に手をついた。

「出過ぎた真似だとは重々承知しておりますが陛下、今のルピナ殿下に旅をお止めさせるのは、少し心苦しいかと思われます。今は殿下に世界情勢を見ていただくことも大切かと」

「あいつには、あいつのやるべきことがある」

「ですか、陛下もルピナ殿下の為を思って一度は旅を許可なされたのではなかったのですか。殿下が人として王女としてご成長なさってご帰還になると、信じて許可なされたのではなかったのですか。もしここで旅を止められたらルピナ殿下は一生後悔いたします」

「ルービィ、貴方が口を出すことはありません」

王妃ヴァレンナがきつく言うと、ルービィはすみませんと謝って

深深と頭を下げた。

「ルービィの言う通りだ。極力ルピナの気持を尊重してやりたい、
だが人には時間と言うものがある。無限に時間があるわけではない」
「ですが殿下はまだ十七歳ではありませんか、若者の自由を束縛し
て何が得られましょうか」

「ルービィ、もういい、下がちなさい」

ヴァレンナの怒鳴りに頑固さはなかったが、金の髪で輪郭を縁取る
ルービィの頬が硬直する。

「ご無礼、お許しください」

ぎこちなく伏礼して玉座の間から出て行った。

＊ ＊ ＊

これからもっと暑い夏がやってくると思うと、ヴレイは心の底か
ら億劫になった。

胸壁の上に立つアーチ状の列柱が並んだ廊下に囲まれた中園は、
中央で直交する十字形の園路で区画されている。園路の交差点には
噴泉が設置され、その一角がオアシスに見えた。

涼しげな水飛沫の音と共に弦楽器を奏でる音色が、風に乗って聞
こえてきた。

その中園を覗き込むと、角に植えられた木の下でガディルが涼し
げにバイオリンを弾いていた。清廉で閑雅な印象を与えるのはやは
り王族だからなのかと、ヴレイは単純にそう思った。

その姿に三人は黙って見入っていると、ガディルがこちらに気付
きバイオリンを弾く手を止めて、おだやかに笑顔を見せた。

「ルピナ殿下がお客様に是非ガディル王子の演奏を聞かせてあげてほしいとのことですよ」

「そうですか、わかりました。三人は僕が預かります、君は仕事に戻ってくれて結構だよ」

従者は伏礼をして仕事に戻って行った。

「すばらしい音色ですね」

シリウスが中園に踏み込むと、リウドとヴレイもそれに付いて行き、噴水に手を伸ばして心地よい涼しさに浸った。

「バイオリンでも弾いて気を落ち着かせないと、これからの季節は参ってしまうからね」

バイオリンを傍に置き、一緒になって噴水に手を伸ばして涼んだ。「ルピナが僕に託すなんて、お呼びでも掛かったのかな」

宝石の様に光を散りばめる水滴を見透かした視線で眺めながらガディルが呟くと、これもまた涼やかな声色でシリウスが答えた。

「そのようです。王族に会える機会なんて滅多にないので、ルピナ王女を待っている間にガディル王子とお近づきになれたらと思います」

「それは嬉しいな、僕も他大陸の訪問者と接する機会なんてそうないからね、それに君達からは不思議な力を感じるんだ、常人にはない感じ」

王子の言葉に驚いた三人は同時に動きが止まってしまった。

彼らの驚き様にガディルは特に気にすることもなく、少し首を傾げてシリウスの胸あたりに視線を向けた。

見えていないと分かっているから尚、彼の視線は不思議と畏怖的なものを感じさせた。三人は不自然にガディルから間合いを取った。

「君は相当努力してきたみたいだね、すばらしい師がいたんだね、それにずいぶん厳しい人だったのかな」

「そこまで分かるんですか」

「なんとなく、君に培われた人柄だね」

本当に鋭い人だなと感心しながらもシリウスは憮然と苦笑いを浮かべた。そして次の標的は誰になるかなと、他人行儀に腕を組んだ。

案の定、ガディルの視線はヴレイとリウドに向けられた。

良く当たると有名な占い師が突然目の前に現れたかのような錯覚に襲われ、否に気温が下がった気がした。

「君達のような人と会うのは初めてだけど、何故か心がとても静寂な気分になるよ、内なる火は強大な存在だけど、向き合ってるんだね」

かなり抽象的にまとめられたが、十分だった。それ以上に詳しく検分されても、嬉しくはなかったのでヴレイは一先ず肩の力を抜いた。

だが見透かされてばかりではおもしろくないので、今度はヴレイから質問した。

「失礼だとは思いますが、今度は俺があんたを分析してもいいですか」

N
E
X
T

第64話 碧眼の意

「失礼だとは思いますが、今度は俺があんたを分析してもいいですか」

噴水の脇に腰を下ろしていたガディルの背後にから、ヴレイは否に真剣な眉間で見つめながら聞いてきた。

「構いません」

ヴレイの突拍子も無い行動にはシリウスも止めに入る余裕がなかった。

「あんたはルピナのこと大事に想ってるのか」

一瞬中庭の風が止んだように感じたのは自分達だけなのかと、シリウスとリウドはあ然としてしまった。

「分析じゃなくて、質問じゃねえか」

「そういう問題ですか、王子に何てこと訊いてるんですか」

真つ当な意見が飛んでくるのは当たり前だった。ヴレイも自分が発言したにもかかわらず、彼らの意見に納得していた。

「真面目に聞いているんだ」

「じゃあ僕も真面目に答えないとね」

間髪無しに返してきたのでヴレイは思わず生唾を飲み込んでむせそうになった。

「これからは僕が彼女を守りたいと思っている、盲目で力足らずかもしれないが、ルピナに求婚しようと思う」

「きゅ、きゅう……こん？」

もはや言葉の意味を成してないことにも気付かず、見事な動揺っぷりを見せたヴレイはその場で放心した。

「この気持ちはずっと前から決めていたことだ、ずっと傍にいたい
と思っている」

見えていないはずの瞳に直視され、ヴレイの視線はあまりにも揺れて動いていた。「それでお前はどんなんだ」と、もの凄い威圧感で問われている気がした。

もたもたしている間に、ガデイルはヴレイから目を離し、回路の奥の方へ視線を移した。

「ルピナの足音かな」

「足音が聞こえるのか」

リウドは顔をしがませて耳を澄ましてみたが、く分からなかった。暫く静かに待っていると、こちらに向かって駆けて来る足音が三人にも漸く聞こえるようになった。

ずっと立ち上がったガデイルが足音の持ち主が現れる前に、その名を呼んで彼女を出迎える。ガデイルの歩みを眼で追ってしまったヴレイは、帰って来たルピナを見て様子の異変に気付いた。

細い肩を抱いたガデイルはうつむくルピナの顔をやけに近く覗き込んだ。

眉間にしわを寄せたヴレイは思わず身を乗り出したが、リウドが「ここは一先ず様子を見ろ」と言うように腕を掴んで止めた。

「どうした、泣いているのか」

「そんなわけないでしょ」

軽く鼻で笑い飛ばしたルピナだが、内に秘めた不安感が透けて見えた。

「じゃあどうした」

「なんでもないわ。三人の相手ありがとうガディル。みんな演奏聞いたんでしょ、腕はかなりのものよって言うても分らないか」

ルピナはガディルの手を肩からどけると、目を反射させる噴水を眺めて目を細めたまま、沈黙してしまった。

「お父上に止められたのか、これからの旅を」

「ええ、でも今は絶対に諦めたくないの。せめて一人前の剣士になるまでは、それにまだこの仲間と一緒にいたい」

決然とした彼女の瞳は少し涙を浮かせていた。

噴水の水飛沫の音だけがにぎやかに響く。

「ルピナ」

真剣な呼びかけにルピナは振り返って、少しだけ視線をかしげる。

緊張感のある空気が流れてヴレイはまさかと息を呑んだ。立ち去りたい衝動に駆られたが、ここで逃げたら負けだと自分に言い聞かせた。

「君の気持ちが変わらないことも分かっている、それでも僕は君を止める」

「えっ」

目を丸くしたルピナと同様、三人の男達の胸の内も同じ眩きを発していた。

「ガデイル……」

しがめいたルピナは眉をハの字にして、返す言葉を模索した。どんなにルピナが困ろうと、ガデイルは断固として彼女からの返事を待った。

中庭から見守っている三人もさすがにここで口を出すことははばかった。

風が吹いてなびいた黄金色の髪は蠱惑なほど決然としていた。碧眼は巨木の如く、微々たる突風ではビクともしない様子で見開かれていた。外野が心配するほどルピナは気圧されてはいなかった。

「何を言われても私は行くわ。私を信じて待っていてくれる人がいるから、でしょ」

ガデイルは一つ溜息を付いて答えた。

「当たり前だ。それでも僕は我慢強い。君が帰って来るのを待っているよ」

また抱擁をするのかと思ったが、今回は固い握手だけだったのでヴレイは溜息を付いて安堵した。

とりあえず折り合いが付いたようだったので、三人は温まった中庭から逃げ出し、日陰になった回廊の下に駆け込んだ。すると今度はルピナが中庭に出て日差しを浴び始めた。

その時見せたルピナの笑みは夏真っ盛りの碧空のようだった。

「あの時ガデイルが買ってくれた剣を持っていこうと思うの」

噴水の水で手を冷やしながら涼んでいると、腰に下げていた緋色い鞆に触れて、名残惜しそうに柄を撫でた。

N
E
X
T

第65話 二本の剣

「あの時ガデイルが買ってくれた剣、持って行こうと思うの。今までグリーフの遺品でもあった剣で剣豪になろうと思っていたけど、いつまでも引きずっているわけにはいかないもの。この剣は婚約者だったルービィに返して、ガデイルからもらった剣で新しく旅立とうと思うの」

柄をぎゅっと握ったルピナは決然と輝く碧眼をガデイルに向けた。それに答えるようにガデイルも頷くと、近づいてくる人影に気付いて回路へと視線を移した。

「その剣はルピナ殿下がお持ちになってください、それがあの方の本望です」

回廊の日陰で涼んでいた男達の後方から突然女性の声が発せられたので、無言で驚いた三人は同時に振り向いた。

佇んでいたルービィはいつにも増して真剣な面持ちだった。流れるような金髪を陽に当てる彼女の妖艶さに、男達は口を開けたままぼう然としてしまった。

「でもルービィ、これは貴方の婚約者だったグリーフの物なんだから、これも貴方の傍にるのが一番いいと思うの、それに私には重過ぎるわ」

断固として首を横に振るルービィ。頭から被る日除けの薄いレースが遅れて揺らめく。

「それでもルピナ殿下の御傍においでいただきたいのです、私では

その剣を錆びさせてしまうだけ、そしてガディル王子がくださった剣を振るえるのも殿下だけです」

ルービイの言葉に心の底からルピナは嬉しくなった。あまりにも素直に嬉しさが込み上がり、涙で濡れた目を隠そうと前髪を掻いてごまかした。

「ありがとう、ルービイ」

それ以上は本当に泣きそうだった。

どうやら一件落着いた様子に、回廊の陰に潜んでいた彼等はいきなりあえず安堵して、それぞれこの閑寂な穏やかさに浸ることにした。

＊ ＊ ＊

翌日、ルピナの腰ベルトには緋色の剣、漆黒の剣の二本が下げられていた。それを見たジラ王は静かに娘の出発を見送ることにした。諦めの境地なのか、それとも素直に見守ることにしたのか定かではないが、ルピナを見送る眼差しはまさに親の視線だった。

首都から南全域は町でつながっているのです、時折馬車を停めて町に立ち寄りながら北空港に向かった。

相変わらず馬車の揺れに慣れないヴレイにとって、こまめな休憩はありがたかった。

城で結ぶ古城街道は街道ごとに名所が付けられているほど有名な。それらの道をたどれば、今も地方色豊かな文化に触れることができる。

代表として知られているのが今いる古城街道や大学街、河沿いの古城多い地域を結ぶ数百キロの長い街道だ。街道沿いには絢爛豪華

な宮殿や、山上にある廃城など六十以上の城が点在し、それらを取り巻くように赤茶色の屋根が並ぶ古い市街が広がっている。

目も覚めるような風光明媚の街道にヴレイは感激した。

季節の花が咲き、澄んだ空気と優しい花の香りが旅人の心を癒してくれる。

そう広くも感じられない道の両側に、一階を店舗として開放した木骨造家屋の店が連なり、少しでも隙間があるところには露店が立てられていた。

時間帯を考えればそれでもまだ人出は少ない方なのだろうが、それでも市場は行き交う人々で狭苦しくなっていた。

ヴレイとルピナは近くの露店で飲み物を買った。集合時間までまだいくらか時間があったので、階段状になっている広場で待つことにした。

二本の剣は腰を下ろす際には少し邪魔になるようで、ベルトの金具から外して手に持ち替えた。「毎度のことだと面倒ではないのか」とヴレイが訊ねると、ルピナは「そんなことはない」と気さくに否定した。

「時々辛いのも、私が小さい頃から傍に居てくれた二人だから」

涙を拭う仕草を見せたので、ヴレイは横目でルピナの様子を窺った。真剣に心配している自分に気付いて、ハッと視線をそらしたが、やっぱり目が離せないでいた。

NEXT

第66話 故人へ

「時々辛い、私が小さい頃から傍に居てくれた二人だから」

涙を拭う仕草を見せたので、ヴレイは横目でルピナの様子を窺った。真剣に心配している自分に気付いて、ハッと視線をそらしたが、やっぱり目が離せなかった。

「グリーンフが死んでしまったことはとても辛かったけど、もっと辛かったのはルービィが大切に想っていた人を私のせいで死なせてしまったこと」

当時の記憶を思い起こそうと、ルピナが見つめる先は更に遠くなる。

「ルービィが一番悲しいはずなのに、いつまでも泣いていた私を無理やりグリーンフの墓前に連れて来て、「命を救ってくれた人に、いつまでも悔やんで泣いているのは失礼よ」って言うてくれたことは今でも鮮明に覚えている」

緋色の鞘をぎゅっと握り、一つ一つの言葉を搾り出すようにして話すルピナは今にも泣き出しそうだったが、すぐ笑みに変わった。

「彼が亡くなってすぐに私の誕生式典があったの。とても自分の誕生日を祝える気にはなれなくて、そんな私にガディルが城下町の鍛冶屋で剣を買ってきてくれたの。この剣で一人前の剣士になれって言ってくれた」

それがその剣かとヴレイは黒い方の柄を見据えた。

「でもしばらく、その剣を持つ自信がなかった。自分一人で強くなっていかなくちやいけないことに、すごく不安だったから、緋色の剣には彼がいるようで、まだ過去に生きているよな自分を見て見ぬふりをしていたことも知っていたから、断ち切る自信もなかったし」

地元の住民が行きかう路上を眺めながら聞き手になっていたヴェイは、なんと答えて良いか躊躇した。

だが素直に思ったことを口にした。

「友達や姉さんを守れなかった悔しさで仇を追ってきた俺が言うのもなんだけど、何かを成し遂げるためには何かを切り捨ててまで、前に進まなくちゃいけないことだってあると思う。ルピナが故人へ依存する自分を切り捨てて強くなりたいと思うのなら、切り捨てた分強くなれるんじゃないかなって思うよ。ただその人との思い出は大切にしなよ」

ヴェイが言った言葉はまるで自分自身に言い聞かせているようにも聞こえた。だがそれよりなにより、このヴェイが小恥ずかしい真面目顔でいかにも決めましたと言いたげな台詞を投入してきたので、思わず泣き笑いしそうなになったルピナは「ありがとう」の一言がやっとの思いで言えた。

もしかしたらずっと彼の隣に居たいのかもしれないと思ったが、情が移っただけだと自分に言い聞かせた。

「とりあえず、ルピナが旅やめなくて良かったよ」

立ち上がり際にぼそつと言われて、聞き漏らしそうになった。でも確かにヴェイはそう言った。

紅潮した頬をぎこちなく押さえたルピナはヴェイの背中を切なげに見つめながら、嬉しくて何も言えなかった。

離れていくヴェイの後姿を見つめ、紅潮する頬を膝で抱いたまま、ルピナは「ねえ」と呼び止めた声を裏返らせた。

「何？」と返事をして振り向いたヴェイはあからさまに紫紺色の瞳を瞬きさせて驚いていた。

「その、ここにいなさいよ」

顔から火が出そうになったルピナは両膝に顔を埋めてしまった。
戻ってきたヴレイはそんな彼女の姿を見て、照れそうな頬を無理矢理引き締めて、少し間を空けて腰を下ろした。

遙か上空で風が鳴る。

故郷を思い出し、「彼女」を思い出す。青嵐の香りを感じてヴレイは気持ちを確認する。

今はルピナの隣に居てあげたい、素直にそう思いながらもどこかで「彼女」への罪悪感を隠していた。

NEXT

&l t; 5章&g t; 第67話 塔の街にて

それから街道を抜け、北空港からゼノレフ王室御用達の飛行船に乗り変えたのは、月が昇ってからだった。星の川を眺めていると、流星が見えてヴレイは童心に返ったかのように感動した。

馬車より数倍乗り心地の良い飛行船内の個室にはベッドも備えられていた。どっと疲れに襲われたヴレイは荷物を床に置いたまま、気を失ったように寝入ってしまった。

空港を飛び立って丸二日が経過した頃、上空から見渡してきたのは高い地位を持つ貴族達が競って塔を建てた街だった。そんな名残ある首都ジェナは昼間の賑わいがまだ冷め切らないようで、星屑を撒いた様に街は煌びやかだった。

そんな王都を眺めていると、天を仰ぐ円塔が寄り集まってできた巨大な主塔ゼノレフ城が眼前に見えてきた。

頑固な楼門の吊り上げ橋は当時の要砦姿が残っている。

城門には二棟の巨大な円塔が付いている。その塔は下の方が広がっており、石組みが基部で分厚くなっている。これは敵が穴を掘って侵入してくるのを防ぐためだ。また攻撃を防ぐため吊り上げ橋の下は深く空掘りされている。

城内中央に建てられた、一際巨大な建造物が飛行船ドックだった。開放されたゲートを通り、誘導されたコンテナに飛行船の船首が固定されると、降り口がケージと繋がった。

到着が深夜だったので早々に個室を案内された。眠気で意識が虚

ろなヴレイは床に就くなり、気付けばうつ伏せの姿勢で翌朝を迎えていた。

あまりの眩しさに慌てて飛び起きると、見覚えのない部屋にヴレイは一瞬戸惑ったが、昨晚ゼノレフ城に到着したことを思い出した。あまりに久しぶりの熟睡に頭が朦朧とした。顔を洗って眼を覚まし、鈍い動きで身だしなみを整えながら、大窓から城下町を見下ろした。

街中のあちらこちらに防衛線にも似た土塁が張り巡らされ、土塁を繋ぐ橋が目立つ。さらに目を奪われるのが、摩天楼とも言えるその街並みだ。さまざまな建造物が街中に何百基と競って伸びていた。

黒髪を結って、靴紐を結び直すと静かに部屋を出た。

広すぎる回廊に途方も無い虚無感があって茫然とした。

陽がかなり昇っていることに気付いて、焦りと不安に駆られているとタイミング良く従者が通りかかったので、ヴレイはすがり付くように尋ねた。

「今お迎えに行くところでした。ガデイル殿下から伝言を受け賜っています、朝餉の後会議室に来てほしいとのことですよ」

「会議室……」

「お連れいたしますが、朝餉の支度ができておりますのでまずはそちらへ」

＊ ＊ ＊

会議室にはすでに皆の顔がそろっていた。

「こめん、寝過ぎたみたいだ」

玉で装飾された椅子に腰を下ろしているガデイル王子の身なりは

本より、ここにきて完璧な凛々しさをさらに磨いたような王子に、ヴレイはかける言葉が思い付かなかった。

ガデイル王子の隣に立っている男は二十代後半あたりの青年だった。鉄色の長い髪はオールバックにして額が露だ。銀とルビーのイヤリングとデザインの同じ指輪と腕輪をしている。

漆黒のローブには頑固な獣の刺繍が施されている。

「良いんですよ、疲れた時は休んでください」

「しょうがないわね、ガデイルに感謝しなさい」

苦笑いするヴレイをルピナは横目で睨みながらも安堵していた。

フレイヤ城の居間と同じく天井が高く、細かな色ガラス細工の嵌め込まれた大窓からは、灰色の空から射す弱い日光を室内に通していた。

「目的とする村、ラ・バジティスの位置を地図で確かめていたところです」

シリウスが親切に説明してくれた。歩み寄ったテーブルにはゼロネフ国内の地図が広げられていた。

ガデイルの隣に立っていた男が三段ほどの階段を下り、飄々とヴレイの近くまで歩み寄って来た。

「俺はデュラッセという、ガデイル殿下の専属宮廷付きエスコーターだ。諸事情があり殿下のフレイヤ来日にはお供できなかった次第だ。今話していたことを伝えよう、耳の穴かっぽじってよく聞け」
通った鼻筋、人懐っこそうな碧眼がヴレイを見下ろした。

「聞いた話によると、お前さんの祖先に関係するものがこの村にあると」

「本当かどうかは」

「で位置は王都から西へ行った所、「迷いの森」にある魔族の集落だ」

「魔族の……」

ヴレイはデュラツセの碧眼を見上げてから、再び怪訝な面持ちで地図上の村へ視線を落とした。

N
E
X
T

第68話 午後のち雨

聞いた話によると、お前さんの祖先に関係するものがこの村にあると」

「本当かどうかは」

「で位置は王都から西へ行った所、「迷いの森」にある魔族の集落だ」

「魔族の……」

ヴレイはデュラッセの碧眼を見上げてから、再び怪訝な面持ちで地図上の村へ視線を落とした。

「その村までは我々の飛空艇でお送りする。村と交流のある俺から先に手紙を送っておいた。お前の祖先の事も何か知っていたら教えてくれるだろう、だが俺はすぐに王宮へと戻らなくてはならないし、ガディル王子も城を長く離れるわけにはいかない、君達だけの行動になってしまいが、それでもいいか」

堅物とは縁のなさそうなデュラッセの人懐っこそうな声色に対して、ルピナが覇気のある声で答えた。

「十分よ、案内だけでも本当に助かるわ」

「そこまでしていただいて、恐縮です」とシリウスも礼を示すと、リウドとヴレイもそれに倣った。

「お安い御用さ。飛空艇は三日後に準備ができる、それまで王宮内でゆっくり寛いでいくといい、もちろん街に行っただいいし、案内してほしけりゃいつでも言ってくれ、俺様御用達の穴場スポットを教えてやるぜ」

鉄色の髪を掻きあげたデュラッセはヴレイの肩に重みのある手を置く、何か質問はないかと皆に尋ねるとシリウスが手を挙げた。

「迷いの森にあると言われる彼らの村には、陸路では行けないんですか」

「行けるには行けるんだが、その森を良く知る案内人がいなくては方角さえ見失ってしまう森で有名だ、それに魔獣と出くわすのもつまらん、だから我々が責任を持って君達を送る。逆にロマノからなら陸路で直ぐなんだがな」

「何故彼らはわざわざ余所者を寄せ付けない辺ぴに住んでいる」

禁煙のせいで気分が落ち着かないリウドがデュラッセの説明が完全に終わる前に訊いてきた。

「数百年前からそこに暮らしているらしいが、あの村は伝説となった神に守られているとかで、村の連中も離れる気がないだけだろ。物資を外から仕入れる交通路は整備されているし、環境はそれなりに良い所だ」

ヴレイの頭を掴んだリウドは顔を近付けて、何やら面白がって呟いた。

「お前の祖先がその守り神だとしたら、村の奴らお前に向かって拝んでくるだろうな」

クククツと人を小馬鹿扱いするようなりウドの笑いに、しかめ面をしたヴレイはこの場で殴り飛ばせないことに苛立った。

＊ ＊ ＊

翌日。午後遅くになって雨が降り出した。

中庭にいた連中は逃げるようにして屋根の下に戻ってきた。

娯楽の間で従者達も混ざってカードゲームをすることになったが、途中で抜けたシリウスは飛行船の中で読んでいた本を持って、デュラッセとガディル専属の従者であるリンと言う男がいる部屋へと移動した。

「失礼する、リン、デュラッセ氏」

ソファアーに深く腰掛けて、分厚い魔法書を難しい顔で読んでいたデュラッセが顔を上げた。

「俺のことは、デュラでいいぜ、皆そう呼んでいる。ここ座りな」

碧眼がシリウスを迎えて、鼻先で向かいのソファアーへ促した。

鉄色の髪は腰まで流れ、シャンドリアの灯りで艶やかに光っている。耳たぶに光る銀リングのピアスが揺れて反射した。

身を引き締めたままソファアーに腰を下ろすと、窓際でぼんやり雨が降るのを眺めていたリンが歩み寄ってきた。

「シリウスさん、でしたね、カードゲームは趣味じゃないですか」
とリンは澄んだ笑顔をしながら覗いてきた。

「そういうわけではないですが、宮殿のエスコーターと話す機会なんて滅多にありませんし、勉強を兼ねていろいろ教えてもらおうと思ひまして。場を白けさせては失礼ですし」

長い足を組むデュラッセは細身でありながら、骨格はガッチリしていて大柄だ。改めて面と向かうと圧倒的な彼の存在感に空気も引き締まった。

「それは失礼なことをしたなシリウス、ああ見えて殿下は結構遊び

好きな青年なんだ。幼い頃はルピナ王女とよく庭の太木に登って遊んでいた。今は外交業務でむちゃばかりしているよ、おっと余計な話になっちまった。政治的な話なら俺の十八番だ」

自慢げに言ったデュラツセは水代わりのワインをくいと飲み干す。それから何度もワインをお代わりしながら、デュラツセは顔色ひとつ変えずに、シリウスが質問してきた事を詳しく説明した。

満足いくだけの情報を手にしたシリウスは、感嘆な溜息を付きデュラツセに礼を言った。

「流石、さまざまな事を御存じで。思ったんですがフレイヤとゼノレフは私の知るかぎり交流はさほどなかったはずですが」

「十七年前、西海岸沿いの国々で安保同盟が組まれたんだ。何かあったら助け合いましょって言う約束をな、そこで石炭が採れなくな我が国のワープ鉱山をフレイヤと協力して賄うという動きが出たんだ、それからだな交流が盛んになったのは。ルピナ王女とガディル殿下が出会ったのもその頃だな」

「ところで、シリウスさんいくつなの」

リンが思いついたように尋ねた。

「今年で二十一でしょうか」

「若いね、その年で貴方も色々御存じでいらっしゃる」

「とんでもない、まだまだ勉強しなくてはいけない事が山ほどあります。魔導ライセンスもまだ取得していませんし」

デュラツセは手元にあった分厚い魔法書を本棚へ戻しに行ったが、シリウスの口から出た言葉を聞くや否や、本も戻さずに戻ってきた。

「お前、魔導士目指しているのか」

「はい。やはりデュラも幻獣を操るのですか」

「勿論。チビだけどな」

「チビ？」

片方の眉をゆがめて首を傾げていると、天井から何かが落ちてきた。

N
E
X
T

第69話 生涯一頭

「やはりデュラも幻獣を操るのですか」

「勿論。チビだけだな」

「チビ？」

すると天井から何かが落ちてきた。

丸い顔に尖った長い耳、毛が多くて小さい体だ。短い四本足に長い尻尾、茶色い毛並みがひどく柔らかそうだ。その獣は顎の下を撫でられ嬉しそうに「プーウ」と鳴く。

「幻獣と言うのは本人が勝手に選べるものじゃない。自分の性質にあった、自分だけの幻獣がいる。修行を積みめば誰でも魔法陣を使って幻獣を魔境から召喚できる。そして召喚できる幻獣は一頭だけ、その魔方陣も一度しか使えない、それが召喚士と魔族との違いだ。召喚士は自由自在に魔獣を召喚できるからな」

「一頭だけ」

「そうだ。自分が希望しているものを願っても、出てくるのはイメージとは違うんだよなあ。そしてその幻獣は生涯自分だけの僕だ、召喚した本人が死ぬと幻獣もそこで寿命を尽きる。幻獣の力と己の能力を組み合わせる戦闘能力を向上させることもできる」

聞き終えてから、シリウスは最も気になっていたことを口にした。
「魔族でなくても魔導ライセンスは取得できるのでしょうか、私は生粋の魔族ではないので、幻獣が召喚できません」

不安げに俯いていたが、スッと顔を上げて、デュラッセからの答

えを覚悟する姿勢に変わった。

「んじゃあ丁度いい、もうすぐバジテイスで祭典が始まる。それと同時に魔導試験も開催される、お前もそこにエントリーしてやる。シリウスみたいに魔族ではないが魔力を持つ受験者は特別枠になると思うがな」

「いいんですか、でも合格の必須項目は幻獣の召喚では」

「安心しろよ、特別枠には特別用の課題がある」

何を意味して乾杯なのか分からなかったが、デュラッセの調子に合わせてシリウスもグラスを掲げた。

紅茶をがぶ飲みすると、思い出したようにまたデュラッセに質問した。

「あの、ガディル王子の専属エスコーターがお供しないほどの事情って、何かあったんですか。差し支えあるなら結構ですが」

「ああ、あれか」ワインを口にしてデュラッセは飄々と答えた。

「文化推進評議会があつてな、俺は陛下の護衛で付き添ったんだ。個人的に興味ある会議だったのだな」

「文化推進評議会って」

「年に数回開かれる代表的な文字通りの会談だ。毎回意見は三方向に分かれる。ガディル殿下のように歴史保存優先派と、機械文明反対派そして機械化推進派だ。無論その完全機械化を推すのはロマノ国のみだった。折り合いはつかず結局、次回の議会へ持ち越された。でもこれからは飛行技術も発達し他大陸との交易は多くなる、少なからずはグランドラインも変わっていく事に変わりはない。機械化支援国も増えるだろう」

シリウスの隣に腰を下ろしたリンがやや天井を眺めるように視線を上げると、何かを思い出すかのように丁寧言葉に言葉を連ねた。

「ガディル殿下も最近のロマノ宰相の施政には懸念していたね、彼の説く文明改造論はグランドラインに異変をもたらすんじゃないかって言っていたよ。ある程度の文明進化はいい血の巡りにもなるけど、グランドラインの元々ある文化を傷つけることは許せないって」

「そうですか、グランドラインの中で温度差が生じているわけですか。私個人としてはベフェナのロイン王子の事が心配になります。ロマノの事でまた無茶をするんじゃないかと」

「気が合うなあシリウス。幼いながらのロインの功績は確かに英雄だ。成功したからいいものの危ない橋を渡らせたのは知的な部分より、まだ経験の浅さが彼を先の行動に移させたと言ってもいい。ベフェナ陛下のご苦労お察するよ」

天井を仰いだデュラッセはワイン瓶の底を額に当てて、瓶の冷たさに浸った。

デュラッセと同じ心境になったシリウスは、重くなってしまった空気から脱せようと、ふと思ったことをそのまま口にした。

「それにしてもデュラは私の師と似ています」

「似ている、このおちゃらけたエスコーターと」

リンが噴出しそうになり、デュラッセはキッと碧眼を細くした。

「はい、雰囲気みたいところが」

睡まで噴出して笑ったリンにデュラッセは今度こそ許さんと言わんばかりに、本の角で従者の頭を叩いたのだった。

N
E
X
T

第70話 碧空へ

突然降り出した雨でリウドとヴレイは近くの酒場に駆け込んだ。

「急に降ってきたな、しゃあねえ止むまでここにいろか」

「そうだな、でもえらい混んでるぞ」

酒場にはこの二人と同じく雨宿りついでで酔客でごった返していた。

煙草と酒、野次や罵声が飛び交う酒場は熱気と湿気をこもらせていた。水分を吸った砂利が木製の床に散らばり、踏み込むたびに靴の底に砂が張り付いて滑りそうになった。

「奥へいくか、まだ向こうなら空いてるはずだぜ」

狭い店内にひしめく酔客を掻き分け、雨交じりの湿った風が細く吹き込んでくる窓際の席に落ち着いた。

リウドが二人分の酒を持ってきて席につくと、心底重い溜息を吐いた。

「明日は出発だな。話さなくていいのか、ガディルもずいぶんお前のこと気に入ってたみたいだし、お眼鏡にかなって良かったじゃねえか」

「でも王子から訊きたい事はもう聞いたし、それにサシで話せる度胸はないね」

「真正面からあんな質問しといて、よく言うぜ」

鼻で笑うリウドは口いっぱい酒を流し込むと、豪快なげっぷを吐いた。店内中に充満する煙草の煙と酒の匂いに浸りながらヴレイはこれから行く村の事を思い出した。

「バジティスって所には俺と似た奴がいるのかな」

「そりゃあ、妖魔族ってのがいるぐらいだから、いるんじゃないのか」

「でもザイドは行かないのに、俺だけが行っても何の解決にもならない気がする」

リウドは上着の内ポケットから煙草ケースを出して、残り一本の煙草に火を点けると、深く吸い込んで長く煙を吐いた。

「自分がそう思えばそれまでだ。あいつがバジティスに行ったからって結果は同じことだ」

煙がまとわり付くリウドの横顔を、上目遣いしたヴレイは眉根を寄せた。平然と店内を見据えるリウドは同じ情緒で言ってきた。

「話は変わるが、お前ルピナのこと好きなのか」

口に酒を含んだとたん噴出しそうになった。

「変なこと言うなよ」

「凶星か」

「ちげえよ」

強引な否定があまりにも技とらしかったので、リウドは「ハイハイ」とあしらいながらも、目尻に薄ら笑みを浮かべた。

「置いて来た女がいるにもかかわらず、旅先で他の女を作れるほど度胸が据わったオトナじゃねえもんな」

「なんだよそれ」

怒鳴り散らすヴレイは頬を真っ赤に染めた。

鼻で笑い飛ばすリウドは喫煙と飲酒を繰り返しながら、顔色ひとつ変えない。

「もっと遊べよ、もったいねえぞ」

「だからってあんなのに手を出す趣味はない」

「十分上玉だろ。僕がなぜ固定の女をつくらないかわかるか小僧」
「そんなの分からなくていい、いつか女に殺されるぞ」

「でもルピナは案外お前の事気にかけているんじゃないのか、僕はこういう洞察力には自信があるんだぜ。せいぜいガディルにやきもち焼くなよ」

片方の口端だけを上げて不適に笑うリウドを見て、ヴレイは腹立たしくなった。憎らしいぐらいに苛立ったヴレイはジョッキが空になるまで酒を喉に流し込んだ。

「酔いつぶれようがどうなろうが構わねえが、きっちり答え出せよ、いつまでもソラがうるせえからな」

「わあかってる」

唐突に現実を突き付けられ、不貞腐れたヴレイは親から宿題をしなさいと言われた子供のようになり、ぶっきら棒な返事をした。

酔いでふらつく頭の片隅で微かにルピナの横顔が見えた気がした。

＊ ＊ ＊

飛空艇を飛ばすにはもってこいの碧空だった。

ドック内は出発に備え、早朝から整備員や技術士で慌しかった。

乗り場と繋がっている移動式ケージで、ガディル王子の灰色の瞳は清々しくデュラッセを見上げていた。

「では頼んだぞ、城のことは心配ない、デュラが彼らを守ってくれ」
「何を言い出すかと思えば、もしも陛下と殿下の身に何かあったら」
鉄色の長い髪が強い風で大きく舞う。

「これは王子としての命令です、よろしく願います」

ガデイルの決定意志は絶対に変わることはない、しかも出発直前に言われてはそれに従うしかない。

デュラッセは背筋を伸ばし、強い声で言った。

「御意」

「ガデイル、そこまでしてくれなくても」

荷物を肩に掛けたルピナが申し訳なさそうにデュラッセを見上げた。

「これくらいはさせてくれ、何もできない分こうした方が、気が楽だ。君たちの旅路にハレルヤの幸多からん事を」

ガデイルはルピナを軽く抱擁し最後に手を握った。恥ずかしそうに少し俯いたルピナは、離れそうになったガデイルの手を咄嗟に握り返して、止めた。

「ごめんね。ガデイルにも心配かけちゃって、でも後悔はしたくないから」

すべてを受け入れてくれるかのようなガデイルの手は、ルピナの手を優しく包んでいた。

それを横目で見ていたヴレイにガデイルが気付いた。紳士的な笑みだが、見えない者から見られるということにどうも慣れないヴレイは肩を硬直させながら軽く会釈をした。

「君には負けられないな。彼女を頼むよ」

思いもしない言葉にヴレイは頬が強張ってしまった。

「目は笑ってないぞ」と心で呟きながら「ああ」とだけ、あからさまにぎこちない返事をした。

「勘がいいんだなあ、王子は」

言いながらリウドは目元だけケラケラ笑っていた。

「ちよっとなんの話よ」

聞いてくるルピナを無視してヴレイはこめ髪を掻きながら、さっさと一人で乗り場へ行ってしまった。

それぞれガデイルに礼を伝えると、船員の一人が出発できると報告に来た。乗組員の搭乗が完了すると、船首を固定していたケージが放され、船体は強い風が吹き抜けるドックをゆっくり抜けた。

ガデイルとリンに見送られ飛空艇は蒼茫たる虚空へ、吸い込まれるように飛び上がっていった。

N
E
X
T

第71話 神体に見守られた村

村外れの小さな空港から坂を少し下りた先に、その村はあった。

「よくいらしたデュラッセ氏、お初お目にかかりますフレイヤの王女、そして歓迎いたします旅人達よ。私は村長のセノラと申します、隣に居るのは自警団長のリユーラン」

村長は素振りの良い好紳士のような男だった。その穏やかな細い目を来航客に向けている。村長の隣に佇む大柄な団長は萌黄色の制服に身を包み、太い眉の下から黒い瞳で来航者を見張っていた。

四人は順番に握手して、村の中へ足を踏み入れた。

三方を山脈に囲まれた集落は、坂道や小径、細い階段が多かった。村の周辺を囲む岩山には幾つもの見張り塔が設けられているのが特徴だ。

村長と自警団長に先導され、村の中で自警団本部の次に大きな建造物、石積み様式の神殿へと案内された。

「初めてこの村に来た訪問者はまず、自警団と村の長に挨拶した後、神々へ感謝をささげるのが慣わしとなっているのです」

紋切り型の説明を受けながら、静寂な礼拝堂へと促された。

出迎えてくれたのは妖艶な雰囲気のを漂わせ、白亜の石像に碧玉の瞳を嵌め込んだような男だった。首の後ろで無雑作に束ねられたその漆黒の髪が、やはり風にあおられて空中を躍っている。

「彼がこの村の祭司、シェノル殿だ」

祭司シェノルは軽く会釈をすると、歌うように声を発した。生クリームを舌に乗せたようななめらかさだった。

「ようこそ、ラ・バジティスへ」

＊ ＊ ＊

礼拝堂の天井には聖書の物語を描いた絵画と、内壁に装飾された神話に出てくる諸動物の彫刻に客人は息を飲んだ。

天窓から射す光は真っ赤な絨毯が布かれた祭壇を照らす。

祭壇の中央には不気味に紫紺色の光を帯びる、水晶のような物体にとにかく違和感を覚えたヴレイは同じ色の瞳を細めた。

祭壇を見下ろすかのように二つの石像が右左に立ちはだかっていた。右側には女神の様にも見える像は琥珀色で、絹の様に流れる髪には目を奪われた。

左側には鬼か悪魔か、どちらにせよ闇を象徴するような紺碧の像が立っていた。一枚一枚が生きているような翼は大きく広げられ、針のような髪は長く風で靡いた形に彫られている。鋭い牙と爪、鍛え上げられた大柄な体軀だ。

これが何者であろうとその邪惡な目つきと威圧感に、ヴレイは思わず息を飲んだ。冷たい汗がこめかみに浮いた。

「この二対の像は何だ」

唐突にリウドが訊ねると、大観したような趣でシェノルが答えた。「この二対の像は村の守り神として祭られています。右の女性は光を司る神です。人々に希望と幸福、勇気を与えてくれます。そして左の像は魔を司る神、通称『戦いの神』ともいいます。人々をたぶらかし絶望の極地へと誘います、がそれは再生の意味もあるので、罪を犯した者には罰を与え、再び光の地へと導く」

四人の脳裏にある人物名がよぎった。

すると村長のセノラが真剣な表情で続きを言った。

「『戦いの神』は太古の昔実存したという言い伝えがあり、魔界を支配する魔王、その魔界とはこの世界とは裏の世界の事を意味するらしいが、それも真か伝説かは定かではありません。この方は偉大なる力を持っていたと言う、それはまさに神」

「ラセツ……」

村長は目を皿のようにしてヴレイを直視した。今のは空耳じゃないかと。

「何故その名を」

つい言葉にもらしたヴレイは、驚く村長の視線にどう答えてよいか躊躇した。なかなか答えを出そうとしないヴレイに気付いたシェノルが皆を神々の前に促した。

「さあ皆さん、祭壇に感謝を捧げてください」

救いの手に助けられたヴレイはほっと肩を撫で下ろした。だが違和感の残る救いの神に対してヴレイは視界の隅で祭司を凝視した。

祈りの風習はどうやら何処も似たり寄ったりのようだ。

この村では祈りではなく日々の感謝を捧げるもので、鼻先で指を組み、瞼を閉じる形式らしい。

参拝し終わった四人は神殿を後にすると、個人経営している宿屋に招待された。

エントラスを抜けて、目に入ったのが鉢植えに咲いた大輪の花だ。新緑の季節にはピッタリの宿築二百年以上経つという石積み壁には、蔓が生い茂り、前庭には湿気の混じる清涼な風が吹き抜けていた。

窓から切り取れそうな紺青の空を見て一時の休息が満喫できそうではあったが、落ち着いて休める気にならなかったヴレイは村の中を見てくると告げた。どうも彼一人では心配なのでシリウスも付いて行くことにした。

N
E
X
T

第72話 風纏う祭司

「本当にあの像はラセツだったのですか。確かに村長は『戦いの神』だと言っていた。ですが君が実際にラセツの姿を見たわけではないですよね」

シリウスの真新しい芝瑠瑠色のローブが風に舞っていた。

いつの間にか買ったのか訊くと、北空港へ向かう途中の町で買ったのだと答えた。

「見たことはないけど、ラセツの記憶みたいなものが頭の中で再生された時と、あの像を見た時の感覚が似ていた。あれが本当にそうだとしたら、ラセツを知る者の子孫、ソラが言っていたラセツの弟の子孫がいる」

「それほど広くもない集落です、探すにはさほど苦労はしないでしょう。ザイドの時もそうですが、なんでも記憶に頼りすぎでは？」

肩口まで伸びた焦げ茶色の髪を揺らし、シリウスは渋った表情でヴレイを見下ろした。

「そんなこと言ったって、しょうがないだろ」としかヴレイは答えることが出来ず、取り留めのない両者の溜息は湿った微風に浚われていった。

「それにしてもこの村、居心地は悪くはないけど、魔力が村中に充満している。香りのない匂いでまた酔いそう」

胸を撫でるヴレイを見て、シリウスは情けなく笑った。

「魔族の村と言うだけのことはありますね。魔力や妖力に関係のないルピナは平気のようでしたが、リウドは渋ってましたね」

慣れるまでは仕方があるまいとヴレイは極力気にしないことにした。熱気がまわり付くような感覚さえ除けば、ここは平穏な村だ。

白を基調とした穏やかな趣が軒を連ねている。白い壁と灰色の石で詰まれた尖がり屋根の家屋が、村を形成していた。しかもその屋根は水を集める受け皿にもなっているという。この地方の雨量は決して少ない方ではないが、村人が自由に使える水の量は少ない為、この屋根を伝って地下の井戸に雨水を溜める仕組みが施されている。迷路のような狭い通路には花を飾る露店が所々に並び、雑貨はどれも色鮮やかだ。階段状の広場では噴水が音を立て、子供達がその周りを駆け回っている。

バジティス・ザリの神殿は、村の中央に位置していた。

石造りの門を通りぬけたところに広がっている前庭には、さまざまな木々が生い茂り、季節の花々が咲き乱れている。

その隅には小さな泉の水面が輝き、大木のすぐそばに聖水を汲み上げるための小さな井戸がある。

その前庭を奥へと進んでいくと、何本もの石柱の並ぶ列柱室が現われる。そこから足元が石の床となり、礼拝堂へと続いていく。

列柱室を抜けた礼拝堂にも、前庭に咲き乱れる花の香りがやわらかく舞い込んできた。ガラスも鎧戸もない石枠の窓から、外の風がなんのためらいもなく無邪気に舞い込んでくる。

前方の壁に描かれたレリーフを眺めていた祭司の後姿が、ゆっくりと振り向いた。その動きに合わせて無造作に結ばれた黒い髪が揺れる。

碧い切れ長の眼がヴレイとシリウスを認めて細く笑んだ。

「またお祈りですか」

警戒心という鎧を、あっさりと溶かしてしまいそうな優美な笑顔だ。それでも相手の気配をうかがう獣のように、ヴレイは微かに目

を細めた。

年の頃は二十代後半あたりの青年だ。背丈は悔しいほど高かった、だが男としてはやや華奢な体格だ。体格の良い自警団長と比べてしまうと、長身の美女にも見えてしまう。

ガデイル王子に劣らないその容貌に目を奪われてしまったヴレイは、「何故こんなばかりがいるんだ」と苛立ってしまった。

「シェノル殿、あなたも魔力をお持ちで」

「そんな感じです」

「あれは何でしょうか」

シリウスは、祭壇から不気味に光の帯びを発するものに目を向ける。ヴレイもそれに視線を向ける。

「あれは、この村に「光」と「影」をもたらす星。光を司る女神の魔力と言う者がいれば、戦いの神ラセツの魔力を封じていると言う者もいる。あれに関する記述が十分に残っていないため、明らかではありません」

「そうなんですか」

ヴレイはシェノルの格好を幾度となく見てしまう。その長身を包む祭司独特のゆったりとした長衣は、薄い水浅黄色。胸と背中の部分には、自警団の制服と同じように花をかたどった村章が刺繍されている。群青色の紐状のベルトが結われている腰はやはり細い。

「祈りをささげていきますか」

貫けるように蒼いシェノルの眼光は異様な存在感を帯びていて、ヴレイとシリウスは警戒する程度に身を引き締めた。

「結構です、さっき祭壇をゆっくり見物できなかったただけなので」

「そうですか、またいつでもどうぞ」

シリウスは丁寧に会釈して、礼拝堂から足早に出て行ってしまったヴレイの後を追った。

N
E
X
T

第73話 夕色の帰り道

「またいつでもどうぞ」

シリウスはシェノル祭司に会釈して、礼拝堂から足早に出て行ってしまったヴレイの後を追った。

既に影が長く伸びるほどに太陽は大きく傾いていた。日々の喧噪に明け暮れている畦道をゆっくり歩きながら、ヴレイが静かに口を開いた。

「あいつの力、魔力なんかじゃない、俺と同じ力だ。もしかしたらあいつがラセツの弟」

「私も同感です。ソラの言ったとおり、ザリとラセツが知らなかった事実を知る者かもしれませんね、と言うより知っていることを願います」

小さな子供達が楽しそうに二人の横を駆けて行く、家路に向かって真っ直ぐと。小径を幾つか通りすぎ、そのうち二人は中心街へと続く太い道に出た。

「にしても驚きの連続ですよ、あんな小さな子供にまで肌で感じる魔力が備わっているとは、フォーリスタークの魔族から見ても驚くでしょうね」

羨ましいさ交じりの言葉を聞きながら、ヴレイは視線で子供達を追った。駆けていった子供達の後を過去の自分が残像となって追い駆けた。でも一人置いていかれてしまい足を止めた。

「自分ばかりがって思っていた自分が情けない。自分は特殊で他の人達とは違う、そう思っていた方が諦めも付くし、楽だった。俺はこの能力のせいにしておきながら、与えられた席に甘えていたんだ」
憤ったヴレイは前方に延びる大通りに視線を投げた。苛立ち混じ

る視線で。

「気付けただけいいじゃないですか」と答えて、微かに夕焼け混じる西空をシリウスは遠い目で見据えていた。

＊ ＊ ＊

宮殿付きエスコーターのデュラッセは自警団本部のミーティングルームで濃いお茶を啜っていた。自分で淹れて飲むほど、村のお茶を大層好むガディル王子の為に、お茶の葉をお土産用に包んでもらった。去年より新芽の量が多く質も良好だったので、満足そうに笑むガディルの顔が目には浮かんだ。

満足そうにお茶を啜るデュラッセに対して、お茶を淹れ替えた团长リユーランは少し音色を低くして言った。

「お前が連れてきた連中、ただの観光客じゃないことは見て分かった」

兵達の訓練風景を眺めながら、その口調はあくまで真剣だ。

「敵意は感じないが、何か目的があつて来たんだろ」

「まあ、色々知りたいことがあるらしいなあ」

「特にあの黒髪の少年、シェノルと同じ波動を感じる」

剣術稽古に精を出す兵士達の掛け声がけたたましく響いてくる。

「しかしここは暑くなつたな、祭典が近いだろ」

「ああ、せっかくだ参加してってくれ、フレイヤ王女も夏の祭典は初めてだろう」

湿った風が自由気ままに吹き込んで、初夏の蒸した匂いを漂わせた。

お茶を飲み干したりユーランは、額に滲んだ汗を手の甲で拭いてから、口を開いた。

「祭りの話題を逸らすようで悪いが、ここに来て隣国のロマノ国が不穏な動きを見せている」

茶葉が揺らめくのを眺めながらデュラッセは気長に呟いた。

「昔から気に入らない国だが、十年前に宰相が変わってから政界の上層部は人相が悪い。あのガデイルも珍しく渋ってるしな」

「現宰相は文明を現状維持してきたグランドラインを積極的に機械化しようとしている。文明進化論を発表し民衆の興味を惹いた、今の地位まで登りつめたのはそれらのパフォーマンスのおかげだな、裏では悪業もあると聞く。何にせよ更に深く調べを進めるには、刺客が要る。ダグシステムからロマノを調べてみるっていうのは」

リューランの提案に鉄色の髪を揺らしたディラッセは気が抜けたような返事をした。

「おいおいロマノはグランドラインで最も機械化が進んでいる、ゼノレフ程度のシステムじゃあすぐ気付かれるのが落ちだ、それよりルチルから情報を回収した方がいい」

リューランは、ルチルと呼ばれた旧友のことを思い出して鼻で笑った。

「忙しいんだか暇なんだか、二週間前も酒場に飲みに来ていたらしいぞ、属州総監督のくせに。宰相の時は半年に一度しか村に来なかつたくせによ」

「んじゃ久々に奴の痴話でも聞いてやるか、ガデイルが俺をここに行かせたのも分かった気がしたよ」

「祭りも近いし村も騒がしくなる、幾分ロマノの内偵はしやすいだろう。できるだけ正確な情報だけガデイル殿下に伝えた方がいいだろ、陛下に伝えるかどうかは王子が判断するだろうし、公でやることじゃないからな。そうと知ってか知らずカルチルから手紙が届いて、祭典を見にベフェナ王子と近々来日するそうだ」

「タイミングがいいじゃねえか。しかしベフェナ王子はよく外出許可をもらえたもんだな」

「良くできた王子だ」と苦笑いを浮かべながらリューランは訓練場に視線を投げた。同じ場所に視線を向けたデュラッセが思い出したようにいつてきた。

「祭典と同時に魔導試験があるだろ、シリウスがその試験を受けるんだが、試験に向けて俺が師匠になってやろうと思うんだ」

「シリウスってあの茶髪の青年か、でもあいつ魔族じゃないだろ、見てすぐわかった」

「魔族じゃない者は幻獣を召喚できないから、その代わりに実力を示さなくてはいけない、久しぶりにあいつは俺の眼鏡にかなった奴だからな」

片方の口端を上げて笑んだデュラッセは額の汗を吹いて、イスから立ち上がり部屋を出ようとした。

「おい、デュラ」

リューランはカップを片付けながら呼んだ。

「悪いな、宮廷のエスコーターにスパイみたいなことさせてよ」

「今さら何言うんだよ、五年十年の付き合いじゃねえだろ」

飄々と手を振って町の中へ去って行った。

いつの間にか大きく日が傾き、白石の建物が多い村を緋色に染め上げていた。

「明日は晴れか」

NEXT

第74話 朝餉の老人

夜明けと同時に村の暁鐘が轟いた。

狐色に焼けたパンを乗せた籠を食卓の中央に置いた宿主の妻は、テーブルの上に食器を並べている夫にそっと訊ねた。

「爺さま用のスープよそいましょうか、今朝は部屋で食べるって？」

「そうだな。でも大丈夫だろ、具合が悪いわけでもないみたいだから」

「爺さまは気紛れですしね、私が持っていくわ」

妻は食器棚からトレイを取り出し、湯気の立つ深皿を陶器の匙と一緒にのせた。

「待って、ドア開けるよ」

宿主は居間から奥の間、爺様の寝起きする扉へと歩み寄り、鉄製の取っ手を下げた。

「ありがとうございます。爺さま、おはようございます」

パチパチと小さく燃える暖炉を確認して、女は少し声を上げた。

麻布のローブを胸元にかけて、厚手の布地で作られた二股のズボンに二本の足を通して、つま先を冷やさないように布製の部屋靴を履いている。山羊の毛で編まれた敷物を暖炉の前に敷き、その上に乗せられた揺り椅子に腰掛けていた老人が、ゆっくりと顔を上げ、口元に笑みを浮かべた。

「おはよう、美味しそうなスープの香りがするね、すまないが、今日は居間で食事をさせてもらっていいかな、あの子がもうすぐ下りてくるのだ」

「え、ええ、いいわよ、肩をかすわ、ちょっと待って……」

嫁の手を持ちながら居間にやって来た老人はソファアーに腰を下ろ

した。

渡されたスープを静かに冷ますと、ゆっくり喉に流しこんでスープの温かさに浸った。

「本当に美味しいよ、君が作るスープは」

「ありがとう、爺さま」と嫁が台所から笑みを投げかけたその時、居間の扉が開いた。

「お、おはようございます」

「あら、早起きさんなのね、顔は洗ってきたのかしら」

年配と言うわけでもないが中年手前の女性が真昼のような笑顔で言ってきた。まだ寝起きでぼんやりした頭をかきながらヴレイは挨拶をした。

「はい、なんか早く目が覚めちゃって」

いまだに村の空気に馴染めなかったヴレイは珍しく早朝に目が覚めたのだ。

居間に入ったとたんヴレイは視線をぎよつとさせた。吹けば飛びそうな枯れ枝のごとき風貌だったが、その全身から発される気迫は鍛錬を極めた者特有の尊厳に満ち溢れていた。朝からキツイ臭気に当てられたような気分になっていたヴレイはその老人を遠巻きに警戒した。

「おはよう。どうした、そんな所に突っ立てないで、こっちにきて顔をよく見せてくれ」

久々に孫との再会を果たしたかのように言われ、少し戸惑ったヴレイは渋々その老人の元へ歩み寄っていく。紫紺色の瞳が恐々と老人の顔を捉えた。

老人はまるで自分の影を糸で床に縫い合わせて、体の自由を奪ったかのように思えたが、老人の発する威光に驚嘆したヴレイは一歩足を引いてしまう。

「強い、いい眼をしている、祭壇の玉と同じ色をしてる」

くくくつと笑う老人のしわくちゃな目尻をいやに注目しながらヴレイは訊ねた。

「あの玉はなんですか」

「なんだと思う」

「分からないから訊いてるんですけど」

「せわしないのう、あれはラセツの涙の結晶とも言われていたが、本当にそうだと証明するものは何もない。お前さんも妖力使いじゃろ」

「使い？」

聞きなれない言葉に戸惑ったヴレイは眉をひそめて聞き返してしまった。

「なんだ聞いたことないのか、まあいいソファアに座りなさい」
言われてヴレイは老人の向かいのソファアにそつと腰を下ろした。
宿の夫婦はなんの変わりもなくいつもの調子で朝食の支度をしていた。

「ラセツの一族と同じ匂いがする、そうなんじゃろ」

唐突な尋問に驚いたヴレイは剣呑に老人を見張った。

NEXT

第75話 祭司の正体

「ラセツの一族と同じ匂いがする、そうなんじゃろ」

唐突な尋問にヴレイは剣呑に老人を凝視した。老人の声は夫婦にも十分聞こえる音量だ。にもかかわらず会話をはずませながらテールに料理を並べている姿が、ヴレイには不思議に思えた。

老人の瞳に嘘は通用しなさそうだった。

「そうですけど、それが何ですか」

「何も、ただの好奇心じゃ。一目見てわかったよ。驚くことではない、遅かれ早かれここに辿り着くだろうと思っていた。お仲間達に来るぞ」

老人の言う通り居間の扉が開いた。

「おはよ、めずらしくあんた早いじゃない」

「いつも寝坊しているみたいに言うなよ」

するとルピナの後ろからリウドとシリウスが続けて入ってきた。

「腹減ったあ、その前に煙を吸わねえとな」

麻生地の寝間着姿のままリウドは煙草を吸いに、表へ出て行った。

「おはようございます……」

まるで放心状態のシリウスは重たそうな瞼を半分だけ開いて、物音ひとつ立てずに入ってきた。

デュラッセは自警団に用があると告げ、昨日からそっちの方へ泊っている。

歓談な朝食を取り、後片付けは皆で手伝った。

片付けが終わるとリウドはバルコニーから庭先に出て一服を始めると、ヴレイが後に付いて来た。意味はなさそうだがあの老人が気になる様子だ。

一本煙草を吸い終わった丁度その時、朝からソファーに座ったまま、姿勢の変わらない老人が唐突に口を開いた。

「今日はいいい天気だな、このまま祭典の日も晴れかの？ そちらのお兄さん」

明らかにリウドに尋問している。老人の声は小さかったが、明瞭感のある透った声色だ。

切れ長の目尻にキツイ笑みを見せたリウドは老人の様子を窺いながら、バルコニーへ上がった。

「あいにく僕は天気予報までできない、そこまで「陽」の勉強はしなかった」

腕を組んで窓枠に寄り掛かり、老人を繁々と見下ろした。

「僕の事も知っているんだろ爺さん」

「知っているとも。いずれは真実を求めにやって来ると、そして私は真実を求める者にそれを話すまでだ、それからどうするかは自分で決めればいい事だからな」

「気が合いそうだな爺さん」

ヴレイは老人の向かいのソファーに腰を下ろし、身を乗り出して訊ねた。

「だったら知っているんだろ、ザリとラセツの間にあったこと。二人はすれ違ったまま死別したってことも。俺はその真実を知るために来た、友達を助けるヒントになるかもしれないんだ」

ヴレイは必死だったが、いたって閑雅な趣を崩さない老人はどこか虚ろ目をして答えた。

「友人とはザリの人格を隔世した者かな」

「はい」ヴレイは強く老人の目を直視した。

「ソラという女性にはもう逢ったか」

「はい、会いました。ここにすれば真実が分かると言われて」

「そうか、お前さんの力のことは言わなかったかな」

「封印のことを言われましたけど」

すると老人はゆっくり立ち上がった。倒れるかと思ってしまうほど、危うい足取りだ。目尻に笑みを作ると幾本もの深い皺ができた。「これを話すには神殿に行く方が良い、でも私はこのとおり足が悪いので一緒には行けないが、私の代わりにシェノル祭司が話してくれるだろう、行くがいい」

その危うい足取りで老人は奥の部屋へもどっていった。

＊ ＊ ＊

シリウスとルピナも連れて、四人は神殿の前庭までやってくると、小さな井戸で聖水を汲み上げていたシェノルを見つけた。彼等に氣付いてシェノルが顔を上げた。

彼の表情は木々の陰にまわれ、輪郭をおぼろげに見せた。

「おはようございます。朝の祈りですか」

落ち着き払ったシェノル祭司は銀の聖餐杯に聖水を注ぎ、女神の石像と戦いの神の石像に供えた。指を組んで瞼を閉じると、皆も揃って同じことをした。

祈りが終わると、眉根を寄せた険しい面持ちのヴレイが最初に口を開いた。

「お前は何者だ、俺はラセツの子孫だ」

シェノルは微風を耳で澄ましながら瞼を閉じた。

「私は、ラセツの弟ゼラの子孫です」

N
E
X
T

弟76話 真実の先

「お前は何者だ、俺はラセツの子孫だ」

シェノルは微風を耳で澄ましながら瞼を閉じた。

「私は、ラセツの弟ゼラの子孫。さきほど宿のお爺さんの召喚獣が知らせに来てくれたから、そろそろ来るころかと思ったよ」

言ってゆつくり瞼を開く。作り物のような碧眼が怖いぐらいに真つ直ぐヴレイを見据えていた。

「文献が残っているわけではない、人から人へと噂のように言い伝えられただけですけど。弟ゼラは兄ラセツを誰より尊敬していた。君にラセツの力が隔世したのはザリとの決着をつける為だって聞いたんだろ」

「ああ。俺達一族の歴史を蒐集してきたソラと言う女から、この村に行けば真実を知ることができると言われた。お前がその真実を知っているのか」

意味もなくシェノルは笑んでいるように見えたので、悪気はなかったが口先を尖らせたヴレイはついその碧眼を睨み付けてしまった。

「眉間に皺がつくよ。今から話すことが君の為になるかどうかは分からない、それは了承して聞いてほしい。ラセツの妻を魔族に襲わせたのはザリではなく、弟だと言われている」

「やっぱりザリじゃなかったんだ」

無意識に拳に力が入っていた。

その様子を、礼拝堂の長椅子に腰を下ろして見守っていたルピナがシリウスの袖を掴んで不安を抑えていた。扉のない入り口に寄り掛かるリウドは有無を言わせぬ静かな迫力を発し、灰色の瞳でシェ

ノルを見張っていた。

「ラセツの心を奪った人間の女性が憎かったのか恨んでいたのかは分からないが、因縁を抱いていたのは間違いない。ゼラにとってラセツは偉大な兄だった。女を魔物に襲われるよう仕向け、自分がやったと悟られないよう、ザリにやらせたように仕組んだ。結果ラセツはザリを殺してしまった。これが、君が知りたかった事実です」

「陥落した弟が末路に取った行動によって、現代にまで飛び火するなんて」

それ以上言葉が出なかったシリウス。隣でヴレイは黙ったまま立ち尽くしていた。あまりにも簡潔に述べられて立ち尽くすしかなかったのだ。

像を細い瞳で見据えるシェノル、その細面の横顔には祖先から受け継いだ荷を、自ら背負い彼なりに苦心と懺悔を繰り返してき影が垣間見えた。

「だから私は、せめてもの償いとして、この二人の像を祭っているのかもしれませんが。ラセツとザリは種族が違うにも関わらず、勢力争いを競う好敵手だったそうです。彼らの絆に亀裂を作ってしまった報いは、償いきれるものではありません」

「そうだな、でもあんたがやったわけじゃない」と低く呟いたヴレイは茫然としたまま、祭壇前に並ぶ長椅子に腰を下ろした。かなり遠いところを無意識に見つめていた。

礼拝堂にいく人かが祈りを捧げにやって来ては、シェノルに挨拶をして帰って行く様子が繰り返された。正午も近く、買い物を終えた村人達が足早に家路へ向かう。

「小僧いつまでそうしているんだ。ザイドを助ける方法が見つからない、あっ気ない真実を今更知ったところで、何も変わらないと思

「ったんだろ」

シェノルは前庭まで出て、足を運んでくる村人に挨拶をして迎入れていた。

「もう仕事が片付いて来てみれば、ザイドを見習いなさいよ」
聞き覚えのある声に皆が同時に前庭の方へ視線を向けた。

「手紙が届いてから待っていたよ、ソラ」

シェノルと抱擁を交わし、絹のような黒髪を翻して祭壇の前まで来ると、村人達と同じ様に祈りを捧げた。腕を組んで溜息をついたソラは少々怒り気味にヴレイの前へ歩み寄った。

N
E
X
T

第77話 紫紺の怒り

「もう仕事が片付いて来てみれば、ザイドを見習いなさいよ、いい意味でスッパリしてるから、悪く言えば馬鹿ね」

聞き覚えのある声に皆が同時に前庭の方へ視線を向けた。

「手紙が届いてから待っていたよ、ソラ」

シェノルと抱擁を交わし、絹のような黒髪を翻して祭壇の前まで来ると、村人達と同じ様に祈りを捧げた。腕を組んで溜息をついたソラは不機嫌気味にヴレイの前へ歩み寄った。

「今は穏やかに見えるシェノルも私がここに連れて来るまでは、自分の能力に翻弄されていたの、貴方が乱流を起こすようにね。でも彼は自分に課せられた運命を受け入れ、ここに身を置くようになったのよ。真実を知ってもザイドを助けられないと思っているんですよ、でも何も知らずに彼と再会するのとは違うわ」

「つまり昔話でも救われることはあるってことか、あんたは知ってて言わなかったのか」

床に視線が落ちたままヴレイは問いただした。

「ええ。簡単に教えたら身にならないでしょ。何も知らないで戦うってことはラセツとザリの時と同じなのよ、でも今はそうじゃない、それに「記憶の書」以上の事を知ることが出来たでしょ」

「そういえば「記憶の書」、ここにあるんだろ」

シェノルが祭壇に視線を上げたまま答えた。

「あります、でも今の君に必要なとは思えない、もう君は真犯人でもあるラセツの弟のことを知った、それ以上は君の判断だ、「記憶の書」は焼却処分する」

双眸を見開いたヴレイだったが、すぐに元の幅に戻った。ソラとシェノルが言っている事が正しかったからだ、何も意見することはなかった。

「戦う戦わないとか、そんなことは関係ない、大昔の奴らのことで、友人をなくしたりしない、そんなアホらしいことで」

太い眉根に力が入り、紫紺色の眼光帯びる瞳は祭壇の石像に向かって怒号していた。

「ザイドはロマノにいるんだな、なら俺もそこへ行く。先に言っておくが戦う為じゃない」

「なら祭典を見てからにしたら、私が薦めるのよ、一週間もすれば精霊祭りが始まるから」

あれほど真剣に語っていたソラが唐突に話題を変えたのでヴレイは呆然としてしまった。

有無を言わずシェノルが祭りの説明を始めた。しかも陽気に。

「この一年を無事に過ごせた感謝と、これからの一年も平穏に過ごせるように、自然界の精霊達に祈りを捧げる祭典だよ。それに人手も欲しいから君達の宿代を半額にしてあげる変わりに、祭典の準備を手伝ってほしいんだ」

結局それが言いたかったのかとあっ気に捉えてしまった四人は、シェノルの頼みに止む無く承諾することにした。

NEXT

第78話 屋台で飯・前

ゼノレフ国と隣接しているロマノ国はドナ海とは反対側の真大海側に面している。ロマノ国はさほど広くはない国だが、西部にはゼノレフ国と繋がる湖、東部にはトラーナ国と繋がる砂漠がある。夏の近いこの季節になると砂漠地帯から乾いた季節風が吹く。

南北へと横断する大山脈はベフェナ国までその尾根を貫いている。グランドラインの大部分が人跡未踏の地という、手つかずの大自然は膨大な歳月を経てきた大地の歴史を物語っているほどに雄大なものだ。

運河が大きく南北に伸びているロマノの首都イーバルは、ゼノレフの首都と同様にその規模は大きかった。権力を持つ一族が富みと名声のシンボルとして高見の塔を競って建てた街は、円を描くように形成し、その中心に栄華を極めた大都城がそびえていた。

堅固く豪華な塔で連なる城壁が象徴的で、強固な隅塔を備えた高い内壁が城を囲み、その外側に低い外壁が囲んでいる。十数層にもおよぶ城郭は下界の街並みと比べるとその巨大さがよく分かる。

ロマノ国の方針は頑丈だ。賊の侵入を防ぐため街中は頑丈な石の壁に幾つも区画分けされていた。商人や旅人など外国から来た者は必ずゲートパスを持ち歩き、通行門を通らないと街の中心部には入れない。しかも門では通行税まで払わなければならない。

「なんだかなア、僕この街あんまり好きじゃない」

ロインが気だるそうに呟くと、二十歳は年上の男が眼鏡のレンズに息を吹きかけ、服の裾で拭きながら言葉を返した。

「でもここの国政を見習う他国の官吏は多いからね、犯罪も周辺国より三割は少ない、だがグランドラインの古くから持つ誠心はこの

国では衰退しようとしている」

グランドラインで最も機械化が進む国は、本の中で見たインジョリックサークの街と似ているような気がした。

様々な機械開発を進めるロマノ国の都心部では、飛獣の交通量より電車やケーブルカーなど街の中を縦横無尽に行き来できる乗り物の方が多く普及していた。飛獣を管理する労働力を考えれば、機械分野に強い国なら必然的な結果になる。

「インジョリック現象は僕が宰相になる前から起きていた、拍車を掛けたのが今の宰相だ。なにも機械化を反対するわけじゃない、だがいっつはインジョリックに対抗している姿勢がある。あちらの文明を吸収したいがために、とんでもない計画を立てているようなきな臭さを感じるんだ」

隣でずるずると音をたてながら麺を吸い上げたロインは、口の中に麺が詰まったまま言葉を発した。

「大臣のくせに確信がないの？ 推測だけじゃあ内通者失格じゃん」
「僕なりに考えているの、それに口の中に物が入ったままゴモゴモ言うな。あいつは、国民に僕が悪政をしているなんて言うめっちゃかな嘘をばら撒き、僕から宰相の座を取りやがった野郎だ」

「その話なら何回も聞いた、でもあの時は鉱物の輸入停止もあったし」

「フォーメスの野郎、十五年前突然現われて、国の発展をとか訴え国民からの信頼も熱かった、だが裏では賄賂と闇取引、死刑囚を使った人体実験なんかは国民からの税で行なわれ、魔族のカメラや遺伝子変異の人種は一般人とは隔離された所に拘束されている、彼に人の血が流れているとは思えない」

話しているうちにルチルの口調はどんどん苛立っていく。

「でも人体実験を本当にやっているかなんて証拠は皆無なんだろう。そんなことが現実にあるなんて」

「予想は付くさ。特殊能力者の開発だよ、例えば魔導と機械と融合とか、それにもし魔術の改造に手を付けられたら質が悪い、あれはアストラルを操れるからね」

「そんなことできるの」

「科学の力を借りればグランドラインでも驚異の武器は作れる」

ルチルは眼鏡をスーパの湯気で曇らせたまま真顔で語り続けていたので、ロインはその曇った眼鏡が気になって小さく言った。

「眼鏡取ったら」

だがルチルはそれを無視して続けた。

「絶対にあれはインジョリックへの挑戦だ、とんでもない兵器を造ろうとしているに違いない。もしかしたら発掘された宝珠を使うのかもしれない」

「でもそれは大袈裟だよ。機械化はインジョリックと交流を深めるためにしていることじゃないの、ルチルの言っていることも一理あると思うけど、絶対にそれって言える確信はないわけだし」

属州総監督へと後退したルチルは気のゆるんだような眼をしておきながら、母国の事を話し始めると葉缶のように熱くなる男だ。

「じゃあ何故研究を非公開で行う必要がある、もしかしたらロマノは世界侵略を考えているのかもしれない」

「世界侵略って、たかだか一国の力が世界に通用すると思う。世界戦争でも勃発させるつもり。千年前に四大大陸を巻き込んだ世界大戦は、魔法文明の発達したフォーリスタークが世界侵略を企てて起きたものだ。その後魔力の乱用を避けるため魔法律が制定され、インジョリックに魔力が広まることはなかった。その代わり科学機械が

進化する結果になった」

ロインはスープを一口啜ってさらに続けた。

「今度はその機械を使って世界侵略だなんて、しかもグランドランから仕掛けたってインジョリックの力には歯が立たないと思うけど、それならインジョリックと少しでも貿易を容易にして、安寧な大陸を作った方が利口だと思うけど」

スープを飲み干したロインは、グレイがシルバームで戦艦を停めた光景を思い出した。あんな人間がインジョリックサークには五万というと思うと、ここで対抗意識を燃やしていること自体、意味のあることとは思えなかった。

N E X T

第79話 屋台で飯・後

スープを飲み干したロインは、グレイがシルバームで戦艦を停めた光景を思い出した。あんな人間がインジオリックサークには五万というと思うと、ここで対抗意識を燃やしていること自体、意味のあることとは思えなかった。

「はあ、旨かった」

満足げに笑みをこぼし、熱った頬を手で押さえた。水の入ったグラスを頬に当てても熱りは冷めなかった。

それもそのはず、酒場と食堂屋台の集まる市場は酔客や観光客、地元の民衆でごった返し、熱気が渦を巻いていた。特にこの屋台街は件数が半端なく多いため、値段も競って低くする。ロマノ国一の台所として毎晩賑わっている。

「そもそもファビ・ナラードの遺跡発掘調査の裏には宰相が絡んでいるに違いない、でなかったらなぜロマノの研究室になんか移管させる」

ルチルもまだ熱くなっていた。

「ルチルまだ言ってる。そうだとしたらとくに大陸軍法評議会に目を付けられていてもおかしくないよ。無法な実験を行っている証拠でも上がれば、それこそ全大陸和平評議会に挙げられて、ロマノ王は永遠に失脚だよ」

「だから早く尻尾を捕まえなくてはいけないんだ」

躍起になってスープを飲み干したルチルは水を飲むように酒も飲み干してしまった。

「ところでバジティスのお祭りが終わったら、宝珠を見に行くんでしょ、苦労して父上を説得したんだからさ」

その時のことを思い出したロインは少し眉根を寄せ、小さく溜息をついた。

食事を終えた二人は、首都の空港に泊めていたルチルの専用飛行船で直接バジティス・ザリへ向かうことにした。

毎度のことながらロインは飛行船に乗り込むなり、将来自分が持ちたい飛行船のことを楽しそうに語る。

「にしてもロイン王子は何故そこまでフォーメス政権の裏事業を疑わない、シルバーム前新王を失脚させたのは君なのに、シルバームとロマノが軍拡協定を結んでいるのは知っているだろ」

「そうだけど、ルチルこそ勘ぐり過ぎじゃないの、事実ロマノはここ五十年内戦もないし、規律は厳しいから犯罪だって他国より少ないじゃない、インジョリックとの交易を盛んにさせたのだってロマノなんだ。少なからずはロマノの功績によってグランドラインが潤ったとも言える、それなのに批判ばかりじゃあ、前には進まないよ」
背を向けたままのロインに剣呑な表情を見せたルチルは腕を組んで、眼鏡越の目を細めた。

「ロインらしくない、いつもの君なら自ら内偵に行きそうなのところなのに」

「そんなことないよ、シルバームの時はベフエナにもグレイディウルにも難民が押し寄せて大変だったし、あの国には友達がいたから助けたかっただけだよ」

虚ろ気に呟いたロインは狼のような姿をした召喚獣を傍らに連れて、用意された個室に戻っていった。

通路からは月のない夜空を眺めることができた。ガラス窓に映るルチルの眉間に細く皺がより、不安混じる溜息を漏らしてから自室へ戻っていった。

N
E
X
T

第80話 仄々明け

宿のベッドはいつも陽射しをいっぱいに吸った匂いがする。深く眠っていたヴレイはいきなり寒くなつてぼんやり驚いた。

「おはよう、ヴレイちゃん」

ヴレイが使っていた掛け布団を手につこり笑っているのはソラだった。

カーテンも盛大に開けられ、窓も全快に開け放たれている。窓の外はまだ夜明けの青さを残している。明け方でも寒くはないが吹き込んでくる風が少し冷たい。

「まだ暗いじゃん」

「もう、ヴレイちゃんったら、皆起きているのよ。半額で宿泊まらせてもらう代わりに、お祭りの手伝いするんでしょ。ヴレイちゃんって朝弱いよねえ、皆で起こしに来たのよ」

似たような台詞をどこかでも聞いた。環境が変つても早起きはどうしても辛い。それとも努力が足りないだけなのかもしれないが、不眠症だった時期が嘘のようだ。

覚めない目を擦りながら上半身を起こすと、掠れた声でよたよたと言った。

「そのちゃん付けはやめてくれない」

「じゃあ早く着替えて、朝ご飯できているから、がんばってね」言つて出ていく彼女の後ろ髪が楽しそうに揺れている気がした。

神殿ではルピナと巫女達がすでに掃除を始めていた。

大あくびをするヴレイは彼女達の働きぶりに、感心したまま突っ立っていると、巫女の一人に神殿の天窓拭きを命じられ、渋々と屋根に登った。

屋根から見る村の景色はなかなか格別だった。神殿の裏方を覗くと、やはりリウドが影に隠れて一服していた。ヴレイは声を上げてリウドを呼ぶと、不機嫌そうな顔でこちらを見上げた。

「うるせえなあ、寝坊助はさっさと仕事しろ」

まだ朝のせいか叫ぶ声が少しかれている。

「うるさいなあ、それよりシリウスはどこに行っただ」

「自警団にいるんじゃないのか、今日からデュラのところだろ」

「そっか、じゃあ後で顔にいこうよ」

「だったら早く仕事終わらせろ」

一つ天窓を拭き終わるたび、雑巾は煤が付いたように真っ黒になった。何度も水の入ったバケツを抱えながら屋根と井戸を往復するのは、さすがに体力を消耗した。全部の窓を拭き終わるとヴレイはその場に仰向けに倒れた。全身から汗が吹き出るのが分かる、脇の下は汗で服がぐったりしていた。

下に戻ると神殿中の窓という窓が開け放たれ、巫女達はそれぞれ窓を拭いたり柱を磨いたりしていた。その動きを見ていると何かの競技のように、きびきびと力がこもっていて早い。ルピナは廊下で雑巾掛けをしていた。

誰よりも速く廊下の端から端まで走っている。

「突っ立ってないで、拭きなさいよ」

顔を上げたルピナが唇を尖らせて言ってきたが、ヴレイはあからさまに嫌な顔をした。キツと恐ろしい形相をつくったルピナはがみがみと文句を飛ばしてきたので、渋々ヴレイは雑巾掛けを手伝わされることになった。

初めての雑巾掛けだったが始めてしまえば後は早かった。ひと段落着いたところで、ぐったり長椅子に腰を下ろして休憩した。普段は使わない筋肉を使ったのでヴェイはしんどそうに息を上げた。

「ちよつといいかな、買い物頼みたいんだ」

礼拝堂に入っ来たシェノルに巫女達はお疲れ様ですと声を掛けた。

「お疲れ様。これで今日の仕事は終わりでいいから。村外れに生地屋が出ているはずだから、そこで白いサテン、あるだけ全部買ってきて欲しい」

シェノルはルピナの手を止めさせ、先に呼ばれていたリウドが前庭で待っていた。

N E X T

第81話 修行開始

「返しに来るのが面倒だからって、小僧が借り馬車を断ったおかげで、このクソ暑い中、クソ重たい荷物をバカみたいに担ぐ破目になったじゃねえか、クソめんどくせえ」

数歩歩けば文句しか言わない有様だ。散々文句をぶちまけた挙句、しゃべりすぎたリウドは息を切らしていた。

「だって、代車を借りたって、どうせ歩きで帰らなきゃいけないんだ」

大人一人分はすっぱり納まりそうな布袋にサテンがこれでもかというぐらい押し込まれている。その重量は半端なく重い。

それを両手に二袋ずつ、平気な顔をして持って歩くヴレイとルピナを、リウドは眼鏡の向こうから呆れるように見つめていた。腕の筋肉が硬直してしまいそうなほど、荷は重い。

「意外にリウドってひ弱ね」

「残念ながらお前らみたいに怪物並みの力など持ち合わせていないんでね、僕は学者だっ」

「もうすぐ自警団だ。シリウスの様子を見ていこうよ、持とうか」
「結構だ」

年下に持つてもらうぐらいなら、迂回して荷馬車を借りに行きたいほど偏屈な意地を張るリウドは、額にまで皺を寄せ、顎の下まで流れた汗を乱暴に手の甲でふき取った。

「一服してく、先行ってろ」

二人を先に行かせると、サテンの詰まった袋を路上に倒した。その上に腰を下ろし、やっとの思いで煙草を吸い始めた。額から汗が流れ落ちて、リウドの苛立ちは地道に浸透していった。

「暑いっ」

朝方は涼しくていいが、昼間は日陰にいないとジトジト汗が滲み出てくるほど暑い。袖なしのシャツと綿素材のズボンにサンダルという組み合わせを、勧めてくれた宿の亭主に感謝した。

荷を積んだ馬車がリウドを避けながら何台も往来するので、路上の乾いた砂塵が車輪に巻きついて舞い上がる。村の喧騒さを眺めながらリウドは仕事に追われない一時もたまにはいいかと思った。

吸い終わった煙草を踏み消すと、袋を担ぎゆくりだが自警団本部へ向かった。

＊ ＊ ＊

魔導試験は筆記と実技が行われる。

専門の学校に通っている者でさえ、実技が合格する確率は全体の三割だという。だが場所によって試験内容が変わる、バジティス村では幻獣を召喚し支配下にしてしまえば合格となる。特殊な環境、辺境の地という面で優遇されているのだ。

シリウスのような幻獣を召喚できない特別枠の場合は、保持する能力を最大限に見せる必要があるとデュラッセは言った。

そこでデュラッセは、シリウスが自分の杖を魔力で出したり消したりする能力に目を付け、それ一点に集中させた。

「で、シリウスは今どこにいるの」
ルピナがデュラッセに訊ねると、本部内の格技場へ案内してくれた。

覇気のある掛け声が吹き抜け廊下にまでけたたましく響いている。格闘訓練や筋力トレーニングをしている兵士達の熱気が充満していた。汗を掻いた時のすっぱい臭いが鼻について、ルピナは渋い顔

を作った。

その中に一人、窓際で手を前に出したまま目を瞑り、黙々と佇んでいるシリウスの姿があった。場違いと言うか、妙にそこだけ空気が静寂していた。

「シリウス、何しているんだ」
今度はヴレイが訊ねた。

「彼は魔力を粒子にまで実体化させようとしているんだ、だからああやって神経を手の先一点に集中させている。完成させるには鋼のような強い精神力がなければ不可能だ」

「でも何故こんなうるさい所でやらせるのよ、普通は静かな所で瞑想するものでしょ」

サテンの詰まった袋の上に腰を下ろすルピナは不思議そうに言った。

「こんなうるさいところだからいいんだ、実戦ではいつどんな時にでも技が使えなければ意味がないからな」

するとようやくリウドが格技場までやってきた。気だるそうにシリウスを見つけると安堵したような溜息を付いて、煙草に火を点けた。

「リウド、煙草吸いすぎじゃない」

ルピナは渋って声を掛けたが、気にする様子もなくリウドは吸い続けた。窓の外へ煙を吐きながら、未だに息が絶え絶えの有様でデュラッセに訊いた。

「で、具体的にシリウスが習得しようとしているのは何だ」
「それはだな」

口端を上げたデュラッセは自慢の作品でも紹介するかのよう微笑を見せて答えた。

N
E
X
T

第82話 月明かり

「で、具体的にシリウスが習得しようとしているのは何だ」

リウドが訊ねると、口端を上げたデュラッセは自慢の作品でも紹介するかのような微笑を見せて答えた。

「彼は杖を魔力で実体化しているところを見ると、魔力という超特種粒子を実体化させることを得意としているらしい、その性質を応用し彼にも幻獣を操れるようにする。あいつの師匠がヒントを託したんだな」

「で、それは試験までに間に合うのか」

不安そうなヴレイはデュラッセを見上げた。

「個人差はあるが、応用技術を習得するには長い時間が必要なんだが、彼の才能に賭けてみるさ。たぶんシリウスの師匠は彼の性質を見抜き、杖を実体化させることに成功した、それは弟子に能力開発のヒントを与えていたんだ。生粋の魔族でも難しいとされる魔力実体化だが、彼なら残り一週間で形にしてみせるさ」

ヴレイの肩を力強く叩いたデュラッセはその場を後にした。

一人静寂に目を瞑るシリウスの額や頬には滝のような汗が流れ落ちていた。

＊ ＊ ＊

三人が帰ってからもしリウスは遅くまで自警団の格技場で鍛錬を続けていた。帰りが深夜になることも多かった。そして毎日のようにリウドの部屋の明かりが遅くまで点いていたことに、シリウスは気付いていた。

ドアと床の隙間から部屋の明かりが漏れて、時々人が動くのとい

緒に影も動いた。さほど気にもせずにシリウスは床に就くが、喉が渴いたので湯を沸かした。二つのカップに紅茶の葉を包んだ袋を一つずつ落として、お湯を注いだ。

一つだけカップを持ってリウドの部屋のドアをノックした。少し眠そうな生返事が返ってきたので、そっとドアノブを下げた。

「紅茶を淹れたんですけど」

「毎晩遅くまでやっているんだな」

「そちらも随分遅くまで起きていますね」

リウドは椅子を引いて立ち上がると、開いていた本を閉じてシリウスから紅茶を受け取った。

閉じられた本の表紙に一瞬だけ視線を向けたシリウスは台所に置いたままの自分のティーカップを取りに戻った。

煙草を手にとったリウドはバルコニーの窓を開放した。

明かりの点いていない居間には青白い月の光がいっぱいに射し込み、二人の影をくつきりとバルコニーの床に落とした。

「間に合いそうなのか、幻獣は」

眼鏡を外したリウドが紅茶を啜って訊ねると、シリウスも一口啜って答えた。

「分かりません、間一髪ってことになりそうですね。リウドこそ毎日何やっているんですか、さっき閉じた本は陰陽の本ですよ、表紙に天秤の印がありましたよ」

外した眼鏡を丸襟に掛け、煙草に火を点けようとしたが風に邪魔されななか火が点けられないでいると、シリウスが掌で風を遮ってやった。漸く煙を吹かしてから「わるいな」と軽くリウドは礼を言った。

「前に言っていましたよね、グレイはザイドを倒し、自分はザイド

を解放すると、随分前から考えていたみたいですね」

「一つ言っておく、お楽しみは最後まで取っとくもんだぜ」

「ヴレイの夢の中に潜った時貴方は心身にかかなりの疲労を受けていた、貴方の使う能力が体に負担をかけるものなら、今度は疲労だけじゃ済まないんじゃないんですか」

眉間に皺を寄せるシリウスは細い目をさらに細くして、リウドの横顔を凝視した。月明かりに照らされ、輪郭を青白く浮かせている。吐いた煙がシリウスの顔に当たったので、リウドは風下に回った。

「僕にしかできないからな、覚悟さえあればいいことだ。それと勘が良過ぎるのもどうかと思うぞ」

「リウドに覚悟があっても、ヴレイはザイドと戦うことを拒んでいる。彼はシルバームの内戦が終わった後に「何も起きないでほしい」と言った、軍人ながらなんてひ弱な事を言う人だと驚きました。でもそれは戦ってきたからこそ怖いものが何かを知っている。リウドが考えている事を話せば、彼は決断できると思います」

「だとしても、話すことはできない」

言い切ってリウドは煙草の煙を肺の奥まで吸い込んだ。

「頑迷な人ですね」

煙草を吸い終わったリウドは紅茶を一口飲み、「ごちそうさん」と言い残して自室に戻っていった。

NEXT

第83話 海上要塞

ラ・バジテイスの祭典初日を迎えようとしている頃。ジルニクス国護衛機関セイヴァ、第一艦隊の艦長候補生スピカは、インジヨリックサークとグランドラインの境界海域に浮かぶ老朽要塞を上空から眺めていた。

濃い群青の海上に孤島のように浮かぶ要塞は、堅固にその場を守っているようにも見えた。

「着水完了、船体に異常ないし、スピリツチャーケージ内の安全ロックを解除します」

「スピリツチャー隊はケージに集合してください」と艦内にアナウンスが流れた。

マニユアル本に目を通していたジーベックが納得した様子で頷いた。

「境界警備軍には作戦プランを提示した、後はこのまま作戦通り進行だな」

「順調に行けば今日の十五時までには七番までの作業は完了よ」
真っ直ぐ中央モニターを仰いでいたノアが昂然と返事をした。

クルー達がマニユアルをチェックしながら、順調に作業が進行している事を確認したスピカは席から立ち上がった。

「ジーベックさんはスピリツチャードックでイーグル隊長の補佐と、ここへの中継係に当たって下さい、ハリさんとシェルトリー二佐、ジノールス一尉は緊急時に備えてのバックアップ対策を行ってください」

ヴレイがグランドラインに渡ってから、いつの間にか半年も経過していた。メールのやり取りはあるらしいが、やはり彼には早く帰

つてきて欲しいというのがスピカの本心だ。

時々押し寄せる不安な気持ちを、振り解くようにスピカは頬を叩いて活を入れた。艦長の任に就いているからと言って、経験も知識も浅い新人には変わりはない、でもそれを言い訳にはしたくなかった。マニュアル本を読んで技術を学ぶこと以前に、状況から推察される判断力が本部から離れた現場では一番重要視される。スピカにとってそれが最も不安な要素でもあった。

スピカは緊急時のマニュアル本を開いた。作戦課から二名、本作戦に同行したのも緊急時に備えてのことだ。やはり万が一の対応にはまだまだ補助が必要だった。しかも今回は境界海域への遠征で、本部から直接的なバックアップもされない状況にある。スピカにとって初の大仕事となったわけだ。

息抜きをしようとスピカは発令室を出てオープンケージへ足を運んだ。

老朽要塞を眺められるオープンケージには強い風が吹いていた。グランドラインに一番近い最北端の海域だ。ここまで来るのに戦艦クラスのスピードでも四日はかかる距離だ。さらに五日はかかる先にグランドライン大陸があるのだから、どれだけ遠い世界なのか思い知らされる。

明るい栗色の髪が肩口で揺れる。一瞬で髪が潮臭くなったがそんなこと気にはしなかった。深緑色の瞳が不安げに大海を眺めながら、どこかグランドラインの姿を探していた。

「あら艦長さん、休憩？」

「あ、シェルトリー二佐、お疲れ様です」

「ノアでいいよ」

クスツと笑ってノアは続けた。

「あいつにも同じこと言ったよ」

「そうなんですか。艦長元氣そうですね僕安心しました。他大陸でしかも一人で仕事だなんて、僕だったら一週間と持たずに戻って来てしまいますよ」

彼女の笑顔が「そうね」と頷いていた。

「霧のせいで要塞が全然見えないな。それに境界海域は天候が変わりやすい、晴れているのも稀らしいよ」

「そうなんですか」とスピカが返事をした後、話題がなく沈黙だけがおりた。不気味に静まり返る中で、「あの」と緊張した面持ちでスピカが口を開いた。

「ノア二佐はヴレイ隊長がグランドラインに行つて不安じゃないんですか、顔色ひとつ変えないし弱音も言わないから、すごいなっと思うんです」

霧の中に浮かぶノアの横顔がいつもとは違う表情を見せたので、スピカは余計なことを訊いてしまったと後悔した。

「そういうことは人の前では出さないものよ」

彼女の気丈な笑みにスピカは畏敬な想いでいっぱいになった。

「それよりあの海上要塞の事なんだけど、所有者がロマノ国と判明した。まだ公にはしてないけど艦長の貴方にまず報告する。それと調査を進めてあれが無人と言う根拠はなくなってきた、システムは稼動しているようだし、一説によるとあの海域には古代の遺跡が沈んでいるとかで、ロマノ国の調査隊や政府の人間が乗り込んでいる可能性も考えられる」

「じゃああっちが我々の艦に気付いてる可能性が」

「そうよ。艦にダグ防壁を掛けたから、もしあの要塞が何かを仕掛けてきても防壁を破かない限り大丈夫。だからスピカはもっと肩の

力抜いて、何かあった時は優秀なクルーがフォローするから」

「はい、有難う御座います。では本部に報告します」

ノアに一礼するとスピカは駆け足でオープンケージを出て行った。

だが調査を開始してから十二時間が経った頃、異変は起きた。

N
E
X
T

第84話 消えた偵察機

調査を開始してから十二時間が経った頃、異変は突然起きた。

コックピット内は情報収集に追われ右往左往と乗組員が駆け回る。辺りを覆っていた霧が突如牙をむいて豹変したのだ。

「どうして、なぜスピリッチャー隊が消えるんですか、情報開示はまだですか」

「スピカ落ち着いて、状況はすぐ解る」

ノアはオペレーターの端末モニターを覗き込む。

「このデータをスピカのデスクへ送って」

「はい」

指示を仰いだのノアは階下のブリッジから階段を駆け上がると、そのままスピカのデスクへ飛び込み、キーボードを操作した。

「この霧は微量ながら電子を帯びている。スピリッチャーが消えたのはこの霧が作り出した電磁界の影響とも考えられる、でも磁界だけで船が消える事は科学的に考えにくい、もしあの要塞から人工的に発生しているものなら、空間をねじる何かがこの電子に含まれている、私見だけど」

「だとしたらあの要塞の所有者は余所者を近づけまいとしているって事ではないでしょうか」

「さすが艦長、さしずめ何かを隠しているか邪魔をされたくないのかですね、じゃなかったらわざわざ境界海域に潜伏しませんって、にしても一帯何を」

言い切ったハリだったが顎に手を付いたままやはり考え込んでしまった。

解決策が見当たらないまま端末を凝視していると、オペレーターからの報告にスピカはスツと顔を上げた。

「本部より入電、モニターに回します」

前方の中央モニターにスカイ副司令官が映し出された。

「つい先ほど、第一艦隊から緊急信号が本部に届いた。ダグ信号はスピリツチャーの救難信号を示している、何故即座に連絡しなかった」

ノアは唇を噛んで答えた。

「申し訳ございません、レーダーからスピリツチャーが消失した瞬間、電波障害が起き連絡が行き届かず……」

「言い訳はいい、消えた原因は何だ、ハッキングか」

「いえ、それはないと思われます。グランドラインにそこまでの技術はありません、ダグ防御壁を破られた形跡ありません。可能性としては辺り一帯を覆う霧が原因かと思われます。スピリツチャーが調査していた辺りの霧は特に密度が濃く、微量ながら霧の粒子と混じって電子が検出されました。そこから考えると何らかの仕掛けで歪んだ磁界がスピリツチャーを消したのが原因かと考えています」

「それで救出作戦は何かあるか」

「まだ分析段階ですが、歪んだ磁界によって消息を絶ったスピリツチャーは肉眼では確認できない狭間らしき空間に、固定された形になっていると思われます。ですからレーダーで捕捉できなくても、我々と同じ空間にいると仮定できます。あくまで理論上ですが」

声を張り上げているわけではないがノアの声色は怜悧でよく透る。一呼吸おき、再び不確定な説明を続行しようとしたその時、階下のオペレーターが突然マイクに向かって声を上げた。

「ウイルス侵入、第一艦隊の第三ダグシステムにウイルスが見つかりました。バージョンを変えながら各エリアの防壁を突破、ダグ中枢に進行しています」

「ウイルスはダグコードを解読し侵食を続けています。防壁の効果なくなりました。完全侵食まで約三時間。第三システムから第二システムに進行しています」

通信モニターに映る副指令は険しい表情を見せ、苛立ちを込めて言った。

「早急にウイルスの出所を調べろ、このまま回線を切るんじゃない、常に本部の発令所と繋いでおけ」

「了解しました副指令。リンダ、急いで迎撃ワクチンを作って、対抗防壁でもいいわ」

「はいっ」

まだ年の若い作戦部の一尉はオペレーターのデスクに着いて作業に取り掛かった。

「彼女の専門って」

あまりの手際の良さにスピカは瞬きも忘れている。

「ハッキングやダグ防壁の組み上げとコンピューターウイルス除去が専門、その腕だけで言えば一佐より上だ。ハリ、ダグ稼働率のレベルを下げる、ランダムに暗号を変えて中枢には侵入させないで」

「了解。ウイルスの進行が遅くなりました、完全侵食まで約六時間」

その時、イーグルが息を切らしてブリッジに駆け付けて来た。

「ウイルス侵入ってどういうことだ、防壁を張っていたんじゃないのか」

半分怒りを露にしたイーグルは鋭い双眸をスピカに向けた。視線に気付いたノアがスピカの背を押して自席に座らせた。

「おい、どうなってるんだ、偵察機が消えたんだぞ」

「分かってるっ」

NEXT

第85話 静止する艦隊

半分怒りを露にしたイーグルは鋭い双眸をスピカに向けた。視線に気付いたノアがスピカの背を押して自席に座らせた。

「おい、どうなってるんだ偵察機が消えたんだぞ」

「分かってる、張った時点ですでに感染していたんだ、この霧の中に混じる電子がウイルスに変異していたら尚更だ。遅効性のウイルスで発症するまでの間、戦艦内部を探索されていた可能性もある。今リンダにワクチンを作らせている」

「なんでグランライン程度のウイルスを侵入させるんだ」

舌打ちをしたイーグルは邪魔そうな前髪をかき上げて床を蹴った。「落ち着け、今作戦を練り直している」

「緊急事態のために作戦部が乗っているんだろ、作戦とかじゃなくて先ずスピリツチャーを戻すことを考えろよ。こうしている間にもあっちでは何が起きているか解らないんだ」

「スピリツチャー内は電磁除去システムが働いている、乗員に影響はない、騒ぐなっ」

ノアとイーグルの言い争いがスピカには心苦しかった。

艦長としての己の至らなさで口論が起きてしまっているのだと思うと、萎縮してしまった。

「すみません、僕が至らないばかりに」

か細い声でスピカが呟くと、ノアとイーグルは黙って自分達の大気なさを恥じた。咳払いをして恥じらいを誤魔化す二人の姿に、ジーベックとハリは隠れて鼻で笑っていた。

「とりあえず霧の攻略作戦の概要を伝える」

まだ機嫌の悪そうなノアはブリッジ内に声を響かせた。彼女の威

敵に磨きが掛かり、クルー達は恐れをなして騒然と静まり返った。

「謎の磁界空間をこじ開けてスピリツチャーをサルベージするには、最低でも三方からの磁界壁で空間を閉鎖し、タイミングを見計らって超高压電流放射砲で歪みを打ち抜く。それを扱えるのはディウアースしかない、ですからディウアースの受け入れ準備と平行に、ライフルをディウ用に改良すること、起動回路とバックアップもディウ用ダグをライフルと直結できるようにしろ、手の空いた者はワクチンの作成に協力して。スピカ、貴方が艦をまとめるのよ」

「は、はい」緊張で頬が強張っている。

「副指令、以下の計画で至急ディウアースを第一艦隊まで輸送願います」

「分かった、ディウを輸送すると同時に、そちらから一人緊急高速船でヴレイを迎えに行け、一刻の猶予もない、居場——携帯の、そ——、検索して——」

「電波障害で通信が切断されました」

「そのようね」

冷静に状況を把握したノアはモニタを目視したままだ。

「にしても突拍子もない計画だな、でも信じるしかねえよな、ヴレイは副艦長である俺が迎えに行く。ケージの現場はジーベックに一任した。ハリ、ヴレイが持つてる携帯端末電波から居場所を検索してくれ、その間に船の準備とあいつにこの旨を連絡する、いいだろノア」

「え、ええ、お願い」

「どうした、浮かない顔して、今更計画変更か」

「そうじゃない、ここはいいから早く行って」

その時、リンダが椅子を半回転させて声を上げた。

「ワクチン完成しました」

「感染している領域にワクチンを注入して」

「はい、ダグシステムに注入します。第三領域からウイルス除去開始。合体ウイルスには抗体を組み替え、対抗防壁で解体攻撃、終了まで残り一分、……残り三十秒、……十五秒、……五、四、三、二、一、工程完了しました」

緊張の張り詰めるブリッジ内が突如暗闇に襲われた。

「システムの電圧がダウンしました。艦内の電力機能が停止、予備電力も稼動しません」

艦内が一瞬のうちに静止状態になり、電子機器がその機能を失った。

ブリッジの明かりは外界からの自然光だけとなり辺りは薄暗くなった。

NEXT

第86話 迎えに

緊張の張り詰めるブリッジ内が突如暗闇に襲われた。

「システムの電圧がダウンしました。艦内の電力機能が停止し、予備電力も稼動しません」

艦内が一瞬のうちに静止状態になり、電子機器がその機能を失った。ブリッジの明かりは外界からの自然光だけとなり辺りは薄暗くなった。

出入り口の頭に非常灯だけが静かに灯る。

「ウイルスを消滅させると電力が落ちる仕組みか。私達を幽霊船に閉じ込めてどうするつもりだ。非常用電力でもいいから回せるだけダグシステムに回して」

ノアは親指の爪を少し噛んで、混乱する神経を落ち着かせようとした。そんな不安定なノアを見てイーグルが「落ち着け」と声を掛ける。

「分かってる」

苛立ち交じりの返事がきて、イーグルは無然と頭をかいた。

「各部損傷を確認して、電力復旧を最優先に、ライフの方はどうなっているの、通信部は」

「ただいま回線も停止しているため技術部と連絡が取れません」

「なら直接確認しに行つて。ドアは緊急時に備えて手動になっているはずよ」

怒鳴ったノアはデスクを丸く囲んでいる座席の足元から、懐中電灯を取り出しオペレーターに渡すと、自分も一本手に持った。

「ノア二佐も行かれるんですか」

席から立ち上がったハリが心配してノアを見た。

「当たり前だ、ここにも何もできない。スピカが中心になって情報を集めて、ハリはスピカの補佐を、後をよろしく」

昂然と指揮を仰いだノアはオペレーターとブリッジを出て行った。

「ハリ、ヴレイの居場所分かったか」

「はい、停電直前で分かりました。これがその位置の座標です、この端末から高速船の端末に繋がば自動で座標に登録されます」

手際よくダグノートを操作したハリは座標を受信したモニターをイーグルに見せた。

「緊急用のサーバーに繋がばメールも送れると思います、でも隊長への連絡は船が発進する前にやってください、緊急運搬船は超高速で飛行します、その影響で電波状況が悪くなるかもしれないので」

「分かった。行ってくる」

ダグノートを脇に抱えてブリッジを出ようと踵を返したイーグルは「それと候補生の補助しつかりやれよ」と言い放って出て行った。

肩が強張ったままのスピカはモニターに視線を落としていた。今の言葉に気を落としたのだろうと察したハリが見かねて声を掛けた。「気にすることないよ、イーグルは悪気があって言ったわけではないから。まず自分が出来る事からやっていけばいいんだよ」

「分かっています。でも僕は臆病だからヴレイ艦長の足元に追いつくことすらできない、こんな艦長は失格だって分かっているんです」

今にも泣きそうなスピカにハリは情けない笑みをつくった。

「そんなこと誰も思っていないよ」

慰めの言葉をもらっても右から左に抜けてしまっているスピカは肩を落としたまま作業に当たった。

放心状態では艦長として頼りないが、これ以上がんばれと言っても効果がないことは一目瞭然だ。

もうそれ以上何も言うことができなかったハリは、発令室を囲む

大窓へ視線を投げると、霧の中で不気味に浮ぶ要塞を肉眼で確認した。

N
E
X
T

第87話 届いたメール

祭典初日は諸外国からの観光客や、村人以外の魔導受験者で市場も宿泊施設も大混雑した。

村の空港も激しい船の出入りで、交通規制まで行っているほどだ。露店は通常の倍は軒を連ね、旅芸人や大道芸人が競って芸を見せている。

数年前までは村人だけで質素に行われていた祭りだったが、魔導試験を祭典初日に行うようになったことと、機械化の発展で個人飛行船を持つようになってから各国の王族や首相、冒険家などが物珍しがつて訪れるようになった。

その御かげで村の名が大陸中に広まり、祭典の時期になると観光客が集中して訪れるようになったと宿主が教えてくれた。

村全体が目覚める前にシリウスは朝食を済ませ、午前中に行われる筆記試験を受けに自警団本部へ向かった。

臨時の宿泊施設を設けてはいるが、彼等の宿泊している小さな宿も見事に満室となり祭典時の時ばかりは、隣人の手を借りるほどの盛況ぶりだった。

朝食の片付けが終わってから休憩を貰ったヴレイは洗い場を借りて自分の衣服を洗濯した。個室に設置されている小さなベランダに洗濯物を干すと、湿った風が部屋の中に入り込んだ。

人通りが多くなってきた路地を眺めながら、そろそろ副指令からの報告通知命令書がメールで届いていそうな頃だと思いダグノートを開いた。デイルの家を出てから受信フォルダをまだ開けていなかったのだ。

運良く宿の全個室にはダグ回線が装備されていた。受信フォルダを開くとそこには副指令とノアからのメールがいくつか届いていた。予想通り、報告メールを送れたの、何故連絡をくれなのなどの内容が送りつけられていた。

ノアの怒った顔が目には浮かんでゾツとしていると、数日前の開けていないメールの中に、送信元はセイヴァ本部だが送信者がイーグルと提示されているのを見付けた。珍しい送信者にヴレイは少し戸惑った。

良くない予感を察知しながら、イーグルからのメールを開く。

『ノアがお前からの返信メールがこなくて怒っていたぞ』という見出しから始まり本文は唐突に緊張感を増した。

『第一艦隊は作戦局一課の第二少佐ノアと新人の技術部一尉を乗せ、グランドラインとの境界海域に浮かぶ海上要塞の調査に出る予定だ。本部で調査を進めているうちに可能性として挙げられた所有国はロマノ国。グランドラインで最も機械化が進歩し、インジョリックを最も意識している国だ、それに廃棄された無人要塞と見せかけて、こちらの情報あるいは非合法の武器や船を密輸している可能性もある。しかもロマノは軍拡材料をインジョリックから多額の鉱物と交換に輸入している事が分かった。しかも一つの国からではなく、どうも複数の国々から輸入しているようで、今まで何も浮上しなかったのは上手く分散させていたからだろうと上は見ている。』

とりあえずまだセイヴァだけで動いている、これを読んだらなるべく早く消去してくれ、ロマノに洩れたら厄介だからな。それとノアにはメールしてやれよ、うるさいぐらいに心配しているからな』

そしてもう一通、ついさっき入ってきたばかりのメールを開いた。ヴレイはそのメールに目を通すなり、ノアの安否で頭が一杯になった。

『第一艦隊が海上要塞からの攻撃を受けた』

呆然としていたヴレイはハッと我に返ると、ダグノートを持って一目散に部屋を飛び出した。混雑している人込みをかき分け神殿へ向かった。

祭典の時だけ神殿の広場には七本の白亜の柱が立てられる。そしていつもは使われない大扉が開かれていた。輝く清い亜麻布の衣に身に纏い、頭には純白のレースをかぶり、腰には金糸が編み込まれた帯を締めているシェノルの姿を見つけた。

彼の側にソラの姿を見付けてヴレイは見失わないように急いで追った。

「ソラ、シェノル、丁度良かった探していたんだ、今時間あるか」
やけに真剣なヴレイを見てシェノルは祭司室を案内した。そこでダグノートを開き二人にメールを見せた。

NEXT

第88話 歳のはなれたトモダチ

輝く清い亜麻布の衣を着て、頭には純白のレースをかぶせ、腰に金の帯を締めているシェノルの姿を見つけた。彼の側にソラの姿も見付けてヴレイは見失わないように急いで追った。

「ソラ、シェノル、丁度良かった探していたんだ、今時間あるかいやに真剣なヴレイを認めて、シェノルは祭司室を案内した。落ち着いた仕事机に置くとダグノートを置き、二人にメールを見せた。

任務のこととセイヴァの事を話すと「なるほど」とソラは納得した。

「貴方がセイヴァの軍人ってことは知っていたけど、グランドラインの調査で来ていたなんて知らなかったわ、貴方をこっちで見つけた時は驚いたもので、迎えはいつごろ来るって」

「第一艦隊からの高速船なら祭典が終わる頃には」
二人は黙って了解しているようだ。

「それでソラにちょっと調べてほしいことがあって、ダグ回線は使えるか」

「はい、隣の資料室に回線があります」

隣の部屋に移るとソラは手際よくダグノートと回線を繋いだ。

「電子回線からの情報収集なら得意分野よ」

「よかった。インジヨリックの研究機関に従事している人は、情報戦に長けているって聞いたことあったから」

ヴレイは安堵の表情を見せて本題を説明した。つまりは海上要塞について調べてほしかったのだ。ソラは十分に理解し快くその依頼を引き受けてくれた。

＊ ＊ ＊

ソラを残し、ヴレイとシェノルが資料室から出てくるやいなや、ルピナがやっと見つけたと言わんばかりの表情で口を尖らせていた。「もう、一緒にシリウスの所に行こうって言ったでしょ。勝手にいなくなってるんだから。それと、お客さんも来てるんだから」

ルピナがその人物を呼んだ先にヴレイは視線を向けた。
「ルチル、こっちだって」

そう言って、廊下の角から軽快に駆けて来たのは、すっかりケガも治ったロインだった。楽しそうに赤銅の長い髪を揺らして、見知らぬ男性と入ってきた。

「ヴレイ、久しぶり」

ケガは大丈夫なのか訊くと、傷跡は残ったが完治したと笑った。再会を喜ぶ二人を眺めながら、シェノルはロインと共に訪れた男を認めた。

「よくいらっしやいました。ルチル属州総督、それにロイン王子」
握手を交わした相手はさらにシェノルより五、六歳ほど年上に見えた。伶俐で気丈そうな男は朗らかに愛想を振りまいている。丸眼鏡が彼の輪郭には良く似合っていた。

「僕の友人ルチルだよ。ロマノの属州総監督。毎年バジティスのお祭りには一緒に来ているんだ」

ロインから紹介を受け、初めましてと言ってヴレイはルチルと握手を交わした。そしてどこかで聞いたことある名だと気付き眉根を寄せていると、ルピナが耳元で答えを教えてくれた。

「ロマノの前宰相よ、前に説明してあげたでしょ」

「ああ」と小声で驚くヴレイは、男を上から下まで眺めてから手を離そうとしたが、ルチル属州総督はまだ離そうとはしなかった。

「キレイな顔立ちだね君、ガディル王子といい勝負だよ、よくそう

言われない？」

「いや」

予期もしない第一声に苦笑いするしかなかった。

「ロイン王子から君の事は聞いたよ、シルバームの戦艦を停めたんだってね。新聞に載らなくて正解だったよ、公になっていたらきつとロマノ政府が血眼になって君を探すと思うからね。もしロマノの役人がここまで搜索に来たとしても、この人込みならたぶん大丈夫だろ」

「たぶんですか」

笑顔の引きつるヴレイはやっと離してくれた掌に湿ぼったさを感じて、気付かれないようにズボンのすそで汗を拭き取った。

「君の瞳って本当に祭壇の水晶と同じ色なんだね」

ルチルは眼鏡以上に目を丸くした。覗かれるのが気持ち悪くてヴレイは思わず身を引いてしまう。どこに視線を置いていいか分からず、紫紺色の瞳がふわふわと宙を泳ぐ。

「そうみたいです」

お互いの自己紹介が終わってから、ルピナの服装が普段より華美にそして奇抜に変身していたことに気付き、思わずヴレイは顔を赤めてしまった。

触れたことのない異様なデザインと目の覚めるような鮮やかな服装に、声も出ずに凝然としてみると、ルピナがするどい形相で寄って来た。

「何よその顔、あんたも着替えるのよ」

思わずハアッと声を裏返してしまったヴレイはルピナに手を引かれ、つんのめりそうになりながら、慌しく神殿を出て行った。

N
E
X
T

第89話 お祭り衣装

野外に出ると日差しが強く照り付けていた。

おまけに人口の倍増で熱気を保温状態にしているかのような暑さだった。

スタイリストになった気分の方ピナは上から下までヴレイの衣装をコーディネートすると、その足でシリウスが受験している試験会場へ向かった。

試験会場になっている自警団本部にはすでにリウドが暑さを凌ぎながら一服していた。吹き抜けになっているエントランスは風の通り抜けが良かった。デュラッセとリューランも露店で買った飲み物で涼みながら休息していた。

サングラスの眉間を少し下げたりリウドは不審そうにヴレイの服装を窺った。そして何も言わず元の位置にサングラスを直した。

「何か言えよっ、変なんだろ」

「変って何よ、私が選んだ服に文句あるわけ」

「明らかに変だろ、何だよこの格好」

服屋の亭主は祭りの時だけ着る、縁起の良い民族衣装なのだと説明してくれた。

麻生地のパンツは動きやすいが、原色ばかりの糸が織り込まれたケープは肩から斜めに掛けて腰のベルトで締められている。おまけは何種類もの石が通されたアクセサリを何重にも首や手首に巻き、髪を結う紐にも同じ物を着けられた。

フレイヤ城で無理やり着させられた堅苦しい服装の方がまだマシと思った。

衣装に悪気はないがヴレイは赤っ恥をかいたような羞恥に赤面するしかなかった。

「筆記は昼前までに終わるから、そろそろ終了の頃だろう。ようルチル久しぶりだな、ロイン王子もお久しぶりです、恙無くお元気そうですねよりです」

リューランは二人を慣れた様子で向かい入れた。デュラッセも同じように二人と抱擁を交わす。

ロインは誰にでも無垢な笑みで開放的だが、ルチルと言うロマノの政府幹部だろう男は、誰にでも同じような含み笑いを向ける接し方だ。と言うよりデュラッセやリューラン、シェノルとは普段から会っているような、軽い挨拶だった。

昼になって会場からは多数の受験者と一緒にシリウスが出てきた。そしてリウドと同じ様にヴレイの服装を眺め、「うん」と頷いて何の意味もなさそうな愛想笑いを向けてきたので、ヴレイはまた眉間に深い皺を寄せた。

「なんだよ」

「いえ、似合っていますよ」

「似合わなくていい、それより午後は実技なんだろう、大丈夫なのか」
「自分で言うのもなんですが、私の場合氏より育ちですよ。やれるだけのことはやりました、後は実力を出し切るだけです」

迷いのない屈託の笑みを見せた弟子は凜然としていて、デュラッセは自分の事のように安堵した。

「とりあえず、飯に行くか」

この混雑した露店街で、皆でテーブルを囲むことは困難だった。ルピナはロインと同行し、護衛としてリューラン隊長とデュラッセが付いて行った。リウドは単独で食事に行ってしまう、残されたシリウスとヴレイは村の中で最も活気付いている繁華街で食事をすることにした。

N
E
X
T

第90話 実技試験

「とりあえず飯に行くか」

この混雑した露店街で、皆でテーブルを囲むことは困難だった。ルピナはロインと同行し、リウドは単独で食事に行ってしまう、残されたシリウスとヴレイは村の中で最も活気付いている繁華街で食事をすることにした。

「にしても早変わりするもんだな、ついこの間までは閑静な村だったのに」

「そうですねえ」

路地と繋がっている開放的な店内は観光客でごった返していた。突き出た屋根の下には臨時で用意されたオープンテラスもあったが、そこも満席状態だった。ヴレイは丁度いいタイミングでカップルが退席したテーブルを確保した。

店員が忙しく店内を駆け回っている。注文を取り、テーブルの片付けをして、料理を運ぶ。誰もが言われるまでもなく自分の仕事をこなしている。店内の厨房からは威勢の良い店員の声や、火の上がる竈で炒め物をする音が聞こえてくる。油が炒められた香ばしいにおいに釣られてヴレイの心は躍る。

注文した料理が大皿に盛られてやってきた。

気の利くシリウスが取り皿に別けながら訊いてきた。

「その衣装、ルピナが選んでくれたんですか」

民族衣装に話題を向けられヴレイは気まずそうに頷いた。

「そんなに恥ずかしがらなくても、目立ちませんよ皆そうなんですから」

「気持ちの問題だよ」

渋々炒め物を頬張るヴレイを見てシリウスは含み笑いをした。大人気もなく子供のように拗ねた顔をするヴレイを見て、出逢った頃を懐かしく思った。

「まあ、シリウスは実技もがんばれよ」

気を取り直したヴレイは陶器のカップを握ると、叱咤するようにシリウスのカップに軽く当てた。

他大陸で出会った友人は目尻に笑い皺を刻み「はい」と強く返事をした。

ただでさえ露店や出店で道幅が狭くなっている繁華街は、祭典によって異常なほどの人だかりだ。しばらくそんな町の喧騒に浸っていると、ヴレイが料理に視線を落としたまま真剣に口を開いた。

「シリウスの試験が終わったらみんなに話さなくちゃいけない事があるんだ。こんな混雑した中じゃあゆっくり話せる状態じゃないしな、とりあえず俺達の同盟もここまでってことだ」

それ以上ヴレイは話そうとはしなかった。

ほぼ重要な部分は言っておきながら、それから先をお預けにされたシリウスは釈然としない面持ちで料理を啄ばんだので、ヴレイは「そんなに気にするなよ」と申し訳なさそうに苦笑いした。

午後からの試験は本部の訓練場で行われることになった。特別枠と通常枠で分けられる。

特別枠は一人ずつ能力を見せていくものだった。番号順でもなく覚悟の決めた者から、試験官に見せていくという少し変わったやり方だった。

シリウスと同じように始めから覚悟を決めていた者は躊躇なく列に付いた。

「よし、次だ」

訓練場はドーム型になっていた。二階の観覧席から試験の様子を観ることができる。

誰にでも観える場所でやるというのは次の挑戦者にプレッシャーを掛けるためか、それとも特に意味はないのか、どちらにしろ受験者にとってライバルの技を見られるというのは良い勉強になった。

頭では分かっているけどシリウスは自分の番になると、暗示されるように鼓動が高鳴った。

何度も深呼吸を繰り返して、いつも使っている杖に意識を集中させた。一気に放出させた魔力は大蛇の姿を形作り、半透明な形から徐々に黄金色に色付きそして実体化した。

実物より微かに透き通ってはいるが、手に持った杖を手首で返したり振り上げたりすることによって、自由自在に操れるようだ。

だが大蛇はそう長くは維持されず、小型で細い蛇へと変化していった。息が上がり、目眩を起こしたシリウスは力なく杖を落とすと、幻獣は空気のように消えてしまった。

「なるほど、手から離れると断ち切れるわけか。まだ攻撃性や対応策がなされていない上、長時間の魔力を放出し続けることは難しいようだ。だが生粋ではないにもかかわらず、よくここまで練り込んだものだ。よし終了だ、結果は今日中に掲示される」

何度も深く呼吸を繰り返したシリウスはお辞儀をして会場から出て行った。

NEXT

第91話 引き返すわけ

自警団本部から出てきた時にはシリウスの意識は朦朧としていた。外で待っていたルピナとヴレイがシリウスの危うい足取りを見てとっさに支えた。

「シリウスと同じような特別枠で受ける連中は、稀に生粋より遙かに凌駕した能力を持つ者がいる。なぜなら生粋の魔族はライセンス取得と同時に、召喚した幻獣が己の鞘代わりになるようなものだからな。だが幻獣を召喚できない特例魔族種は縛り付けるものがないから、自由自在に特殊能力を身に付けられる。それだけの力の持ち主ならな」

デュラツセはシリウスのために買ってきた飲み物を持って、最後尾から弟子の背中を見つめていた。それを隣で聞いていたリウドが執し疑念めいた目付きで尋ねてきた。

「だったら召喚獣が邪魔でライセンスをわざと持たない奴がいるはずだぜ」

「それで捕まった奴も五万といる。捕まれば即牢獄行きだ、悪行や乱用を防ぐために魔力制御をさせるライセンスがある。だから試験の審査委員会も特別枠では特に慎重に審査が行われる、技だけではなく人間性も見抜いているんだ」

「ふうん、でも特例魔族では就けない職もあるだろ」

歩きながら酒を飲み続けるリウドの足取りでは、そのうち人の手が必要になるんじゃないかと思うほどふら付いていた。

体力が回復してきたシリウスは「ありがとう」と声を掛けて、ルピナの肩から腕をどけた。

「それよりヴレイの話したいことって何ですか、試験中も気になっ

ていたんですよ。唐突に同盟はここまでと」

宿までの最後の上り坂でシリウスは少々息を上げながら本題を切り出すと、何も聞かされていなかったルピナが困惑した顔でヴレイを見た。

「本部から徴集が掛かったんだ。つまり帰ることになった。すでに迎いの飛行船がこっちに向かっている」

「ザイドのことはどうするのよ」

「それはこの件が片付いたら、またグランドラインに戻ってくる」

「迎えはいつ頃ここに」

シリウスはその場に立ち止まって呼吸を整える。

「たぶん祭りが終わる頃には」

あからさまに意気消沈したルピナはそれから何も訊かなかった。

ヴレイから目を背けたまま、シリウスの容体を窺っている。

「おい、力の封印はどうするつもりだ、軍に戻ったら妖力を使うんだろ。お前のことだからすんなり封印する気はないんだろうけど、でももしお前が力に喰われたら、誰も止められる奴はいないんだぞ」

嘲笑しながら呆れ果てた様子のリウドは、剣呑な眼光を帯びた灰色の瞳でヴレイを見下した。

しばらくの沈黙で祭りの騒音が明瞭に聞こえた。夕刻近くになって風が出てきた。路上に舞い散っている木の葉が風に吹かれて、滑るように横断していく。

目の端でリウドの視線を感じながら、ヴレイは彼の言葉に否定するわけでもなく無意識に首を横に振っていた。

「乱流さえ起きなければ力は維持できる、これがなくなったら俺の帰る場所はなくなるんだ」

肩から斜めに掛けていたケープが暑苦しかったのでヴレイはそれを腰に巻いていた。結び目が緩んだケープを結び直す仕草が焦燥に

駆られて乱暴になっている。

見かねてシリウスは顔を歪ませて説得を試みた。

「帰る場所はありませんよ。軍でああなたの帰りを待つ人達はヴレイの「力」関係なしに、傍に居てくれる仲間じゃないんですか。私も魔力を持つ者として力を手放すということは、想像以上の覚悟が必要だということは分かります。こんなこと訊きたくありませんが、絶対に乱流を起こさないと誓えますか」

洞察力を働かせる時に細める彼特有の精悍な眼に、なぜか恐怖心を覚えたヴレイは独り閉鎖的な空間に囚われたかのように立ち尽くして答えた。

「誓えないに、決まっているだろ」

答えた声はか細く、撫然に頬をゆるませた。

「これを失った後にやってくる不安がどうしようもなく怖い。前はザリの事を考えると、本当にザイドを救えるのか不安で眠れなかったし、こんな力ない方がよかったって思った」

ヴレイは撫然に笑ったが、リウドとシリウスは黙ったまま眉根を寄せていた。

「力の事を考えると、ザイドの事以上に悩んでいる自分が心底嫌だった、納得するまで考える、これは俺一人の問題だ」

自分で言った言葉が虚しく胸に響き、寂寥感を振り払うかのようにヴレイは再びシリウスを支えて宿に向かって歩き出した。

だが背後から突き刺さるような視線を感じて、ヴレイは恐々背後を覗くと、ルピナの紺碧の瞳が沸々した怒りを滲ませていたので、生唾を飲み込みながら視線を逸らした。

NEXT

第92話 君へ贈りたい

背後から突き刺さるような視線を感じて、ヴレイは恐々背後を覗くと、ルピナの紺碧の瞳が沸々した怒りを滲ませていたので、生唾を飲み込みながら視線を逸らした。

「帰ってくるの」

ルピナの黄金色の髪が横に流れて乱れる。身体の両側で拳を握り締め、愛嬌のある眉をゆがめていた。

「分からない」

「俺一人の問題ってなによ、あんた一人のことで皆が巻き込まれているのよ、一人の問題なんて言わないでよ」

「ごめん」

「謝らないでよ、どうしてグランドラインにくるのよ馬鹿、帰るぐらいなら来ないでよ」

「馬鹿って」

耳までガンガン響きまくる怒鳴り声を放ったルピナは、来た道を駆け足で引き返していった。

「おいっ」と声をかける間もなくルピナの背中小さくなった。

「知らねえぞ」

煙草をくわえたりウドは飄々と歩いていってしまい、「ここは出番なし」と背中に書いたデュラッセも行ってしまった。

「私はもう一人で歩けますから、謝りに行った方が」

「なんで俺が、ほっとけ」

ヴレイはルピナが戻っていった石畳の道を横目で睨みつけていた。

＊ ＊ ＊

宿に着くとシリウスは数時間仮眠を取るので自室に上がっていった。

ヴレイも自室に戻り寝床に横になると、外の祭り騒ぎが耳に付いて落ち着かなかった。祭りは嫌いじゃなかった。向こうにいた時はイベントがある度に祭り好きのクルーに強引に連れられ、いつの間にかすっかり自分も祭り好きメンバーの仲間入りをしていた。

そんな懐かしい思い出に駆られ、宿から出て盛況する市場を歩いていると、装飾店が軒を連ねた露店街へと迷い込んだ。祭りの雰囲気を感じながらも、辺りを見回す視線は落ち着かなかった。

「あいつどこ行ったんだ」

ブツブツと文句と言いながら、ふらっと店内を覗いてきた旅人に気づいた店主が、目尻を細めて歩み寄ってきた。

「彼女へのプレゼントかい」

と思わぬことを訊かれヴレイはとっさに首を振った。

「じゃあ自分のために女物選んでるのかい、観光客だろ、精霊祭じやあ装飾品を女に贈る風習があるんだ、愛があふれる季節だな」

店主は悪巧みでも考え付いたかのような笑みを見せてきた。

「そうなんだ」

苦笑いしたヴレイは唇を噛みながら腕を組んだ。

どこか嬉しそうに品を買っていく客を尻目に、店から立ち去ろうとしたが心なしか後ろ髪を引かれ、装飾品を見ながら店主に尋ねた。

「フレイヤの王女を知っているか」

「ああ、もちろんだ、なんせ我が国王子の婚約者候補だろ」

「そうらしいな」

途端にヴレイの気分は下り坂になった。

「べっぴんさんで剣術が達者と聞いた、城下町に時々見えられるって言うんだ、一度お目に掛かりたいもんだが隣国の一市民には遠い

お方だぜ、もしかして彼女がフレイヤ王女だとか」

店主はあえて意地悪そうに覗いてきたので、ヴレイは頬をゆるませ「そうだ」と言ってみた。すると予想通り店主は冗談に捉えて高笑いした。

「何を貰ったら喜ぶかなって」

装飾品に視線を泳がせながら真剣に悩んでいる少年を見て、店主は含み笑いをした。

「簡単さ、お前さんが選ぶものなら、何でも喜ぶさ」

「だいいけど」

内心そこだけは納得いくものがなくて、憮然と笑ってしまった。

そんなことはお構いなしに、店主は嬉しそうにヴレイが選ぶ物にあれやこれやと口を挟んで営業を始めたのだった。

NEXT

第93話 すれ違う視線

「いいのか、飲みに行くって言わなくて」

「なんでリウドと飲みに行くのに許可が必要なの」

グラスを片手にルピナは眉間にしわを寄せた。不満をぶちまけた
そんな口端を尖らせては、グラスにかぶりつく。

「ガキみたいに拗ねんなよ、グレイだって分かってると思うぜ」

「分かってるってなにがよ」

「お前があいつに惚れてること」

「はあっ」

込み合う酒場の中でもルピナがテーブルに叩き落したグラスの音
はよく響いていた。

「意味分らないこといわないで、私にはガディルっていう立派な
婚約者候補がいるのよ」

「候補ねえ、でもあれは分かりやす過ぎるぞ、気づいてる？ 誘惑

される身にもなれよ、彼女持ちかもしれないねえぞ」

「え、そうなの」

紺碧の瞳が満月の様に丸々と見開いた。

リウドは吸っていた煙草を根元まで吸いきると、陶器の灰皿に押
し当てた。

「知らねえよ、それよりあんな小僧よりさあ」

グラスを持ちながらリウドはルピナの隣に座ると、涼やかに目尻
を細めて肘を突いた。あまりにも近くに座ったので、ルピナは思わ
ず不機嫌そうにリウドを睨みつけた。

「僕と遊んでみる？ いい社会勉強になると思うぜ、青臭い小僧な
んてほっとけ」

リウドの腕が蛇のようにルピナの肩を抱き寄せた。

「ザイドのことも、お前のこともほっぽりだして見す見す帰るような奴だぜ」

回した手でルピナの髪を撫でた。

しばらく黙っていると、虫でも叩くように手をどけられた。勢い余って腕がルピナの肩から落ちてしまった。

「ヴレイが帰るって決めたのよ、見す見すじゃない、そんな人じゃないわよ、それに」

これ以上にならない満面な笑みをつくり、「あんたと遊ぶぐらいなら、ヴレイと遊んだ方が何百倍もマシよ」と言い捨てて、グラスの中の酒を一気に飲み干した。

ルピナの飲みっぷりに圧倒されたりウドは、煙草に火を点けて満足げに煙の味を楽しんでいた。

＊ ＊ ＊

翌朝、シリウスが居間で食後の紅茶をいつものように啜っていた。ヴレイもいつもと同じ時間に起きてきた。服に着替えてはいるが、まだ寝癖だらけの黒髪は力なく肩に落ちたままだった。

「シェノルから伝言がありましたよ。お昼頃に神殿に来てほしいそうです」

「わかった、ありがとう」

宿主に礼を言うと、まだ半開きの目を擦りながらヴレイはソファに深く腰を落とした。

「ソラに調べものを頼んでいる、シリウスも一緒に来るか」

「そうですね、まだ試験の結果も見に行っていないませんし、ついでに」
「受かっているといいな」

それから昼近くになってようやくルピナとリウドが起きてきた。
明け方まで露店で飲んでいたらしく、ぼさぼさの頭を気だるそう

に掻きながらリウドはテラスで煙草を吹かした。

酔いに任せて腹を割って話せたのか、以前より打ち解けているルピナとリウドの様子を尻目に、ソファアーにふんぞり返るヴレイは空になったカップを持って立ち上がった。

「いつの間に飲みに行ってたんだよ」

「お前の許可がいるのか」

ぶっきら棒な返事がテラスから飛んできた。

「聞いただけだろ」

台所にカップを洗いに来たヴレイとすれ違ったルピナは、淹れたコーヒーに視線を落としたままだった。

そのままテラスに出たルピナの背中に文句の一つでも言ってやりたい気分だったが、大人しくカップを洗った。

ヤキモキしながらも苛立つ口調を隠し、二人に神殿へ行くかと訊ねると、まだ眠気眼のリウドは気が向いたら行くといい、テラスから戻ってきたルピナは一緒に行くと返事をした。

神殿はお昼の祈りに足を運んでくる村人達と観光目当ての見物客でにぎやかだった。シェノルによる聖書の朗読が終わると、資料室へ案内してくれた。

ダグノート越しにソラが快くいらっしゃいと言った。

「グランドラインの電子情報なら、ちょこつと操作すればゴロゴロ出てくるわよ」と得意げにソラは笑みを浮かべた。

「何か分かったか」

「せっかちなね、ちょっと待ちなさい」

結果を急ぐヴレイに対し、急がされたソラは唇を立てて嫌々キーボードを操作した。

「ロマノは情報ネットも発達しているから調べやすかったわ、セイヴァが調べている老朽要塞の画像を見つけたの」

手際よく操作すると、ダグノートの画面にそれは映し出された。
嵐の影響で画像がひどく歪んでいるし画質も見れたものではないが、
目を凝らして観てみれば母艦としても使えそうな軍艦が映っていた。

N
E
X
T

第94話 海溝に眠るもの

「何か分かったか」

「せっかちなね、ちょっと待ちなさい」

結果を急ぐヴレイに対し、急がされたソラは唇を立てて嫌々キーボードを操作した。

「境界線で浮かぶ艦隊は確かにロマノ国の所有物だったわ。この海域はインジヨリックの海流とグランドラインの海流、そして双方の対気流がぶつかる一帯だから晴れることは滅多にない。インジヨリックの電波を捕まえることも困難だし、非合法的な武器を密入するにも、こう悪天候や嵐が続く海域を業と経由させるなんて変だと思ったの」

ソラは椅子から立ち上がって本棚の縁に寄り掛かった。

「驚きました。宮殿付きの諜報部員並みに、いやそれ以上に腕があります、何故そんなことが」

感嘆するシリウスは眉を歪ませた。

「プロだからね。彼女は考古学研究者として修士号と、遺跡ハンターのライセンスを持つ、情報戦は彼女の十八番です」

シェノルが自慢げに言うのと、満更でもなさそうなソラは恥ずかし気に彼をにらんでから、寄り掛かっていた本棚から一冊の本を手にとった。

「メリットがないことが分かってから、ロマノ政府の情報ネットを調べていたら気になる話題が挙がったの、ここからは私の興味本意もあったんだけど、「世界の空」って知っているかしら」

ソラの質問に皆は眉根を寄せて、返す言葉を詰ませた。

「遺跡の類に分類されているんだけど、約三千年前の魔術士が創っ

たもので、地系能力者の力によって創られたと古書では記述されているわ」

「な、何、そのマジユツシッて」

また非現実的な単語にヴレイの口端が引きつった。日頃子供たちにものを教えるのと同様に、呪文を歌う様な透る声でシェノルが説明した。

「魔術士の力は魔導とはまったくの別物です。魔導は魔族と人間の間から生まれたもの、それに対し魔術は普通の人間が先天的に備わっている能力の事で、「六大」と言う万物を構成する六つの要素のどれかを操る者を魔術士と言います。その六大とは空、水、雷、地、火、風を意味し、総称してアストラルと言い、アストラルの精霊が憑いていると言われています。でも六大の力を持つ者は本当に稀で、しかも地系は特に希少です。確認されているだけでも千年間に十人も満たない」

突飛な現象にヴレイは怪訝な顔をした。

「すごい確率だな。そこまで稀だと自分が魔術士だと知り、能力を呪いたかった奴もいたんだろうな。偏見もあるだろうし」

過去の自分と照らし合わせながら、まるで悲劇の主人公にでもなったかのようなヴレイに陰気臭さを覚えたルピナは二、三回咳払いして、声を張り上げた。

「じゃあそれを創った人はとにかくすごい人だったってことね」

「そうですね、現にこの村に魔術を持つ人はいません」

シェノルはソラに続きを話すよう視線を向けた。

「『世界の空』は太陽光と火山岩で構成され、どんな原理かは解らないけどこの世で唯一、主の思うままに兵器を具現化する、あるいは合成物を創ることがきる鉱物なの」

「魔術士ならそんな物が作れるってのか」

きよとんと瞬きを繰り返すヴレイは、ダグノートの画面に視線が釘付けになる。

「天体規模として存在しているアストラルは外界から降り注ぐ有害物質を分解し除去するエネルギーを持っているらしいですよ。インジオリックサークではすでにその存在が証明されているそうですが、科学を知らない我々にとってそれは珍現象なんです。君もいい例ですよ。だからそんなものがあっても不思議じゃないと思いませんか」

信ぴょう性がありそうでなさそうな話しに、怪訝するヴレイは「短絡的過ぎじゃないか」と、あまり機嫌が良さそうではない情緒で呟いた。

「今は海溝に封印されているけど、実存するのよ、ロマノの要塞の下にね」

腕を組むソラが片方の口端を上げて気の強そうな笑みを向けた。

「じゃあロマノはそこに石の在りかを探し出したってことね」
ルピナがパチッと指を鳴らした。

「その石を研究している学者達の資料とロマノ要塞艦の位置からして、多分間違いないわ。魔導に関わる者ならどこかで耳にした事はある昔話だし、ちょこっと詳しく調べれば何処にあるのかもすぐ調べられる」

「じゃあ何故今まで誰も石に手を伸ばそうとしなかったんだ」

せっかちな質問に、ソラは「待ちなさいよ」とでも言いたげな視線をヴレイに向けた。

「しなかったんじゃない、できなかったんだろ、グランドラインの技術じゃあ引き上げるにも難しいんだ」

溜息と一緒に呟いたのはドアの縁に立っていたリウドだった。サングラスを取って喉襟に掛ける。

N
E
X
T

第95話 幻獣の化石

「しなかったんじゃない、できなかったんだろ、グランドラインの技術じゃあ引き上げるにも難しいんだ」

溜息と一緒に呟いたのはドアの縁に立っていたリウドだった。サングラスを取って喉襟に掛ける。

「二日酔いは大丈夫ですか」

喉で笑ったシリウスが部屋の中へ促しながら訊いてきた。

「そんなもんねえよ」

気だるそうに頭を掻くリウドは明り取りほどの小さな窓の下に落ち着いた。

「リウドの言う通りよ。海溝にある物をどうやって発掘するのよ」

不思議がるルピナがソラに目を向けると、「それは」と少々考えながらソラは答えた。

「普通なら潜水艦で探索して、クレーンで引き上げるんだけど、そのやり方はインジョリックでしかできない方法だからここではどうなの」

結局質問に答えられずシェノルに回答権を譲った。

「で僕に目を向けられても。陣で呪をかけても本人が死ねば封印は解けてしまいます、封印場所を海溝に選らんだのは術者が自分の死後、封印が解けても海底と言う聖域で守られ、石は眠り続けるだろうと考えたからでしょう」

「神官さんの仮設で考えると、要は寝ている奴を叩き起こさせてこどろ」

「どうやって起こすのよ」

意味が分からないでいるルピナはリウドに訊き返した。

「つまりだ、目が覚めちゃうほどの強大なエネルギーで呼び起こす

んだ」

「そうよ思い出したわ、ロマノの研究施設に移管された、ファビ・ナラードで見つかった幻獣の化石が握っていた宝珠、その宝珠が封印を解くのに使われるはずよ、目が覚めちゃうほどの召喚力を生む」
質問には答えられなかったものの、ソラは自慢げに説明する。

「召喚獣と関係しているのか……」

独り言のように呟いたヴレイはふとある一点の可能性が脳裏をよぎり、困惑と疑念で頭がいっぱいになった。

「まさか」

啞然とするばかりのルピナは笑いながらも焦りを隠しきれず、シリウスに自分とは反対の意見を望んだが、期待した答えは出てこなかった。

「ヴレイも今同じ事を思いましたよね、もしかしてって」

シリウスの言葉にヴレイはハッと顔を上げると、ルピナが愕然とした面持ちで立ち尽くしていた。

「何か心当たりがあるの？」

ソラは皆の目を順に見ながら、顔をこわばらせた。

「あたし外出てる」

ルピナは逃げるように資料室から出て行ってしまった。

彼女の後をシリウスが追う。理由が分からずソラはあっけらかんと立ち尽くした。

「気にすることないよ、ところでありがとう。本当に助かった」

ソラはヴレイにダグノートを返し、お安いことよと笑った。

「妖力のことはちゃんと考える、自分だけの問題じゃないから」

「そうね。ゆっくり考えて」

ルピナが出て行った入り口の向こうには、礼拝堂の入り口が見える。祭りで活気付く村人たちは、いつもより装いが派手なような気

がしてヴレイは楽しそうに眺めた。

「こっちに來てから色々思ったんだ。毎日世界のどこかで内戦や紛争が起きている。そして俺みたいに仇を取りたいと思っている奴も沢山いる。憎しみに駆られて復讐をしたらまた何処かで争いが起きる」

祭りの賑やかな喧騒音だけが部屋の中に響いた。

「だから仇はもう追わない、復讐を成し遂げたとしても喜ぶ奴なんていない、でもザイドのことは諦めない、絶対に助けたい」

無然に笑んだヴレイはソラに表を向けた。

「会えてよかった、本当に」

「私もよ、祭り楽しんでね」

ヴレイは照れ臭そうに頬を緩ませ、噛み締めるようにソラと握手を交わした。感謝の意を示すようにシェノルの碧眼を見据えてから資料室を後にした。

残されたリウドは腕を組んだまま、鼻から溜息を吐いた。

「リウドさん」

「さんはいらねえ」

「彼を頼みます」

「お前に頼まれる覚えはないぞ」

素っ気無い笑みをつくるリウドは無雑作にサングラスを掛けると、長身の体を揺らして資料室から出て行った。

N E X T

第96話 肩に掛かる体温

夜になって村は煌びやかに浮かび上がった。

村を三区に分け、一区に一台ずつの四輪山車を引きながら区内を練り歩く。

派手に金銀を装飾された山車には村の子供達が行儀よく座り、小太鼓を叩き、お囃子を奏でている。

二日目までは区内を引き回り、三日目に中央通りに三台が集まるといった具合だった。

自警団本部でシリウスの試験結果を聞き、夜も待たずに露店の酒場で祝賀会を開いた。デュラッセとリューランも呼び、人でごった返している狭い店内で大人六人が卓を囲むと、益々熱気がこもって暑苦しくなった。

席を確保するなりルピナはカメラを持っていた観光客を呼び止め、場に落ち着いている暇もなく唐突にカメラのフラッシュが光った。

仕切りたがるルピナがシリウスのために乾杯の音頭を取ると、炭酸の泡が噴きあがったように、盛大にシリウスの合格を祝った。決して広くのない円卓を埋め尽くす料理と酒が会話を異常なほど弾ませた。

数時間かしてデュラッセとリューランは自警団本部に戻って行った。四人になってからも場の熱は冷めそうもなかった。かなり夜が更けてから、まだ疲れの残るシリウスはリウドに付き添われ宿に帰って行った。

三台の山車が広場に集まると村人達は山車を囲み、太鼓のリズムに合わせて踊り始めた。

手をヒラヒラと頭の上で返しながら、千鳥足で踊るのがこの祭典

の形式らしい。頬を赤くしたルピナは昂揚して飄々とした足取りで踊り始めたので、心配するヴレイも仕方なく輪の中に入った。

無邪気に笑うルピナから目を離すことなくヴレイも恥ずかしがりながら見真似で、村人達や観光客と交じって踊った。

そのうちに千鳥足が酔っ払いのよろめき姿に変わっていたので、ヴレイはルピナの手を取って広場を出ると、祭りの様子をただ静かに見守っていた街路樹の脇に腰を下ろした。

「少しここで酔い醒ませ」

ルピナの頬はさらに赤みを増し、目も虚ろになっていた。

ルピナを座らせてから、少し距離を置いた隣にヴレイは腰を下ろした。

「まだ怒ってる？」

お囃子や小太鼓の音色が祭りの騒ぎ声と一緒に流れてくる。愉快的な笑い声が合唱のように響いていた。

「始めから怒ってないわよ」

「怒ってたよ、無茶苦茶なこと言うし」

苦笑いを滲ませながらヴレイは天を仰いだが、見えたのは夜風に吹かれる青葉だった。

「できることならザイドの件が片付いてから帰りたかった、ごめんな、色々振り回して」

「なんで謝るのよ、他人でもないのに」

まだ酔っているのかルピナの口調は怒りながらも弾んでいた。

また「ごめん」と言いそうになって、言葉を飲み込むとヴレイは何も言えなくなってしまうた。

「少し落ち着いたら宿に戻ろう」と告げると、コクリと頷いたルピナの頭が肩に乗った。ふわっと野花の香りがして、ヴレイは肩に力

が入った。

無理にどかすこともできず、しばらくそのままじっと耐えた。祭りの明かりがぼんやり浮かんで光景が夢幻のように揺らいでいた。

「帰ってきて」

消え入りそうに呟いたルピナの声を、聞き逃さなかったヴェイは

「うん」と答えて、肩から伝わる体温を感じながら瞼をとじた。

しばらくしてからポツリとルピナが口を開いた。

「明日、ロインのところに行くわ」

N E X Y

第97話 渡された想い

「帰ってきて」

消え入りそうに呟いたルピナの声を、聞き逃さなかったヴレイは「うん」と答えて、肩から伝わる体温を感じながら瞼をとじた。しばらくしてからポツリとルピナが口を開いた。

「明日、ロインのところに行くわ」

「宝珠の事か」

「そうよ。お祭りが終わったらロマノに移管された宝珠をルチルと見に行くって言っていたし、少しだけ話がしたいの」

「分かった、俺も一緒に行く。だからそろそろ宿に帰ろ」

ルピナを起こして、宿に向かってゆっくり歩き始めた。

まだまだ混雑する露店街の中で逸れてしまわないように、ヴレイはルピナにケープを掴ませた。

シリウスの祝賀会の時は場を盛り上げようと一生懸命に気分を昂揚させていたようだが、お開きになり気がまぎれる場がなくなると、打ち上げれた花火のように静まってしまった。

ちゃんとルピナがケープを握っていることを確認しながら、黙って歩く宿までの道のりがやけに長く感じられた。

宿に着く頃には全身に酒が回っていた。今にも崩れ落ちてしまいそうなルピナを部屋まで運ぶと、居間のソファで気ままに紅茶をすすっていたシリウスを見つけて、向かいのソファ―にふんぞり返った。

「ああ、疲れた、歩きながら半分寝てたぞあいつ」

「相当飲んだようですね」

「いや、弱いんだろ、そーいやりウドは」

「飲み直すとか言ってまた出て行きました」

「よく飲む奴だな」

ぐたつとソファに身を倒したヴレイは手足を伸ばした。空気が動く。ヴレイから発する酒臭さも一緒に動いた。

「寝ちゃう前にベッドへ行った方がいいですよ」

「ん、後で行くよ」

言いながらヴレイの瞼は虚ろに開いたり閉じたりしている。

「ヴレイ、少し前のことなんですが、ザイドから連絡があったんです」

「え、ザイドから」

眠気を堪えていた瞼が数秒開いたまま動かなくなった。

「ザイドから言わないように口止めされてましたが、君の連絡先を聞いてきたので、勝手ながら教えました、これがザイドの携帯電話の番号です」

シリウスは用意していたメモ紙をテーブルに差し出した。

突然転げ出た折紙を見つめてから恐々手を伸ばした。そろそろと紙を開き、半開きの目は書かれた番号を何度も見返していた。

「君が帰るなら、黙っておく必要もないかと思ひまして、勝手ながら。ザイドから連絡するとも言っていましたよ」

「え、あいつから掛けてくんの、まさかザリじゃないだろうな」

「まさか、それはないと彼も言っていたような気がします」

口内を噛むヴレイは紙を折り畳み、ズボンのポケットに突っ込んだ。

「なんかガキみたいなケンカに巻き込んで、ごめん、色々迷惑掛けたな」

「どうして謝るんですか」

聞いたことある言葉にハッとヴレイの視線が上がった。

「どうして余所余所しくするんですか、大きなお世話かもしれませ

んが、君の目の前にいる友人は君の事を心配したくてここまで来たんですよ、それを「ごめん」で返すんですか、友人を心配してはいけませんか」

常に落ち着き払ったシリウスが珍しく早口だった。横になっていたヴレイは体を起こして背もたれに身を預けた。

「ルピナにも同じこと言われた、謝るなって、ありがとう」

その言葉を聞いたシリウスは満足そうに笑みを作ると、「ベッドで寝てくださいね」と言付けてソファから立ち上がった。

「あのさ、電話した方がいいと思う？」

メモ紙を指で転がしながら、不安げにシリウスを見やった。

「気になるなら掛ければいいじゃないですか、恋する乙女じゃあるまいし」

「そりゃ、そうだけど、緊張するし」

「子供ですか」

雪解け水を浴びせられたようにシリウスの言葉は冷たかった。

簡単に一人残されたヴレイはメモ紙を閉じたり開いたりしながら、「それもそうか」と納得した。

NEXT

第98話 懐かしい声

しばらく応答を待っていると、警戒するような低い声が電話に出た。

「久しぶり、電話で話すなんて初めてだよな」

『お前か、シリウスの奴喋りやがって』

溜息と思ったが、電話口で聞こえたのは煙草を吐いた時の吐息だった。

「俺、向こうに帰ることになったから、っていうか今、ザリじゃないよな」

『みたいだな、へえ帰るんだ、グランドラインはどうだった？ 楽しかったか』

電話口でザイドは皮肉そうに笑っていた。

「ああ、楽しかった、こっちに来てよかった、なんかこうやって話していると、ザリとかラセツとか嘘みたいだ」

『嘘だ、今だけは』

「はあ、なにカッコつけてんだよ」

笑いながらヴレイは天井を仰いだ。ふと目頭が熱くなって、必死に口元に笑みを作った。

「助けるから」

『お前こそカッコつけんな、じゃあな』

「ちょっと待て、お前今どこにいるんだロマノか？」

『帰るんだろ、知ってどうするんだよ、じゃあな』

「ザイド、インジョリックサークに来い」

必死に呼び止めた。もう少し、もう少しと思いながら、ヴレイは電話口で言葉を搾り出した。

「ザリの人格を消す方法があるかもしれない、俺はジルニクスのセ

イヴァにいます、こっちに来いよ、時間ないかもしれないけど」

電話口から言葉が返ってこなくなった。煙草を吸う音さえ聞こえない。

『考えておく、ありがとな』

電話は一方的に切れて、自分の鼓動だけが響いていた。たかが数分の会話だったが怖いぐらい長く感じられた。

しばらく切れた電話を茫然と見詰めたまま、ポケットの中でメモ紙を握っていた。

＊ ＊ ＊

祭りの最終日というのに、怪しげな暗雲が広範囲にわたって空を覆っていた。

「ロイン王子は昨晚から熱を出されていたようで、今は臥せっていらっしやる、ついさっきルチルが薬を買いに行ったところだ。どうやらシルバームの時にやった大規模な召喚の反動がまだあるらしくてな」

ルピナとヴレイは朝食を取ってから、デュラッセが宿泊していた自警団本部に向かった。そうとは知らず、本部の医務室のベッドでロインは頬を赤らめ、深い呼吸を繰り返しながら横になっていた。ルピナとヴレイが医務室を訪れると、ロインは首だけ起こして二人を迎えた。

「ロイン大丈夫？ 無理していたんじゃないの、体力が回復してなかったから」

「大丈夫、前にもあったけどすぐに熱は下がったから」

無垢に笑うロインはゆっくり上半身を起こそうとしたので、とっさにルピナが手伝った。

とりあえず安心したヴレイは軽く咳をしてから口を開いた。

「ロインにはまだ話してなかったんだけど、実は俺インジヨリック

の軍人なんだ、ジルニクス国の防衛機関に所属している。嘘をついて悪かった」

気にすることないよとロインは首を振った。

「そのセイヴァがグランドライトとインジョリックの境界海域に浮かぶ要塞を調査していた途中でトラブルが起きた。それで俺は軍に戻るようになった、たぶん今日中には村の飛行場に迎えが来ると思う、村の管制官には一応知らせてはある」

「そうなんだ、じゃあお別れなんだね」

寂しそうに呟いたロインの肩にそっと手を置いた。

その様子を黙って見据えていたルピナが「それで」と、ヴレイの代わりに続きを話し始めた。

「その要塞がロマノの所有物だって分かったの。要塞の下には「世界の空」っていう遺跡が眠っているらしくて、それを呼び起こそうとグレイディウルから移管された宝珠を、ロマノは使おうとしているのよ」

直球に話すルピナの双眸はロインの深緑色の瞳を真っ直ぐ見つめていた。その様子を客観的に眺めるヴレイは胸に痛むものがあった。自分がソラに調査を依頼したばかりに、ロインを責めるようなことになってしまった、だが一番痛んでいるルピナだからこそ隠さずに話せるのだろう。

「知らなかった、「世界の空」って……」

ルピナはロインの質問らしき言葉に少し動揺した。聡明なロインなら当然「世界の空」の事は知っていると思ったからだ。それはヴレイも同感だった。

「持ち主の意思で機械を合成するのよ」

「ロマノはその遺跡を使って機械化を促進させるつもりなんだね」ルピナは「世界の空」の意味をわざと濁した。

ロインに変わった様子はないかルピナはごく自然に窺っていた。所詮は他人事だが噂で耳にしたから話してみた、程度に軽く会話している調子だ。

「宝珠を見に行くって言っていたから、ロインなら何か調べてあるのかと思って。召喚士に関わりがある石なんですよ」

ルピナの台詞にロインは一瞬躊躇い、数秒間静かに視線が重なった。

「そうみたいだね、僕だって召喚士の端くれだし興味はあるよ、特別に見せてもらえることになったから、ルチルも付き添ってくれるし」

「好奇心の塊ね、体調が良くないのに無理しちゃダメよ」

そつとロインの横髪を撫でたルピナは少し不安そうに微笑んだ。

「分かってるよ、ルピナも体には気を付けて、ヴレイも元気で」

毅然なロインは二人を澄んだ瞳で見送った。

平然を装っていたルピナは医務室から出たとたん、心苦しい表情に変わってひとつ溜息をついた。

まだ三人が医務室で話していた頃。ルチルは買った薬を持って、本部のエントランスまで戻ってくると、馴染みのある顔ぶれが帰りを待っていた。

「とりあえず解熱剤と栄養剤ぐらいはあったよ、どうかしたかい」

丸眼鏡の眉間を上げたルチルはその馴染みある二人に声を掛けた。

「今、ルピナ王女とヴレイがロイン王子の見舞いに来ている、見たところ様子が少し違う。確か宝珠を見に行くとロイン王子はルピナ王女に話していたらしいが」

「ああ、話していたよ。だからってデュラはロインを何か疑っているのか」

ルチルは眼鏡越しに目を細めて、険しい表情を付き合いの長い旧友に向けた。

N
E
X
T

第9話 決別

「確か宝珠を見に行くとロイン王子はルピナ王女に話していたらしいが」

「ああ、話していたよ。だからってデュラはロインを何か疑っているのか」

ルチルは丸眼鏡越しに怪訝するような眼差しを、付き合いの長い旧友に向けた。

「ヴレイはインジョリックの人間でしかも軍人なんだ、シエノルからの情報だ。その軍がロマノの所有物らしき要塞を「世界の空」が眠る海域で発見したらしい、何かのトラブルでヴレイは帰る事になったらしいが、それで彼らも宝珠と「世界の空」の関係を知り、もしやと思いロイン王子の元を尋ねてきたと見える」

デュラッセの鉄色の長い髪がエントランスを吹き抜ける強い風に乘って舞い上がった。

「そういうことだルチル、まさかとは思うが俺も彼らと同意見だ。まだロイン王子とはその事について話さない方がいいと判断していたが、こうして彼らが先に追求しに來たわけだ」

大柄で貫禄もあり、尚且つ皆が親しみを求めるリユーランが珍しく渋っていた。長い付き合いだがこれほどまでに不安そうな顔を見たのは、初めてかもしれないとルチルは思った。

「でも、いきなり大げさ過ぎる、ここにくる途中何度もロマノや宝珠の話はしたが、ロインには少しも不穏な身振りはしなかった。それに宝珠を見に行く時も僕が付いているんだ、フォーメスと手を組んでいたのならさすがに僕だって気づく」

双方を交互に見ながら、ルチルは毅然と言葉を続けた。

「確かに「世界の空」の事でロマノ王とフォーメス宰相が手を組んでいることは明だ、フォーメスの様子が突然豹変したのもそれに関わっているからだ、でもロインは白だ」

「なぜそう言い切れる。ルチルとロイン王子が長い付き合いなのは知っている、だからって見逃しておくわけにはいけない、ここに来るまでにお前にも引っ掛かる事はあったはずだ、中途半端に庇うつもりか」

デュラツセの双眸は旧友に対し敵意とも取れる眼光を放ち、ルチルは溜息を付いて重重しく答えた。

「僕は何も言わないしロインをロマノまで連れて行く」

「ならお前もフォーメスと同類か、ロマノ王の策略に手を貸すことになるぞ」

腹立たしくさえ思えたデュラツセの言葉に、ルチルもそれ相応の眼光で睨みつけた。

「分かった。そこまで言うなら、今回は手を切ろう」

「おいルチルっ、そう躍起になるな、デュラもそんなつもりで言ったんじゃない」

見かねたリューランが咄嗟に仲介役になる。

「そうしよう。その方がお互い自由に動けるしな、リューラン止める必要はない、情報交換もここまでだ。ロイン王子の体調が良くなっている頃には、祭りが終わっているだろうし、ここまでロマノの内情が分かっていたいれば、後はタイミングだ」

「デュラの言うとおりだよ、ここからは独断ってことだね」

剣呑な笑みを見せるルチルはエントランスから伸びる階段を見上げ、医務室から出てきたヴェイとルピナの姿を認めた。

「お帰りルチル、ロインを起こしちゃったみたいで」

「いえ、それよりもお祭り今日で最終日なんですから楽しんで」

ルピナは「はい」と透る声で返事をする、ヴレイを連れて人込みの中に交じって行った。

歩む足は早足で、苛立ちさえも感じた。見失わないようにヴレイはルピナの背後をぴったり付いていた。

市場の端には荷馬車を停める広場が用意されていた。人の川も開けていたのでヴレイはルピナの手首を掴んで、噴水のある広場まで連れ出した。

沈黙したままのルピナは唇を噛み締め、苦渋の色を見せていた。手首を離し、「どうした、ロインの事か」とヴレイは腕を組みながら訊いてみた。

「ロインは宝珠について知っているわ、もしかしたら宝珠を使うつもりなのかもしれない」

泣きそうになりながらルピナは水飛沫を睨みつけていた。

「でもどうしてロインが」

雲は厚みを増し、暗雲の空模様へと変わっていた。強い横風が吹いて露店のサテンがバタバタとはためかせる音に、陰鬱さを一層募らせていった。

N E X T

第100話 真昼の月影

白を基調とした医務室はロイン一人では広すぎた。

二人が自分に言いたいことを薄っすらと感じ取ったロインは、ロマノ宰相との約束を思い出し複雑な心境を抱いた。

絶対に他言をしない、誓約書もない約束だ。

ベフェナ国とロマノ国には安保条約も経済協定も結んでいない。だがルチルとはレイスに次いで昔馴染みの一人だった。だが現ロマノ宰相フォーメスとはシルバーム内戦後に出会ったのが初対面だった。

ロマノの事は予め調べていた。ルチルという貴重な情報源もあり、疑わしいと思った時もあったが、機械化推進派のロマノ国はインジヨリックサークとの交易を行い、真剣にグランドラインを変えようとしているのだ。

その証拠にフォーメス宰相は何度もインジヨリックサークに赴き、ダグノートを始め高性能な飛行船や乗り物、保安の為には軍艦の造船材料などの輸出を促し、評議会委員と交じって会議を重ねていた。その外交活動が内戦で苦しんでいる難民を救済し、貿易を豊かに繁栄させられれば、グランドラインはもっと安寧になれるとロインは信じていた。

ルチルは現宰相に座を横取りされたような失脚だったので、現宰相フォーメスの政権を応援しているわけではない。

だが国民からの圧倒的な支持率は宰相立候補前から高く、文明進化論や機械との共存、そして他大陸との貿易推進運動などの働きぶりに、「グランドラインを未来へ導く独裁者」などという、キャッチフレームまで掲げた国民はそれから一気にフォーメスを政界へ推したのだ。

歴史を残しながらの機械化ならロインも賛成派で、軍閥な政治が目立った時もあったが、フォーメスの働きには同意するところもあ

った。そんな時、召喚の力と機械の力でグランドラインを救おうと言われたのだ。

「世界の空」、それは持ち主の意思によって創造される兵器、でも兵器としてではなく魔導と機械の融合でグランドラインの可能性と未来を広げる要に変わる。魔導があれば歴史も守られる。

ぼんやりと窓の外を眺めると、真昼の月が薄っすらと浮かんでいた。

＊ ＊ ＊

バジティス・ザリの空港にセイヴァの緊急高速船が着陸したのは祭典三日目の夕方だった。飛行場の管制官が宿まで知らせに来てくれた。

すでに荷物をまとめ、洗濯をしておいた服装に着替えたヴレイはルピナがないことに少し戸惑った。

「待たなくていいのか」

「時間がおしてる、そろそろ行くよ」

支度を終えたヴレイは両手に荷物を抱えると、シリウスが片方の荷物を持ってくれた。庭先で待っていた宿夫婦と老人に握手をして、清々しく礼を言った。

「体に気をつけてね、いつでも遊びに来て」

「はい」

しみみり返事をするヴレイは最後に、揺り籠椅子に腰掛けている老人に視線を向けて、丁寧な頭を下げた。

「お前さんがやりたいようにやればよい、わしがお前を見てそう言ってるんだ」

町の方へ視線を見やった老人は、さっさと行けと言わんばかりにひらりと手を振って見せた。

喉で笑ったヴレイは「ありがとう」と軽く手を振って宿を後にした。

そう広くもない飛行場にはヴレイも見ることがない飛行船が停まっていた。前部の鼻先が長く伸びた高速船に見惚れていると、搭乗口からイーグルが降りてきた。

だだっ広い滑走路を吹き抜けた横風に、青黒い髪が舞い上がっていた。懐かしい制服がやけにまぶしく見える。

ヴレイは飛行船に背を向けて、シリウスとリウドに向き直った。

二人とも背が高いので、見上げる姿勢となるのがこれで最後かと思うと、少々心細さを感じた。

「ザイドは昔の奴らのために、お互いが命を差し出すようなことはするなって言っていた、その上でザイドが全力で俺と向き合うなら、俺もそれに答えなきゃいけないと思った」

「好き勝手ほざきやがって、生意気な小僧が」

鼻で笑いながらも、ニヤリと口端を吊り上げたリウドはそれ以上何も言わなかった。

「シリウス、改めて合格おめでとう。シリウスには本当に感謝してるよ、いろいろと貸しを作っちゃったな」

「なら返しに来てください。君に付いて来て正解でした、ライセンスも取れましたからね」

シリウスの淡白で無責任そうな笑みに、安心感を持っていたことにヴレイは今始めて気付いた。

ついにルピナを待つのは諦めようと覚悟したその時。一頭の獣の姿が見えた。その背には人が乗っている。赤銅の髪が揺れているのを見て、ロインだと認識した。

近くまで来るとロインの後ろに、黄金色の髪が揺れているのが見えた。

NEXT

第101話 南風と別れ

ついにルピナを待つのは諦めようと覚悟したその時。一頭の獣の姿が見えた。その背には人が乗っている。赤銅の髪が揺れているのを見て、ロインだと認識した。

近くまで来るとロインの後ろに、黄金色の髪が揺れているのが見えた。

「間に合った、大急ぎで飛んで来たんだ」

ヴレイは安堵すると、ひとまずロインの容体を心配した。

「熱は大丈夫なのか」

「平気だよ、それより、これ」

まだ少し息の荒いロインから渡されたのは、片手で握れるほどの卵大の石だった。見た目の割にずしりと重量感のある石だ。しかも人肌ほどに温かかった。

「一回だけ、本当に困った時に割ってみて。召喚陣のところをちゃんと割るんだよ。これはシルバームで助けてくれたお礼」

「お礼なんて、仕事であの場にいたようなものなんだから」

掌の中の石をひっくり返すと確かに印みたいなのが小さく描かれていた。

ロインはにっこり笑うとルピナを前に連れ出した。突然向き合うことになって、お互い躊躇していると、お互い背中を叩かれた。

同時に何かを言おうとして言葉がつまづいた。ヴレイが先を譲るとルピナは手に持っていた物を差し出した。

「シリウスの合格を祝って皆で写真撮ったでしょ、現像してもらったの」

突然風が強く吹くと、他大陸から来た飛行船が豪快な駆動音を轟かせた。

「ヴレイ、時間だ」

響くエンジン音に負けじとイーグルが声を張り上げて呼び掛けてきた。少しは待てよと胸の中で文句を言った。

「ありがとう。じゃあまたな」

「約束だからね」

写真を受け取りながらヴレイはルピナの手を握った。初めて握る彼女の手は小さくて温かった。無性に胸がいっぱいになったヴレイはこれ以上ルピナの目を見ていられず、手を離した。

エンジン風が激しく風を舞い上げる。突風に押されそうになりながら、砂埃が目に入らないように皆は目を細めて、初めて見る他大陸の飛行船に圧倒されていた。

「ルピナ、これ、君が耳につけているピアスの石と同じ、赤い宝石」
露店で買った首飾りをルピナの手中に渡した。羊の毛で紡いだ紐が金の輪に通されている。金の輪の中には、金の針金が滑らかにくねり、花の形を描いている。花の真ん中には小さな赤い石が嵌め込まれていた。

「その石、フレイヤで採れる宝石なんだろう、店の主人から聞いた。ありがとな」

ヴレイの手がルピナの手から離れる。その時、ふとルピナの目頭から涙が落ちた。

「待って」

ルピナの呼びかけに振り向くことなく、一方的に言い放ったヴレイは飛行船へと駆け込んだ。飛行船のハッチはあっ気なくもすぐに閉じられ、機体は滑走路へ向きを変えた。

初夏を感じさせる南風が飛行船を送り出すように滑走路を吹きぬけた。

一直線に走り出し徐々に加速すると、数秒しないうちに車輪は地

から離陸し、吸い込まれるように薄雲広がる空へと飛び去ってしまった。

完全に飛行船の姿が消えるまで空を眺めていたルピナは貫った首飾りをそっと胸の前で握り、下唇を噛み締めた。

一度は冷めた目頭がまた熱くなり溢れそうなものを必死にこらえた。今更ながら泣いて彼を止めればよかったと後悔している自分がいた。それでも彼は行くだろうとルピナは思った。そして泣いて止めたことを後悔するのかもしれないのだと。

「さ、私達はこっちでやることが山程ありますよ、ヴレイも向こうで取り組む事は同じです、そう思えば心強いじゃないですか」

シリウスは撫で落ちたルピナの肩を叩いた。その叩いた肩に力がかもっていたことを察すると、「さあ行こう」と叱咤するようにルピナの背中を押した。

N E X T

&l t; 6章 &g t; 第102話 女王の決起

「さ、私達はこっちでやることが山程ありますよ、ヴレイも向こうで取り組む事は同じです、そう思えば心強いじゃないですか」

シリウスは撫で落ちたルピナの肩を叩いた。その叩いた肩に力がかもっていたことを察すると、「さあ行こう」と叱咤するようにルピナの背中を押してやった。

自警団本部に戻ってくると、デュラッセとリユーランがエントランスで皆の帰りを待っていた。

荷物を持って本部の二階から下りて来たルチルは階段下でロインと合流した。荷物を受け取ったロインはエントランスの先で巨大な鳥獣を召喚した。

「じゃあルピナ、僕達はロマノに行くよ」

「ええ、気を付けて」

硬い握手を交わす両者の髪が強い風に靡いた。

ルチルとも握手を交わし、「ロインを頼みます」とルピナは一言付け加えた。決然と頷いたルチルは「お互い健闘を」と囁くように皆へ視線を送った。

二人を乗せた召喚鳥は向かい風の中、力強く飛び去っていった。

二回目の見送りにルピナはなんだか切なさを感じた。

「ルピナ王女にお伺いしたい。ロイン王子と話していたことは「世界の空」の事か」

突然尋ねられたがルピナはいたって冷静だった。

「そうよ、でも悪いのはロインじゃないわ、ロインをたぶらかすロマノよ」

「如何にも、しかしお気持ちは分かるが……」

渋ったデュラッセにルピナは苛立ちを覚え、鋭い視線を向けた。昂然と構えた瞳は、仲間を見送って虚脱していたとは思えない迫力があつた。

「ここで何を疑ってもしようがないじゃない。ロマノに企みがあるは分かったのよ、だったらこの事をゼノレフ王に知らせてロマノ城を占拠すべきよ、ロマノ王は宰相をほつといて何やっているの」憤慨で苛立つルピナを宥めるようにシリウスが冷静に答えた。

「ルピナ、それはおそらく逆でしょう。私見ですがロマノに表と裏があるのなら、ロマノ王は裏を牛耳る隠然な勢力を持っているから」

剣呑に笑むシリウスを尻目に、リューランはルピナの意見に対して不確定な部分を切り出した。

「しかし軍を派兵させるにはグレイディウル国のリンベル議事堂へ直接出向き、大陸軍法評議長の賛同が必要となる、議長の許可が下りないことにはゼノレフの国軍をロマノへ侵攻させることはできない、許可のない武力行使は反乱軍とみなされてしまう」

「もちろん正統派でやらないじゃ意味ないじゃない、だから陛下が城を離れなくてもガディルが行くのを、王子でも十分にその権限はあるでしょ、その間に陛下には軍備を整えてもらうの、圧制支援部隊としての出動要請が受理されるまでにね」

挑戦的な豪語だが今のフレイヤ王女の偉容さからは、普段の陽気なルピナをまるで連想させなかった。

「ルピナ王女の言うとおりだ、これはもう我々だけで動く問題ではない」

太い眉毛を吊り上げたリューランは、瞼を堅く瞑ったデュラッセを説得するかのように言ったが、眉ひとつ動かさない友人に奥歯を噛み締めた。

「実は私とデュラッセは以前からロマノ政権を握る幹部が怪しいと

睨んでいた。そこで宰相の座を退任したルチルにロマノの内偵を協力してもらっていたんだ、あの国は機械化を強化してきている、しかも普通の機械化ではない、インジョリックサークに張り合うほどの力を手に入れようとしている、例えば機械と魔力の融合化などという異常な開発だ」

皆から少し離れた場所で煙を吸っていたリウドが軽く鼻で笑って言い返してきた。

「そんなことができるのかよ、できたとしたってインジョリックの科学を超えられるわけねえじゃねえか」

「そうよ、グランドラインとインジョリックの文明の差は何百年近い差があるのよ、止まった文明の時間を今更動かしたって」

「しかし」とシリウスが言葉を返した。

「ソラの言っていた「世界の空」を使えば可能かもしれませんよ」

「我々は極秘裏に調べを進めルチルと情報を共有しながら、確かな尻尾を掴みつつ、その時を見計らっていた」

リューランの告白を横で聞いていたデュラッセは、観念したように深呼吸をするとうやく口を開いた。

「今思えば、慎重で冷徹主義だったルチルが今回独断行動に出てくれたおかげで、逆にその期を手繰り寄せることができたわけだ」

「なら確信があるわけでしょ、ロマノが他大陸にまで悪影響を及ぼしかねない、あるいは戦争を起こしかねないと判断されれば、軍法評議会から全大陸和平評議会へ直接報告されるはずよ。デュラッセ、ガディルと一緒にグレイディウルに行って評議長に伝えて、インジョリックの軍も動いている、もう時間がない気がするの」

ルピナは胸の上で、ヴレイに貫った首飾りを強く握りしめた。

すでにデュラッセの意志は、精悍な顔付きで見上げてくるルピナと同じ気持ちになっていた。

「確かに、軍法評議会へ事を訴えられれば、議会で公正な制裁を下してもらえる、分かった承知しよう、責任持って評議会に伝える、だがルピナ王女をここに残して城へ戻ることはできない、護衛を任されている以上、一緒に城へお戻りくださらないと」

「それはできないわ、私はロマノに行く、ロインが心配なの」

N
E
X
T

第103話 艦への帰還

「確かに、軍法評議会へ事を訴えられれば、議会で公正な制裁を下してもらえる。分かった承知しよう。責任持って評議会に伝える、だがルピナ王女をここに残して城へ戻ることはできない、護衛を任されている以上、一緒に城へお戻りくださらないと」

「それはできないわ、私はロマノに行く、ロインが心配なの」

予期していた返答にデュラッセはやはり困った顔を浮かべると、シリウスが即座に挙手した。

「師匠、私が代わりにルピナ王女の護衛をします。不束者ですが弟子からの恩返しだと思ってください」

決然としたシリウスはルピナの隣に立ち並んだ。

「ルピナ王女は多分そう言われるだろうとは思っていた。シリウスの力量は認める、何かあったら承知しないからな、それを肝に銘じて王女を頼む」

師匠と呼ばれたデュラッセは満更その呼ばれ方も悪くないと思ったように、なにやらご機嫌に鉄色の髪を大きく揺らした。

最後に長く煙を吐いたりウドがルピナとシリウスの肩を叩いた。

「お前たちが行くなら僕も行くしかないだろ。それにザイドが宝珠を運んだんだ、関与しているかもしれないねえからな。にしても驚いたぜ、ルピナがあんなに能弁かとは思わなかった」

「私を誰だと思ってるのよ」

「では決まりですね」

三人は陣を組んで視線を交わした。

頷くようにやや俯いたルピナは、首から掛けた金の輪を胸の前でぎゅっと強く握り、雲間からのぞく紺青の空を仰いだ。

＊ ＊ ＊

「第二艦隊が第一艦隊の電力充電のために、すでに現場の海域に着いているはずだ」

イーグルが事故の経緯と状況を丁寧に説明してくれた。

その他にも自分がいなかった間の仲間の様子やノアの様子を聞いていると、ヴレイは緊急時にもかかわらず皆に会える嬉しさで気分が高揚した。

バジテイス・ザリから飛び立って三日、グランドラインとインジヨリックサークの境界海域は双方の大気流のぶつかりによって、天候は荒れ模様だった。

ヴレイを乗せた高速船は嵐にも関わらず、濃い霧に包まれた第一戦艦の甲板に無事着艦した。激しい風雨のおかげで懐かしさなど感じていた暇もなく、甲板から直接繋がっている通用口から早々と発令所へ急いそいだ。

「バッテリーの充電、換装しました。全エリアの電圧正常値に達しました」

「主動力コンタクト。エンジン異常なし。全システムオールクリア。残存ウイルスは認められません、電磁防壁を再起動します」とコックピットのオペレーターが艦内に放送した。

「ライフルの組み立てはどうなっているの」

「順調です、予定時刻までには組み立てられます」

「後は彼の到着を待つだけです」

安堵した様子でハリが席から立ち上がると、突然ブリッジの自動ドアが開き、振り向いたハリはそのままの姿勢で立ち尽くした。

「ヴ、ヴレイ艦長……」

ハリの言葉にノアは振り返ると、背筋まで落ちた赤銅色の髪も大

きく揺れ動いた。

ヴレイは深呼吸を繰り返し、すぐに言葉が出なかった。

長く落ちた赤銅色の髪は明かりにあたって撫でやかに流れていた。凜とした眉は丹精整った顔を優美に作り、柔らかそうな真紅の唇や適度に膨らみのある薄紅色の頬は、靄の中で映える薔薇の様にその崇高な雰囲気をも、前と変わらず漂わせていた。

左胸に豪華な徽章が付けられた赤い制服に、きちつと身を包んでいるノアの姿にヴレイは見惚れてしまった。

「元気そうね」とノアが先に声を掛けると、「そっちも」と余所余所しく返事をした。

「ヴレイ隊長、お久しぶりです」

「おっ、スピカ、すっかり艦長の椅子が似合うようになったじゃないか」

ブリッジに姿を現したヴレイに、階下にいたオペレーター達は席から立ち上がって注目した。

「そ、そんなことないです、まだまだ皆の足を引っ張るばかりではにかむスピカが腰掛けていた椅子の背もたれに手を突いた、ヴレイはブリッジ全体を眺めた。

「いや、彼は良くやってくれているよ、ヴレイ艦長に負けじとね。おかえりなさい艦長」

「ただいまハリ、俺がいない間スピカの補佐ご苦労、待たせてすまなかった、じゃあ早速だけど状況と作戦を教えてください」

ヴレイはノアに視線を向けると、彼女は了承したように強く頷き、説明用として作成した図式を中央モニターに映し出した。

「では順に説明を始める。六日前、スピリッチャー隊は八人乗りの探査専用機で海域の調査に出たところ、何らかの原因でこの海域から姿を消した。遭難した場合、生命維持モードが自動的に作動、船

内である程度の生活も出来るようになっているので、五日間は命の保証がある」

「自力で乗り越えるにもそろそろ限界か」

ブリッジにいる全員の顔が陰しく曇った。

N
E
X
T

第104話 救出作戦

「この海上一面に広がる霧を分析したところ、特殊な電磁粒子の集まりだという事が分かった、なんらかの科学変化で空間がねじれ虚空間を作った、そこにスピリツチャーがまった状態になっている可能性がある。肉眼では確認できないがスピリツチャーはまだこの海域上には存在する」

重々しく説明したノアに視線を移してヴレイは質問した。

「この霧は自然現象なのか？」

「いえ、人工的にあの要塞から発せられるものと考えている。なぜならここはまだ霧が浅い方で磁界の影響は先のウイルスによる電力低下だけ、要塞付近の霧の密度はこの数倍は濃いはず、にも関わらず自身はスピリツチャーと同じような影響を受けないという事は、あそこが霧の発生源だからだ」

「そんなことが科学的にありえるのか、しかもインジョリックよりはるかに科学水準の低いグランドラインがそんな事」

と言いつつヴレイは今まで見てきたグランドラインの非科学的な実態ならありえることかもしれないと思った。

「あれはグランドラインでも唯一科学が発達しているロマノ国の船だ、ありえないことはない。しかも「魔導」とか言うインジョリックにはない「力」もあるのなら、それとも考えられる。何にせよあの霧を破るには超高压電流が必要だ、そのカギを握るのがディウアースだ。その為に第二艦隊も出動させた、念のため第三、第四艦隊にも近くの海域まで来てもらい、ダグ信号で繋げていつでもバックアップが受けられるようにした」

「で俺はディウで何をすればいい」

「磁界を撃破するためにまず三方に電波塔を設置する。二つは我々の第一、第二戦艦に、ディウにはあの要塞に設置してもらう。狙う海域の範囲をダグに計算させた結果がこれよ」

光波による海図モニターにその範囲図が示された。

「ロマノの要塞に人はいないのか、接近したら何されるか」

強張ったヴレイはノアを不安げに直視した。

「今のところ要塞の乗組員は確認されていない、もし中に人がいても甲板に人が出られるような状況ではない。設置したら電波塔を発動させ磁場幕を張って磁界の霧密度を上げる。人工的に磁界を歪ませてから、ディウには歪んだ磁界を破ってもらう。整備班が専用にライフルを改良しているところだ」

「でも練習してみないと、そんなの発射させたことないし」

「標準はこっちで合わせる、シミュレーションした結果も出ているから安心して、それよりヴレイには他に集中してほしいことがあるの」

茶色に深緑色を重ねたようなノアの瞳が剣呑にヴレイを見据えた。

「話した通りスピリッチャーが消えたのはその電磁界の影響だと考えられる。だとするとディウも電力を使うと同じ現象が起きる可能性があると推察した。そこでヴレイにはディウを完全に妖源動力だけで稼動させてもらう必要がある」

「それと」ハリが凜と続きを言い始めた。

「通常なら飛行用の小型飛行機を搭載するところ、あれは電力でしか動かせないので今回は使用できません。そこでまだ試作用ですが妖力を動力に変換する機能を搭載した飛行機を使います。試作段階ですので一定量以上の妖力が流れ込むとエンジンが破壊されてしまいます」

「乱流は許されないうってことか」

「そこで妖力を最小限に抑えて要塞に飛び移る方法を解説します。甲板を跳躍した直後、飛行機の推進力を作動、妖力を送り飛行します、目標地点に向かって下降し始めたら推進力を切り、要塞の甲板に着艦します、帰りも同様です」

至極想像力を必要とするハリの説明に絶句しヴレイは啞然とした。「電力の補助があっても乱流は起こっているんだぞ」

「分かってる、だから二十分の稼動制限をする。もちろんダグシステムのバックアップを付けるけど、電子回線で繋げる事ができないからデイウのダグファイルに乗せることになる、重くなることを考えてデイウの神経回路は全面カットする」

超然と言い放つノアを、ヴレイは目を点にして見つめ返した。

N E X T

第105話 最愛のぬくもり

「二十分の稼働制限をする。もちろんダグシステムのバックアップを付けるけど、電子回線で繋げる事ができないからディウのダグフアイルに乗せることになる、少し重くなることを考えてディウの神経回路は全面カットする」

ノアの自信に満ちた様に気圧され、ヴレイは言い返す際に言葉を詰まらせた。

「全面カットって、妖源の正常値や危険値のレベルが計れないし、第一外界からのノイズが雑じりすぎる、集中するのにどれだけ大変か」

ヴレイの苦渋な表情が、それがどれだけ厳しい状況なのかを物語る。

「艦のサポートを信じて、キツイだろうけど、やってもらうしかないの」

ノアの眉根はゆがみ、台詞の後半は非常に重々しいものになっていた。

周囲を取り巻くクルー達の視線が、ヴレイの首が縦に振られるのを不安げに注目していた。集まる視線に重圧を感じながら、艦長として平然を装った。

「そうだな、やるしかないな」

ヴレイの言葉にクルー達は安堵し、感嘆な想いで艦長を見上げていた。

精悍でいながらもモニターを見つめるヴレイは不安で押し潰されそうだったことに、ノアだけは気付いていた。

＊ ＊ ＊

作戦会議が区切りになると、ヴレイは個室へ案内された。

一人になると早速、向こうで買った服や祭典の衣装など溜まっていた洗濯物を洗濯機へ放り込んだ。あらためて異国の服を着てこなくて正解だったと思うと、突然懐かしさが込みあがった。

数ヶ月ぶりの制服に袖を通すと気持ちが一気に引き締まった。

着替えながら帰ってきた実感を噛み締めていると、久しぶりに携帯電話が鳴ってヴレイは驚いた。

上部に設置された箱型ブリッジの細い窓からは、さっきほどミーティングをしていた発令所が見下ろせた。拔群な眺めを独り占めできる狭い資料室のような空間は、密会したいカップルには最適の部屋だ。

携帯電話で呼び出してきたのはノアだった。電話ではなく直接部屋に来ればよかったのに、と声を掛けたがノアは返事をしなかった。彼女の真剣な面持ちにヴレイはごくりと生唾を飲み込んだ。

「これが終わったら、また向こうに戻るの？」

少女に戻ったかのようなノアの寂しそうな顔を見て「うん」とは言えなかった。

つらそうに眉根を寄せるノアをこれ以上寂しがらせない台詞を考えたが、咄嗟に思い付くわけがない。そっとノアの手に触れてぎゅっと握った。

懐かしいぬくもりが一瞬にして体中を駆け巡った。

今まで押し殺していた寂しさや心細さがよみがえって、高鳴る鼓動に肺が押し潰されそうになった。

言葉を発することができないでいると、ポツッと一粒、水滴が落ちた。大粒な涙を流すノアを見てヴレイは更に胸が押し潰されそうになった。悔しいほど自分が情けなくて、苛立ちすら感じた。

「ノア、ゴメンって言ってもきつと許してはくれないと思うけど」
「どれだけ心配したと思ってるんだ、メールもろくにくれなかったじゃないか」

「ダグが当たり前にあるわけじゃないんだよ、ごめん、言い訳して」

肩を震わせて泣くノアを少々強引に抱きしめた。

長身だが華奢なノアの肩を包み込むことはできる。離れていた時間を埋めるかのように強く抱擁した。

「次にこんなことしてみろ、殴る」

頬をつねられたように、ヴレイの笑顔は引き攣っていた。

吐息ほどに小さく呟いたノアの想いをすべて叶えたいと思った。

ずっとこのまま手を離さない、そう誓ってもよかった。

これから見るのは同じ空で、お互い同じ歩幅で歩いて、ノアの笑顔を見られるのなら本望だと思った。でも、言わなければならぬ。

「向こうにいる仲間と約束したんだ、まだ向こうでやることがあるんだ、だからもう少し待っていてくれないか」

「格好付けるな、これ以上私を惨めにするな」

「本当にごめん、でも向こうに行ってよかった、ずっと探していたものが見つかったんだ。それにやっぱり俺はここに居たいって素直に思った」

気持ちよく言い切ったが、ノアからの返事はなく、しばらく経ってから胴を抱きしめられた。締め付けが強すぎて一瞬ヴレイは咽てしまった。

「あたしは気が短いぞ」

ヴレイの肩に頬をすり寄せて、ノアは最愛のぬくもりを全身で感じた。そしてヴレイも今はこの温もりだけを抱いていようと思った。

NEXT

第106話 作戦行動開始

「スピリツチャーの生命維持システムはすでに限界だ、慎重かつ迅速に作戦を遂行すること、それと本作戦においてディウアースの稼動限界時間は二十分、よって秒刻みで作戦を進行。今から六十秒後に作戦を実行する、――秒読み合わせ、――作戦行動開始」

ノアの合図と共に、コックピット内に只ならぬ緊張感が張り詰めた。

「スピカ、この作戦は理論上成功する作戦です、ですから」

不安と緊張の入り混じる目が何度も瞬きを繰り返し、生唾を飲み込んでからノアを見上げた。

「落ち着いて、いつも通りの貴方なら絶対大丈夫」

「はい、がんばります」

緊張とプレッシャーを隠しきれないスピカの含み笑いに、補佐を勤めるハリ、ジーベックに苦笑いを誘わせたが、スピカへの信頼感は幾多の実戦経験から絶対的なものができようとしていた。

「じゃあ、ここはよろしく、私はケージに向かう」

スピカの肩を強く叩いたノアは早々とコックピットを出て行った。

「ディウアースとの同調回路をカット、ダグプログラムのパイロットコードに書き換え完了。運動野システム偏差修正完了」

「妖源動力システム稼動開始、パイロットとダグ中枢回路を電子レベルで接続します。ノイズ防壁をパイロットコードヘインストール」

「全面フィールド誤差修正完了後にダクサーバー再起動」

「ライフルと電源ケーブルをドッキング、電圧上昇します」

「パイロットの心拍数上昇、他問題なし、妖源稼動最大出力まで残り三ブロック。ライフル制御回路をパイロットコードに繋がります」

「すごい集中力ですね」

ハリは端末デスクのモニターに映るグラフデータを見て、息を呑んで驚愕した。

「逆にそこまで集中しねえと、気分最悪で気絶しかねないだろ。なんせ通常の妖力稼動値の三倍は放出しているからな、いつもなら三対一の割合で、妖力を必要としたのは一割だけ、後は電力とダグのサポートシステムで動いていたからな」

頭の後ろで手を組むジーベックは不敵な笑みを浮かべた。

「そうですね、でないと心身の負担が大きすぎて危険だって言われていて、それなのに当たり前のように承知してくれたんですから、内心では相当の覚悟だったはずなのに」

艦長を畏敬するハリの言葉にスピカは瞬きをするばかりで、計り知れない艦長の偉大さが胸の内大きく膨らんでいくと同時に、いつもの心配性が更にも増して重く押し掛かった。

「それにしてもヴレイ艦長、なんか変わりましたよね」
突然スピカが独り言のように呟いた。

スピカの言葉にハリとジーベックは目を合わせて、何か気付いたような顔をした。

「なんだか、燃えてるって感じです」

その言葉に二人はなるほどと確信を衝かれたかのように納得した。
二人が感心している間にも作戦準備は進んでいた。

「電波塔との絶縁体ドッキング完了、冷却装置の運転開始」

「試作飛行機の搭載完了。動力変換装置起動、回転数に異常なし、行けます」

オペレーターからの合図にスピカは最終的な支持を仰いだ。

「第一艦隊、第二艦隊の電波塔最終安全装置を解除、続いてディウアースが目標の戦艦に電波塔の設置を開始します。ディウアースへ

六十秒後に艦を離脱その後、安全確認後予定の第三設置ポイントの甲板に着艦、電波塔を設置、その後は射撃座標が送信されるまで攻撃態勢のまま待機」

「了解」

「ディウアースとの通信回路を遮断します」

射出口に固定されたディウアースは合図と共に甲板から飛び出していった。

無事要塞に着艦したかのは霧が濃くて確認しづらかったが、モニターのグラフや数値に異常はないので無事だということは確認できた。安堵したスピカは思い立ったように席から立つと、ディウアースのケージへ向かった。

オペレートデスクには何をするでもなく、ノアがただ黙ってそこにいた。

「シェルトリー二佐、百七十秒後に第三ポイントへの電波塔設置が終了します、心配ですか」

ノアはいつも横髪を耳の上で止めている、そしてスピカはいつもその横顔に見入ってしまう。どこことなく寂しげなのは、毎日のようにヴレイを心配していることは知っていた。

「まあね、でも信じるしかないでしょ」

顔を上げて、止めていた髪を解くと、後頭部まで束ね上げて一つに結った。

NEXT

第107話 閃光

「まあね、でも信じるしかないだろ」

止めていた髪を解くと、後頭部まで束ね上げて一つに結った。

そのあざやかな仕草に、スピカはまた呆然と見とれてしまった。

視線を感じたノアが不思議そうな顔をしたので、我に返ったスピカはハッと焦った。

「どうした、ボケっとして、もうすぐディウが作業を終えるぞ、次に移る指揮を」

「あ、はい」

駆け戻って行くスピカの背中とヴレイの背中が重なって見えた。

背格好だけではない、隠れたカリスマ性を秘めているスピカの雰囲気はヴレイとよく似ていて、外見では窺えないスピカの有能さをノアは見抜いていた。だが残念な事に、誰よりもその事実気付かないのは彼自身であり、それはヴレイにも全く同じことが言えた。

「モテモテだなあ」

戻って行くスピカの後姿を眺めていると、スピリツチャーの整備用ケージの梯子を降りて来たイーグルが、ノアの頭上から上機嫌に呟いてきた。

「くだらないこと言っていないで仕事しろ」

呆れたノアはオペレートデスクに向き直った。

身軽に梯子から飛び降りたイーグルは、険しい表情で端末モニターに視線を落とした。

「厄介な霧だ。疑っているつもりじゃねえが、理論上マジで破れるもんなのか、一度失敗したら二度目に使える電圧なんて残ってないぞ」

「でも今はこの手しかないの、練り直している時間だってないんだから」

感情に任せてノアがデスクに手を突いた時、緊急用の船内放送が慌しく流れた。

「緊急事態です。二佐聞こえますか、ディウアースのコントロール神経に乱流数値を測定、このままでは歪みが現われるまで持ちません」

ノアは反射的に近くの電話を取った。

「電波塔の設置は」

「完了しています」

「電圧も臨界圧力状態です。ライフル装填完了しています」
ノアの返事を待つコックピットに緊張が走る。

「磁界内の対流で歪を打ち抜けるチャンスは一度しかない」

「それはいつだ」

焦りを見せるイーグルの問い掛けに、ノアは眉根を寄せて答えた。

「ディウアースの稼動限界のラスト三分前に歪が出現する計算だ」

「それじゃ、あいつが持たねえだろ、どうするんだよ」

解決策の糸口が見つけられずにいたその時、電話口からノアと同行していたリンダ一尉の声が返ってきた。

「先輩、乱流の進行を強制的に遅らせるウイルスを組み上げたんですけど、効果の効き目は今から五分間です、効果が切れると同時に磁界の歪が現れる計算です。どうしますか」

「今はそれでやるしかないわね、今すぐウイルス送信。通信回路をダグネットで繋いで、緊急回線で」

「おいノア、それじゃあ帰りはどうなる、飛行機に妖力を回さなきゃいけないんだぞ」

急遽変更された作戦を聞いたブレイは即座に承諾した。

『心配しなくても必ず皆を助ける、それだけだ』
「格好つけちゃって」

クスツとにやけながら受話器を置いたノアだったが、その顔に安堵は現れなかった。それはイーグルも同様だった。

磁界の歪が現れるまでコックピット内は緊張感が張り詰めた。

「後一分でウイルスの効果が切れます」

「磁界の歪は」

「九時方向付近に熱反応を感知しました」

「ウイルス切れます」

モニタを直視していたスピカは急激の乱流数値の乱れにぎょっとし、思わずイスから立ち上がった。

「シェルトリー二佐っ、艦長が」

「亀裂の熱が射撃可能数値まで上昇、射撃座標をライフフルへ送信」

『じゅ、受信を確認、目標を捕捉』

「発射っ」

稲妻が落ちたような電光石火の眩さは、誰もが一瞬視力を失った。

NEXT

第108話 交差する視線

宝珠をロマノに届けてすぐに、ザイドは海上要塞へ送られた。ロインがフォーメスに教えた召喚陣を要塞の甲板に描けという任務だった。

要塞には「太陽の化石」発掘調査員とフォーメス直轄のクルー数人が乗艦していた。磁界の霧は艦防衛策として魔術士が作り出したものだ。

要塞側からもインジヨリックサークの軍艦が接近していたことを確認していた。そしてその軍艦から一機、機体らしき影が要塞の甲板めがけて跳び上がった。

「未確認の機体が本艦に向かって接近。甲板に着艦する模様。全員衝撃に備えろ」

艦内放送の直後、地震のような衝撃に襲った。

警報音が鳴り響く艦内は騒然とした。突如甲板に着艦したものに船員達は啞然と目を丸くするばかりだった。

デッキに出てきたザイドは激しい風雨に打たれながら、甲板までやってくるとその巨大さに圧倒された。

その機体は艦首に鉄塔のようなものを取り付けた。機体の頭がこちらに気付き、様子を窺うような姿勢になった。

ザイドはその機体から感じ取れる気配に懐かしいものを感じて、ハッと眼が見開いた。

「お前か」

艦体は激しく揺れ、船体を打ちつけた波が甲板にまで侵入した。足を取られそうになったザイドは船内に戻って窓からその様子を窺った。

「電磁粒子の密度が上がっている、どうなっているんだ」

「あの機体の正体をつきとめろ、本部からの連絡は」

取り乱す司令官は激昂していた。

情報を収集しようとクルー達は躍起になって、船内を走り回る。

「磁界に識別未確定の機体が数機、閉鎖空間に固定されています。

おそらく電磁界の歪みに捕らわれたと見えます、磁界をこじ開けるつもりです」

「ならば甲板にいる機体を打ち落とせ」

「やめろ」

「何……」と嫌な顔をした司令官がザイドを厳しく凝視した。

「あれはこちらに何もしてくる気配はない、こちらから手を出して向こうが反撃してきたら要塞はひとたまりもないぞ」

ザイドの言い分にも一理あった。否応に納得した司令官は仕方なく命令を撤回した。

時々霧の中で稲光が発生し、徐々に光は収束すると機体は巨大な銃を構え、何かが一直線に放射された。とてつもない轟音と鋭い閃光が辺りを包み一瞬視力を奪われた。

視界が元に戻った頃には、その機体と鉄塔は甲板から姿を消していた。

＊ ＊ ＊

王都の中心には山腹から天空に向かってロマノ城が聳え立っている。

二重の城壁に囲まれた城郭は、中心部の壁面を深紅に塗られた宮殿に、外回りは白壁の外観に十数層もの階を持つ巨大城だ。それ自体が小さな山のように見える。

宮殿内は千室以上の部屋が備えられ、無数の回廊が存在する。宗

教の中心にもなっていたロマノ城には数万点にもおよぶ、極彩色の壁画や聖像、極典などが所蔵されている。

白壁の城内には研究職員と、許可を取った官僚や官吏だけが入れる研究施設が十数層もの階を埋め尽くしていた。

分厚いガラスケースに入れられた宝珠は、ロマノ城の研究資料室で厳重に保管されていた。ロインはガラスに両手を付けて、まじまじと観察をしていた。ロインに付き添っていたルチルは後ろで軽く手を組んでその様子を見守っている。

不思議と惹きつけられる妖艶な光に、薄暗い資料室に並んだ品々がぼんやり影を浮き上がらせていた。

琥珀色の瞳を細くするフォーメスはルチルの耳元で、話があると言ってロインを部屋に残して廊下に出た。城内とは思えない簡素で無機質的な窓のない廊下はひんやりと冷たさを感じた。

「その瞳、少なくとも貴方に座を渡した時、僕は貴方の怯みない信念にロマノを預けました。それなのにロマノ王に屈するとは、本当に残念です」

「そうやって、宰相を失脚した時から私の身边を嗅ぎ回っていたそうじゃないか、遅かれ早かれお前の身柄は拘束させてもらう予定だった」

「そんなことをしたらロイン王子に不審がられますよ、貴方の計画も円滑には進みませんよ。ロイン王子に宝珠を使わせるのですよね。だったら僕は捕まった方がいいのかもしれない」

「なら捕まってみるか」

フォーメスが軽く指を鳴らすと、数人の守衛がルチルを取り囲んだ。

不気味に帯びるフォーメスの琥珀色の瞳をルチルは横目で睨む。護身用に装備していた銃で守衛が構えていた鉄棒を射撃すると、散

り散りになった守衛達の隙をすり抜け、瞬く間に姿を消した。

N
E
X
T

第109話 秘密の坑道

「そんなことをしたらロイン王子に不審がられますよ、貴方の計画も円滑には進みませんよ。ロイン王子に宝珠を使わせるのですよね。だったら僕は捕まった方がいいのかもしれない」

「なら捕まってみるか」

フォーメスが軽く指を鳴らすと、数人の守衛がルチルを取り囲んだ。

不気味に帯びるフォーメスの琥珀色の瞳をルチルは横目で睨むと、護身用に装備していた銃で守衛が構えていた鉄棒を射撃すると、散り散りになった守衛達の隙をすり抜け、追い駆ける間もなく姿を消してしまった。

「申し訳ありません、取り逃がしました」

守衛の一人が伏礼してから緊張した面持ちで詫びた。

「かまわない、各自持ち場に戻れ。逃げ足の速い奴だ」

扉の内側から、ルチルとフォーメスの異変を察知したロインは銃声音が鳴り響いたのを微かに聞き取り、扉の内側に召喚陣を描いていた。

広大な敷地を持つ城内から抜け出したルチルは、いつの間にか自分に召喚獣が憑いていたことに気付いた。すっかり遠めで見ることが出来るロマノ城を凝視してから、銀色の毛を靡かせる獣の顎の下を撫でてやった。慚然と召喚獣を眺めながら甲斐無い自分をロインに詫びた。

ひとつ溜息を付いたルチルは眼鏡の眉間を上げて、これから向かう先を確かめるように見据えた。

建国した際に建築された凱旋門は現在も堂々たる姿で残っており、

そこから続く石畳のメインストリートはロマノ城まで伸びている。

地形が丘ほどの勾配が続いているので街並みは階段状だ。

ロマノ城を囲むように、政治圏でもある城下町には装飾の見事な宮殿や古城が点在し、さらにその外周を迷宮のような路地に商店や芸術品を生み出す工房や工業がひしめいている。さらにその周囲をロマノ国民が住居を構え、混沌とした町並みを作っている。

三重の外壁を形成し、住居区に住まない者は凱旋門の外側に生活圏を構えている。そうした者達は農業や酪農を営んでいることが多い。

二層目の商業区まで逃げてくると、見覚えのある三人組を見かけてルチルは思わず小走りした。

「貴方達こんな所で何しているんだ」

眼鏡越しに目を丸くしたルチルは三人の手に行っているクレープに思わず見入ってしまった。ルピナが売っていた店を案内してやると、ルチルはご機嫌な様子でクレープを頬張るので、ルピナはつい喉で笑ってしまった。

「私達ロインが心配でここまで来たんだけど、なんで街に入るだけで通行税を取られなきゃいけないの。それよりロインはどうしたの、一緒じゃないの」

銀色の毛並みをもつ召喚獣を見てから、ルピナは険しくルチルを見上げた。

「私がいたらないばかりに、皆に要らぬ心配をさせることになってしまった。いきなりで図々しいとは思いますが貴方達の力をお借りしたい。ロイン王子の元に行ってくれませんか、フォーメスの手から救出してください。とんでもない召喚獣が召喚されることになるかもしれない」

頬にクリームを付けながらクレープを食べ尽くしたルチルは三人

を川岸に連れてきた。

商業区から離れた河川敷には廃坑になった洞穴がいくつも残っていた。

「この廃坑はロマノ城の地下まで繋がっている避難用の隠し通路です。ここの通路をひたすら突き当たりまで進んでください」

湿った土の匂いが風に乗って鼻をついた。

「ロマノ城全体は市井の中枢である政府城と、王族の住む宮殿に分かれています。そして魔導開発機関と機械兵器開発機関で構成された白い城郭が中腹にあります。ここからでは外壁で見えませんが、この通路はその研究施設まで繋がっています」

天災による首都の遷都や、洪水による河川の蛇行によって山岳地帯の地形が変わり、昔使われていた坑道近くに運河ができたのもそのせいだという。

「ありがとうございます、これでロインの所まで行けます」

立て膝を付いてシリウスは召喚獣の頭を撫でながら礼を言った。

水面を反射する光が眩しくて目を細めたりウドが上目遣いでルチルに視線を投げた。

「その研究施設、どうせ違法なんだろう。あんたなら証拠を挙げて全大陸和平評議会に訴えられるんじゃないか、そのつもりなら早くしてもらわねえと困るな。デュラッセとガディル王子が大陸軍法評議会から治安部隊出動許可をもらうべく、グレイディウルに向かったんだ」

「分かっているよ。私はこれから各属州候に協力を仰ぎ、現宰相フオーメスをも駒の一つとして操っている、隠然なるロマノ王を捕らえるつもりだ」

その言葉にシリウスは決然と立ち上がり、驚愕したルピナは言葉を失った。

「やはりロマノ王が首謀者って、ことですか」

「はい。執政官でもあるフォーメスすら自分が使われている事に気付いていない。ロマノ王は直接的な実権を握らない、治世全体の管理的な公務を行っているだけのようには表面は見えないが、政界の裏には元老議会という組織が存在し、その議長がロマノ王だ。インジヨリック化を直接推進したのは現宰相だが、それを利用し極秘裏に「世界の空」復活を計画したのは議員だ」

「でも今更分かった事じゃないんですよ。何故こうなる前に阻止できなかったのよ。ロインが宝珠を見たがっていたのだって、フォーメスに手を貸すためでしょ、貴方分かっていてロマノに連れてきたんですよ」

やり場のないルピナの悔しさまじりの眼差しに、ルチルは申し訳なさそうに眼を伏せた。

NEXT

第110話 望み

「今更分かった事じゃないんでしょ。何故こうなる前に阻止できなかったのよ。ロインが宝珠を見たがっていたのだって、フォーメスに手を貸すためでしょ、貴方分かっていてロマノに連れてきたんでしょ」

やり場のないルピナの悔しさまじりの眼差しに、ルチルは申し訳無さそうに眼を伏せた。

「本当に不甲斐ない。「世界の空」の存在を知った時は手遅れでした。実体を把握しきれていなかった私では事を訴えられるような状況でもなく、デュラツセやリューランに協力を仰ぎました。ロインとバジティスの祭りを毎年見に来ていたが、今回は謹慎中にも関わらず何としてでも外出許可をもらったのは宝珠の為だった。私もそれを知りながらロマノへ案内してしまった、でもこれでロマノ王を捕らえる機会ができました」

「ロマノ王を捕らえるためならロインを犠牲にしてもいいわけ」

「ルピナ王女、断じてそれは違います。私の計算違いでフォーメスがすでにロマノ王の手に落ちていた。魔導の人体改造実験により妖魔族にされていたのです。そして内偵をしていた私を捕らえようとしました、逃れるためロインを置いてきてしまうことになった」

「ロマノ宰相が妖魔族に……」

口を手を添えたルピナはひどく怪訝していた。

「もっと早くこの事態に気付き、軍法に訴えていたら」

「後悔しても仕方ありません、今は時間が惜しい」

シリウスは眉をひそめて声を上げた。

「そうね。ルチルもがんばって、ロインは私達に任せて」

三人の姿が坑道の奥まで進んでいくのを見送ってから、ルチルは

召喚獣の背に乗って王都から飛び去って行った。

＊ ＊ ＊

「ロマンは生体工学を応用し機械と魔導の合成を研究している、そしていずれは人体に融合させることが目標だ。文明の進化が生み出した芸術だよ、ロイン王子」

宝珠を両手の上に乗せたロインは呆然と佇んでいた。宝珠から手を離すことができず、ぼんやりとする意識をかうじて保っているような感覚に襲われていた。

「なんでそんなことを、僕はグランドラインが救われると思って」壇上になっているブリッジには円卓の机が置かれていた。

席に座るのは歳の取った議員と、中央の席にはロマン王が腰を据えていた。

各席に備え付けられたモニタの光で議員の顔が不気味に浮かび上がっている。

階段を二、三段下りた階下で、フォーメスの側に佇むロインを見たロマン王は満足そうな笑みを向けた。

席から立ち上がったロマン王はロインの側まで歩み寄るとさらに階下へ歩みを促し、天井の高い空間へ踏み入った。

大天井画や大聖堂のような荘厳な空間は、閑寂の境地のようでロインは朦朧とその光景に見入った。

何層にも上へ連なった研究施設の割に、数十人程度の研究員がそれぞれ自己の研究に没頭していた。偶に下っ端の研究員が山のような資料を運んでいたり、あるいは文献を読みながら人にぶつかることもなく器用に階を歩き回っている者もいた。

歩みを進めた先には、モニタと接続された巨大なダグコンピューターらしき機械が剥き出しの状態で聳え立っていた。その手前に鉄

色の石柱が六本、輪になって立っている。

柱にはそれぞれ色の違う石が嵌め込まれ、六本の中心には礼拝堂にあるような祭壇が置かれている。ロインはその祭壇の前まで歩みを進めた。

「宝珠によって強大な力を持つ召喚獣を召喚し、その力で「世界の空」を覚醒させ、魔導と機械の融合によって新たな要塞が誕生する。そうなれば世界はもっと近くなる」

ロインの視線まで膝を折ったロマノ王は宝珠を撫でながら陰険にほくそ笑む。

「グランドラインの民を救う礎になるのだ」

ブリッジの席から元老議員の一人が掠れた声で付け加えた。

「主モニターをつけろ」

フォーメスの指示に、ダグコンピュータのデスクで作業をしていた研究員が俊敏に応答した。

「映像を受信、海上要塞からの映像です」

モニタにその様子が映し出された。悪天候で映像が荒くなっているが、確かに要塞から見た敵艦隊が微かだが確認することができた。

「あれはインジョリックサークの軍艦」

虚ろな目を少し開いたロインがぼつりと呟く。

「だが心配する事はない。許可のない攻撃は和平評議会に告訴されるからな。戦闘になることはない。ロイン王子よ、宝珠を握ったままその手を祭壇の上へ乗せてごらん」

言われるがままロインはその言葉に従った。

「望みを叶えるために、召喚獣を呼べばいいのだ」

N
E
X
T

第111話 帰還命令

スピリツチャー隊を救出してからヴレイは丸一日、自室のベッドで横になっていた。

眠りから覚めたヴレイはすぐに起き上がる気になれず、しばらくベッドの上で人形のように茫然と横たわっていた。

船員が廊下を往来する足音が無機質で質素な部屋の中にまで響いてくる。

海上要塞の甲板で見た人影は確かにザイドの姿だったと思い出した。驚きと動揺で集中力が散漫し乱流グラフが一気に上昇した。

掌で額を押さえ、心底重い溜息を吐いた。

ザイドの瞳から発せられたザリの眼光が、悪夢のように蘇る。ベッドから起き上がりしばらく額を押さえて伏せていると、金属製の自動ドアがノックされた。

「入るよ」と言うノアの声がドアの隙間から侵入してきたので、ヴレイは顔を上げた。

「調子はどう」

「なんとか、いいよ」

「下手なウソはいいから、無理しないで」

眉端を下ろしたノアは、両膝の間で力なく垂れたヴレイの手を握った。

「本当に大丈夫だから、ちょっと悪い夢を見て」

俯いたヴレイの目元が影って、瘦せた印象を見せる。

掛け毛布に視線を落としたままのヴレイを見て、どうしようもない不安に駆られたノアはベッドの脇に腰掛け、撫で下がった肩を擦ってやった。

すると俯いていたヴレイは突然ノアを抱き寄せ、赤茶色の髪に顔

を埋めるように深く抱きしめた。

言葉のないまま数分が過ぎたところで、ヴレイの細い肩が小刻みに揺れて、鼻を吸る音が聞こえてきた。ヴレイがどんな顔をしているのかを察して、ノアは揺れる背中を優しくさすった。

どんな想いで涙を流しているのかノアには分からなかった。それでも静かに号泣するヴレイの背を守るように抱きしめ、泣き止むまで彼を受け止めていた。

冷静さを取り戻したヴレイは、ノアと一緒に発令所のブリッジに戻った。クルー達は安堵の表情を見せ、スピカがヴレイに席を譲った。

久しぶりのデスクの感触に酷く懐かしさを感じ、ジワッと胸が熱くなった。

「ヴレイ、目覚めたら本部に連絡をしてくれて、スカイ副指令が」「本部の発令所に回線繋ぐぜ」

ジーベックが隣のデスクで手際よく操作をした。

中央モニタにスカイ副指令の姿が映されると、えらく真面目な趣で端的に結果を述べてきた。

「軍法評議会の調べによると、グランドラインには防衛権というものがある。インジョリックサークとの間には防衛協力機構が軍法によって結ばれている。つまり開発援助として制限範囲以内での戦艦資材輸出を許可していた。特定の国ではなく各国から決められた数量を、決められた物資を輸出しているため、ロマノは独自の科学技術により事の重大さを拡大させたと結論付けられた」

「これからどうすればいいんですか」

「第一、第二艦隊によるロマノ要塞の調査はこれ以上の結果を得ら

れず、非合理だと判断され一時撤退を命じる。よって全艦体は今日中に作業を撤収し本部へ帰還すること」

その言葉にヴレイはまだ疲れの残る目を見開いて、「世界の空」とロマノの企みの事を話したが、スカイ副指令は眉ひとつ微動にせず淡々としていた。

「和平評議会が臨時総会を開いた、今はまだ議会の決議案を待つだけだ。我々は正式な指令があつて初めて動ける組織だ」

「でしたら俺をグランドラインに戻してください、まだやり残した事があるんです」

「個人的な事情で途中離脱は許可されない」

「個人的ではなく、言い渡された任務のためです、それに入隊時に約束したはずだ」

むきになるヴレイは席から立ち上がった。

「今は本部への帰還が最優先だ。本部に戻り議会の結果が出るまで戦闘形態のまま待機。君の発言は命令違反だと分かっているのか、軍人としてあるまじき妄言だ」

言い返す言葉が見付からずヴレイはあつ気無く腰を下ろした。

「分かったら、即時撤収作業を行え」

受信映像が切れるとコックピット内は静まり返り、クルーはヴレイに注目した。

周囲からの視線を感じ、妙な静けさにも苛立ちを感じた。デスクをスピカに譲りヴレイはそのままブリッジを出て行った。

NEXT

第112話 変わったもの、変えたもの

「分かったら、即時撤収作業を行え」

受信映像が切れるとコックピット内は静まり返り、クルーはヴレイを注目した。

周囲の視線を感じ、妙な静けさにも苛立ちを感じた。デスクをスピカに譲りヴレイはそのままブリッジを出て行った。

ノアも後を追いつブリッジを出ると、近くのラウンジで不貞腐れているのを見つけた。

「どうしたのよ。さっきから様子もおかしいし、私情を挟むなどは言わないけど、何がそんなに辛いのか」

ノアは部屋で泣いていたヴレイが心配で仕方なかった、でもその理由を聞いたところで彼の胸に刺さった想いが消えるわけではないと分かっていた。

「こっちを見て、何を隠しているのか」

ノアはヴレイの両腕を掴み、うつむく視線を上げさせた。

虚ろに視線を上げた紫紺の瞳は潤んでいるようで、微かに震えていた。

「あの要塞には俺の友達が乗っていたんだ、そいつは俺の仇で、グランドラインに行きたかったのはそいつとケリをつけるため、助けるためだ。だから今ここで帰るわけにはいかない、ロマノの策略に加わっているなら尚更」

決然とした中にも不安に押しつぶされそうな眼がノアを見据えた。

「やっと話してくれた、今まで一度だってグランドラインに行きたい理由を話してくれなかったもんね」

「ごめん」

「ううん、でも今はどうしようもない、総会の結論次第ではまたこ

ここに戻ってくるかもしれないし、ヴレイがどんなに苦しいのか分か
りたい、でも命令は命令だ」

「けどもう時間がない、ロマノは今すぐにでも「世界の空」を復活
させかねない、鍵である召喚士がすでにロマノにいるんだ、仲間も
そこへ向かったはずだ」

さっきまで弱々しく泣いていた姿が嘘のようだ。強く開いた双眸
には生半可な覚悟など微塵も感じさせないほどに昂然としていた。
依然とはまるで異質的なヴレイの雰囲気になアは戸惑った。

外見的变化はないが、ブリッジで久しぶりに会った瞬間に感じ
た違和感は、鎧の様にヴレイを纏っていた傲然さが消えていたこと
だった。ヴレイが「仲間」と言うその人達を気にしながら、向こう
で何が起きているのか話す彼がまるで別人のように見えた。

ヴレイの思い出の中に置き去りにされたような気がして、嫉妬に
も似た感情がノアの中で付き纏った。それがまた仕事と絡んでしま
うので厄介だ。

「変わったね。グランドラインに行く前まではもっとすねたような
顔をしていた、傍に気の許せる仲間がいたんだね」

ノアはヴレイの頬に手を伸ばしてどこか切なげな笑みを見せた。
ノアの手に自分の手を重ねて、ヴレイは暫しぬくもりに浸った。

「ヴレイ艦長、ノア二佐、至急発令所へ戻ってください」

安心していたのもつかの間、けたたましい警報と共に徴収が掛か
った。

発令所に駆け込むと、切羽詰ったスピカが席を立て振り向いた。
「状況説明を」

「海上要塞付近から高エネルギー反応を測定、それと同時に海溝か
ら大質量の物体が急浮上しています、艦長これは一体……」

一時コックピット内は中央モニターに映る巨大な影に黙然となっ
ていた。愕然と目を皿のようにしたクルー達は、食い入るように中

中央モニターを見つめ、非現実的な現象にキーボードを叩く手が止まってしまった。

「要塞の方はおそらく召喚獣、海溝の方は「世界の空」だ。覚醒させたんだ。本部へ知らせろ、第一艦隊は目標をせん滅すると」

ヴレイの支持によって場の空気は一気に緊張感を増した。

状況が飲み込めないスピカは震える手で本部へ連絡をした。

「これより本艦隊は目標を前方の召喚獣、および「世界の空」とする。スピリツチャーに対磁界防壁を掛けろ、各部戦闘隊形に移行。本作戦の指揮官をスピカ艦長候補生、戦術作戦の補佐はノア二佐とハリ少尉、技術バックアップはジーベック少尉に一任する。自分はディウアースで出撃する。勝手な指揮を執って申し訳ない、皆よろしく頼む」

艦長という立場も忘れ、相手を畏敬するかのように頭を深く下げたヴレイの敢然なる姿に、オペレーター達はどよめく、が感極まったスピカは精一杯の敬意を表した。

「はい、艦長、任せてください」

スピカの笑みは強張っていた。

さらに目線を上げた先には、無然としながらも安堵に笑むノアがいた。お互いに視線で頷くとヴレイは早々と発令所から出て行っていた。

後を追い駆けたい気持ちを胸にノアは浮いた涙をぬぐった。

NEXT

第113話 光源と召喚獣

海上要塞の甲板に描いた召喚陣が光輝くと、まるで山が競り上がって来るかのようにその巨体な姿が露になった。

霧の中に聳え立つ召喚獣の姿は絶対的な存在感をまざまざと見せ付けていた。

その召喚獣に引き寄せられるかのように、何層もの分厚い磨り硝子を重ねたかのような青々した海面が山になって盛り上がってきた。山の中心にあるのは、海上要塞を飲み込んでしまいそうなほどの強烈な光源だ。

「この召喚力に反応して『世界の空』が目覚めたのか」

ザイドの他にも危険を顧みず甲板に出てきた船員達は、口を開けたまま言葉を失っていた。

召喚獣の巨大な両翼が霧を吹き飛ばしていく。凄まじい突風が高波をつくり要塞を大きく揺らした。

頭部から腹部にかけては巨大な竜のようにも見えるが、それほど見栄えの良いものでもなく、岩のような肌が大きく膨れている。前足のような手は幾本もの引っかけ爪が揺れていた。尻尾のようなものが全長の半分を占め、海面を何度も叩いている。口を開ければこの要塞ごと飲み込みこんでしまいそうだった。

海面の直上をどうにか浮上しているような召喚獣の頭は、何十頭という獣の頭が寄り集まっていた。それぞれが奇妙に動き回っている様は不気味で仕方がない。

口元に不適な笑みを浮かべたザリは甲板の手摺の上に立ち、札を取り出した。小さく呪文を唱え、海面に浮き上がってきた光源に向かって札を放つと、何かに遮られるように鈍く輝いた。

海面から出てきた光源はその光を絶やすことなく輝き続けた。ザ

リがとんでもなく口を大きく開けると、「世界の空」はザイドの体内へゆっくり吸い込まれていった。その光景を目の当たりにした船員達は、ザイドの異様さに吃驚し腰を抜かす者や、我を失ったように怯える者までいる。

同じ頃、第一艦隊ではスピリツチャーが出勤していた。

だが妖力だけでは対磁界防壁と搭載用の飛行機にまで動力がまかなえず、ヴレイはディウアース専用ケージで待機しているしかなかった。

「全弾目標に命中しましたが外傷一つありません」

ケージに入電されたオペレータの報告に、欄干を強く握ったヴレイは居た堪れない焦りに襲われた。もうザリの眼を思い出して怯えている場合ではない。

オペレートデスクに戻ってきたヴレイは外の映像を見て、ハッと双眸を丸くさせると、マイクのスイッチを入れた。

「ハリ聞こえるか、霧が晴れてる、これなら磁界の影響は少ないはずだ、濃度を調べろ」

『了解』

ヴレイから支持を受けたハリは素早くキーボードを操作すると、スピカの背後に控えていたノアを見遣った。

「霧がと言うより、歪みを貰った時による相手側の故障か何かでしょう、これなら防壁無展開でディウを飛ばせます、どうしますか」

昂然と腕を組んでいたノアだったが微かに眉根を寄せて、マイクのスイッチを入れた。

「ヴレイ、この程度の磁界濃度なら問題ない、でもディウが出てどうする、スピリツチャーの砲撃も効かないんだぞ、ここは一度撤退させ、策を練り直した方がいい」

「艦長、僕もそう思います、今のままでは歯が立ちません」

スピカがマイクに向かって言い放った。

モニタから発せられる音声を聞きながら、ヴレイはディウアースを見上げていた。制服の胸ポケットに忍ばせていた写真を手に取る。グランドラインで過ごした日々が酷く懐かしく思えた、まだ別れて何日も経っていないというのに、とんでもなく遠い過去の出来事のように思えてくる。

「どうしてもケリを付けたい、我がままばかり言ってすまない、ディウアースの発進準備だ」

入電された返事を発令室で聞いていたクルー達は不安気に上階を見上げた。言葉を失くしたスピカも陰しく眉を歪ませていたが、頭上からは決然とした支持が飛び出した。

「外の現状報告をケージへ回せ、磁界の様子を常に監視しろ、ハリはディウの乱流測定値から目を離さないで」

「シエルトリ―二佐、いいんですか、応戦させても現状以上のことが出来るとは思えません」

伶俐に発言したスピカは怯むことなくノアに意見した。

「そうだな、もし根拠のない強がりならあいつを行かせるわけにはいかない」

「勝算があると」と訝しげにスピカが大きな目を丸くさせると、「本当に勝算があればいいけどな」と剣呑に笑みながらジーベックが主モニタを顎で指した。

スピリットチャーから配信される召喚獣の映像に、弾き出された数字が刻まれる。

「召喚獣の中心部を見ろ、算出された高エネルギー体は炉心と同じ役目をしていることになるぜ、あれがもし爆破したら俺らだってタダではすまないな」

その頃、要塞の甲板には「世界の空」を飲み込んだザリの身体が

炎のように赤々と発光し、あたり一帯の空気を熱くしていた。

N
E
X
T

第114話 策謀に笑う者達

要塞の甲板には「世界の空」を飲み込んだザリの身体が炎のように赤々と発光し、あたり一帯の空気を熱くしていた。

「奴は一体何者なんだ。「世界の空」はどこに消えた」

「おそらく彼の体内かと、とんでもない熱量を感知しています」

ザイドに飛び散る水飛沫は白い蒸気を発し気化していた。

取り出した札を、今度はその巨大な召喚獣に投げ飛ばした。召喚獣は唸り声を上げ、翼を激しくばたつかせた。幾つもある頭は狂乱し奇妙に動き回っている。

異様な光景に、艦内へ避難している船員達はその場で戦慄した。

ザリが腕を大きく開くと、巨体な召喚獣がザイドに向かって押し寄せてきたのだ。まるで重力に引き寄せられるように要塞に向かって接近してくる。

「召喚獣が高熱を発しています、このままでは動力源と思われる中樞が爆発します」

「強力な吸引力で召喚獣が艦にセまっています。吸引源は、それが甲板にいる青年です。多国籍部隊傭兵のザイドです」

「奴を止める、要塞ごと転覆するぞ、クソッこれだから余所者は何をしでかすか」

怒りを露にする艦長は衝動的にデスクを叩いた。

「駄目です、青年から発する熱気で武装兵でも近づけません」

「なら狙撃しろ、艦を沈める気かあいつは」

高台から射撃手が銃を構えた。ザイドの視界に入らない位置から射程を定め、一人の合図と共に、一斉に撃ち放った。

「全弾命中しました」

だがザイドの様子に変化はなく、ザリは狙撃して来た高台に視線

を向けた。一枚の札を取り出すと、札は刃物のような切っ先を作り、それを高台に向かって投げ飛ばした。射撃手もろ共高台は無残に切り落とされてしまった。

引き寄せられた召喚獣が大きく開口すると、ザリは自ら口の中へ引き込まれていった。

「ザイドが召喚獣の体内へ進入しました」

その様子は研究室のモニタにも映し出され、ロインは放心状態のままその映像を見据えていた。横で楽しそうに眺めるロマノ王は感嘆し高笑いした。

「ザイドにここまでやらせなくとも、インジヨリックの艦はせん滅できました」

フォーメスはしがめいた琥珀色の瞳をロマノ王に向けた。

「お前は十分すぎるほど良い仕事をしてくれた」

円卓の席から元老委員の一人がそう呟いたが、フォーメスにはその言葉の意図が理解できず、横目で彼等を凝視した。

「非力な人から人造妖魔族へとすばらしい進化を遂げたお前は、ロマノの科学技術が誇る最高傑作だ、欠陥も後遺症もなくまさしく完璧と言うべき芸術作品だ」

眉根を寄せるフォーメスは軍服の良く似合う体軀を元老議員に向けて、猛然と立ち尽くした。

「我々は意味のない言葉を羅列しているのではない」

「あの者が召喚獣と「世界の空」を融合させるように、お前もその身体を機械と融合させてはどうかね、「世界の空」を取り込んだ彼には適わないが、機械と融合した第一号としてロマノの主力兵器となれるのだ、我々のな」

思い通りに事が運んでいる光景に、老人達は弾んだ笑い声を響かせた。

「貴方達は人間をなんだと思っているのです、私が妖魔族になった

のはインジョリックサークを超えたロマノの新時代を守るため。私が兵器となったところでこの意志が残らないのなら、貴方達はただ人間改造を楽しむ異常快楽者だ」

「フォーメス、口を慎め、誰の御前だと思っている」

ずしりと重量感のある声音で怒鳴ったロマノ王は、その大柄な体躯でフォーメスを威圧した。

分厚い脛を乗せるロマノ王の碧眼は不気味な悪感を発し、その相貌から視線が外せなくなってしまったフォーメスの体は、金縛りに襲われたかのように硬直してしまった。徐々に高鳴る鼓動や発熱に違和感を覚え、異変に気付いた時にはすでに手遅れだった。

「なぜだ、私が制御している間は静まっているはずだ、ロマノ王何をされた」

「機械との融合はお前の力を覚醒させる必要がある。そして「世界の空」の力も必要だ」

強制的な骨格と筋肉の変形はフォーメスに生き地獄のような激痛をもたらした。嗚咽にも似た悲鳴はこの研究室の高見にまでとどき、何事かと研究員が顔をそろえて階下を見下ろした。

NEXT

第115話 阻まれた怒り

強制的な骨格と筋肉の変形はフォーメスに生き地獄のような激痛をもたらした。嗚咽にも似た悲鳴はこの研究室の高見にまでとどき、何事かと研究員が顔をそろえて階下を見下ろした。

研究員が騒然とする中で、研究室の非常用ゲートが爆発した。爆煙の中から部外者と思われる人影を見つけ、警備兵とロマノ王のエスコーター達がゲートを取り囲んだ。

「今度は間違っていないでしょうね。何枚ドアを壊せば気が済むのよ」
「そんなこと言ったってな、沢山部屋があるんだからしょうがないだろ」

煙を払って出てきた金髪の少女の姿を認めて警備兵は銃を構えると、背後からもう二人男が現れた。三名の侵入者が戸惑いながら、肩の位置まで手を上げると、少女が「あっ」と声をあげた。

「ロインがいた、あんなところで何やっているのよ」

巨大なモニタの前でロインは黙然と立ち尽くしていた。

要塞から送られてくる映像はお世辞にも良い映りはしていない。飛び魚のような形をした飛行機らしきものが俊敏に飛び交い、巨体な召喚獣を攻撃していることは見て取れた。

その中に一体だけ型の違う機体を見つけたルピナは、一目でヴェイだと気付いた。英雄のような彼の姿に拳が震える。

「ここは私とリウドで片付けます、その隙にルピナはロインの元へ行ってください」

シリウスは杖の先を警備兵に向けると、その先から大蛇を作り上げた。半透明の大蛇は造作もなく警備兵を薙ぎ倒した。

瞬時に避けたエスコーター達が散り散りになった隙を見て、ルピナは低姿勢でロインの傍まで滑り込んだ。

とんでもない天井の高さにルピナは圧倒されながら、一国を治めてきた堂々たる風格と威厳を放つロマノ王の前に足がたじろいだ。

「無断での立ち入りは重罪と分かつての狼藉か、フレイヤ王女、シルバーム内戦での件で碑石に誓いの碑銘を彫らされたばかりだというのに、派手な行いがお好きのようだ」

「貴方みたいに裏でこそそしないタイプなの。それに趣味が悪いんじゃないの、今すぐロインを離れなさい。貴方達は大陸軍法会議に掛けられるわ」

剣を抜いたルピナは凜と構え、嘲笑するロマノ王を憤慨に満ちた碧眼で睨んだ。

「威勢が良いなフレイヤ王女。フレイヤ王もこれほど勇敢な後継者に恵まれ、さぞ鼻が高いだろう。だが時すでに満ちた。「世界の空」は覚醒し、人と召喚獣を媒体とした兵器が誕生した。インジヨリックサークの軍力を以ってしても、止めることはできまい。戦いの終極の先にはロマノの新世界が幕を開ける、これからは四つの大陸が個を持つ時代ではないのだ、私が世界を統一する」

昂然と力説したロマノ王はまるで自分に酔いしれるかのような高笑いを轟かせ、異常な高揚で双眸は血走る。ルピナは全身の毛を逆立てた。

「狂ってるわ。貴方はおかしい、どうかしている」

遠巻きで剣を構えることしかできないでいるルピナの後方で、シリウスとリウドはエスコーターの幻獣に行く手を阻まれていた。なんとか応戦はしているが百戦錬磨を経てきたエスコーターの幻獣に対し、実戦経験のないシリウスの魔獣では歯が立たなかった。

中央モニタに映った召喚獣の姿にリウドは我が目を疑った。変貌を遂げた弟の姿に絶句し、見る見るうちに顔面蒼白していくのを、シリウスは横目で察知した。

「お前ら何してるのか分かってんのかよ」

頭に血が上り目尻を赤く腫らして憤怒したリウドは、幻獣の死角を風のようにすり抜け、ロマノ王に殴りかかった。

だがエスコーターがリウドの拳をキャッチボールのごとく軽く受け止め、そのままリウドを腕を掴まえると、背負い投げしてしまった。

護身用程度の体術しか身に付けていないので、戦闘能力の高いエスコーターに武力行使で挑まれたら、勝ち目がないことは分かっていたが、怒りを抑えきれないリウドは何度もロマノ王に殴り掛かりその度に返り討ちにされた。

「大方、その妖魔族だってテメーがいいように使っていた宰相だろ、人の命を何だと思ってやがる、そんなクソ最悪で卑劣な王様に誰も付いてこねえよ」

エスコーターはリウドの首を掴み高々と締め上げた。ビクともしない腕力にリウドは抵抗できなかった。口の中が切れて血生臭くなった唾液が、泡と一緒に口端から滲み出た。

N E X T

第116話 宰相の最期

エスコーターはリウドの首を掴み高々と締め上げた。ビクともしない腕力にリウドは抵抗できなかった。口の中が切れて血生臭くなつた唾液が、泡と一緒に口端から滲み出た。

「我々は社会的に廃棄された人間だけを使っている、これも文明が進化するため、彼らも社会に貢献しているのだよ」

「でも今そこでバケモンになったのは宰相だろ、犯罪者でも何でもねえ、それに罪人だからって人が人の身体で弄んでいいわけねえだろ、あんたら狂ってる」

息を詰まらせながら怒鳴り声を搾り出すリウドに、ロマノ王は陰険な目付きを向けて憎たらしく嘲笑した。

非情と言うより異常と言う言葉がここまで似合う人間に出会ったのは初めてだとリウドは思った。

「聞き捨てならない暴言だ。フォーメス、お前に餌だ」

変貌を遂げたフォーメスにロマノ王は道を開けた。不気味に唸る化け物の息遣いがリウドの鼻先までとどいた。飛び出た琥珀色の瞳がジッとリウドを観察している。

魔力を使い果たし、もはや無抵抗のシリウスは幻獣の前足にさえつけられ、血生臭い結果を覚悟してしまった。

鬼の様に妖魔化したフォーメスがリウドの頭目掛けて、牙が剥き出しになった口を大きく開けたその時、ルピナがフォーメスの背後に回り込んで斬りかかった。だが鋼鉄のような皮膚に刃は表面を滑っただけだった。

微かに背後を向いた琥珀色の眼が獲物を捉えると、手のような引っ掻き爪でルピナを突き飛ばした。

「「ルピナッ」」

リウドとシリウスが同時に叫んだ、人形のように突き倒されたルピナの姿に言葉を失った。

最後の瞬間まで怒りの執念を絶やそうとしないリウドの瞳に覚悟の色が見えた。一瞬の時間が永遠のように長く感じたのは初めてだった。

無意識に瞼を強く閉じたと同時に、爆発音が響いた。破壊したのは非常用ゲートで、外から数十人の武装兵士がなだれ込んで来た。

その中にはロインの召喚獣を連れたルチルの姿もあった。

「フォーメス、最後の最後まで手の掛かる奴だな」

ルチルの呼び掛けにリウドを喰らおうとしていたフォーメスの動きが止まった。

銃口を真っ直ぐフォーメスに向けて構えるルチルは一瞬だけ悲哀染みた笑みを作ると、ゆるく瞬きをして、次に開いた瞳は切っ先のごとく鋭かった。一点の迷いなくルチルは引き金を引いた。

素直に眉間を打ち抜かれフツと意識が抜け落ちたかのように、フォーメスはその場に倒れた。

「ロマノ国王陛下、すでに首都近郊の属州候が州軍を出動させ、ロマノ城を包囲した。自ら降伏した方が懸命です」

元老議員の席には各属州候が取り囲んでいた。

状況を眺めるロマノ王は不敵な笑みを浮かべると、向けられる銃口にも顔色一つ変えず、中央モニタを背に堂々たる姿勢で口を開いた。

「ルチル属州総督、とうの昔に尻尾を巻いて城を出て行かれたのかと思っていました。私を捕まえるより先に「世界の空」が最終段階に入る。海上の要塞ごと飲み込み巨大な要塞兵器と化する」

「ザイドが……」

「それでも、ザイドはヴレイが取り戻すわ、彼はシルバームの船だって停めたのよ、きつと今度だって止めて見せるわ。あんた達は力

を持つってことがどんな事か分かってない、力は戦うためにあるんじゃないのよ」

自力で立ち上がっていたルピナは剣の切っ先をロマノ王に向けながら、食い縛る歯の隙間から搾り出すように怒鳴った。

その頃、スピリツチャーは巨大な召喚獣にミサイルや閃光を打ち続けるが、分厚い装甲にすべての攻撃が弾き飛ばされていた。召喚獣は苦しみもがくように頭を振り回し、長い尾を何度も海面に叩き付けていた。巨体は赤々と燃えながら膨張し続けていた。

NEXT

第117話 最後の手段

スピリツチャーは巨大な召喚獣にミサイルや閃光を打ち続けるが、分厚い装甲にすべての攻撃が弾き飛ばされていた。召喚獣は苦しみもがくように頭を振り回し、長い尾を何度も海面に叩き付けていた。巨体は赤々と燃えながら膨張し続けていた。

「臨界に達したコアが急速に膨張、「世界の空」と召喚獣の融合で互いに拒絶反応を起こしています、結果的に失敗を意味しています」
「「世界の空」の質量が上昇しています、このままではコアを構成している炉心が融解してしまいます」

「ロマノ王、ご決断を。もはやインジヨリックの軍にあれを破壊してもらうしか、すべはございません。被爆の予想範囲は対流風の影響を考慮しグランドライン南東部全域、インジヨリックサーク北端部にまでおよびます」

その場で放心する王を見て、剣を鞘に納めたルピナはロインの元へ駆け寄った。宝珠からロインの手を放そうとしたが、手も腕もビクとも動かなかった。まるで強力な接着剤で宝珠に貼り付けられているようだ。

「どうして放れないの」

「宝珠を切ってみてください」

シリウスの助言にルピナは再び剣の柄に手を添えた。呼吸を整えると、キツと見開いた紺碧の瞳が宝珠を捕らえ、真っ直ぐ振り下ろされた切っ先は宝珠を真っ二つにした。

宝珠を添える手に力がなくなり、ロインは気を失ったままその場に倒れてしまった。

もはや侵入者を拘束しておく必要がないと判断したエスコーターは二人を解放した。全身打撲の痛みを堪えるリウドはシリウスの肩を借りながら、ルピナの元へ歩んできた。

その場に座り込んだリウドは二人の手をとって、深呼吸を繰り返した。

「ザイドを解放しに行く」

「体力もないこんな状態でですか」

「いいか、終わるまで決して手を放さないでくれよ。放せば僕の魂が身体から抜け出ちまうかもしれないねえからな、自分で手を結んでい
るだけじゃあおっかないだろ、頼むぞ」

手と手の間に呪文が書かれた札を挟むと、リウドは交互に二人を見てからもう一度二人の手を強く握った。

＊ ＊ ＊

コックピットから召喚獣の炉心融解の危険性を報告され、ヴレイは差し迫った局面に茫然とした。

召喚獣の姿は徐々に変形し、大砲のような筒を幾本も頭に生やした。何十個もの頭が奇妙な動きで辺りを見回しながら、ディウアースの姿も確かに捉えているようだった。

「ヴレイ時間がないわ、もう一度ライフルを充電するそれで……」

「駄目だ、ここにいる者達が爆発に巻き込まれる」

『ラセツ』ならどうするだろうか、操縦桿を両手で掴みながらヴレイは祈るように強く眼をつぶった。自分の中に流れているラセツの妖力が、熱となって身体を包むのが分かった。

何故、ラセツは自分に力を隔世させたのか、何度も己に向かって訊ねている自分に馬鹿馬鹿しく思えてきた。眼前で膨張する召喚獣は頭を振って身悶え、苦痛で泣き喚く。

悔しさで目頭の縁を覆っていた涙がヴレイの頬をつたって落ちる。
「ザイド……」

切なげに呟いてからヴレイは手元のキーボードを引き出し、凄ま

じい速さで打ち始めた。猛然とモニターを睨み付け、たまに独り言を呟きつつプログラムを書き換えていく。その様子は発令室にも受信されていた。

モニターを見ながらハリが読み上げる。

「ディウアースの運動機能を再設定しています。運動フィールドフォワードが重装備用に変更されました。比重プログラムを誤差修正しています。ダグ制御再起動、出力上昇します」

キーボードをサイドボックスにしまったヴレイは操縦桿を握り、決然と正面を見た。

「召喚獣を上空まで飛ばせば、アストラルに分解されるはずだ」
ヴレイの声がコックピットに響いた。

「でも分解されるのはあくまで外界からの有害物質よ」

「分かってるよ、だからあれを分解可能な質量まで粉々にすればいいんだろ」

「そうか」と気付いたハリは振り返ってノアを見た。

「スピリットチャー隊を離脱させます」

状況を理解したハリは即座に入電した。

「手の空いている者はディウのバックアップを最優先に」

スピカの勇ましい指揮に安堵したノアは祈るようにモニターを見上げた。

NEXT

第118話 庭園の岸

「スピリッツチャー隊を離脱させます」

状況を理解したハリは即座に入電した。

「手の空いている者はディウのバックアップを最優先に」

スピカの勇ましい指揮に安堵したノアは祈るようにモニタを見上げた。

＊ ＊ ＊

大小さまざまな岩石が荒磯を表した大きな池を形作り、石つつじが植えられた凄然とした庭園の中洲には、ザイドが佇んでいた。

薄く霧がかった庭園はひんやりしていた。冷たい空気はあきらかに本物だが、身体に受ける感覚すべてにまるで現実味がない。

人の気配に気付いてはいたがザイドは振り向かなかった。

「馬鹿か、半分も寿命を使う奴がどこにいる」

鼻で笑ったザイドの肩が微かに揺れたのを見て、リウドはふて腐りながら頬をゆるませた。

「こっちだってそんな予定じゃなかった。でもそのお陰で僕の半身がザリの魂を異界へ連れて行ってくれるんだぜ、有難く思え」

庭園の奥の方で紫紺色の光が帯び始めたのを見て、リウドは安堵にも似た溜息をついた。

「成功したようだ。先にティネスの所に行ってるぞ、その時に奢ってやるよ、三人で酒を酌み交わすのもいいだろ」

「そうだな、バカ兄貴」

目の奥が熱くなったザイドは空を仰いで奥歯を噛み締めた。

「バジティスの爺さんに感謝しろよな」

「どいつもこいつも」

上を向き続けたまま、肩を揺らすザイドは派手に鼻をすすった。声が震えてあと一言を言葉にするのに胸が苦しかった。

「大枚下ろして待ってろよな」

＊ ＊ ＊

ディウアースは召喚獣の尾を掴み少しずつではあるが上昇し始めた。召喚獣の重みにエンジン音が唸り声を上げる。

海上を見渡せる高度まで上がると、今度は尻尾を掴んで振り子のように回し始めた。徐々に回転の速さを増し、恐ろしいほどの遠心力が一点に収束した。

圧力に耐えるディウアースの運動機能は限界点に達し、ついにその手を放すと召喚獣は遙か上空まで投げ飛ばされた。

機体の間接部がギジギシと否な効果音を鳴らし、操縦席のモニターや外壁にひびを作った。

「浮力は安定、ですがディウアースの損傷は重度の域を超えています」

「神経系統に乱流を測定、パイロットの心拍が上昇」

「目標はなおも上昇中。コ、コックピットのハッチが開きます。パイロットが外に出ます。ディウアースの上部に出てきました」

「何をするつもり……」

艦内にいたクルー全員の手が止まり、コックピットのクルー達は奇跡を願うかのように中央モニタに注目した。

同じ頃ロマノの研究員達も、モニタに映る奇怪な光景に騒然と注目していた。

外に出たヴレイは手の甲に印を描いた。印から発する粒子は指の先で膨らみを増す。ラ・バジテイス村の祭壇に崇められていた玉の光と同じ紫紺色の輝きを放つ妖力の塊は、今にも破裂しそうなほど

膨れ上がった。

繰り返す呼吸が緊張で震えていた。

「大丈夫、落ち着け、絶対に上手くいく」

バランスを取りながらゆっくり光源を掲げ大きく体を反り返した。光源と接触している手の平が焼けるような熱さに包まれ、ヴレイの目尻に涙が浮く。

「いっけええ」

全力で投げ飛ばした光弾は、弧を描き召喚獣目掛けて空へ吸い込まれていった。

光弾に押され召喚獣は凄まじい速さで上空へ持ち上げられた。超高速で空を貫くと天空の雨雲を突き破って、紺碧な空が顔を出した。海上に光が射した瞬間、遙か上空で大爆発を起こした。

上空の雲を円状に吹き飛ばし、海上にまで強い爆風が襲った。海上要塞は高波に押し揺られ、セイヴァの軍艦も激しく艦体を揺らした。爆風をまともに受けたディウアースは木の葉の様に、海面に向かって吹き飛ばされた。なんとかディウアースにしがみつくヴレイは遠く離れていく碧空を眺めながら、手を爆心へ伸ばしていた。

N E X T

第119話 事は終局へ

電波障害を起こしたロマノ研究室のモニターは白紙だけを映していた。

「衝撃波により映像が回復するには今しばらく掛かります」

「召喚獣と「世界の空」は上空で大破したと思われます。有害分子は一万キロメートル上空まで吹き飛ばされ、今のところ地上では確認されません。上昇気流によって成層圏まで昇ってしまえば、アストラルによって浄化されますので安全かと」

「念のため調査機を出動させます」

生きた心地のしない緊迫状態から解放されたかのように、ロマノ研究員達は安堵の表情を見せ、あちらこちらで小さな歓声が上がった。

この世の終極を迎えたような心境でモニターを見つめている首謀者に、ルチルは銃口を向けたまま、後方で構えていた兵達を呼び寄せた。

「数日中にガディル王子がグレイディウル国王と軍法議長を連れてロマノに赴いてくださる。それまで私が責任を持って貴方方の身柄を拘束する。おそらく今年の全大陸和平評議会に挙げられるだろう。公正な裁きを受けるんだ」

取り囲んでいた兵士達が速やかにロマノ王と元老議員を拘束した。

事が終局へと導かれていく研究室は慌ただしさを極めていた、そんな中で、ルピナとシリウスに手を繋がれていたリウドが深く深呼吸吸してようやく目覚めた。

安堵したのも束の間、二人は我が目を疑うような変化に戦慄し息を呑んだ。

リウドの身体は見る見るうちに痩せ細り、顔や手の皮膚に深い皺

が刻まれ血管が浮き出た。

黒髪からは一瞬のうちに色素が抜け落ち、老人のような白髪に変色した。

「何よこれ、リウドが」

「極度の疲労で、老化した」

朦朧と瞼を開けたリウドだったが、眠るように昏倒してしまった。

＊ ＊ ＊

リウドはルチルの邸宅で手厚い看護を受け、一週間後には歩けるまでに体力も回復した。その間ルピナとシリウスは邸宅内の仕事を手伝ったり、街を散策したりして過ごしていた。

ロマノ城の研究室に入ってから記憶のないロインは自分のした事を悔恨してはいたが、ルチルが根気良くロインを説得し、ベフェナ王には自分が代弁すると言い張った。

ロインはルピナに事の発端を隠していたことに深く陳謝していたが、グランドラインを変えたいというロインの純粋な想いを踏み躪ったロマノ王に対して、怒りを覚えていたルピナはそんな彼を両腕で抱きしめてやった。

「今回の件でグランドラインとインジョリックサークの外交関係が少し変わるかもしれないわね、そうなればロインが願っていた未来に少しは近づくかもしれない。変化を毛嫌いしていた国々もいずれは理解を示してくれるようになるわ」

「そんな短絡的な考えで理想郷は生まれないと思うけど」

まだ身体から気だるさが抜けないリウドは黙然と外の景色を眺めながら、首飾りの輪に嵌められた赤い石を飽きもせず眺め続けているルピナに言い返した。

三人は丸二週間世話になったルチルの邸宅を後にし、ゼノレフ国

への国境越え専用の山道ケーブルカーに揺られていた。

「ロマノのやっていた事は確かに卑劣だけど、ロインはそんな子じゃない、救おうとしただけ。近い将来彼が変えるのかもしれないじゃない。正直私もグランドラインが変わる事に反対ではないもの。残すものは残さなきゃいけないけど、それを忘れなければきっと良くなる」

ふうんと半分聞いていないような返事をするリウドは、黙ってケーブルカーに揺られていた。白髪は光に当たると銀のように艶めいていた。だが痩せ細った頬に、目元の深い窪みと刻み込まれた目尻の皺が、以前のリウドの面影を虚ろにさせてしまうほど露骨なものだった。

「ところで、リウドの老けは治るものなんですか。十日以上経ちましたが、変わった様子はありませんけど」

窓枠に肘を着いて、同じように景色を眺めていたシリウスが、眠気眼のような細い目を擦りながら訊ねてきた。

「握力はだいぶ戻ってきたぜ、この皺は最後まで残っちまうだろうな」

「でも何で急にラ・バジティスに戻るわけ、ルチルはリウドの身体が戻るまでは居ていいって言ってくれたのに、ザイドだってあの後どうなったのか」

「行けばわかる」

ケーブルカーを降りてからは長いこと荷馬車に揺られ、ラ・バジティスに着いた頃には夜明けを迎えていた。

早朝からシェノルは神殿に入り、礼拝堂の長椅子を拭いていた。

「待っていましたよ、皆さん」

褪せることなく紫紺色の光を放ち続ける玉。三人は祭壇に祈りを捧げ、再会の握手を交わすと、すでに事を悟っているようなシェノルがリウドに向かって頷いた。

「彼の元へ案内しますよ」

N
E
X
T

最終話 繋がる空

寒さが深まるにつれて、薄紅色の花を咲かせる樹木がある。

インジヨリックサーク全域に生息し、並木道や公園によく植えられている。満開の時期になれば薄紅色の雪が降りしきっているかのような光景が見られる。すでに開花した蕾もあり、セイヴァの敷地内に点在する公園の木々もすっかり薄紅色に色付いていた。

講義室からケージに向かう途中にある廊下は、南側が全面ガラス張りになっている。直射日光に浴びても熱や紫外線は遮断されるようにコーティングされていた。

その廊下から薄紅色に色付く街を見ることがするのは、ここに勤める者の特権でもあった。

「一年前の記録をついに塗り替えたな、乱流の発生率を三割下げるだけでも苦勞していたのに、半減させた努力は本当にすごい」

ノアが記録書を見ながら興奮した面持ちで言った。

「まあね」

廊下から外を眺めるヴレイは他人事のように鼻で笑った。

元の生活は緩慢であるが、後輩に指導するのは何かと頭を悩ませた。しかも仕事はそれだけではない、訓練は毎日欠かすことができないし、一人で受けている学校教育の講義は午後になると集中力が散漫する。そして苦手分野でもある機械整備の基礎技能は未だに合格点に達せないでいた。

なんと言っても妖力の乱流を抑える訓練が最も辛く、自分との孤独な戦いだった。将来、妖力を手放すとしても、今はまだ背負った『力』を封印するわけにはいかなかった。

飛行船が横切った後に残る筋状の雲が水で滲ませたように薄れていく。どこへ向かって飛んでいるかは分からないが、虚空を分断し

た飛行船を見てヴレイはふと彼等のことを思い出した。

今見上げている空が彼等のいる世界と繋がっていると思うと、突然懐かしさが込み上がった。旅が終わり、何事も無かったかのようにここに立っているが、日々の喧騒に身を任せていると時々彼らとの旅路をふと懐かしんでしまう。

あれ以来ザイドのことを思い出さない日はなかった。

忙しいことを言い訳に、結局向こうには帰れずじまいなのが心苦しかった。それでも、やるべき事も守るべきものも、ここにしかないことは分かっていた。

結局ラセツが守りたかったのは何だったのだろうか。召喚獣に妖弾を放とうとした時、一瞬だがラセツの記憶がよみがえった。

ラセツは分かっていた。ザリが、己の力と恨みで満ちた人格を子孫に隔世させると。だからラセツは自分を殺した。ザイドとほぼ同期に生まれてくる子孫に力を隔世させるために。

ザイドを救いたかったのか、それとも友人を救いたかったのか。

どちらにせよ現世まで絡み続けた運命の糸は解かれ、碧空へと消え去ったのだから。

今更どうこう考えるのは、やめた。

「もう、外ばかり見てないで行くぞ、ケージで待たせてるイーグルにまたどやされるぞ」

ノアは唇を尖らせた。

この笑顔も守るべきものの一つだ。死の直前に言い残した姉の言葉が、今では身に沁みて感じていた。忙しいことは口実で、本当はここから離れたくないのかもしれないと、ヴレイはノアの手を強く握りながら思った。

廊下を歩き出した時、携帯電話が短く鳴った。

そこには一通のメールが届いていた。

またヴレイの足が止まったので、ノアは呆れた様子で振り返ってみると、驚きながらもどこか嬉しげにメールを読んでいた。

読み終わってヴレイは顔を上げると、ノアの手を引いて歩きながら言った。

頬がゆるんで高鳴る鼓動を沈めることは出来そうになかった。頭上に広がる空は、やっぱり世界中を繋げていた。

「君に紹介したい仲間がいる」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0477f/>

Wild Sky

2011年8月24日03時30分発行